

下 村 遺 跡

2007

財団法人 山口県ひとづくり財団
山口県埋蔵文化財センター

しも むら 遺 跡
下 村



2007

財団法人 山口県ひとづくり財団
山口県埋蔵文化財センター

序

本書は、市道渋倉伊佐線緊急地方道路整備事業・過疎代行（交付金）工事に伴い山口県から委託を受けて、山口県ひとつくり財団が実施した下村遺跡発掘調査の記録をまとめたものです。

調査の結果、弥生時代中期初頭にほぼ限定される集落跡が検出され、弥生土器や石器など多くの遺物も出土しました。特に鹿が描かれた絵画土器は、弥生時代の絵画としては国内最古級のものであり、当時の人々の精神世界を知るうえできわめて重要な資料と言えます。

本書が、文化財保護に対する理解を深め、教育並びに学術研究の資料や郷土史の基礎資料として、広く活用されることを期待するものがあります。

おわりに、当発掘調査の実施・報告書の作成にあたり、御指導・御協力いただいた関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成19年3月

財団法人 山口県ひとつくり財団
理事長 村岡 正義

例 言

- 1 本書は平成18年度に実施した、下村遺跡（山口県美祢市伊佐町下村地内）の発掘調査報告書である。
- 2 調査は市道渋倉伊佐線緊急地方道路整備事業・過疎代行（交付金）工事に伴い、財団法人山口県ひとつくり財団が山口県美祢土木事務所の委託を受けて実施したものである。
- 3 調査組織は次の通りである。

調査主体 財団法人山口県ひとつくり財団 山口県埋蔵文化財センター

調査担当 調査研究員 小南 裕 一

文化財専門員 籠山 幸 雄

文化財専門員 松林 寛 樹

調査員 河原 剛

- 4 調査にあたっては、山口県教育委員会、美祢市教育委員会、山口県美祢土木事務所ならびに地元関係各位から協力・援助を得た。
- 5 本書の図1は、国土地理院発行の5万分の1地形図「山口」「防府」「厚狭」「西市」を複製使用した。図2は山口県美祢土木事務所提供の地図を元に作成した。
- 6 本書で使用した方位は、遺構配置図に関しては国土座標（世界測地系）の北で示し、個別遺構に関しては磁北で示している。また、標高は海拔高度（m）である。
- 7 本書で使用した土色の色調の表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局（監修）『新版標準土色帖』Munsell方式による。
- 8 図版中の遺構番号は、実測図の遺構番号と対応する。
- 9 本書で使用した遺構略号は、次のとおりである。

SC：竪穴住居跡

SU：貯蔵用土坑

SK：土坑

ST：墓

SP：柱穴

SB：掘立柱建物跡

SD：溝状遺構

- 10 資料の鑑定・分析について植物遺体については宇都宮宏氏（山口大学大学教育機関講師）、出土石器の石材については亀谷敦氏（山口県立博物館）に依頼した。また、炭化物のAMS年代測定については、株式会社古環境研究所に依頼し、その成果を付編として掲載した。
- 11 報告書作成の過程で、青木勘時氏（天理市教育委員会）、井上勇也氏（福智町教育委員会）、片岡宏二氏（小郡市教育委員会）、竹内奈央氏（山口大学大学院）、田畑直彦氏（山口大学埋蔵文化財資料館）、常松幹雄氏（福岡市埋蔵文化財センター）、仁田坂聡氏（唐津市教育委員会）、宮地聡一郎氏（九州国立博物館）、村上賢治氏（兵庫県教育委員会）、村田枝里子氏、村田裕一氏（山口大学）、山田康弘氏（島根大学）に御指導・御協力を賜った。
- 12 本書の作成・執筆は、小南・籠山・松林・河原・竹内が共同で行い、編集は小南が行った。

本文目次

I 遺跡の位置と環境	1
II 調査の経緯と概要	4
III 調査の成果	7
1 A地区	7
(1) 弥生時代の遺構	9
(2) 弥生時代の遺物	31
(3) 中世の遺構・遺物	95
2 B地区	97
(1) 遺構	97
(2) 遺物	101
IV まとめと考察	103
V 付編	119

挿図目次

図1 遺跡の位置と周辺の遺跡	2	図31 出土遺物実測図⑫	44
図2 調査区設定図	5	図32 出土遺物実測図⑬	45
図3 遺構配置図 (A地区)	7・8	図33 出土遺物実測図⑭	46
図4 竪穴住居跡実測図①	10	図34 出土遺物実測図⑮	48
図5 竪穴住居跡実測図②	11	図35 出土遺物実測図⑯	49
図6 竪穴住居跡実測図③	12	図36 出土遺物実測図⑰	50
図7 貯蔵穴実測図①	14	図37 出土遺物実測図⑱	51
図8 貯蔵穴実測図②	15	図38 出土遺物実測図⑲	52
図9 貯蔵穴実測図③	16	図39 出土遺物実測図⑳	53
図10 貯蔵穴実測図④	17	図40 出土遺物実測図㉑	54
図11 貯蔵穴実測図⑤	19	図41 出土遺物実測図㉒	55
図12 貯蔵穴実測図⑥	20	図42 出土遺物実測図㉓	56
図13 貯蔵穴実測図⑦	21	図43 出土遺物実測図㉔	57
図14 土坑実測図①	23	図44 出土遺物実測図㉕	58
図15 土坑実測図②	25	図45 出土遺物実測図㉖	59
図16 土坑実測図③	26	図46 出土遺物実測図㉗	60
図17 大型土坑実測図①	28	図47 出土遺物実測図㉘	61
図18 大型土坑実測図②	29	図48 出土遺物実測図㉙	63
図19 墓実測図	30	図49 出土遺物実測図㉚	64
図20 出土遺物実測図①	31	図50 出土遺物実測図㉛	65
図21 出土遺物実測図②	32	図51 出土遺物実測図㉜	66
図22 出土遺物実測図③	33	図52 出土遺物実測図㉝	67
図23 出土遺物実測図④	34	図53 出土遺物実測図㉞	68
図24 出土遺物実測図⑤	36	図54 出土遺物実測図㉟	69
図25 出土遺物実測図⑥	37	図55 出土遺物実測図㊱	70
図26 出土遺物実測図⑦	38	図56 出土遺物実測図㊲	72
図27 出土遺物実測図⑧	39	図57 出土遺物実測図㊳	73
図28 出土遺物実測図⑨	40	図58 出土遺物実測図㊴	74
図29 出土遺物実測図⑩	41	図59 出土遺物実測図㊵	75
図30 出土遺物実測図⑪	42	図60 出土遺物実測図㊶	77

図61 出土遺物実測図④②	78	図71 B地区竪穴住居跡実測図	98
図62 出土遺物実測図④③	79	図72 B地区土坑実測図	98
図63 出土遺物実測図④④	80	図73 遺構配置図 (B地区)	99・100
図64 出土遺物実測図④⑤	81	図74 B地区出土遺物実測図	102
図65 出土遺物実測図④⑥	91	図75 下村遺跡遺構配置図	104
図66 出土遺物実測図④⑦	92	図76 川棚条里遺跡遺構配置図	105
図67 出土遺物実測図④⑧	93	図77 下村遺跡出土土器の細分	107
図68 出土遺物実測図④⑨	94	図78 日本列島出土韓半島系無文土器 の年代的位 置	109
図69 出土遺物実測図⑤⑩	95	図79 弥生時代初期の絵画資料	112
図70 中世墓及び出土遺物実測図	95		

表目次

表1 A地区出土弥生土器観察表①	82	表7 A地区出土弥生土器観察表⑦	88
表2 A地区出土弥生土器観察表②	83	表8 A地区出土弥生土器観察表⑧	89
表3 A地区出土弥生土器観察表③	84	表9 A地区出土石器観察表	96
表4 A地区出土弥生土器観察表④	85	表10 A地区出土石材重量比	113
表5 A地区出土弥生土器観察表⑤	86	表11 下村遺跡炭化植物種子 出土遺構一覽表	114
表6 A地区出土弥生土器観察表⑥	87		

図版目次

図版1 A地区遠景	図版13 SK106遺物出土状況 SK106完掘状況
図版2 A地区全景	図版14 SK102遺物出土状況 ST 1 完掘状況 ST 1 土層断面 ST 1 管玉出土状況 ST 3 遺物出土状況
図版3 SC 1 完掘状況 SC 2 完掘状況	図版15 B地区遠景 B地区全景
図版4 SC 3 完掘状況 SC 3 遺物出土状況	図版16 SC201完掘状況 SK208遺物出土状況
図版5 SC 5 完掘状況 SU 1 遺物出土状況	図版17 出土遺物①
図版6 SU 2 完掘状況 SU 5 土層断面 SU 6 土層断面 SU 7 完掘状況 SU 8 遺物出土状況	図版18 出土遺物②
図版7 SU 8 炭化物出土状況 SU 8 完掘状況 SU13遺物出土状況 SU22土層断面 SU22遺物出土状況	図版19 出土遺物③
図版8 SU24土層断面 SU24完掘状況 SU25遺物出土状況 SU25完掘状況 SU29遺物出土状況	図版20 出土遺物④
図版9 SU28土層断面 SU28遺物出土状況 SU30遺物出土状況 SU32遺物出土状況 SU40土層断面	図版21 出土遺物⑤
図版10 SU49土層断面 SK 1 遺物出土状況 SK10遺物出土状況 SK11遺物出土状況 SK16完掘状況 SK20完掘状況 SK22遺物出土状況 SK23完掘状況	図版22 出土遺物⑥
図版11 SK34遺物出土状況 SK54土層断面 SK59完掘状況 SK59壁面のピット SK61遺物出土状況 SK66遺物出土状況 SK79遺物出土状況 SK82遺物出土状況	図版23 出土遺物⑦
図版12 SK80土層断面 SK80炭化物出土状況 SK80完掘状況 SK87土層断面 SK93遺物出土状況	図版24 出土遺物⑧
	図版25 出土遺物⑨
	図版26 出土遺物⑩
	図版27 出土遺物⑪
	図版28 出土遺物⑫
	図版29 出土遺物⑬
	図版30 出土遺物⑭
	図版31 出土遺物⑮
	図版32 出土遺物⑯
	図版33 出土遺物⑰
	図版34 出土遺物⑱

I 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

下村遺跡は、山口県西部中央の美祢市伊佐町下村に所在する弥生時代中期初頭の集落遺跡である。美祢市は中国山地の一分岐系、長門山地のほぼ中央に位置し、地形的には周囲を山地で囲まれており、高原状か丘陵性山地が大部分で、わずかな小平野が散在する状況である。市域の東北部は秋吉台カルスト地形の於福台、雨乞山、伊佐台があり、これらは標高100～400mの壮年期から老年期のわが国で最も標準的なカルスト地形として知られている。河川は厚狭川が主流で、水源は大ヶ峠より発し、吉則付近で伊佐川と合流し、また渋倉付近で麦川と合流している。沖積平野は厚狭川流域沿いに細長く発達しているが、全般的には平地に乏しい。気候的には、山口県は三方を海に囲まれ一般に温暖であるが、美祢市は内陸に位置する盆地であるため瀬戸内や山陰よりやや平均気温が低い。また、寒暖の差が大きい内陸性気候を示すが、一般的には人々の居住に適している気候条件といえる。下村遺跡は、大嶺盆地に続く伊佐盆地の南西部、ちょうど厚狭川と伊佐川の合流したあたりに位置し、標高455.5mの桜山から北西に派生する標高約100mの独立丘陵上に立地する。

2 歴史的環境

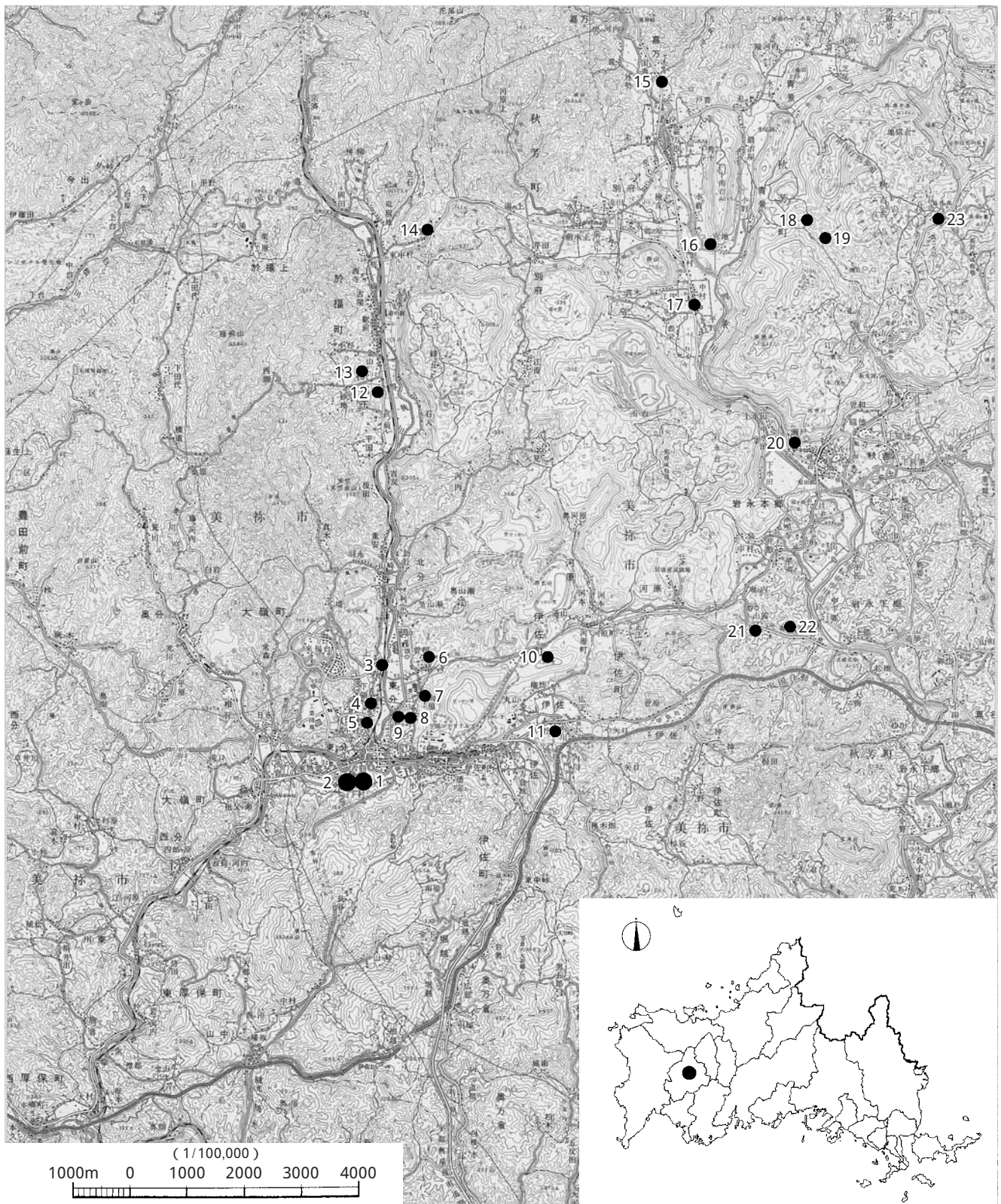
ここでは、下村遺跡の歴史的な位置づけを明確にするため、旧石器～弥生時代の周辺遺跡について概観する。

美祢市やその周辺に人類が住み始めたのは、旧石器時代であると推定される。秋吉台上の秋芳町青景の船が窪遺跡からは片刃礫器様の石器1個が採集された。同じく秋吉台上の美東町大田の北馬コロボ遺跡からは搔器と尖頭器5個が採集され、器形や石質から旧石器時代の遺物としての可能性を指摘されている。美祢市でも、於福町万光や伊佐町野崎から打製石器の破片が発見されているが、確実に旧石器時代の所産であるとは断定できない。

秋吉台やその台麓には縄文時代の遺跡が多く分布している。この一帯は地形的に狩猟に適した環境であり、多くの湧水地が存在する。船が窪、出来水、山露、岩永市（いずれも秋芳町）などで、縄文土器、石鏃、磨製石斧が採集されており、未調査ながら縄文時代の遺跡が存在した可能性が高い。1992年度に発掘調査された秋芳町嘉万の国秀遺跡では、縄文時代の遺物として縄文土器、扁平打製石斧や打製石鏃が出土した。特に扁平打製石斧の出土は184点にものぼり、土中に突き刺さった状態で発見されたものがあり、土掘り具として使用されたと考えられる⁽¹⁾。また、美祢市では大嶺町東分長ヶ坪のゴジキ穴遺跡で、人骨片や縄文土器が検出され、美祢市と秋芳町の境界近くの於福町萩原台地から大分県姫島産の黒曜石の石鏃が採集されている。このほか、宇部興産伊佐セメント工場のある伊佐台からも縄文時代の磨製石斧が発見されており、美祢市域の属する西秋吉台もこの時代の人々の生活の場であったことがうかがえる。しかし、これ以外、美祢地域からの縄文時代の遺構や遺物の発見は少なく、この時代の人々の生活については不明な点が多い。

弥生時代は、朝鮮半島から稲作を含む新たな文化が到来した時代であり、急激な人口増加と社会の複雑化が進行した。当地域においても遺跡数が増加し、発掘調査が行われた例も多い。以下それらについて記述する。

美祢市大嶺町の東分中村遺跡は弥生時代前期～中期の集落跡であり、4棟の住居跡や約30基の土坑



- 美祿市 1 下村遺跡A地区 2 下村遺跡B地区 3 上領遺跡 4 下領遺跡 5 東分中村遺跡
 6 曾根遺跡 7 向原遺跡 8 彦山遺跡 9 コジキ穴遺跡 10 伊佐台遺跡 11 野崎遺跡
 12 砂地岡遺跡 13 上ノ山遺跡 14 萩原遺跡
 秋芳町 15 国秀遺跡 16 嘉万宮地遺跡 17 中村遺跡 18 出来水遺跡 19 船が窪遺跡 20 瀬戸遺跡
 21 山露遺跡 22 岩永市遺跡
 美東町 23 北馬コロビ遺跡

図1 遺跡の位置と周辺の遺跡

が発見された。土坑の多くは断面が袋状を呈しており、中から炭化物や土器片が大量に出土した。弥生土器には、貝殻施文具で羽状文・木葉文・鋸歯文などの文様が施されており、時期的には前期末～中期初頭にあたる。石器については、石庖丁・磨石・磨製石斧が出土しており、水稻耕作に関連する石器組成が確認できる。同市於福町の砂地岡遺跡では、弥生時代の竪穴住居8棟・土坑19基・溝状遺構6条が検出され、その中でいくつかのものは前期末～中期初頭の所産であると考えられる。遺物としては、前期末～中期の土器や細形銅剣が出土した。特に細形銅剣は当地域における有力者の出現を示唆するものとして貴重な資料である⁽²⁾。また、近接する上ノ山遺跡は弥生時代中期後半の集落跡であるが、砂地岡集落の発達・拡大によって生み出された分村である可能性が指摘できる⁽³⁾。また、同市大嶺町の上領遺跡は弥生時代～古代までの集落遺跡であるが、前期後半の土坑が検出されている。土坑の中で注目されるのが長軸約6mの隅丸方形の大型土坑で、東西方向に3本の柱穴が走っており、屋根付きの施設の可能性がある。また、土器では日本海側に分布する湯免式壺に形態が類似するものがあり、この時代の美祢市域と山陰地域との交流を示すものといえよう⁽⁴⁾。下村遺跡は、東分中村遺跡や上領遺跡の2km以内に位置し環境的にも類似しているため、多くの共通点をもっていると考えられる。

また、秋芳町の中村遺跡からは、弥生時代の竪穴住居15棟・土坑約100基・溝状遺構1条が検出された。土坑のうち最古のものは前期末～中期初頭、竪穴住居は中期後半のもので、9棟存在する。土坑からは多数の土器が、住居内からは鉄器・管玉・ガラス片が出土しており、有力者の存在を彷彿させる⁽⁵⁾。また、同町の瀬戸遺跡・嘉万宮地遺跡などでも美祢市東分中村遺跡や秋芳町中村遺跡と同様、前・中期の土器が出土・採集されており、器形や文様からして北九州系や瀬戸内系の土器の影響を受けていると思われる。

その他に美祢市域で弥生土器を出土する遺跡としては、大嶺町下領遺跡、曾根遺跡、向原遺跡、彦山遺跡、伊佐町野崎遺跡などがあり、これらは大嶺盆地やその周辺に分布する。このことから、この地域が美祢市において最も稲作に適し、農業生産の盛んな場所であったことが推察される。下村遺跡も同じ地域に位置するが、遺跡の規模などからして、中核的な集落であったと考えられる。

以上、美祢市や美祢市周辺の自然環境や旧石器時代から弥生時代までの遺跡について概観したが、今後の発掘調査でさらに美祢地域の歴史が浮き彫りになることが期待される。

〈註〉

(1)山口県教育財団・山口県教育委員会編『国秀遺跡』1992年。(2)山口県教育財団・山口県教育委員会編『砂地岡遺跡』1993年。『上ノ山遺跡』1994年。(3)山口県教育財団・山口県教育委員会編『上ノ山遺跡』1994年。(4)山口県教育財団 山口県埋蔵文化財センター編『上領遺跡』2004年。(5)山口県教育財団・山口県教育委員会編『中村遺跡』1987年。

〈引用・参考文献〉

美祢市史編集委員会編『美祢市史』1982年

秋芳町史編集委員会編『秋芳町史』1991年

美東町史編集委員会編『美東町史』2004年

美祢市立図書館編『ふるさとの歴史美祢』1969年

日野綏彦・土屋貞夫監修『図説字部・小野田・美祢・厚狭の歴史』郷土出版社 2005年

中原和夫編『歴史物語シリーズ美祢地方歴史物語』瀬戸内物産 1993年

山口県教育委員会編『幸崎古墳・松ヶ迫遺跡』1973年

Ⅱ 調査の経緯と概要

美祢市では伊佐町伊佐地区において都市計画街路渋倉伊佐線建設事業（山口県美祢土木事務所が代行業として実施）および関連事業として美祢市下村土地区画整理事業を計画した。事業予定地には周知の埋蔵文化財包蔵地である下村遺跡（A・B地区）が一部含まれる。このため、関係機関の協議により山口県教育委員会に試掘調査を依頼することとなり、平成17年度に山口県教育委員会文化財保護課が工事予定地区の試掘調査を行い、弥生時代から古墳時代にかけての遺跡の埋存が確認された。

この結果を受け、山口県教育委員会と山口県美祢土木事務所が協議を行い、平成18年度に発掘調査を行うことが決定された。市道渋倉伊佐線緊急地方道路整備事業・過疎代行（交付金）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査として、山口県ひとつくり財団山口県埋蔵文化財センターが委託を受け、平成18年4月から着手することとなった。

4月上旬より、調査対象地区の現況確認、山口県美祢土木事務所との打ち合わせ等、事前の諸準備に取りかかり、美祢市教育委員会を通して周辺の小・中学校および地域住民に安全確保のための理解と協力を要請した。調査区は厚狭川に隣接する丘陵上に位置するA地区4,100㎡と西に約300m離れたB地区1,400㎡の2地区であるが（図2）、面積が広く遺構の密度も高いと予想されるA地区の調査から開始し、8月下旬頃からB地区の調査も並行して進めることとした。

A地区では調査に先立って進入路の設置や樹木の伐採等も必要であった。4月下旬に調査員による試掘で遺構面の確認をした後、重機による表土除去を始めた。5月1日には現地調査事務所を設置し、



表土除去



発掘体験

9日から作業員を動員して本格的な発掘調査を進めた。作業員の約半数は発掘作業経験者であったため、当初から安全で効率的な調査を行うことができた。調査区の西側から進めた遺構検出は6月中旬に終了し、竪穴住居跡・貯蔵穴・土坑・柱穴等が調査区全体にわたって高密度に分布していることが確認された。その後、標準座標杭を設置し、平板測量で遺構の配置を把握したうえで、掘り込みの計画を検討した。調査期間と検出遺構数を考慮して、西側から大きな遺構を優先して掘り込みを進めることとした。6月下旬から始めた遺構の掘り込み作業は、遺構の深さと出土遺物の多さから予想以上の時間を要したが、幸いにも梅雨や台風等の影響も少なく、好天に恵まれたおかげで着実に進めることができた。

掘り込みを始めて間もない6月末には美東町立大田小学校の児童が来跡し、竪穴住居跡の発掘体験をした。8月初めにも教職員のグループの研修として、土坑や貯蔵穴の発掘体験が実施された。

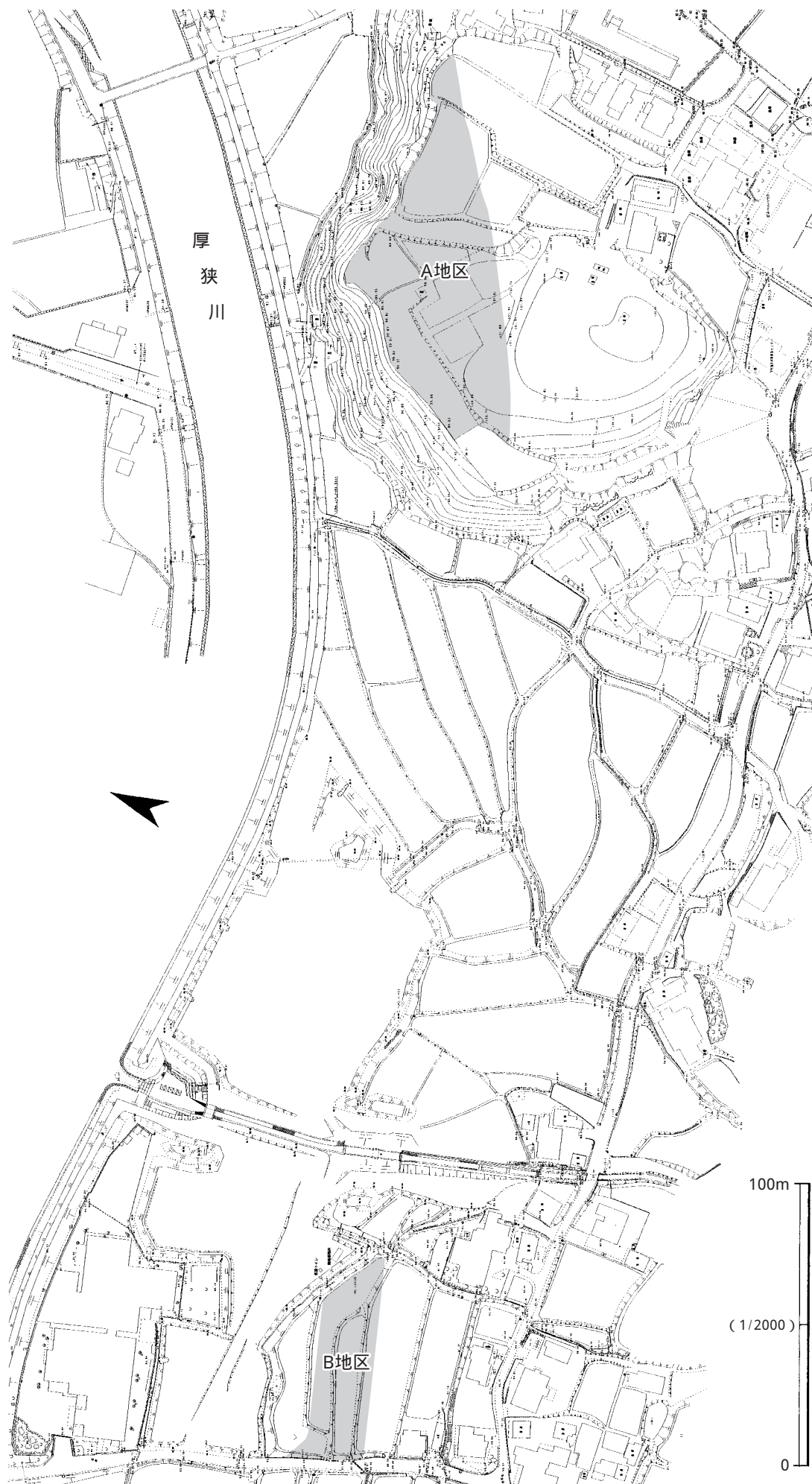


図2 調査区設定図



遺構の掘り込み



現地説明会



空中写真撮影

いずれも参加者が意欲的に取り組み、たいへん有意義な体験学習となった。また、現地調査期間中には地域住民や県内各地からの見学者が訪れることもあり、本遺跡への関心の高さがうかがわれた。遺構の掘り込みが8割程度進んだ9月30日には、発掘調査の成果を広く公開するために現地説明会を実施した。さわやかな秋晴れの下、約90名の参加者が遺構や遺物を間近に見学し、当時の人々の生活に思いをはせる貴重な場となった。

調査の成果として、深い袋状の貯蔵穴、大量の炭化物を含む方形の大型土坑、集落内に存在する墓などの遺構があげられる。こうした遺構は出土遺物から弥生時代中期初頭の所産と考えられるが、他の時代の遺構・遺物がほとんど検出されず、集落の継続期間がきわめて短いことが判明した。このような事例は珍しく、弥生時代の集落構造を考察するうえで貴重な資料となった。

遺跡の全容がほぼ判明した10月中旬に空中写真撮影と合わせて写真測量による遺構実測を行った。その後、個々の遺構の詳細な記録や下層遺構の確認を行い、11月9日に調査は全て終了した。

B地区は8月末から表土除去を行い、9月中旬には遺構検出を終えた。標準座標杭を設置し平板測量を行った後、遺構の掘り込みを進めた。この地区は弥生時代終末から古墳時代とみられる竪穴住居跡1棟以外に大きな遺構はなく、出土遺物も少なかったため、掘り込みは短期間で終了した。10月末に空中写真撮影を行い、その後グリッド実測により遺跡全体の記録をとり、A地区と同じ11月9日に調査は全て終了した。

両地区とも、深い遺構を埋め戻して安全を確認し、山口県美祢土木事務所による現地での検査を受け、引き渡しを行った後、調査に使用した機材等を搬出し、11月14日に現地調査事務所を撤去した。

その後、山口県埋蔵文化財センターにおいて、調査資料の整理、出土遺物の復元・実測・写真撮影を行った。出土遺物整理の過程で国内最古級の弥生絵画土器が確認されるなど、遺跡の重要性が改めて注目されることとなった。こうして無事に現地調査を終え、報告書を刊行するに至ったのは、関係各位の多大な御理解・御協力の賜物であり、ここに感謝の意を表したい。



图3 遺構配置図 (A地区)

Ⅲ 調査の成果

1 A地区

A地区は北に厚狭川を望む標高約100mの独立丘陵上に位置する。今回の調査対象地区は丘陵の中央から北西側にあたり、東端と西端との距離が138m、中央部の最大幅が57mで、底辺の長い二等辺三角形を呈する。西部から中央部にかけては北西側が一段低くなる。中央部から東部にかけては階段状に標高が下がり、東端が最も低い。調査区内の標高差は最大で5.5mである。検出された遺構の種類とその数は、弥生時代の竪穴住居跡6棟、土坑約200基（貯蔵穴を含む）、墓2基、多数の柱穴、そして中世の墓1基である。遺構は調査区全体にまんべんなく分布しているが、特に中央部と西部は密度が高い（図3）。土坑のうち、遺物が出土したものは約160基を数えるが、その形態および遺物の出土状況から「貯蔵用竪穴」とみなすことができるものは約50基ある。また、長軸が2mを超える大型の方形プランをもつ土坑も19基検出された。これらはそれぞれ「貯蔵穴」「大型土坑」として他の土坑とは別に取り上げる。

（1）弥生時代の遺構

弥生時代の遺構から大量の遺物が出土しているが、土器のほとんどが中期初頭に位置付けられるものであり、集落の継続期間の短さが注目される。集落は今回の調査対象になっていない丘陵の南東側にも広がっていたとみられる。集落内に墓が存在することもこの時期としては珍しい事例といえる。また、集落の規模・継続期間の短さに比べ、検出された貯蔵穴の数が圧倒的に多い。このことから当時の貯蔵穴が短期間のうちに掘削され、埋められていったことが推測される。

① 竪穴住居跡

検出された6棟の竪穴住居跡は全て円形プランで、中央炉の痕跡を残すものもある。壁溝・貼り床・ベッド状遺構等の痕跡は確認されなかった。1棟は北半が調査区外に広がっており、出土遺物も少なく主柱穴も検出されていないので、これを除く5棟について略述する。

SC 1（図4、図版3）

調査区の西端に位置する住居跡である。後世の削平を受け東半部のみ遺存するが、直径5.1m、壁高は最大で20cmを測る。直径38～54cm、深さ41～58cmの主柱穴3本が検出された。埋土中からは弥生土器に加え、床面付近で石庖丁が出土した。出土土器から中期前半の所産であると考えられる。西半部にあたる位置には大型土坑SK9とこれを切る土坑SK15が存在するが、これらの遺構との新旧関係は明らかではない。

SC 2（図4、図版3）

丘陵の頂部にあたる調査区南端に位置し、一部が調査区外に広がる。西壁が土坑・柱穴に切られ遺存しない。直径は5.6mを測るが、上部は後世の削平を受けており、壁高は最大でも約10cmしか残存しない。主柱穴は直径30～62cm、深さ51～67cmの4本柱。床面中央には長径82cm、短径66cmの楕円形プランを持つ炉跡が検出された。埋土から弥生終末期の遺物が出土しているが、住居構造から中期初頭の所産であると考えられる。床面の下層には不整楕円形の土坑およびピットが検出されたが、時期

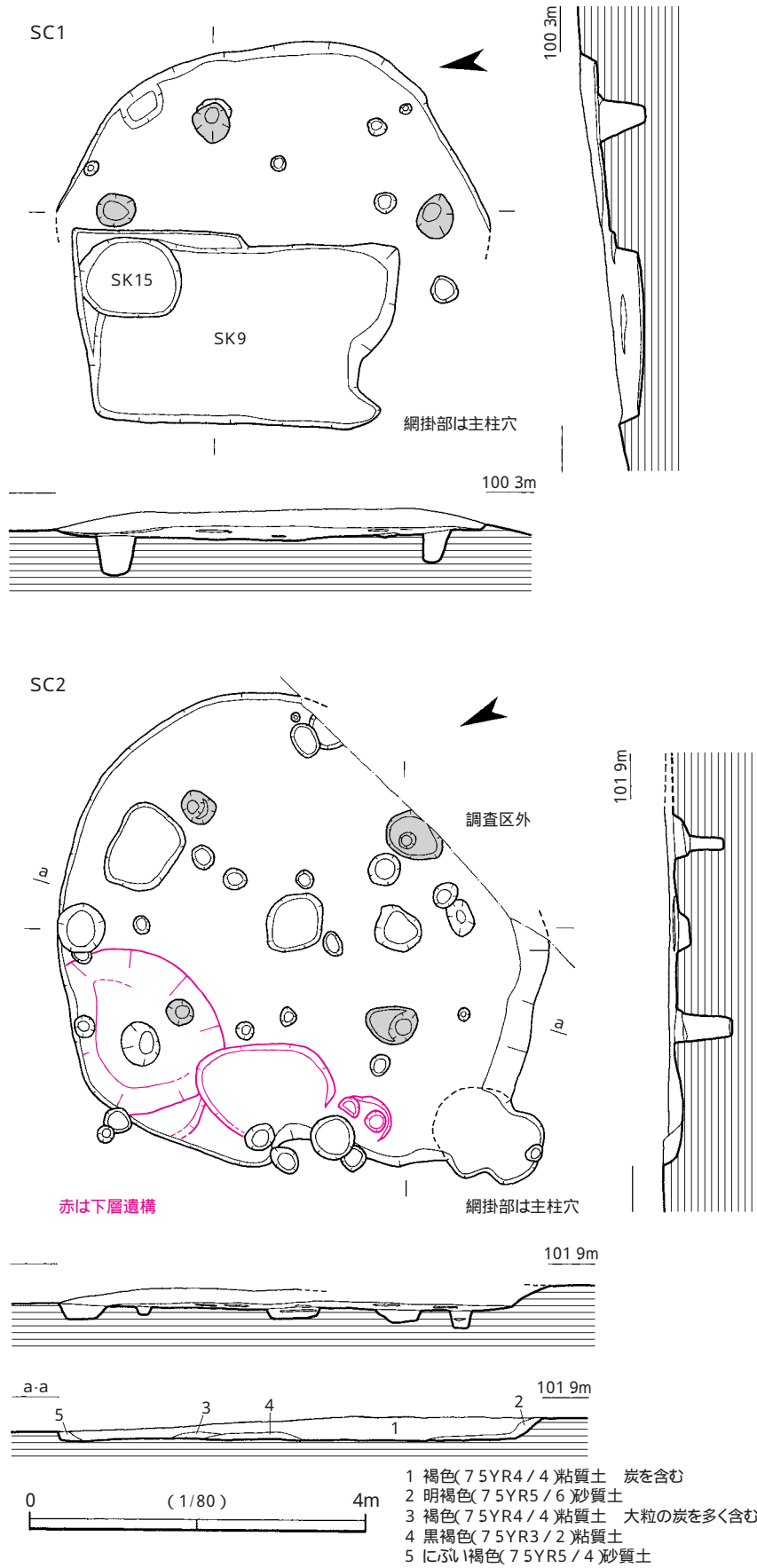


図4 竪穴住居跡実測図①

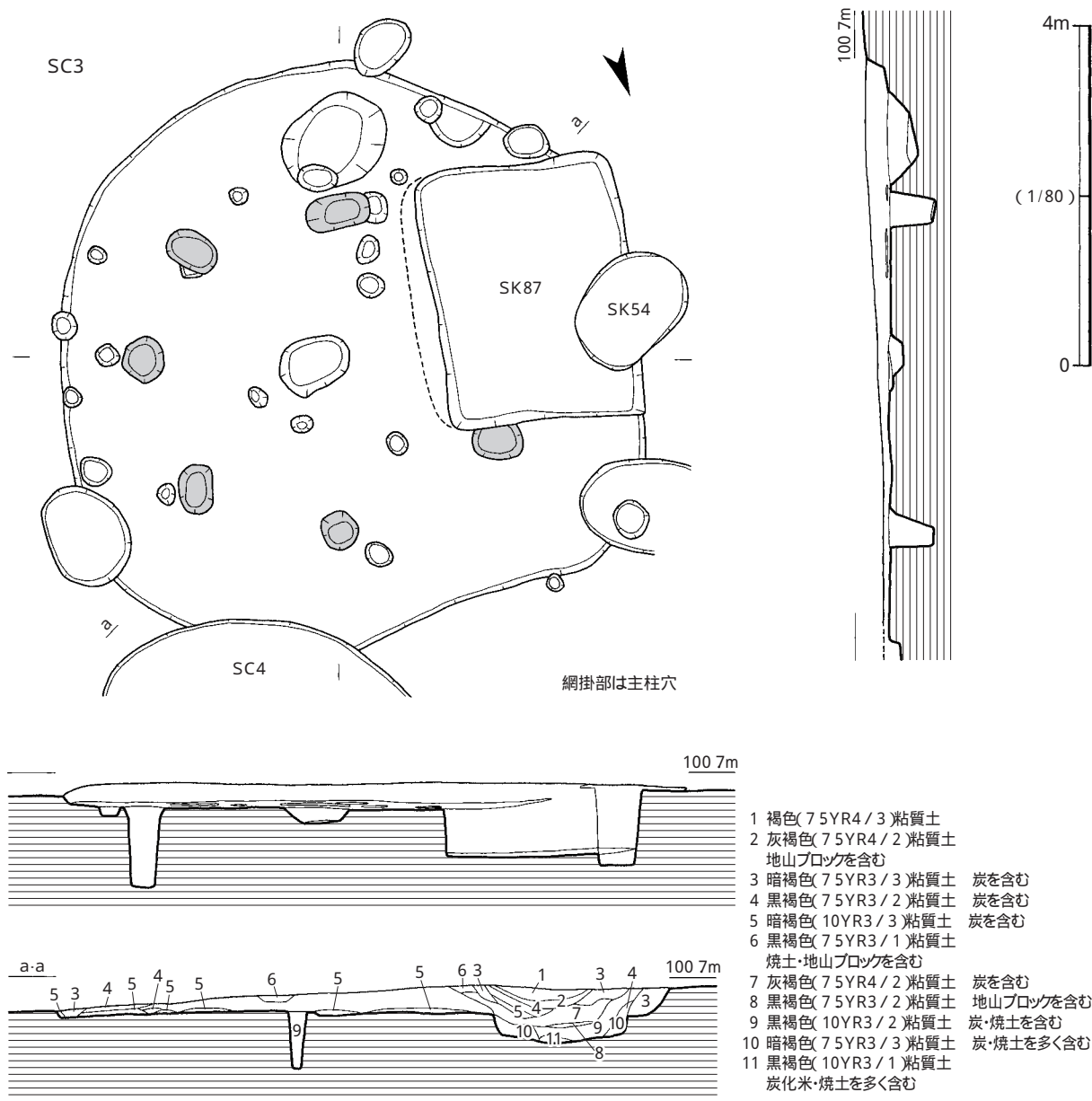


図5 竪穴住居跡実測図②

は不明である。

SC 3 (図5、図版4)

調査区のほぼ中央に位置する住居跡で、竪穴住居跡 SC 4、土坑 SK54、大型土坑 SK87に切られ、西壁と北壁の一部が遺存しない。直径は6.8m、壁高は遺存状況の良い南壁で約20cmである。床面には52~93cmの深さの支柱穴6本が円形に並び、その中央には長軸90cm、短軸65cmの楕円形プランで21cmの深さを測る炉跡とみられる窪みが検出された。埋土からは中期初頭の弥生土器や打製石鎌が多く出土した。

SC 4 (図6)

SC 3の北東に隣接する住居跡であるが、調査区中央を横切る近代の配水管によって北半が削平されており、詳細は明らかでない。直径4～5mの円形あるいは長径5m、短径4mの楕円形と推測される。大型土坑SK59・竪穴住居跡SC3を切るが、出土土器からこれらの遺構との時期差はさほどないと考えられる。床面から管玉1点が出土した。

SC 5 (図6、図版5)

調査区の東部に位置しており、他の竪穴住居跡に比べ標高が3～4m低い。後世の削平を受け、南半しか遺存しないが、7.8mの直径を測り、本調査区で検出された最大の住居跡である。残存する南壁は急勾配で立ち上がり、壁高は30cmを測る。床面には57～74cmの深さの6本の主柱穴が半円を描くように検出された。おそらく12～13本の主柱穴が円形に並んでいたと推測される。中央部には直径40cm、深さ21cmの円形の窪みが確認されたが、用途は不明で

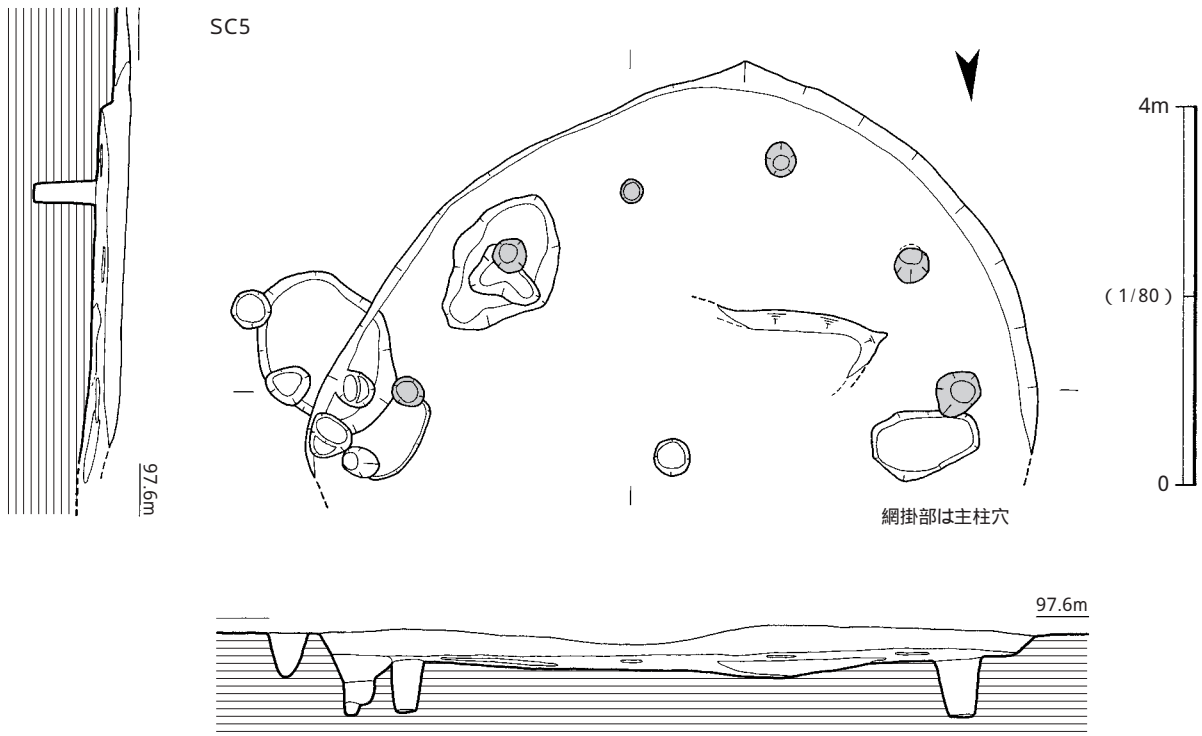
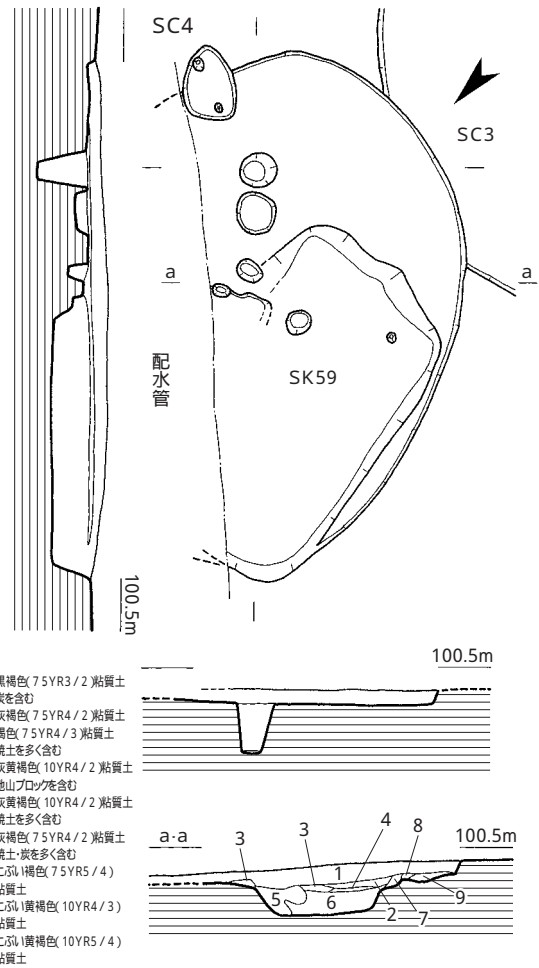


図6 竪穴住居跡実測図③

ある。出土遺物が少ないため時期を決定することは難しいが、住居構造から他の竪穴住居とほぼ同時期と推定される。

② 貯蔵穴

貯蔵穴として取り上げた土坑は円形や楕円形の平面形をもつものが多く、上端の径が150～200cmのものが大部分を占める。上部が削平されて浅くなったものから170cmを超える深いものまでであるが、80～120cmの深さのものが多い。底面は水平に掘り込まれており、上端が不整形でも下端は円形や方形に整えられているものもある。上端よりも下端が広がったいわゆる「袋状」の断面形をもつものも多い。他の遺跡で見られるような明確な下部構造をもつものはない。埋土中に大量の土器類を含有するものも多く、食料の貯蔵用に使われた後、廃棄土坑として利用されたとみられる。出土土器からほとんどの貯蔵穴が中期初頭の所産と考えられる。

SU 1 (図7、図版5)

平面形は楕円形で長径200cm、短径160cm。断面形は逆台形に上部が開くが、底部付近の壁面はほぼ垂直である。西側がやや削平されているが、東側で105cmの深さを測る。埋土は土層の状況から人為的に埋め戻されたものとみられ、下層のにおい橙色粘質土・橙色粘質土(6・7層)から大量の土器が出土した。

SU 2 (図7、図版6)

平面形は不整形円形で最大径160cm、断面形は袋状を呈し、底部は最大で190cmの幅を持つ。深さは80cm。埋土は自然堆積ではないとみられ、人為的に埋め戻されたものと考えられる。土器の含有量は少ないが、底面の中央やや西寄りには石皿が据えられていた。

SU 5 (図7、図版6)

平面形は不整形円形で直径約130cm、断面形は逆台形で深さは50cm。埋土は土層の状況から自然堆積ではないとみられ、人為的に埋め戻されたものと考えられる。上層の暗褐色粘質土には炭と大量の土器が含まれていた。

SU 6 (図7、図版6)

平面形は円形で直径160cm、断面形は逆台形で深さは50cm。貯蔵穴とした遺構の中では壁面の勾配が最もゆるやかである。埋土はほぼ水平に堆積しており、最上層の暗褐色粘質土に少量の土器片が含まれていたが、出土遺物は少ない。

SU 7 (図7、図版6)

平面形は不整形円形で最大径160cm、断面形は袋状で底部は最大200cmの幅を持ち、深さは70cmを測る。埋土は上下2層に分かれており、人為的に埋め戻されたものと考えられる。遺物は少量の土器片しか出土していない。

SU 8 (図8、図版6・7)

完掘時の平面形は不整形であるが、貯蔵穴が土坑を切ったとも考えられる。その場合、大量の土器が出土した部分の平面形は長軸160cm、短軸120cmの隅丸長方形、断面形は方形を呈する。土器は深さ30～70cmのレベルに集中しており、やや下がったところから磨製石剣も出土した。さらに、土器の下

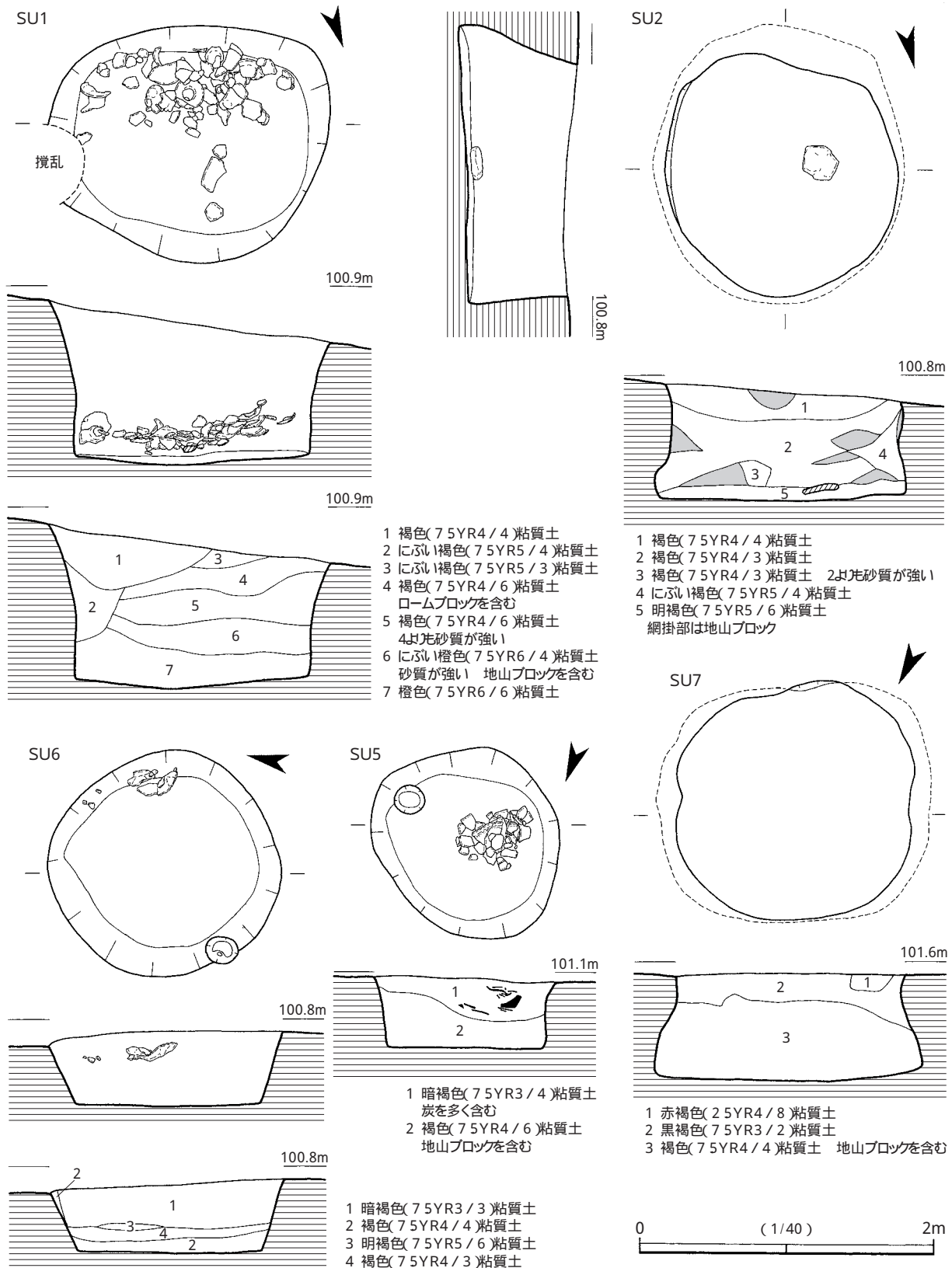


図7 貯蔵穴実測図①

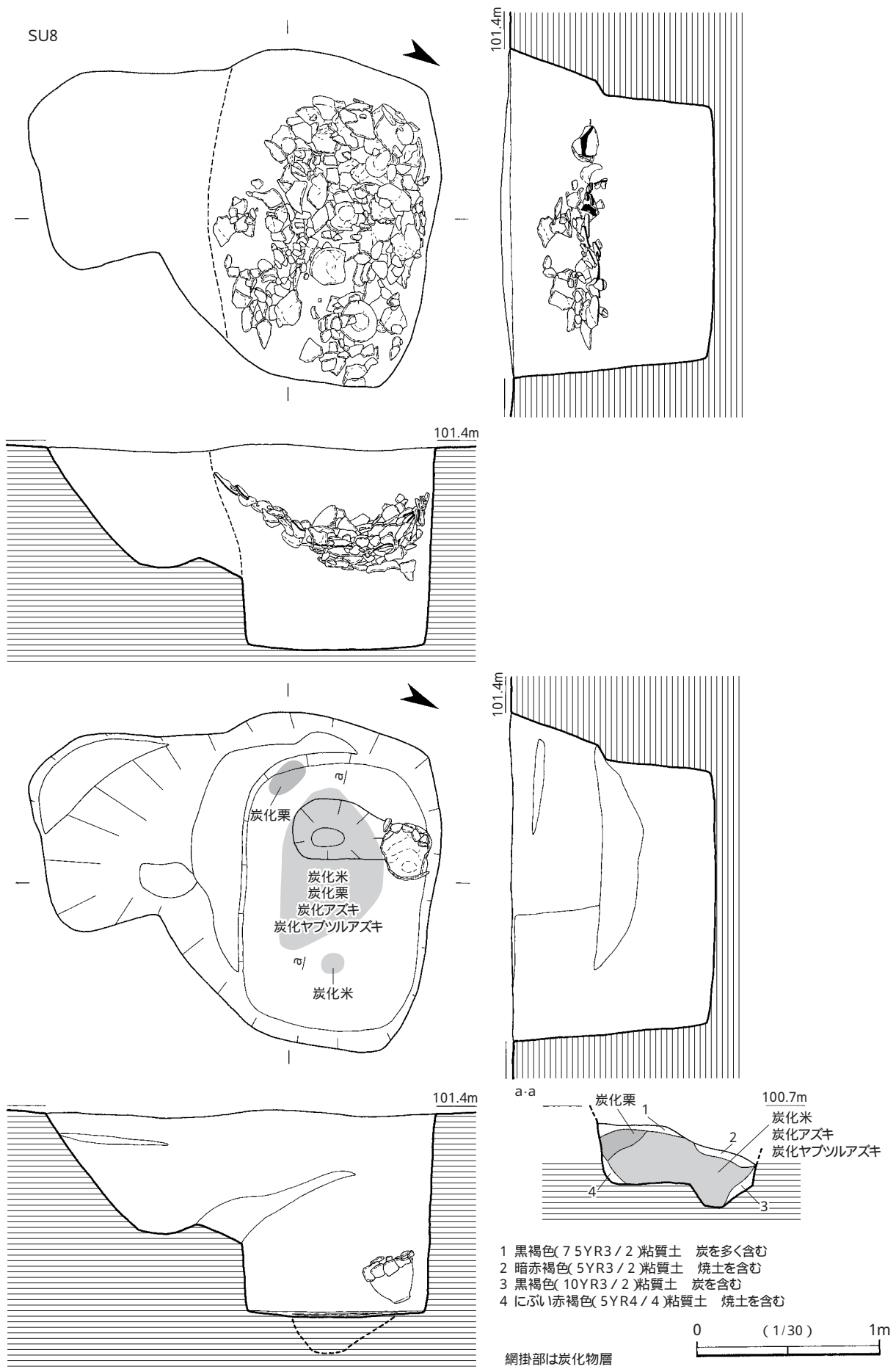


図8 貯蔵穴実測図②

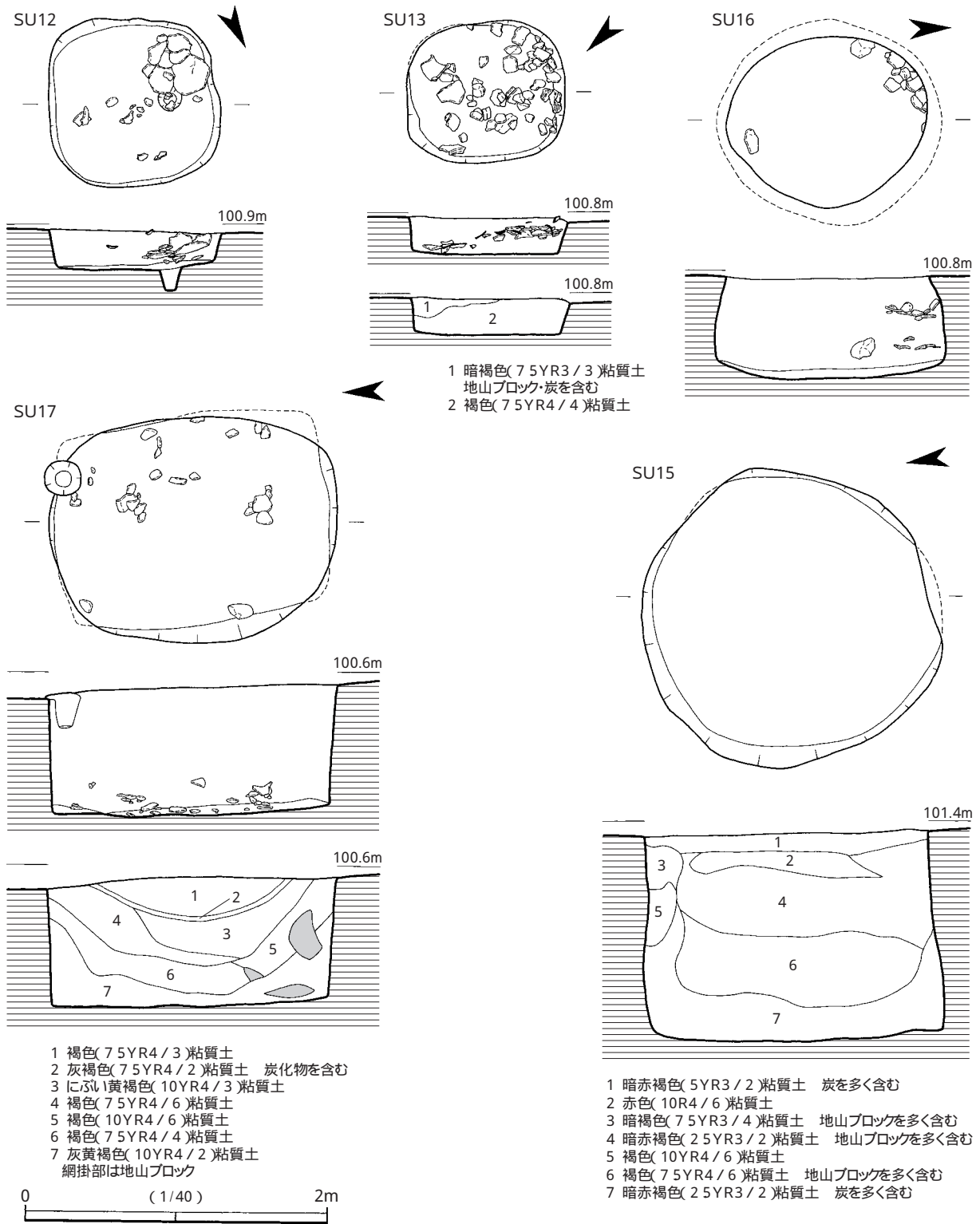


図9 貯蔵穴実測図③

層からは大量の炭化物が出土した。厚さ25～30cmにわたって米と粟が分層して検出され、米の中にはアズキも混入していた。同レベルに据え置かれた壺にもダイズが詰められていた。壺には大量の煤が付着しており、ダイズの入った状態で熱を受けたと推測される。北側の壁面にも被熱の痕跡が見られた。当時の食料の貯蔵方法を考察する貴重な資料といえよう。水平に掘り込まれた底部の深さは110cmであるが、底面の中央より西寄りに深さ20cmの小土坑が検出された。

SU12 (図9)

平面形はほぼ隅丸正方形を呈し、長軸115cm、短軸110cmを測る。断面形は逆台形で深さは25cmと浅いが、多くの土器が出土した。底面の中央より少し西寄りに直径15cm、深さ15cmのピットが検出された。

SU13 (図9、図版7)

平面形は隅丸長方形で長軸105cm、短軸95cm。断面形は方形に近く、壁面はほぼ垂直に立ち上がり、袋状に下端が広がる部分もある。深さは20cmと浅い。土層は人為的に埋め戻された状況を示しており、埋土の大部分を占める褐色粘質土から大量の土器が出土した。

SU15 (図9)

平面形は円形で直径200cm、断面形は底部がわずかに広がる袋状を呈し、深さは140cmを測る。埋土は自然堆積ではないとみられ、人為的に埋め戻されたものと考えられる。埋土中の土器の含有量は少ない。

SU16 (図9)

平面形は楕円形で長径130cm、短径110cm、断面形は袋状を呈し、底部は最大で150cmの幅を持つ。深さは65cmを測る。北壁付近の埋土から多くの土器が出土した。

SU17 (図9)

平面形は上端が不整楕円形であるが、底面は長軸180cm、

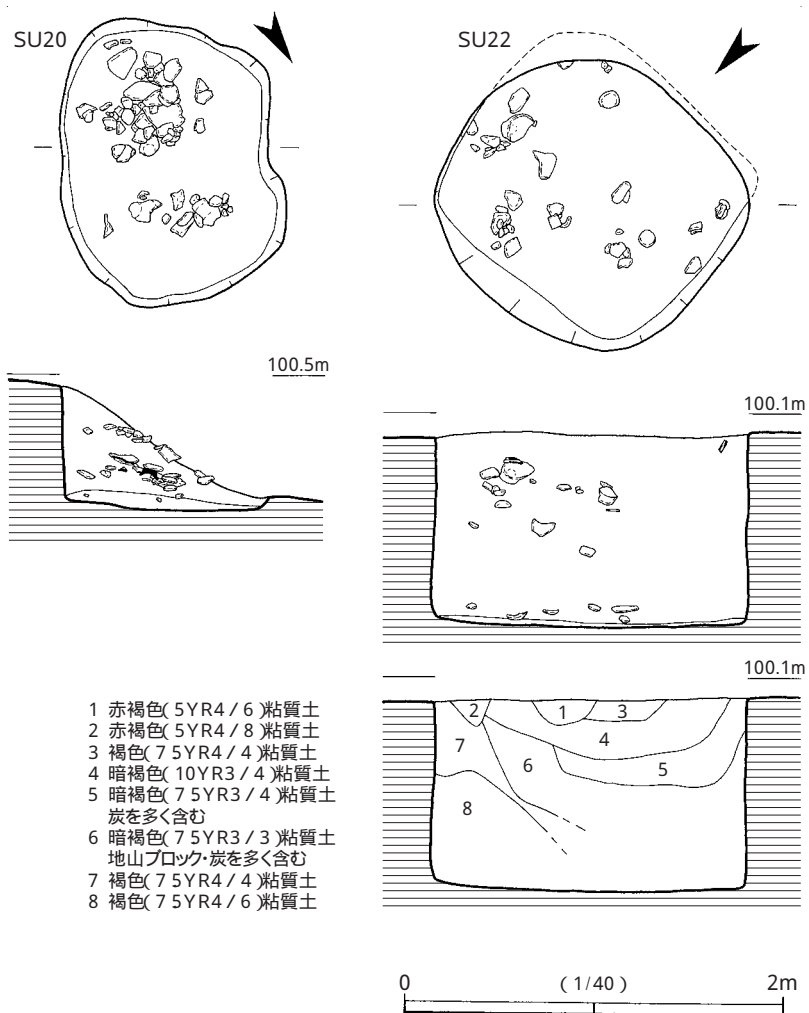


図10 貯蔵穴実測図④

短軸140cmの隅丸長方形に整えられている。断面形は方形で深さは80cm。埋土は土層の状況から自然堆積とみられる。土器の含有量は少ないが、底面付近から大型蛤刃石斧が出土した。

SU20 (図10)

平面形は不整楕円形で長径150cm、短径120cm。断面形は方形とみられるが、北西側が大きく削平されており詳細は定かではない。南東の壁高は60cmを測る。埋土中の土器の含有量が多い。

SU22 (図10、図版7)

平面形は上端が不整円形であるが、底面は長軸140cm、短軸130cmの隅丸長方形に整えられている。断面形はほぼ方形だが、袋状に下端が広がる部分もある。深さは100cmを測る。土層は上半部しか確認されていないが、下層は自然堆積とみられる。埋土からは多くの土器が出土した。

SU24 (図11、図版8)

平面形は不整楕円形で長径170cm、短径140cm。断面形は袋状を呈し、底部は最大で185cmの幅を持つ。北側がやや削平されているが、南側で90cmの深さを測る。埋土の下半部は自然堆積とみられるが、上半部は人為的に埋め戻したものと考えられる。埋土中の土器の含有量は少ない。

SU25 (図11、図版8)

平面形は楕円形で長径160cm、短径135cm。断面形は袋状を呈し、底部は最大で180cmの幅を持つ。底面はわずかに北に傾斜し、最深部の深さは120cmを測る。埋土の下半部の暗褐色粘質土層(3・4層)は人為的な埋め戻しとみられ、ここから大量の土器が出土した。この中に絵画土器も含まれており、出土レベルは底面から約40cmの高さである。祭祀に使われた土器を廃棄したものであろう。埋土の上半部(1・2層)は自然堆積とみられ、ここから遺物はほとんど出土していない。

SU28 (図11、図版9)

平面形は楕円形で長径210cm、短径175cm。断面形は方形で深さは90cm。土層は大きく東に傾斜しており、上層のにぶい赤褐色粘質土層・暗赤褐色粘質土層(1・2層)以外は人為的に埋め戻されたものとみられる。下層の明褐色粘質土層(5層)とにぶい赤褐色粘質土層(6層)の間から大量の土器が出土した。

SU29 (図12、図版8)

平面形は楕円形で長径165cm、短径135cm。断面形は方形。SK56を切って掘り込まれており、深さは120cmを測る。底面中央に直径35cm、深さ30cmのピットを持ち、東側壁面にも直径15cmの小ピットを有する。この遺構からは楯描文土器が多く出土している。

SU30 (図11、図版9)

平面形は不整円形であるが、西側を除く3方向に深さ10~15cm程度の平坦面が広がっており、蓋受けの可能性も考えられる。深さ20cmレベルでの平面形は円形となり直径110cm。断面形は袋状を呈し、底面は直径160cmの円形。深さは140cmを測る。埋土上層に土器が集中しており石皿も出土した。

SU32 (図12、図版9)

平面形は楕円形で長径175cm、短径160cm。深さは35cmと大きく削平を受けている。断面形は袋状を呈し、底部は最大195cmの幅を持つ。中央部の埋土上層から弥生土器とともに松菊里式土器に類似した土器が出土した。

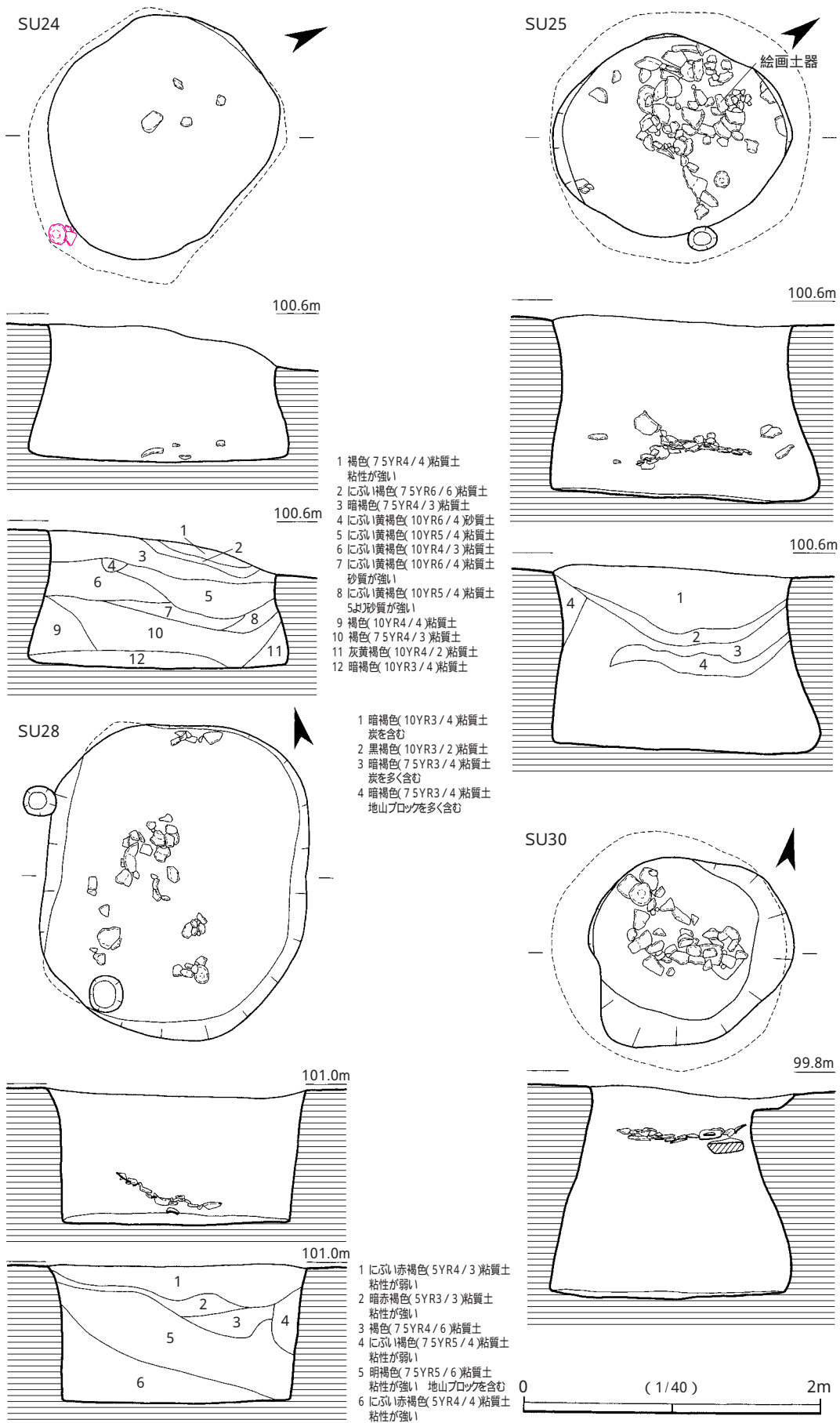


図11 貯蔵穴実測図⑤

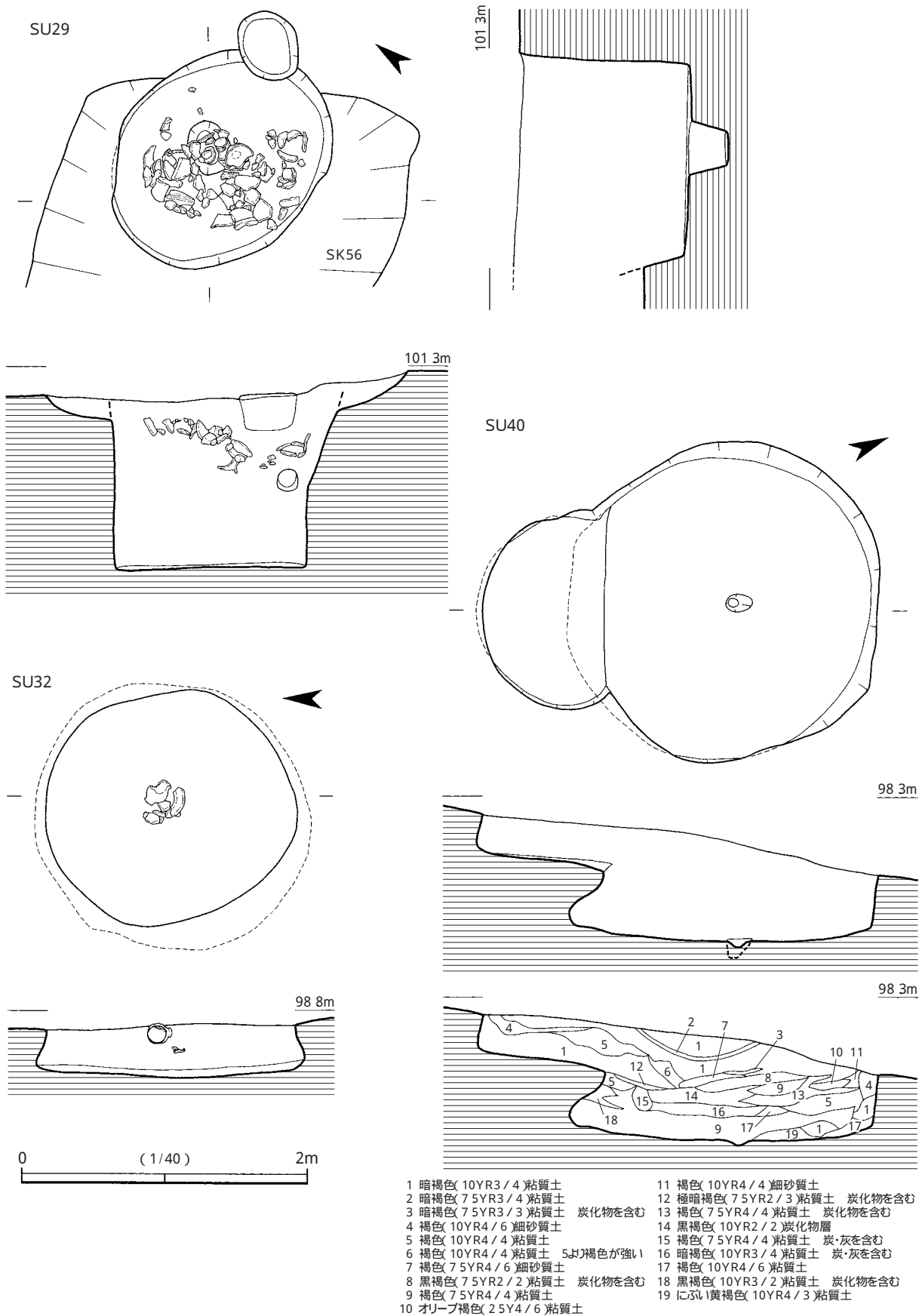


図12 貯蔵穴実測図⑥

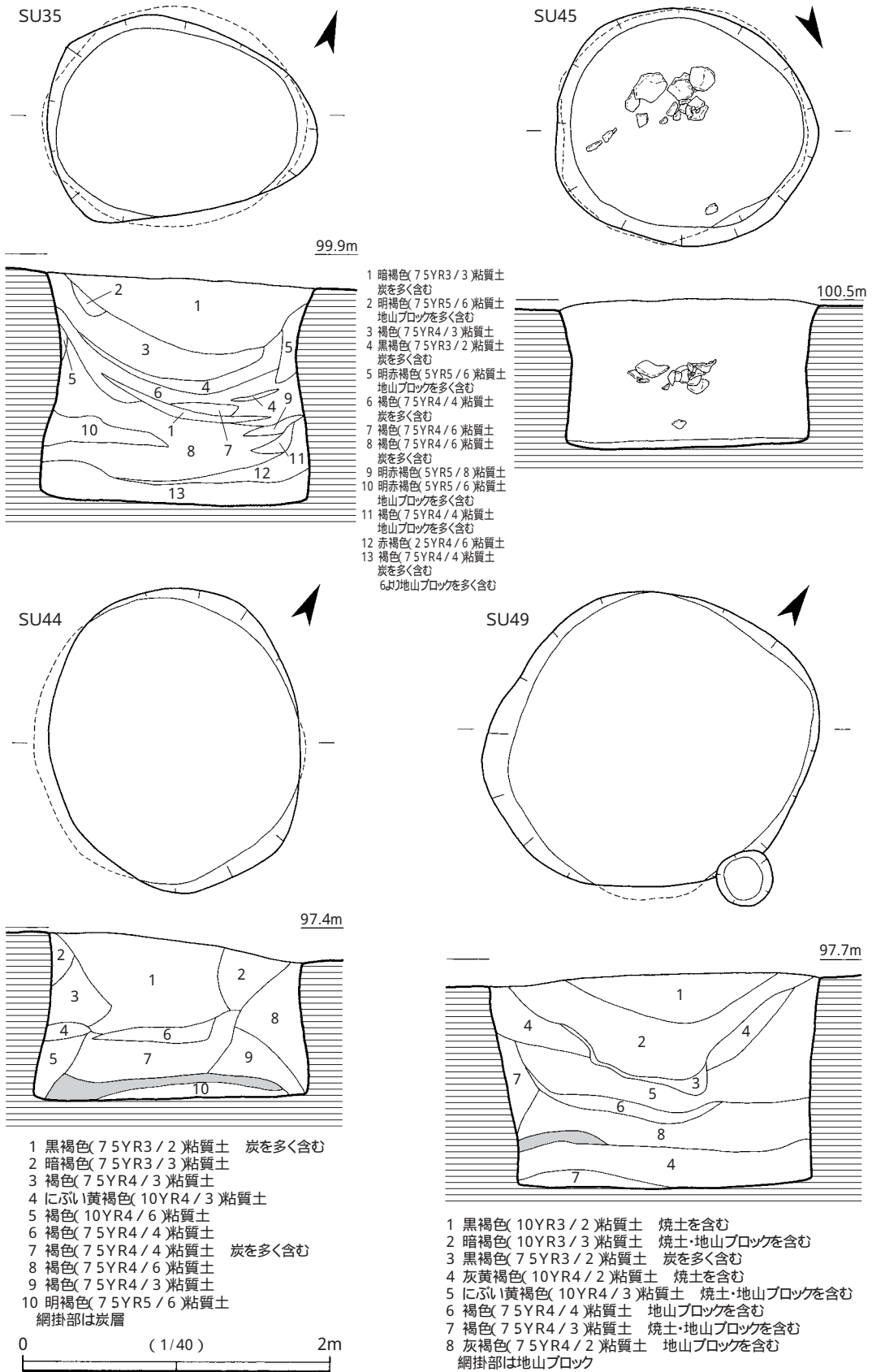


図13 貯蔵穴実測図⑦

SU35 (図13)

平面形は不整楕円形で長径175cm、短径130cm。断面形は中央がくびれた袋状で、上端と下端はほぼ同じ幅を持つ。深さは150cmを測るが、埋土中の土器の含有量は少ない。

SU40 (図12、図版9)

土層の状況から判断して、複数の遺構の切り合いではなく二段掘りの貯蔵穴とみられる。平面形はダルマ形(長軸280cm)、底面は円形(直径220cm)。断面形は上層が方形、下層が袋状で最大25cm広がる。中段の深さは30cm、底面はさらに50cm下がる。底面中央に長径18cm、短径13cmの楕円形のピットを有する。埋土中から大量の土器とともに扁平片刃石斧が出土した。

SU44 (図13)

平面形は楕円形で長径195cm、短径160cm。断面形は袋状で底面は上端よりも最大で11cm広がっている。東側がやや削平されているが、西側で110cmの深さを測る。埋土は土層の状況から人為的に埋め戻されたものと考えられる。上層の黒褐色粘質土(1層)が土器片を含有するが、出土遺物は少ない。底部付近には5~17cmの厚さをもつ炭層が存在する。

SU45 (図13)

平面形は楕円形で長径170cm、短径155cm。断面形は中央がくびれた袋状で、上端と下端はほぼ同じ幅を持つ。深さは95cmを測る。土器は深さ40~60cmのレベルに集中して出土したが、全体の出土量は多くない。土器とともに柱状片刃石斧が出土した。

SU49 (図13、図版10)

平面形は不整楕円形で長径220cm、短径190cm。壁面は急勾配で立ち上がり、断面形は方形に近い逆台形を呈する。深さは140cmを測る。土層の状況から下半部は人為的に埋め戻されたものとみられ、上半部は自然堆積の様相を呈する。土器は深さ80~100cmの褐色粘質土層(6層)から多く出土した。これらの中には本遺跡では出土例の少ない高杯も含まれていた。

③ 土坑

貯蔵穴および後述の大型土坑・墓を除いた土坑の主なものについて述べる。

SK 1 (図14、図版10)

平面形は西側が少し開いた隅丸長方形で長軸205cm、短軸135cm。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。底面は西側がわずかに下がり、最深部の深さは95cmを測る。深さ45~65cmのレベルに土器片が集中していたが、出土量は多くない。

SK 2 (図14)

平面形は楕円形で長径145cm、短径105cm。深さは18cmしかないが、二段掘りで10cmの深さにテラス状の平坦面がある。出土遺物は少量の土器片だけである。

SK10 (図14、図版10)

平面形は不整楕円形で長径175cm、短径90cmを測り、SK82を切る。断面形は逆台形を呈し、深さは45cm。廃棄土坑とみられ、大量の土器片が出土した。北西の壁面付近で被熱の痕跡のある粘土塊が検出されたが、用途は不明である。

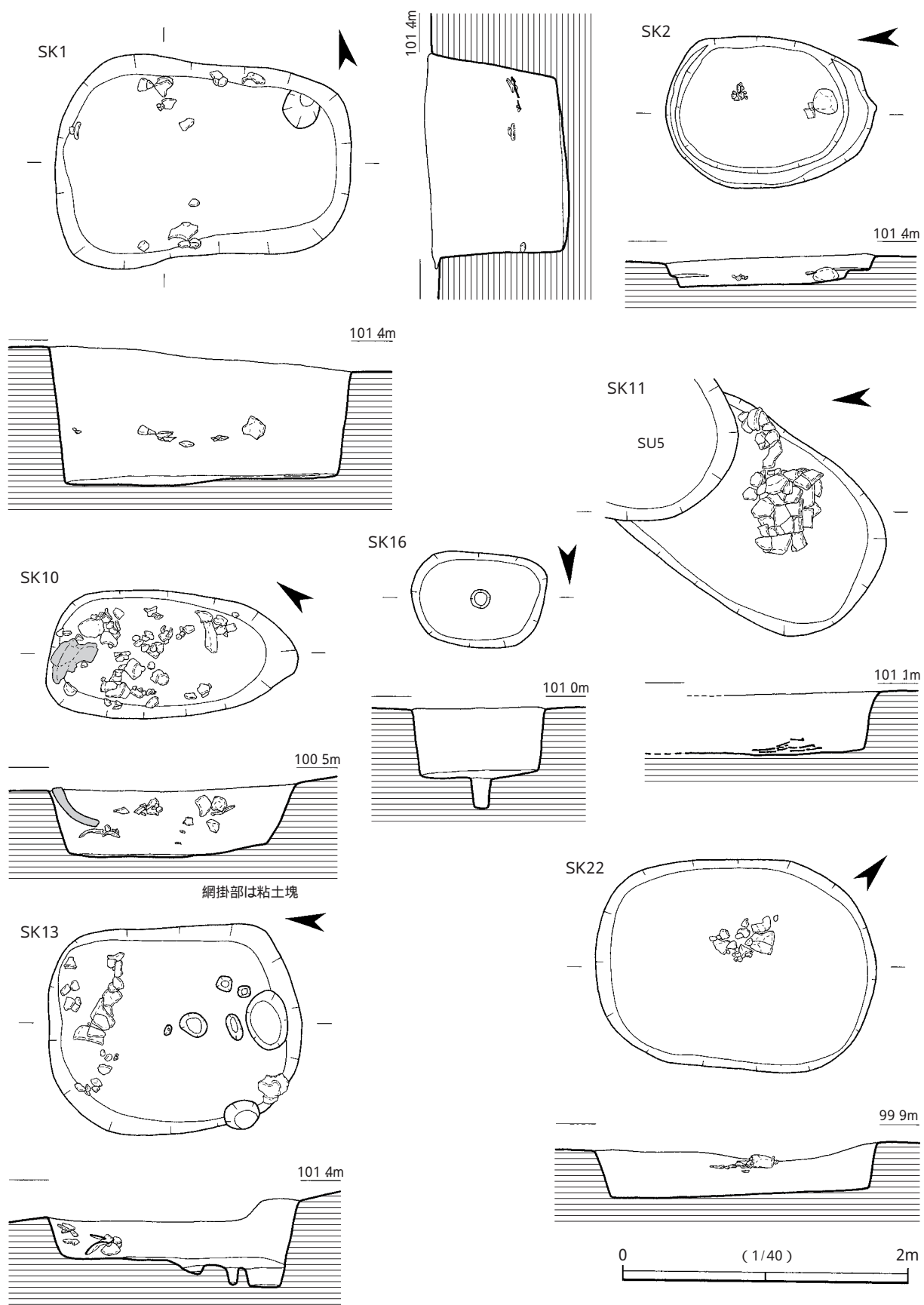


図14 土坑実測図①

SK11 (図14、図版10)

貯蔵穴 SU 5 に切られ、北東部は遺存しない。平面形は楕円形とみられ、長径は推定で約200cm、短径は125cm。断面形は逆台形を呈し、深さは40cm。口縁部に刻目を施した甕2個体が押しつぶされた状態で出土した。他の遺物が混在しない状況から考えて、廃棄土坑とは性格を異にするものとみられる。

SK13 (図14)

平面形は隅丸長方形で長軸180cm、短軸145cm。底面はゆるやかに南側に傾斜し、最深部の深さは40cm。底面の南半には不整形のピットが多く検出されたが、用途は明らかでない。北側の埋土から多くの土器片が出土した。

SK16 (図14、図版10)

平面形は楕円形で長径95cm、短径65cm。深さは45cmで、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は単層で遺物を全く含まない。床面中央に直径13cm、深さ22cmのピットがあり、小型の落とし穴の可能性も考えられる。

SK22 (図14、図版10)

平面形は楕円形で長径195cm、短径145cmを測る。断面形は逆台形を呈するが、壁高は30cmと浅い。調査区西側の下段に位置しており、上部は削平されていると考えられる。埋土は単層で中央付近に土器片が集中していたが、出土量は多くない。

SK25 (図15)

北半が後世の削平を受け遺存しないが、平面形は楕円形と推測される。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、南側の壁高は40cmを測る。底面は中央付近がわずかに窪む。埋土は単層で南半部に土器を多く含有する。

SK34 (図15、図版11)

平面形は隅丸長方形で長軸220cm、短軸165cm。上部は削平を受けているとみられるが、東端の壁高は47cmを測る。埋土は自然堆積の様相を呈し、最も厚い黒褐色粘質土層(4層)から大量の土器片が出土した。

SK45 (図15)

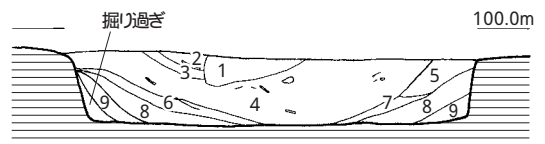
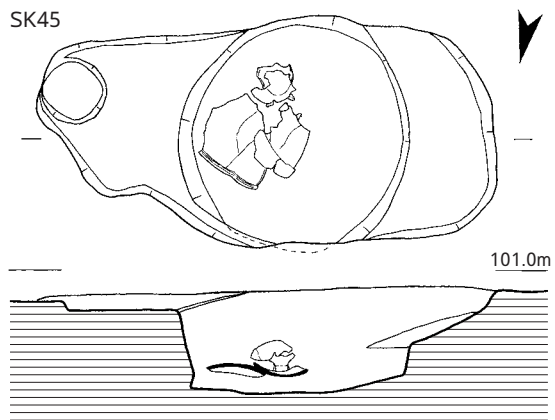
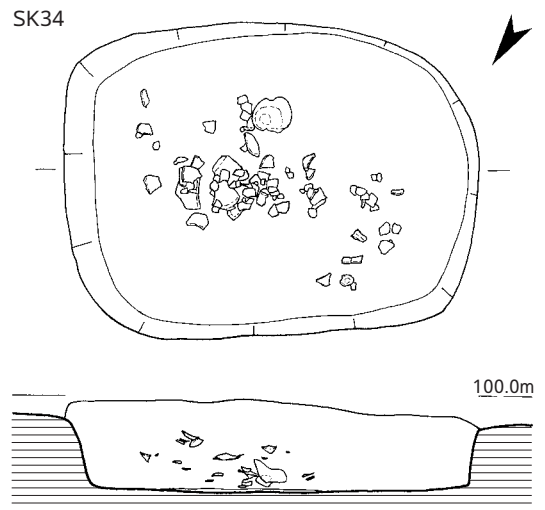
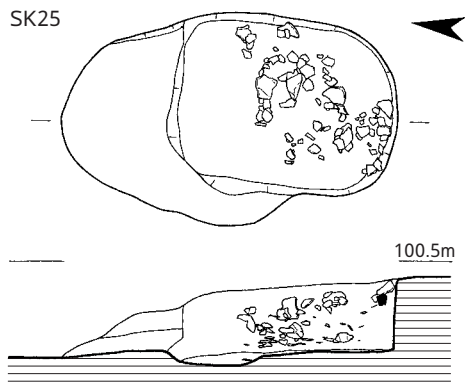
不整形の平面プランをもつ土坑であるが、複数の遺構が切り合っている可能性も考えられる。中央に深さ約55cmでほぼ水平な円形の底面が確認され、底面直上から口径40cmを超える甕が押しつぶされた状態で出土した。

SK54 (図15、図版11)

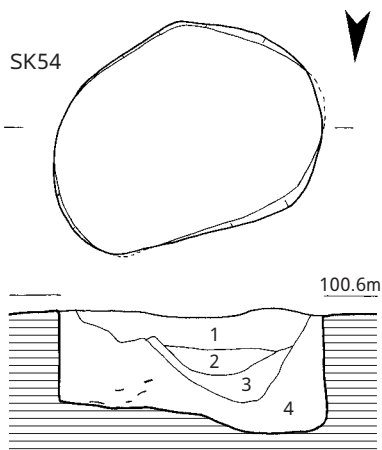
平面形は楕円形で長径145cm、短径110cm。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。底面は西側に大きく傾斜しており、最深部で65cmの深さを測る。埋土は人為的に埋め戻されたものとみられ、最下層のにおい黄褐色粘質土には多くの土器片が含まれていた。

SK61 (図15、図版11)

平面形は不整楕円形で長径185cm、短径135cm。大きく削平を受けており、底面から15cmしか遺存しない。壁面はゆるやかに立ち上がり、逆台形の断面形を呈する。中央付近から出土した小型の壺以外



- 1 灰黄褐色(10YR4/2)粘質土 地山ブロックを多く含む
- 2 灰褐色(7.5YR4/2)粘質土 地山ブロックと土器片を含む
- 3 黒褐色(7.5YR3/2)粘質土
地山ブロックと炭を多く含む 土器片を含む
- 4 黒褐色(10YR3/2)粘質土
地山ブロックと炭を含む 土器片を多く含む
- 5 暗褐色(10YR3/3)粘質土 地山ブロックと炭を含む
- 6 灰褐色(7.5YR4/2)粘質土 地山ブロックを多く含む
- 7 黒褐色(7.5YR3/2)粘質土 地山ブロックと炭を含む
- 8 褐色(7.5YR4/3)粘質土 地山ブロックと炭を含む
- 9 褐色(7.5YR4/4)粘質土 地山ブロックを多く含む



- 1 黒褐色(10YR3/2)粘質土
炭と土器片を含む
- 2 灰褐色(7.5YR4/2)粘質土
炭を含む
- 3 褐色(7.5YR4/3)粘質土
炭と焼土を含む
- 4 にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質土
炭と土器片を含む

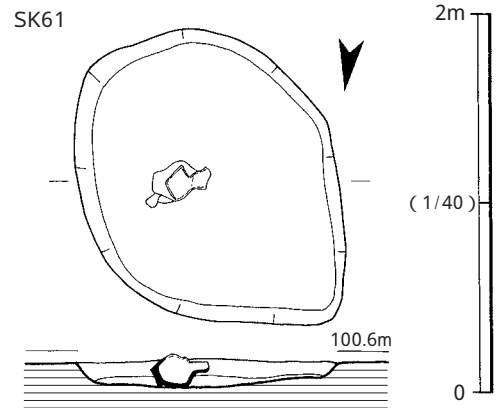


図15 土坑実測図②

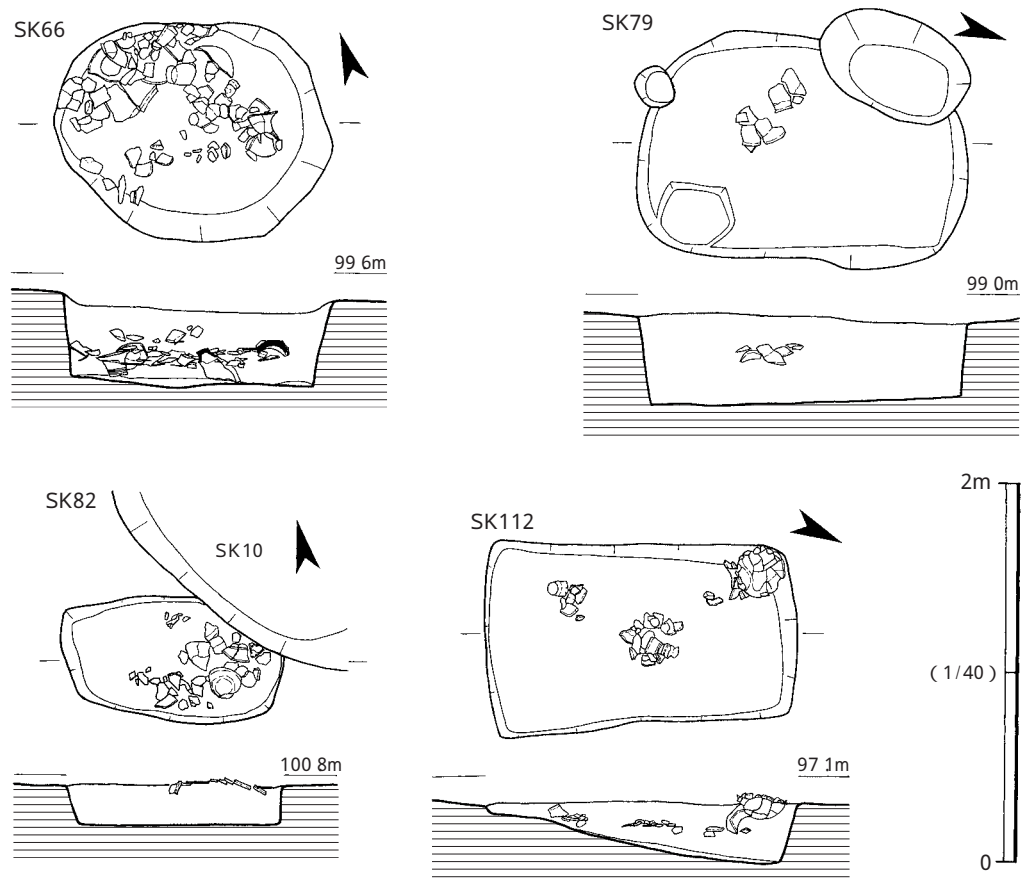


図16 土坑実測図③

の遺物は検出されていない。

SK66 (図16、図版11)

平面形は楕円形で長径150cm、短径115cm。壁面は急勾配で立ち上がる。底面は中心部がわずかに窪み、深さは50cmを測る。口径40cmを超える甕を含む大量の土器と石庖丁が出土した。

SK79 (図16、図版11)

平面形は隅丸長方形で長軸175cm、短軸120cm。北西隅の壁面を小土坑によって切られる。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は50cmを測る。底面の南東隅に長径40cm、短径35cm、深さ10cmの楕円形の窪みが検出された。出土遺物は少なく、用途は不明。

SK82 (図16、図版11)

SK10に切られる土坑で、長軸115cm、短軸65cmのやや歪んだ隅丸長方形のプランを持つ。深さは20cmしかないが、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。遺構面に近い上層から多くの土器が出土した。

SK112 (図16)

平面形は長方形で長軸165cm、短径100cm。底面は北側に大きく傾斜し、北端の深さは30cm。竪穴住居跡 SC 5 の削平された北半に隣接する位置にあり、上部が大きく削平されていると推測される。中央と北西隅から壺2個体が押しつぶされた状態で出土した。

④ 大型土坑

長軸が2 mを超える大型の方形プランをもつ土坑の多くは底面が水平に整えられ、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。埋土中に多くの炭や焼土が含まれているものや壁面に被熱の痕跡が見られるものも多い。これらの土坑からは土器類以外に炭化米等が大量に出土した。袋状の貯蔵穴とともに本遺跡の特徴的な遺構といえよう。

SK20 (図17、図版10)

長軸325cm、短軸210cm、深さ55cm。底面には東・南壁に接する位置に2つのピットが検出された。埋土の大部分は明褐色粘質土で、人為的に埋め戻されたものとみられる。出土遺物は少量の土器片のみであった。

SK23 (図17、図版10)

長軸370cm、短軸220cmの大型の平面プランを有するが、調査区西側の下段に位置しており、上部は大きく削平されているとみられる。残存する埋土は最大でも20cmに満たない厚さで、遺物も出土していないため、遺構の全容は不明である。底面中央よりやや東寄りに直径25cm、深さ27cmのピット、南西側の広い範囲で炭を含む焼土が検出された。西に近接して同じように大きく削平された大型土坑SK19があり、長軸を平行に並べる。ここからは焼土や炭とともに少量の炭化した米と栗が検出されており、同様の性格を持つ遺構とみられる。

SK50 (図17)

竪穴住居跡 SC 3 の南に位置しており、長軸220cm、短軸210cmでほぼ正方形を呈する。深さ25cmの埋土中には多くの土器片が含まれていた。出土状況から廃棄されたものとみられる。底面直上には薄く炭層が広がっていた。

SK59 (図17、図版11)

竪穴住居跡 SC 4 に切られ、上部は遺存しない。長軸350cm、短軸210cmの長方形とみられるが、北壁から東壁にかけて近代の配水管によって削平されている。西壁の高さは45cmで、壁面に直径11～13cm、奥行5～12cmの4つのピットと2つのテラス状の平坦面が検出された。対応する東壁が遺存しないため、これらのピットの詳細は不明である。埋土は炭や焼土を多く含み(図6)、上層から石庖丁が出土しているが、土器の含有量は少ない。

SK80 (図17、図版12)

長軸360cm、短軸280cm、深さ65cmを測り、本調査区で検出された最大の土坑である。底面全体から炭化した米が5～20cmの厚さで検出された。埋土の下層部にも多くの炭化米が含まれており、総量は膨大なものとなる。埋土は人為的に埋め戻されたものとみられ、上層部には少量の土器片を含むが、下層部からは炭化物以外の遺物は出土していない。壁面には広く被熱の痕跡が認められ、収穫した稲の処理に関する大規模な施設とみられるが、詳細は明らかでない。

SK87 (図17、図版12)

竪穴住居 SC 3 を切って掘り込まれた長軸310cm、短軸240cm、深さ70cmを測る土坑である。SK54に切られ、西壁の一部が遺存しない。深さ50cmまでの暗褐色粘質土と黒褐色粘質土(1～3層)から大量の土器が出土した。土器とともに柱状片刃石斧も出土している。これらの下層からは炭化した米

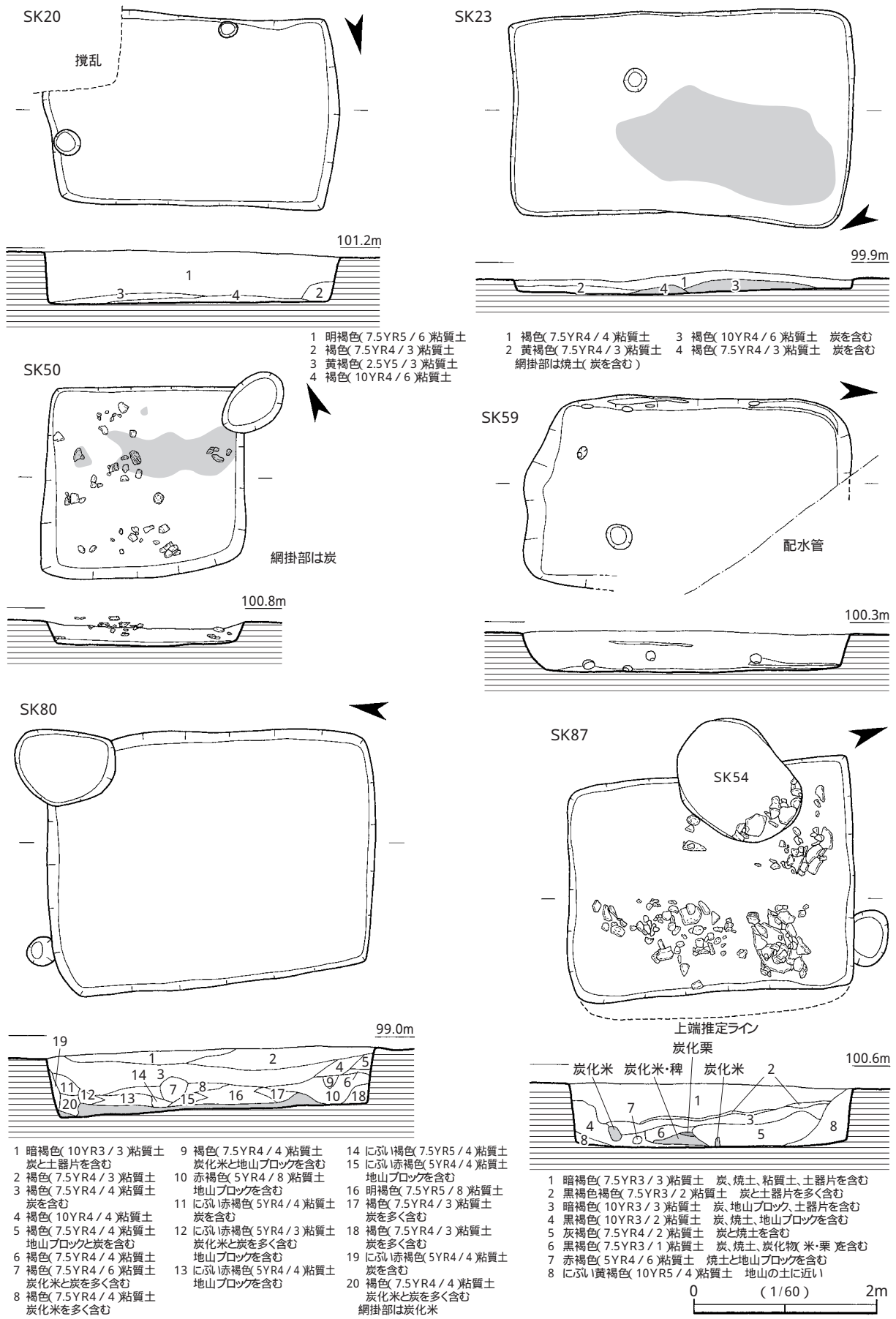


図17 大型土坑実測図①

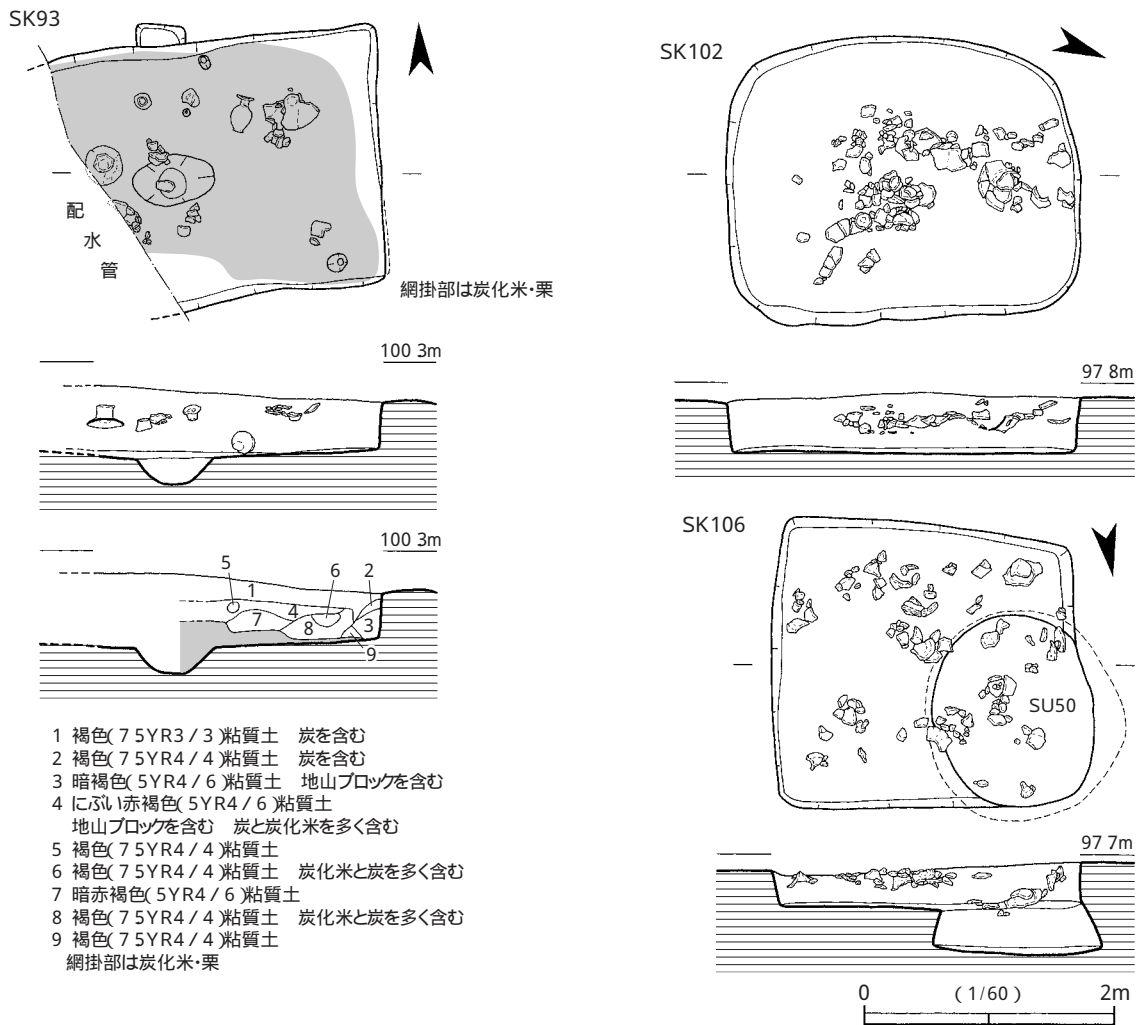


図18 大型土坑実測図②

や栗が検出された。地山崩落土とみられるにぶい黄褐色粘質土（8層）を除いた全ての層に炭や焼土が多く含まれており、人為的に埋め戻されたものと考えられる。壁面にも被熱の痕跡が確認された。

SK93（図18、図版12）

近代の配水管によって西半が削平されているが、底面の小土坑を中央と考えると長軸は約340cmと推定される。短軸は210cm。底面は西にわずかに傾斜しており、最深部の深さは55cmを測る。小土坑は長径65cm、短径40cmの楕円形で、深さは20cm。埋土の上層部に土器が多く含まれるが、底部付近でも完形の壺が出土した。埋土は人為的に埋め戻されたものとみられる。底面全体から炭化米が検出され、中央付近では厚さ20cmを超える。壁面には被熱の痕跡が見られた。大型土坑 SK80と同様の性格を持つ遺構とみられる。

SK102（図18、図版14）

調査区の東側の最下段に位置する。長軸285cm、短軸230cm、深さ50cmを測り、他の大型土坑よりも隅の丸い平面プランを持つ。埋土中に多くの土器を含有するが、そのほとんどは深さ30cmまでのレベ

ルに集中する。埋土からは石庖丁も出土している。炭化物は検出されず、被熱の痕跡も見られない。

SK106 (図18、図版13)

SK102の北に近接する土坑で、長軸240cm、短軸230cmと正方形に近い。深さは30cmと浅いが、大量の土器が出土した。炭化物は検出されず、被熱の痕跡も見られない。75cmの深さをもつ袋状の貯蔵穴SU50を切って掘り込まれているが、出土遺物から両者の時期差はさほどないものとみられる。

⑤ 墓

調査区の中央部から西部は北西側が一段下がるが、ここに長軸を平行に並べる隅丸長方形の土坑が集中する場所がある。これらは遺物がほとんど出土しないため詳細は明らかでないが、墓の可能性が高い。出土遺物から墓と確定できた土坑は1基のみである。

ST 1 (図19、図版14)

平面形は隅丸長方形で長軸227cm、短軸100cm。底面が二段掘りになっており、木棺墓の可能性が高い。明確な棺の痕跡は検出できなかったが、南東壁付近の底面では木口板の痕跡らしきものが確認できた。棺が据えられていたとみられる推定ラインは長さ196cm、幅55~70cmで成人の墓としてもやや大きい。深さは中央部で37cm。長軸は南東から北西の方向に走り、南東側壁面から50~60cmの位置で大量の管玉が出土した。出土状況から、遺体の首に掛けられていたものと推測され、このことから頭位は南西側であったと考えられる。埋土から中期初頭の土器片1点が出土しており、貯蔵穴や竪穴住居と同時期の所産とみられる。

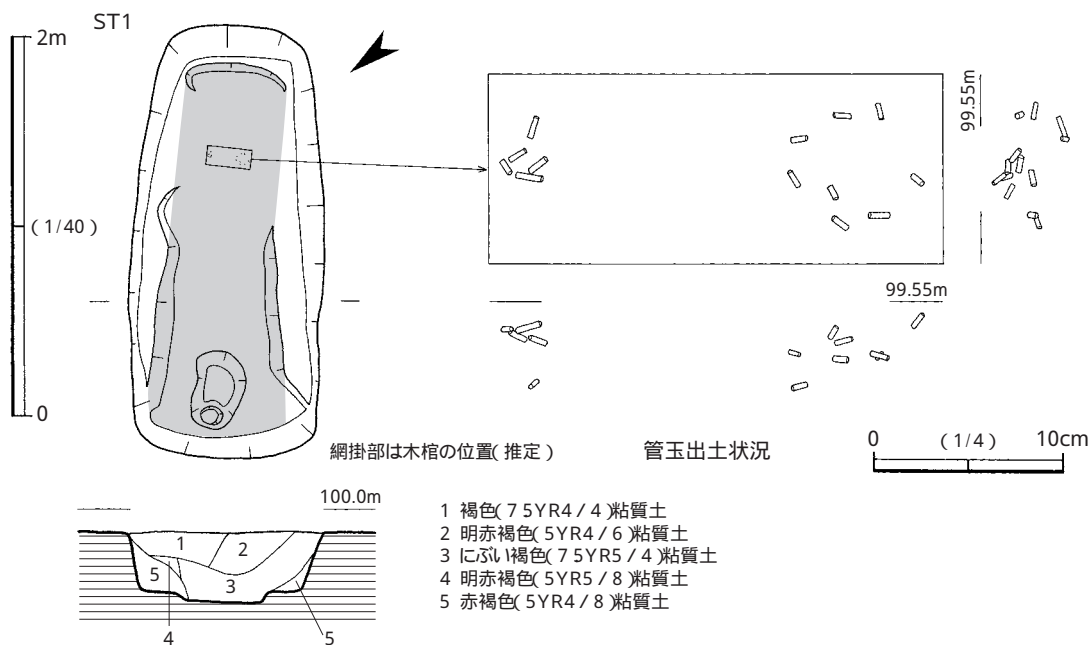


図19 墓実測図

(2) 弥生時代の遺物

① 各遺構出土弥生土器

SC 1 出土土器 (図20：1～9)：壺は内折口縁に沈線を施すもの(1)や胴部に羽状文を施すもの(6)などが認められる。甕は「く」の字状に屈曲し、無文のもの(2・3)、如意形口縁で頸部に3条沈線を施すもの(4)のほか逆L字状を呈する口縁形態(5)も存在する。また、8は甕胴部であると考えられるが、弥生後期に下る可能性が高い。9は蓋で、2孔1組の穿孔が2ヶ所施されている。

SC 2 出土土器 (図20：10～12)：弥生後期の複合口縁壺片(10)、長頸壺胴部(11)などが出土している。

SC 3 出土土器 (図21)：壺は内折口縁のもの(18・19・22)であるが、口縁外面には施文が為されていない。このほか羽状文が施された頸部片(20)や胴部突帯片(21)が出土している。甕は如意形口縁で頸部に複数の沈線を施すもの(23・24)のほか、頸部に沈線を1条のみ施すもの(25)があり、型式的には若干古い要素を残している。また26は器高が低く、甕というよりも鉢に近い。

SC 4 出土土器 (図20：13～17)：内折口縁壺は内面に突帯を貼付するもの(14)と貼付しないもの(13)が出土している。また木葉文が描かれた壺肩部片(15)が認められる。甕は口縁部無文で、胴

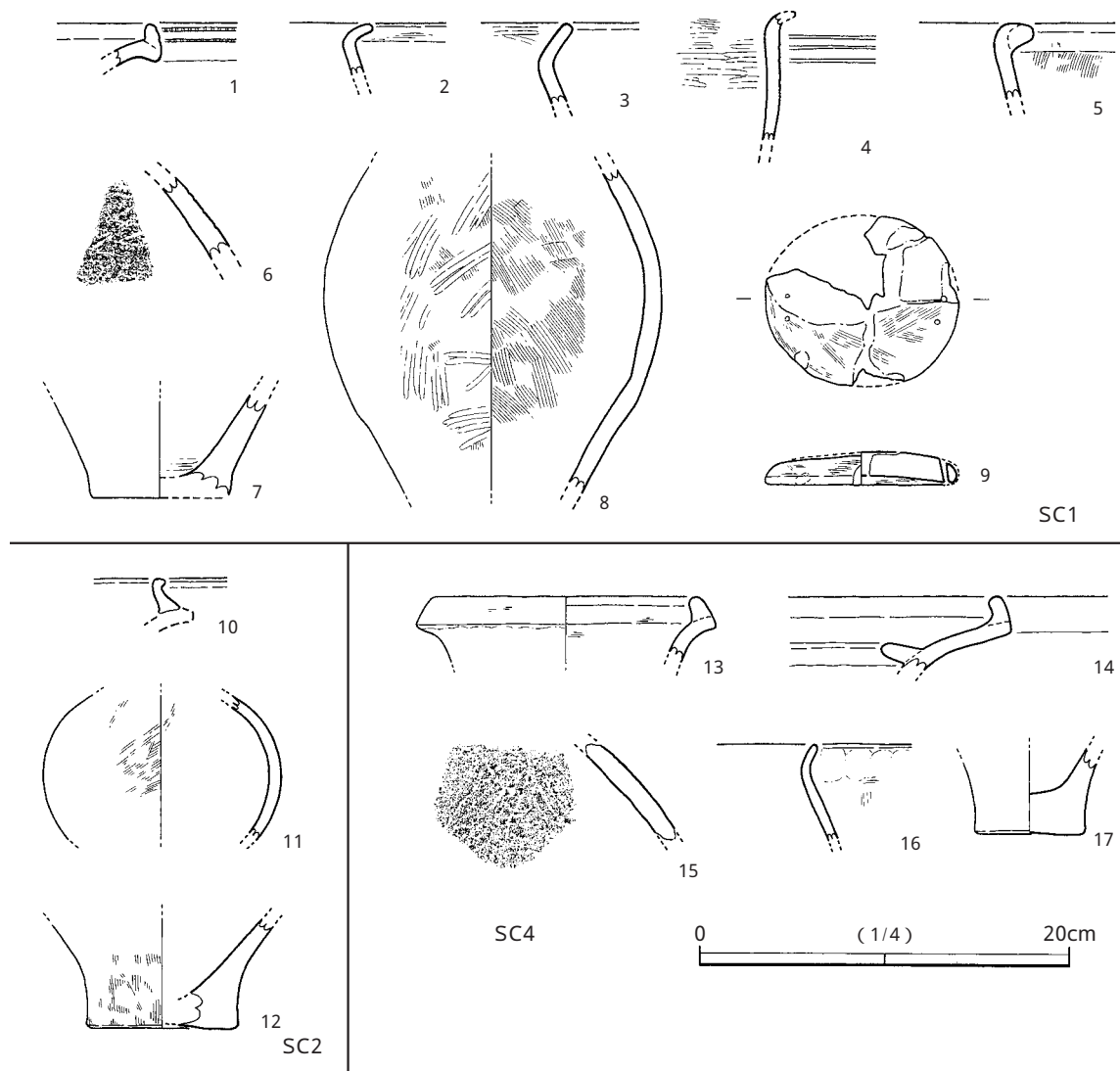


図20 出土遺物実測図①

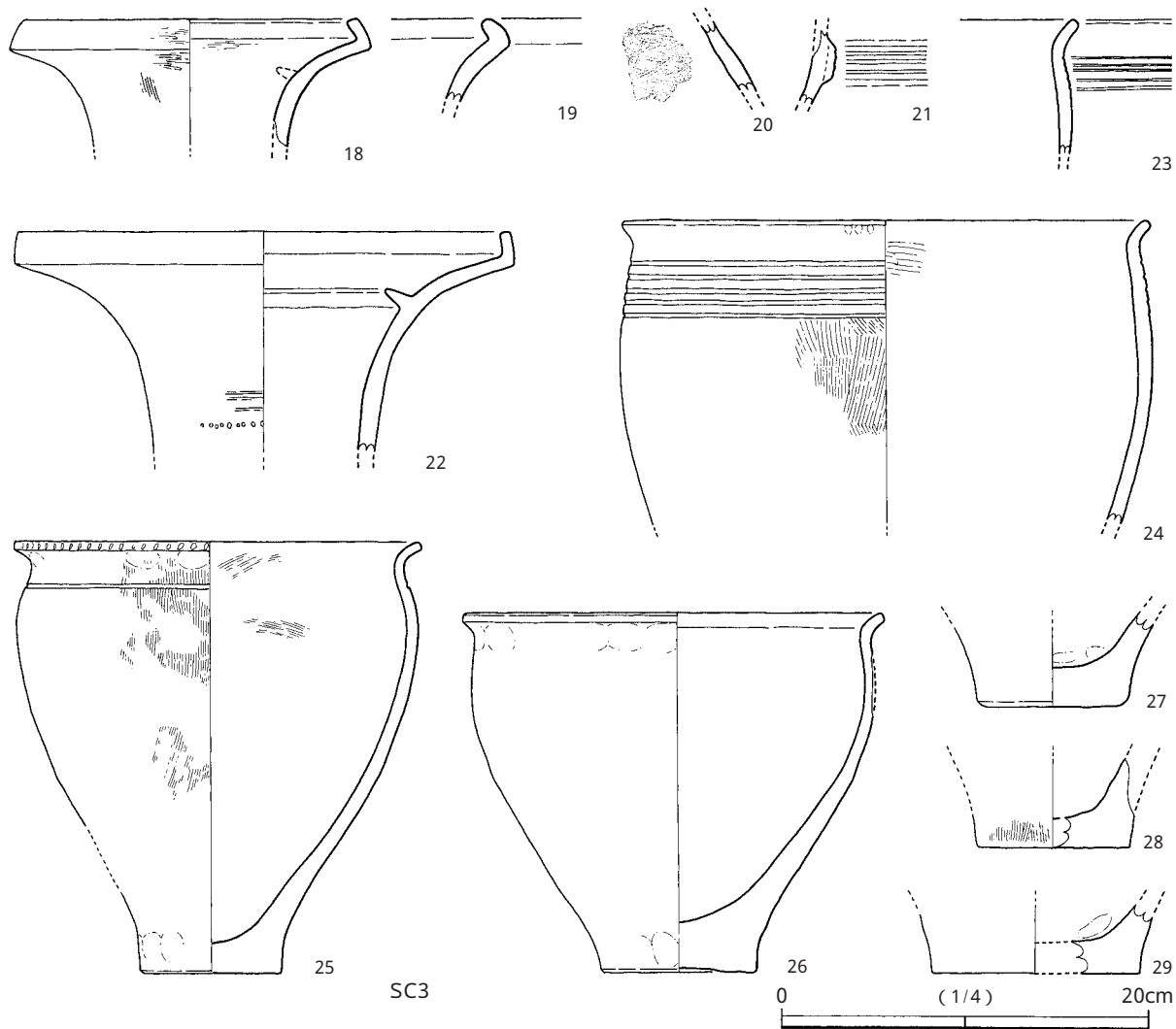


図21 出土遺物実測図②

部が強く張る形態（16）を呈する。

SU 1 出土土器（図22）：壺はいずれも内折口縁壺で、いずれも頸部に数条の沈線を施している。32は口縁部に3条沈線を施し、3本1組の縦方向沈線を区画文として配置している。34は口縁部に3条沈線を施し、屈曲部には刻目が配されている。35は蓋であり、裾部で強く屈曲する形態である。甕の出土点数は少ないが、36は如意形口縁であり、頸部に2条の沈線を施している。

SU 2 出土土器（図23：40～42）：頸部2条沈線を施す甕（40）と底部が出土している。

SU 5 出土土器（図23：43～50）：内折口縁壺は木目痕が残る2条沈線が施されている（43）。44は壺の頸～胴部であり、頸部付け根に「ハ」の字状の刻目が配され、外面全体に刷毛目が施される。甕は頸部に3条沈線と刻目が施されたもの（45）、小型で刻目を施さない如意形口縁を呈するもの（46）、口縁端部を台形状に肥厚させるもの（47）などがある。50は口縁部を突帯状に肥厚させ、刻目を施しており、胴部が強く張る形態を呈する。

SU 7 出土土器（図23：51～55）：壺は内折口縁を呈するが、外面は無文（53）。甕は如意形口縁で、頸部に3条沈線を施したもの（51）、口縁部が逆L字状を呈するもの（52）などが出土している。底部はいずれも甕のものと考えられ、平底のもの（54）とやや厚底を呈するもの（55）が認められる。

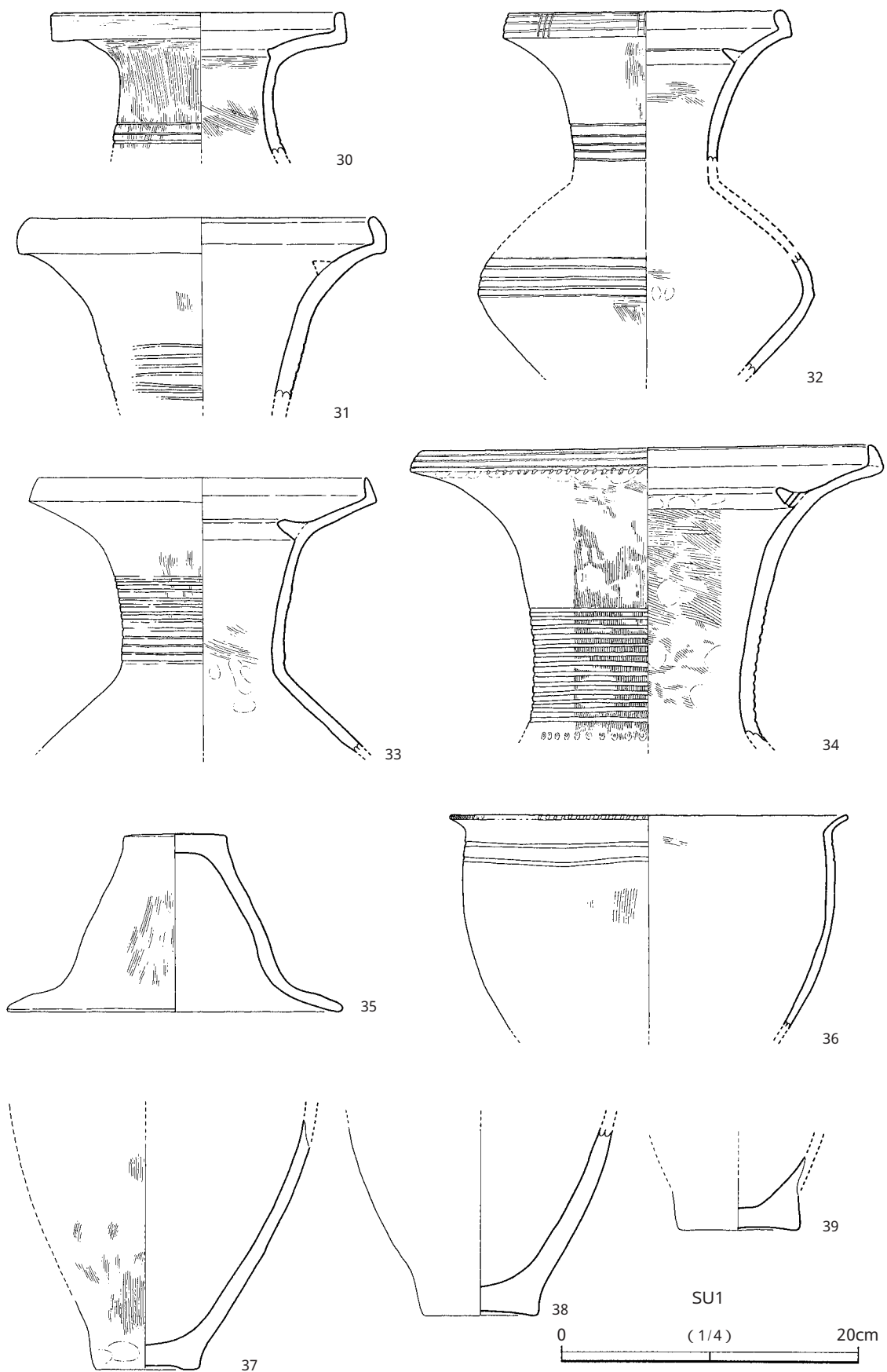


图22 出土遺物実測図③

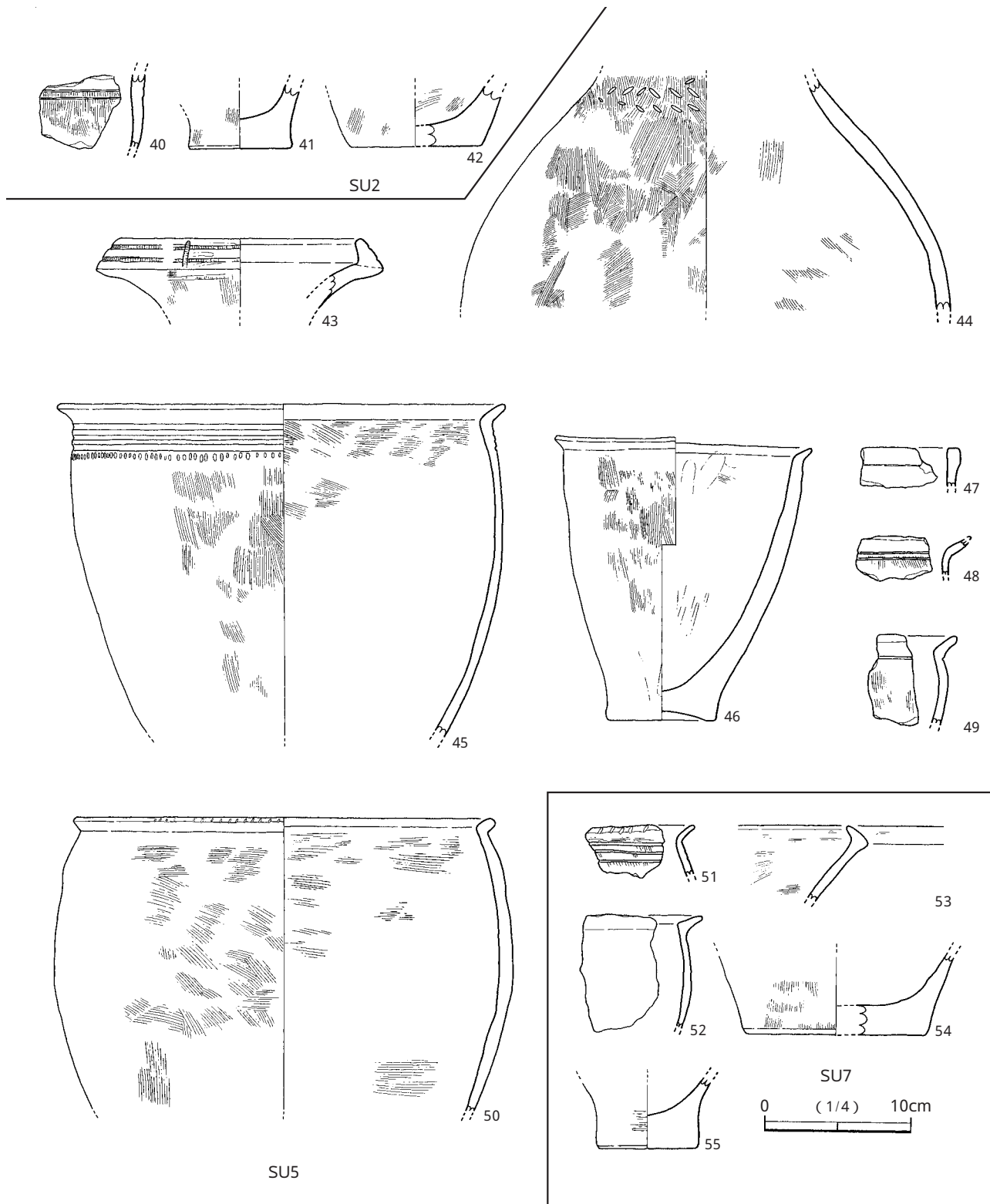


图23 出土遺物実測図④

SU 8 出土土器 (図24～28) : 壺は内折口縁のものだけで構成され、素口縁のものは存在しない。また、形態的には頸部が長く、この位置に複数条の沈線を施すものが卓越する傾向にある。また、器種構成を見ると、壺の割合が圧倒的に高く、甕は少ない。さらに高杯や鉢、蓋といった器種は全く出土しておらず、土器組成には偏りが認められる。

56は小型のもので、外面に2条沈線を施している。これとほぼ同一法量であるのが63で、口縁部内面に注口状を呈する突帯を貼付している。57・58は中型品であり、口縁・頸部ともに文様は施されていない。59は口縁部を欠くが、頸・胴部ともに無文で、57・58と同一意匠であると考えられる。60・62は中型品で、口縁部外面、頸部に沈線を施す同一意匠のものである。64は頸部がやや短く、6条の沈線を施している。65は胴部片であり、鋸歯文、無軸羽状文が認められる。66は口縁部を欠くが、頸・胴部ともに無文。胴上・下部の接合を利用して突帯が形成されており、ここに沈線が2条施されている。67は底部～胴部の資料。外面胴上位に2条の沈線が施され、内外面ともに刷毛目調整。底部は若干高台状を呈する。68は胴部片であり、突帯上に沈線が施されている。

69は口縁部に鋸歯文、頸部に8条の沈線を施す。口縁部内面には突帯が剥落した痕跡を認めることができ、内外面ともに刷毛目調整である。70はほぼ完形に復元できる個体で、内面突帯には刻みが施されている。71は頸部に9条の沈線、胴部に鋸歯文、無軸羽状文が施される資料で、口縁部は欠損している。72は底部～頸部までが残存する資料であり、大型品であるが、器形のひずみが著しい。外面頸部には縦方向、胴部上位には横・斜め方向、胴部下位には比較的密な刷毛目が施されている。内面には炭化物が付着しており、炭化米等の貯蔵に関わる土器である可能性が高い。73・74については壺底部と判断したものである。74は底部が厚く、内外面にはミガキが施されている。

75～77は大型壺であるが、特筆すべきは76の資料で、11条の沈線間に刻目突帯が貼付されている。周防・伊予地域に分布する阿方式土器の連鎖状突帯から影響を受けたものと考えられ、中期初頭土器の地域間交流を窺ううえで重要である。また、この資料には口縁内面突帯に4箇所の刻目が施されている。77は頸部に15条以上の沈線が施され、胴部には列点文、鋸歯文、無軸羽状文が施文されている。胴部には扁平な突帯が認められ、4条の沈線が施されているが、この部分に接合痕が認められ、胴上・下部の接合を利用して突帯が形成されていることが窺える。78は頸部が短く、胴部が強く張り出す形態を呈し、文様は全く施されていない。刷毛目調整痕が若干認められるが、基本的にはナデによって消されている。79は大型壺の胴部であり、77同様、胴上・下部の接合を利用して突帯が形成されており、ここに4条沈線が施されている。

80～90は甕と甕底部と考えられる資料である。80は胴部が強く張り出す形態を呈するが、口縁端部を欠く。頸部に沈線を4条施し、その下に列点文が配されている。81・82は如意形口縁を呈し、前者は2条、後者は3条の沈線を施す。83～86は小・中型甕の底部と見られるが、平底で器壁が薄い。87はほぼ完形に復元できる資料であり、口縁部径が約28cmに復元できる。口縁部が外反し、端部は三角形に肥厚し、刻目は施されていない。器面調整は、内外面とも刷毛目調整ののち、ミガキが施されている。88～90は大型甕の底部であり、いずれも平底を呈す。外面には刷毛目調整が施されている。

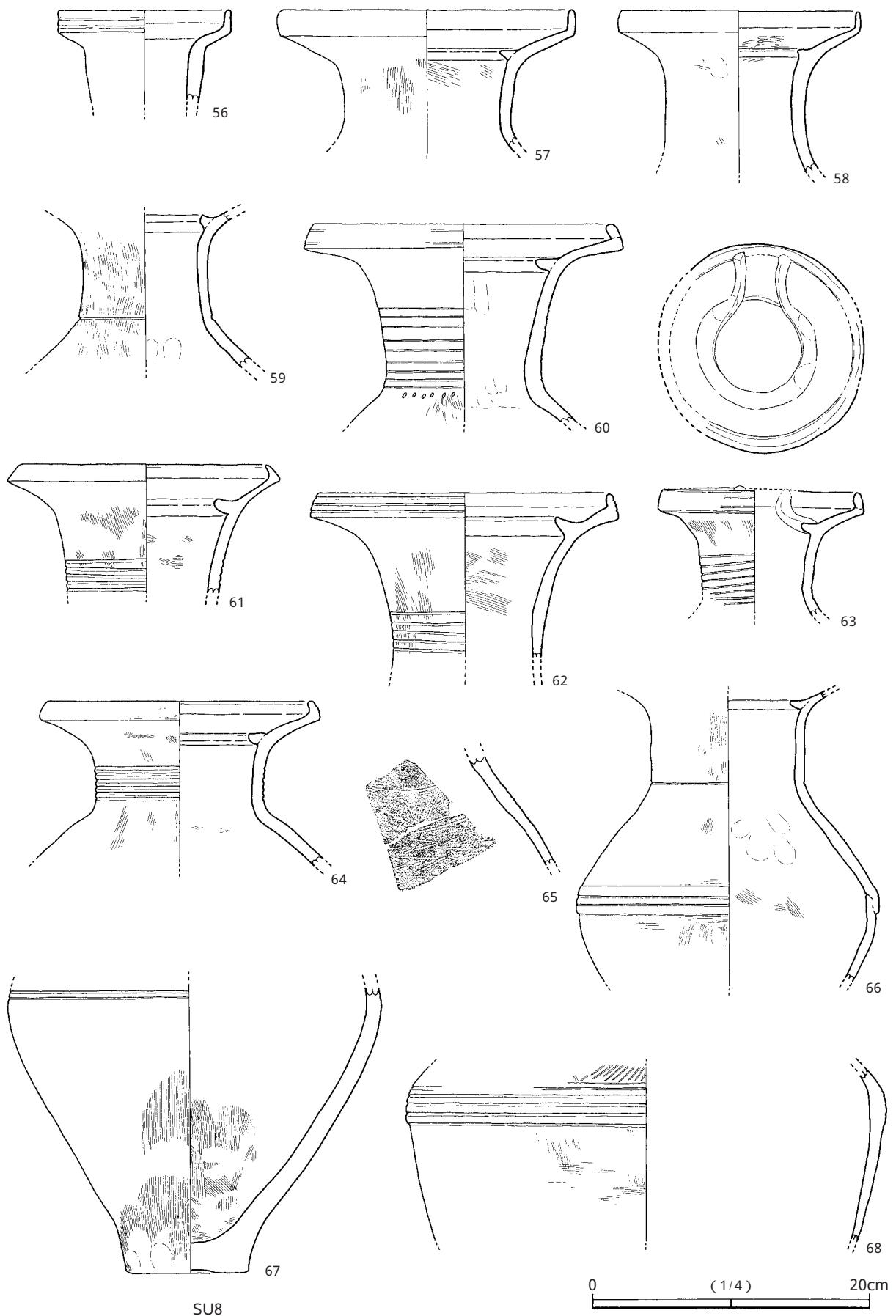


图24 出土遺物実測図⑤

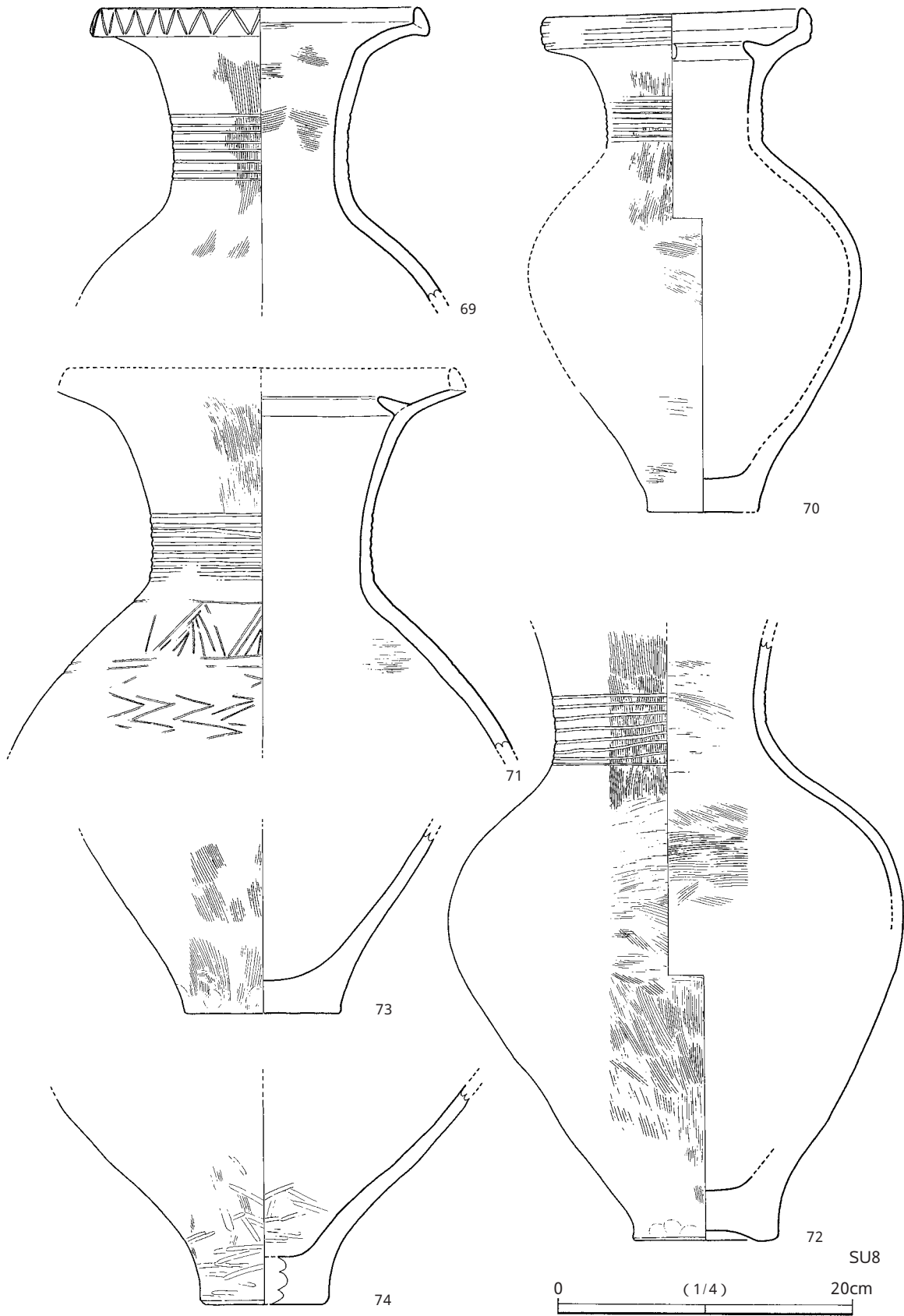


图25 出土遺物実測図⑥

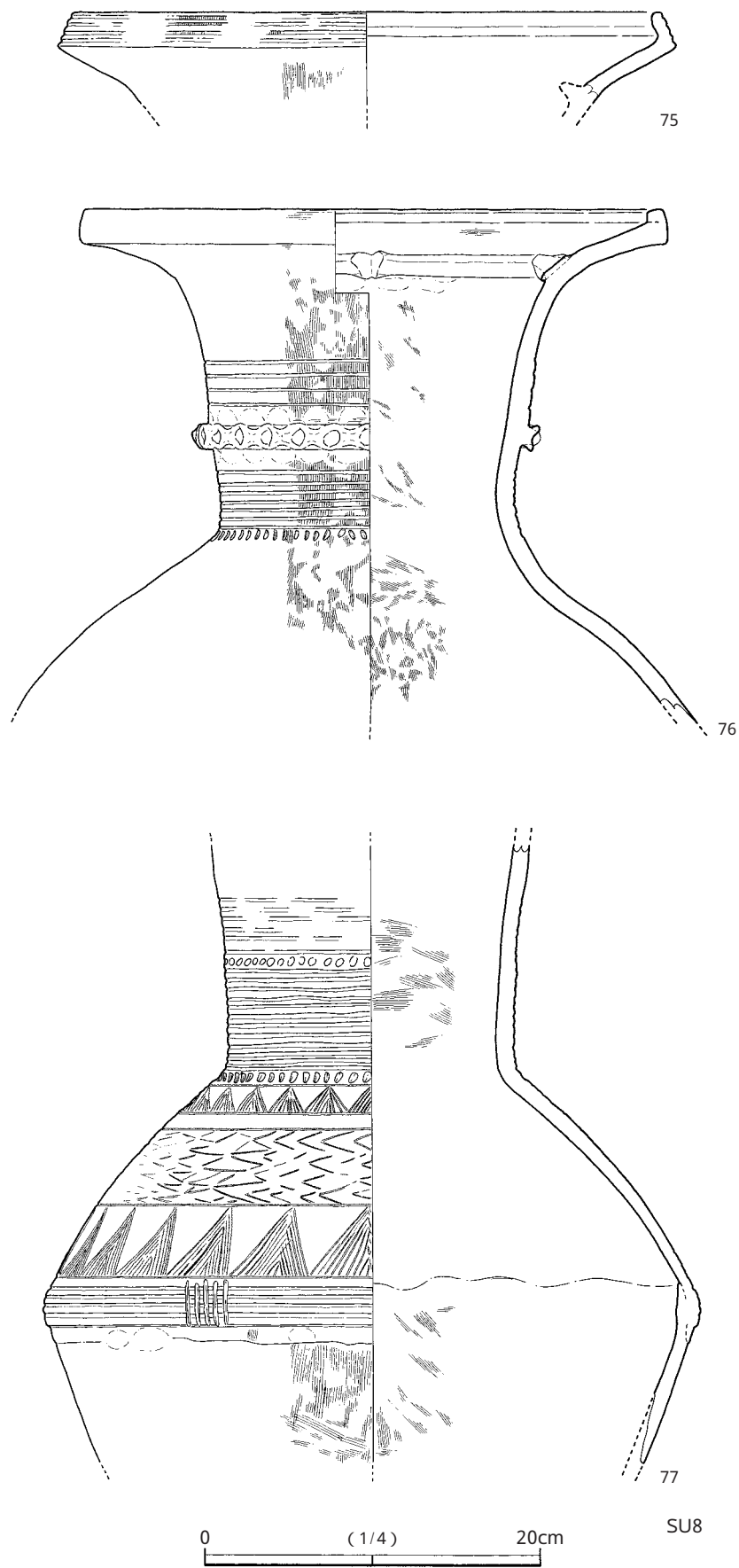


图26 出土遺物実測図⑦

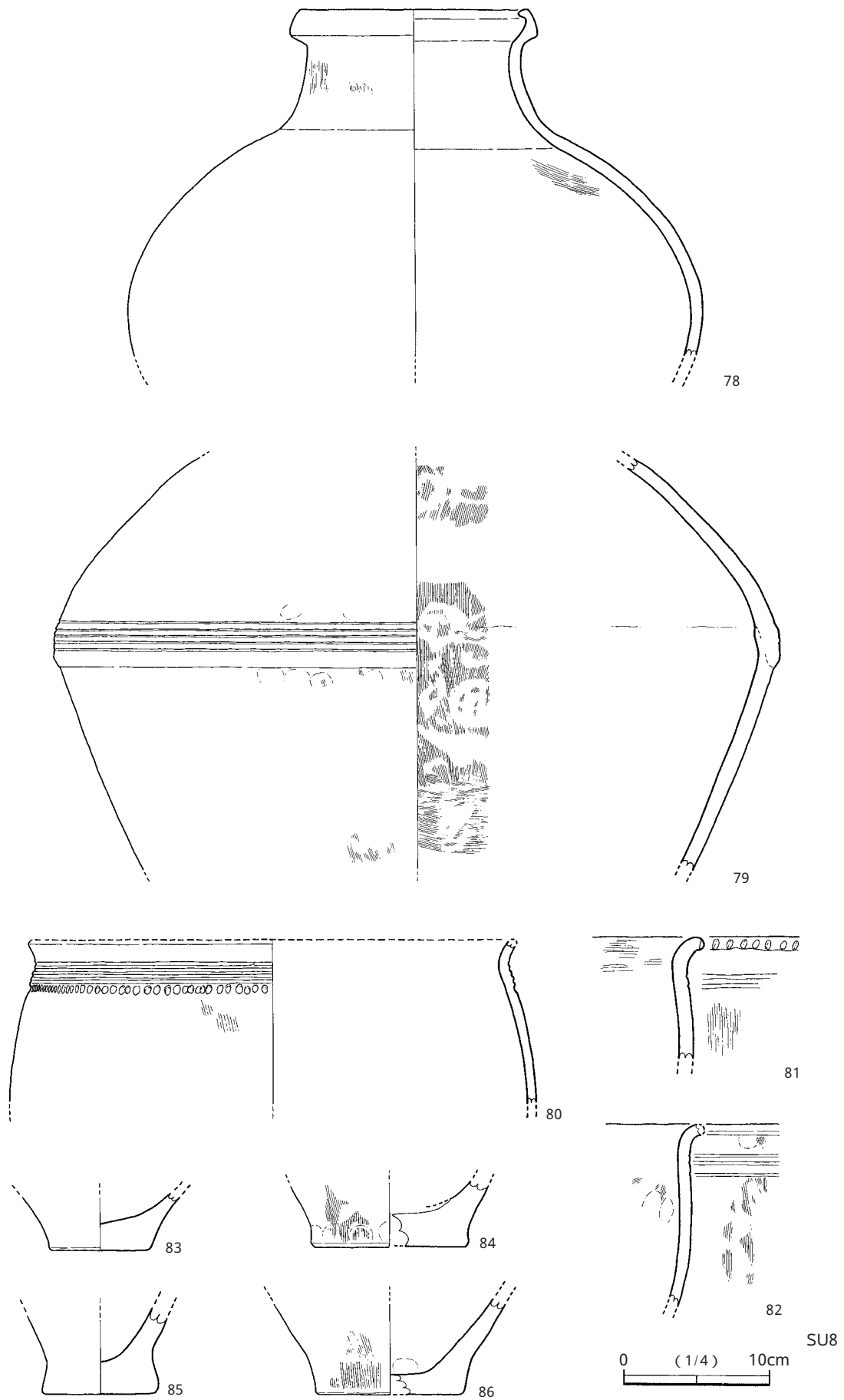
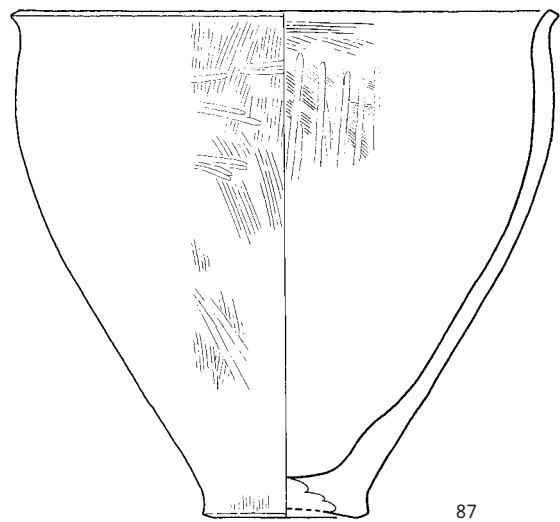
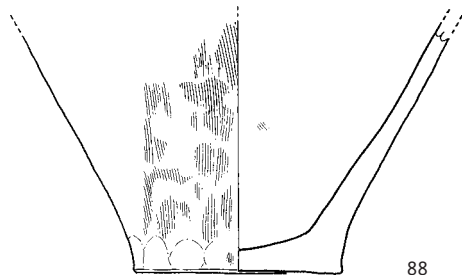


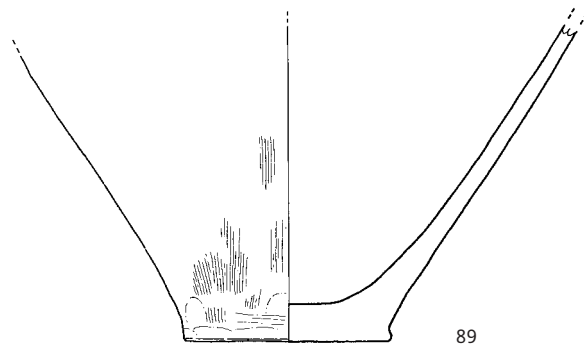
图27 出土遺物実測図⑧



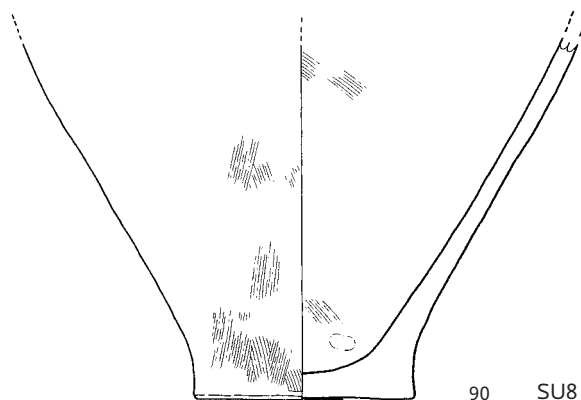
87



88



89



90

SU8

0 (1/4) 10cm

SU12出土土器 (図29: 91~93): 91は長頸壺口縁部、92は甕頸部で2条沈線を施している。93は大型壺の胴部と見られ、外面には刷毛目調整が顕著に残る。

SU13出土土器 (図29: 94~98): 94は器形のひずみが著しい小型壺で、内外面とも磨滅が著しい。95は内折口縁壺。96は素口縁のもので、頸部に4条の沈線が施される。外面には刷毛目調整が顕著に残る。97は接合しないが、頸・胴部と底部は同一個体と考えられ、図上復元で示した。

SU15出土土器 (図30: 99・100): 壺は頸部が太く、4条の沈線が施されており、口縁部には3本1単位の縦方向沈線が配されている。100は甕の底部であると考えられる。

SU16出土土器 (図30: 101~112): 壺は101・102などの内折口縁タイプが認められる。107は底部~頸部までが残存する資料で、外面には縦方向の刷毛目調整が顕著に残る。このほか103は壺胴部の突帯であり、貝による沈線が施されている。甕は如意形口縁で頸部に沈線を施すもの(105・109)、逆L字形口縁を呈するもの(104)などが認められる。106は口縁部が外反し、刻目は無く、外面には縦方向の刷毛が顕著に施される。また、110は小型品で、口縁部に刻目が部分的に残る。111・112は甕底部と考えられるが、いずれも器面調整は不明である。

SU17出土土器 (図30: 113~120): 113・114は壺胴部片で、鋸歯文、無軸羽状文などが施されている。115は内折口縁壺で、外面に鋸歯文を施文。116は内面に粘土をわずかに貼り付け、肥厚させてお

図28 出土遺物実測図⑨

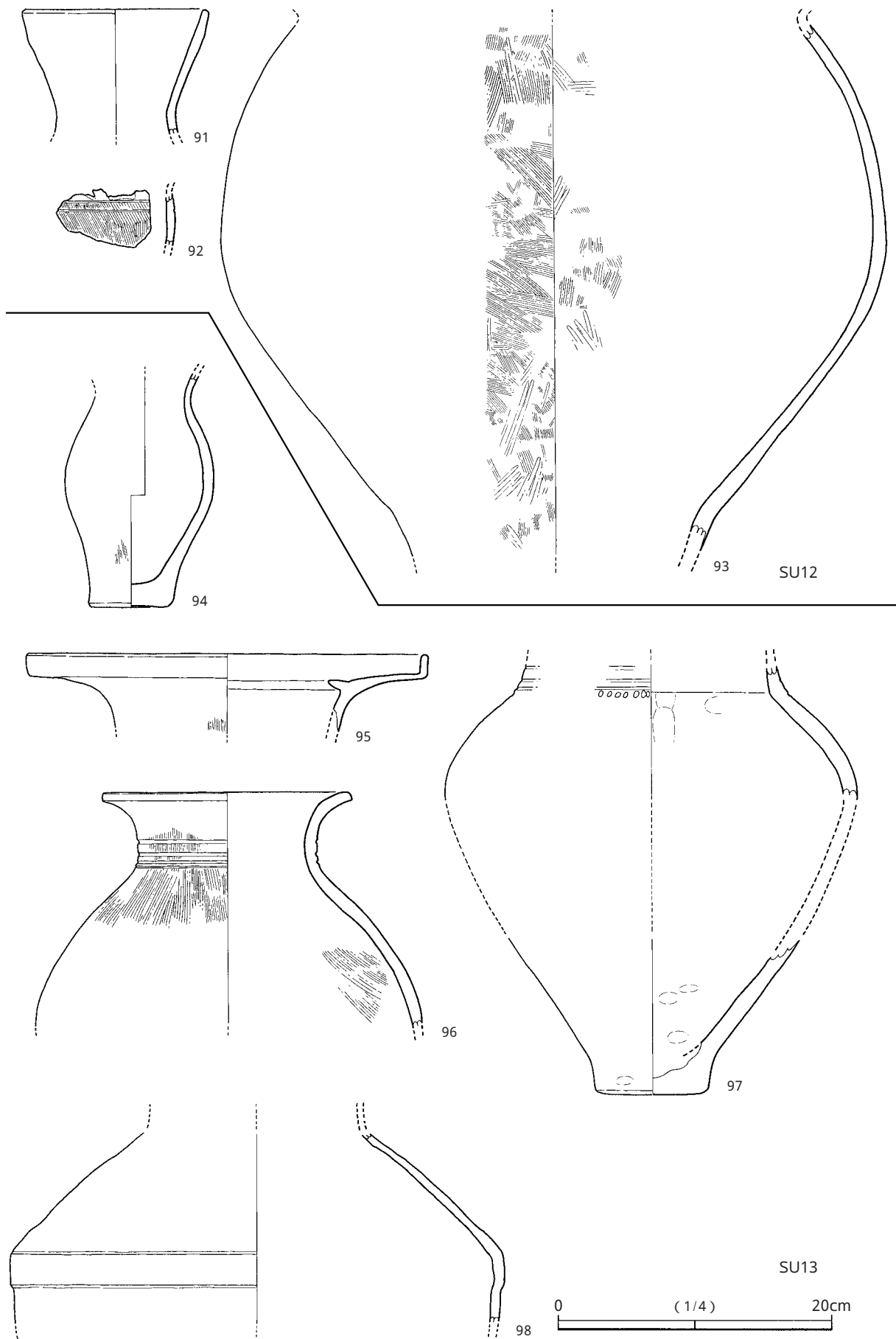


图29 出土遺物実測図⑩

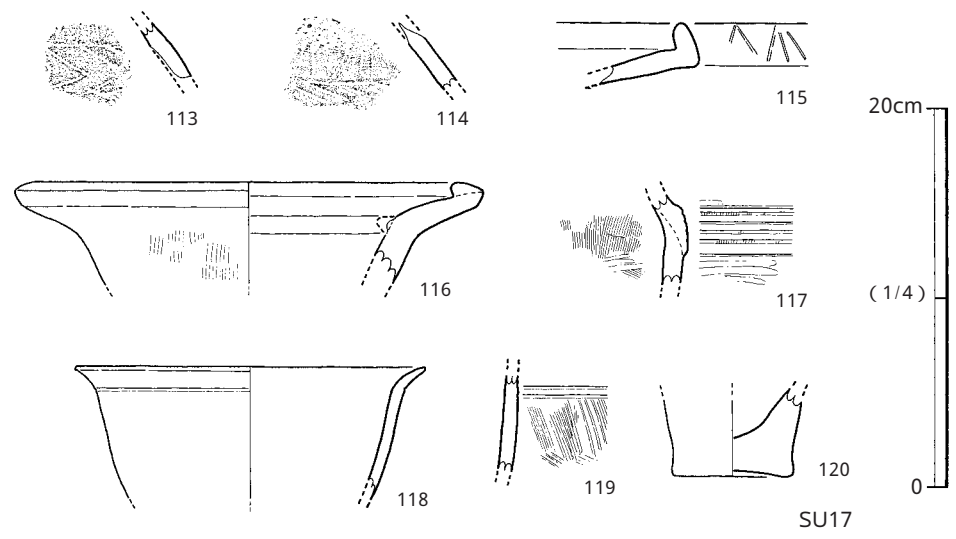
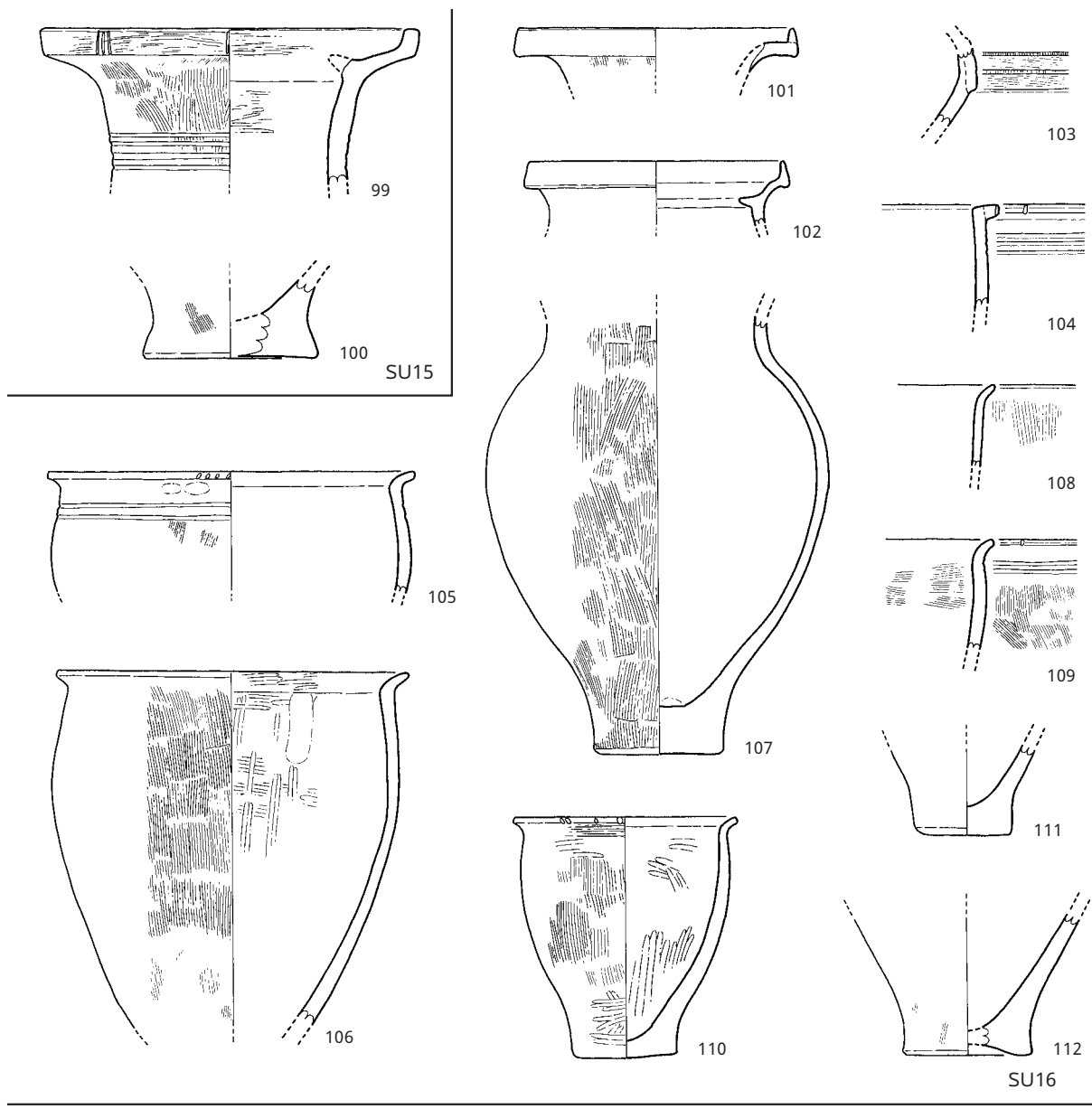


图30 出土遺物実測図①

り、当遺跡では珍しい例である。甕は118のように如意形口縁で頸部には沈線を施す。

SU20出土土器 (図31：121～128)：甕は口縁部が外反し、無文のもの(121)、如意形口縁で頸部に2・3条の沈線を施すものなどが出土している。124は瘤状の突起を有する土器であるが、器形については不明。底部は125が壺、その他は甕のものと考えられる。

SU22出土土器 (図31：129～144)：壺は内折口縁のもの(129・131～133)が出土しており、このほか、胴部に2段の貝による鋸歯文を施したもの(130)や、羽状文片(134)などが認められる。甕は逆L字状を呈するもの(135)、如意形口縁のもの(136～138)、突帯を貼付したもの(139)などのバリエーションが存在する。如意形口縁を呈するタイプには、頸部に沈線や列点を施すもの(136・138)と頸部無文で胴部が強く張り出すもの(137)などが認められる。底部には極端に厚底を呈するものはなく、若干上げ底を呈するもの(142)が1点のみ認められる。143・144は壺の底部、140～142は甕の底部と考えられる。

SU24出土土器 (図32：145～149)：出土点数が少なく、器種もほぼ壺に限定される。145は小型品で、口縁部外面に鋸歯文、内面には注口状の突帯が貼付されている。148は胴部片であり、2条沈線が施されている。外面には縦方向の、内面には横方向の刷毛目が認められる。149は底部であるが、壺のものか、甕のものか判断が難しい。

SU25出土土器 (図32：150～165・図33)：壺は素口縁のもの(150)1点以外はすべて内折口縁である。内折口縁のものは口縁外面無文のもの(152)もあるが、鋸歯文あるいは沈線を施したものが主体である。153・154は頸部が短く、文様は沈線のみが施されている。155はほぼ完形に復元できる個体であり、胴部は2分割され、上位には鋸歯文、下位には無軸羽状文が施されている。甕は口縁部が外反するものの刻目や頸部文様を施さないもの(156～159)が主体を占めている。160は逆L字状口縁部がやや垂れ下がり、頸部には刷毛によると見られる複数条の沈線が施され、これが縦方向の沈線によって区画されている。このタイプの甕は山口盆地の上東遺跡などにおいて確認されており、搬入品である可能性も否定できない。163は如意形口縁を呈するが、口唇部刻目は施されない。頸部に3条沈線、その下に列点文を配し、外面には縦、内面には横方向の刷毛目調整が施されている。底部は極端に上げ底であり、この点非常に特異な土器である。底部は壺のものと考えられるもの(161・162)と甕のものと考えられるもの(164・165)があるが、いずれも厚底のものは存在しない。

さて、このSU25からは鹿を描いたと見られる絵画土器と、これと同一個体と見られる口縁部内面に装飾を施した特異な壺が出土しており、以下これらについて詳述したい。

166は大型壺で、口縁部外面に貝による鋸歯文、頸部には15条の沈線が施されている。口縁部内面には二枚貝による無軸羽状文が施されており、内面突帯上部まで及ぶ。この内面突帯には復元すると6箇所切れ込みが配されている。周防、長門地域における前期末～中期初頭の土器では、口縁内面端部に文様を描くものはあるが、これだけ広範囲に文様を施した例はなく、きわめて特異な例と言える。

167は鹿と考えられる動物が描かれた土器片である。胎土、色調ともに166と類似し、両者は同一個体と見られる。土器片の傾きから見て、大型壺の胴上位部分と考えるのが妥当であろう。2条の沈線が施され、上位には羽状文、下位には木葉文が配され、いずれも貝によって施文されている。鹿と見

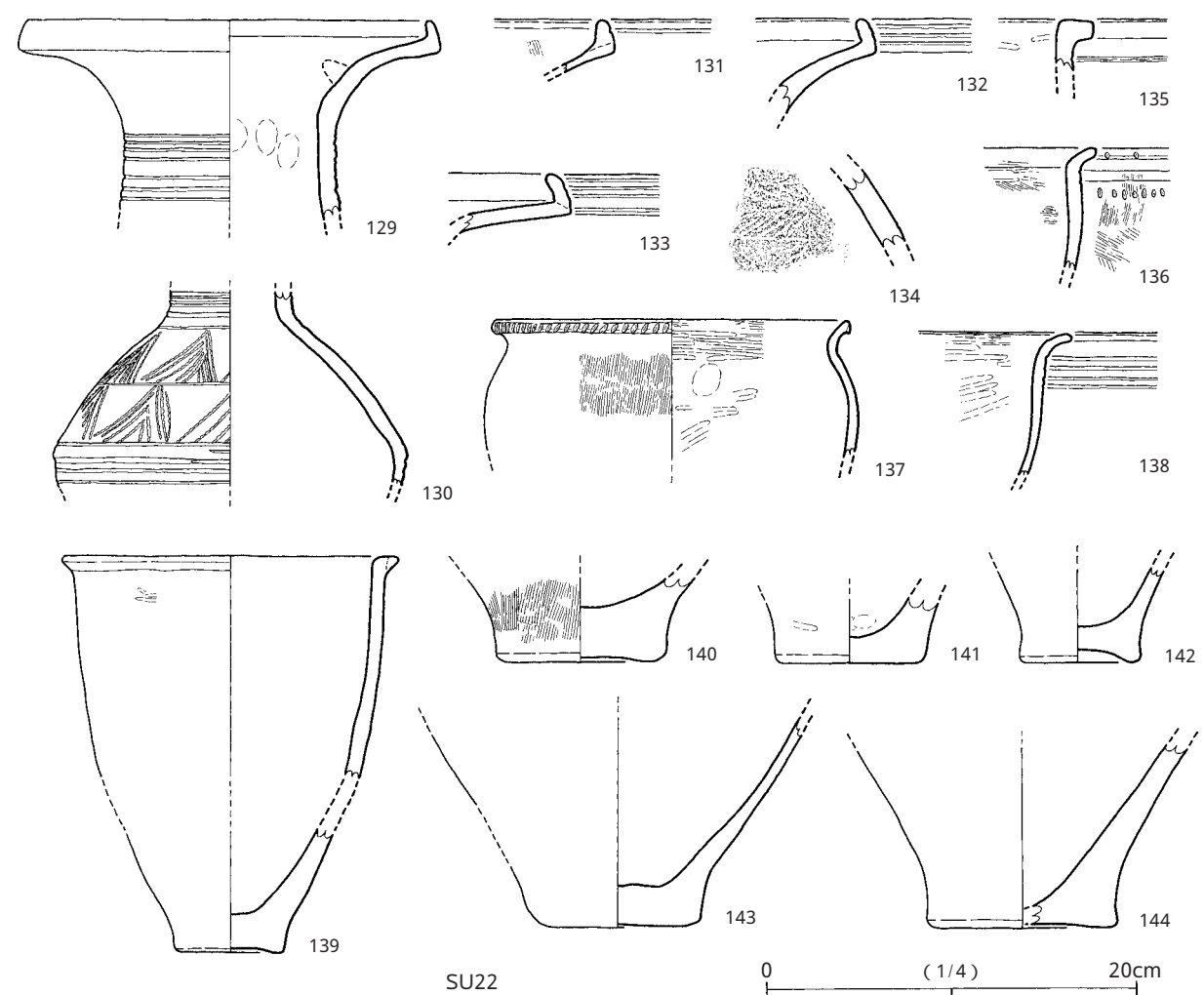
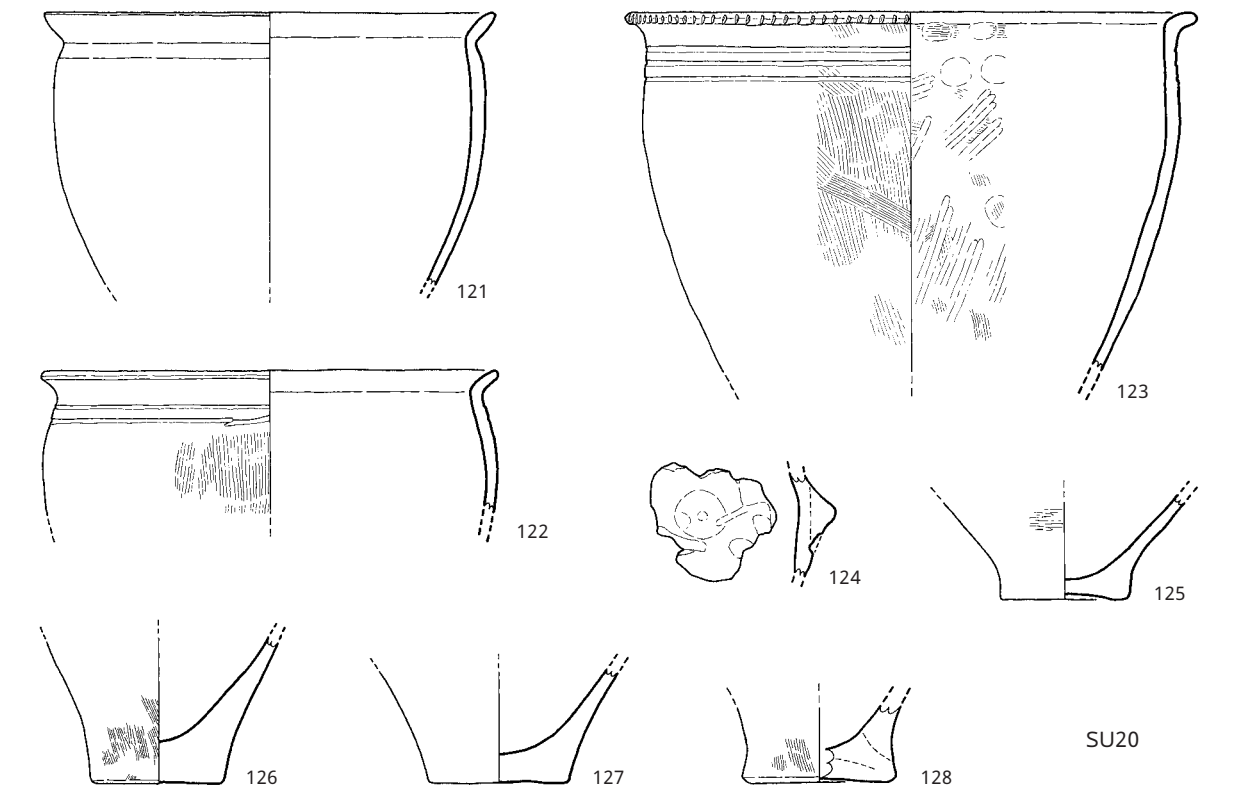


图31 出土遺物実測図⑫

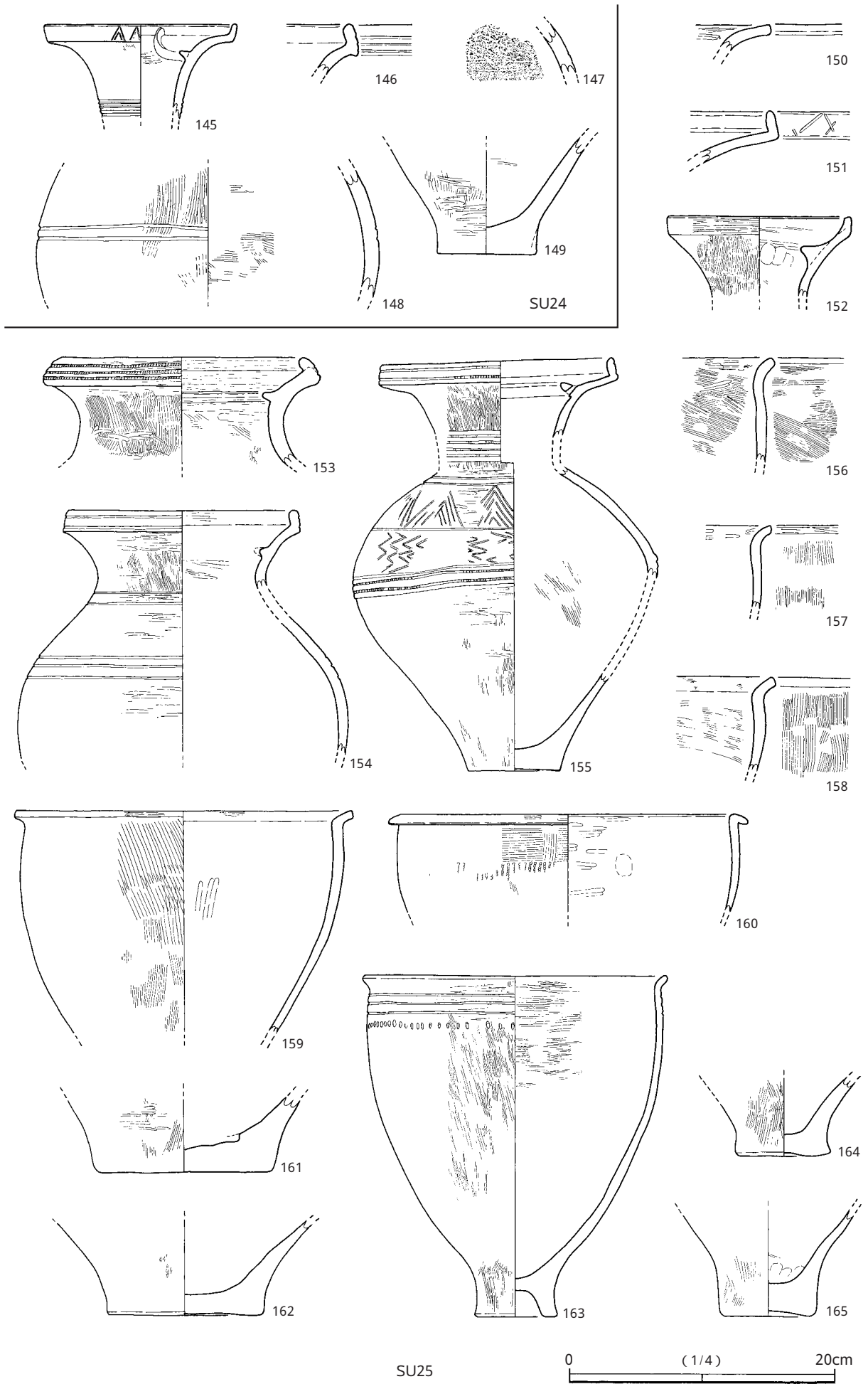


图32 出土遺物実測図⑬

られる絵画は、上位の羽状文をナデ消し、弧線文を5本描くことによって胴体を表現し、そこから2本1組の直線を伸ばすことによって足を表現している。この胴体部を表現した弧線文のうち、上の2本は貝による施文が確認できる。頭部は欠損しているが、足の傾きからして、左側に描かれていたとみて間違いなからう。

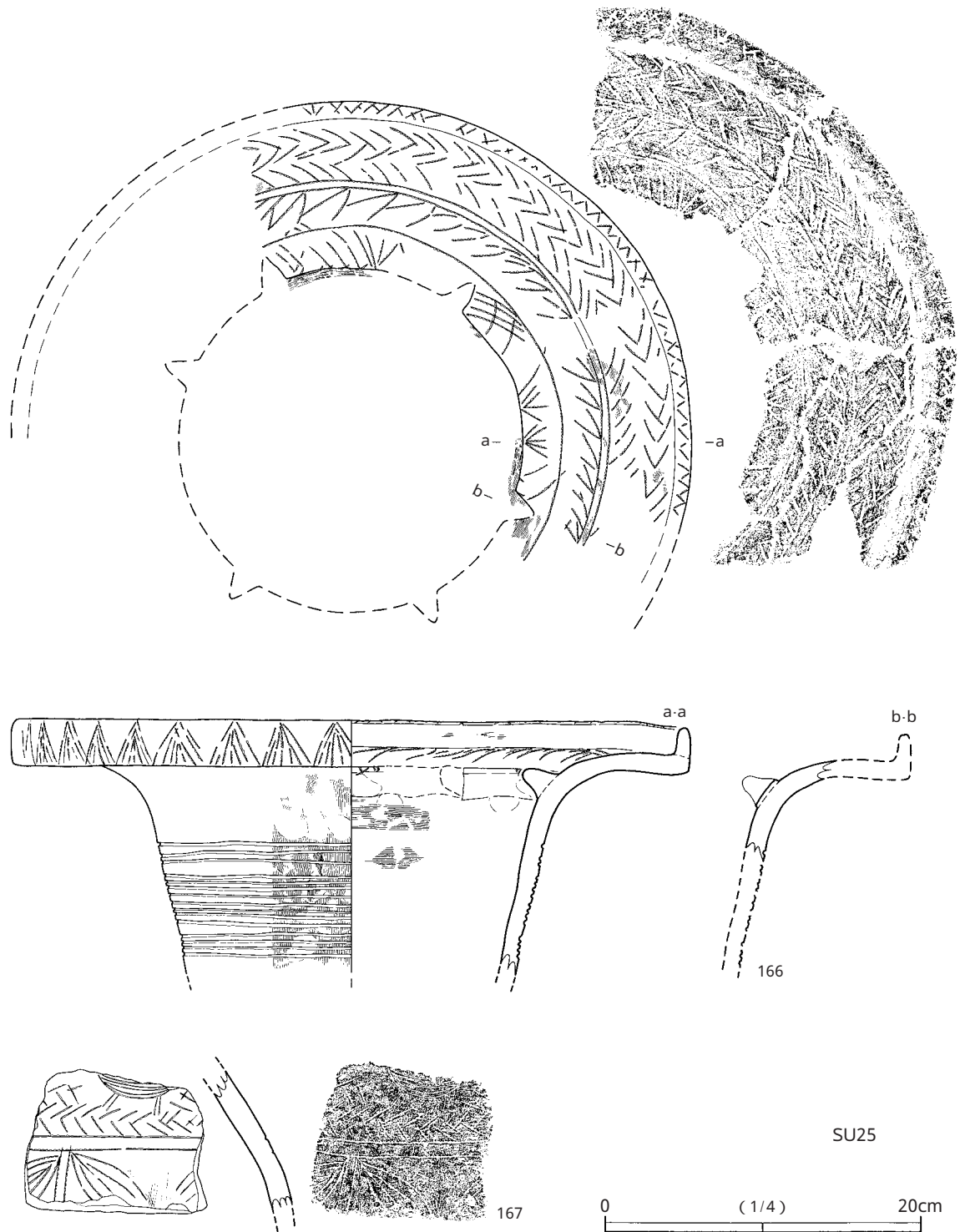


図33 出土遺物実測図⑭

SU28出土土器（図34：168～182）：壺は内折口縁のもの（168・170～172）が認められる。168は口縁部外面に2条沈線を施し、内面には注口状の突帯が貼付されている。170は口縁部外面無文で、頸部に沈線ならびに列点文、胴部には格子目文が施されており、文様構成としては稀な例である。171は口縁部外面にわずかに鋸歯文の痕跡が認められ、頸部には沈線と列点文が規則的に配されている。172は無文であり、内外面ともに刷毛目のちミガキが施されている。

甕は如意形口縁で、頸部に1条沈線を施すもの（173・174）、口縁部、頸部ともに無文のもの（175・176）が認められる。175は外面刷毛目調整で仕上げられ、断面には外傾接合痕が認められる。

177～182は底部である。177は厚底で、胴部が湾曲しながら立ち上がる形態であり、小型甕の一部であると考えられる。178～181は甕底部の可能性が高い。いずれも厚底ではなく、調整痕もほとんど認められない。182は壺底部と考えられる。断面台形状に張り出し、外面には刷毛目調整痕が明瞭に残る。

SU29出土土器（図35・36）：183～185は内折口縁壺片で、184は刷毛目状工具による沈線が施されている。186は口縁部を欠損するが、頸部に沈線、胴部上位に鋸歯文、その下には重弧文が配されており、頸部内外面には刷毛目調整痕が明瞭に残る。187は大型壺の底～胴部であり、胴部中位に突帯が形成され、3条の沈線と縦方向の区画文が配されている。また、188も壺胴部であり、外面に刷毛目調整が顕著に残るものの、文様は施されていない。189は蓋。器高が高く、内外面にミガキ調整痕が残る。

甕には数種類のバリエーションが存在する。190は口縁部が外反し、無文のもので、底部は厚底である。外面には粗い刷毛目調整痕、内面にはミガキ調整痕が認められる。この土器とほぼ同じタイプの土器として、194・198などがあるが、これらの土器は色調が肌色に近く、胎土に含まれる砂粒の粒子も細かい。下村遺跡で出土する中期初頭の土器は、色調は橙色を呈し、胎土に含まれる砂粒も大きいものが主体であることを考えれば、時期的に若干後出する甕形態である可能性が高い。この点については後述する。191・193・195は櫛描文を施す土器である。191は如意形口縁を呈し、頸部に5条1単位の櫛描文が施されている。193は口縁部に粘土帯を貼り付け、如意形口縁状に仕上げ、刻目を施している。頸部の櫛描文はきわめて粗雑である。195も如意形口縁を呈し、頸部には5条の直線文、その下に3条1組の櫛描文が施されている。こうした櫛描文土器は、下関市菊川町下七見遺跡、山口市赤妻遺跡、同市上東遺跡などで出土例があり、前期と中期を分かつメルク・マールとなる。甕にはこのほか口縁部は如意形を呈するが、刻目を施さない192のような資料がある。この個体は胎土が精選されており、焼成もきわめて良好である。また、197は粘土紐を貼り付け、ほぼ水平な口縁部形態に仕上げられており、周防地域の甕から影響を受けた可能性もある。196・200は如意形口縁を呈するが、頸部は無文。199は如意形口縁であり、頸部には3条の沈線が施されている。

201～203は底部であり、いずれも甕のものと考えられる。203は底がやや厚く、若干の上げ底を呈する。202は底部の器壁が薄く、上げ底である。

SU29出土土器には櫛描文を施した甕が3点も含まれており、他遺構と比較してその出土比率が高い。これらの甕はいずれも前期的な如意形口縁を呈しているが、櫛描文の施文から見て、中期初頭に位置づけられる。

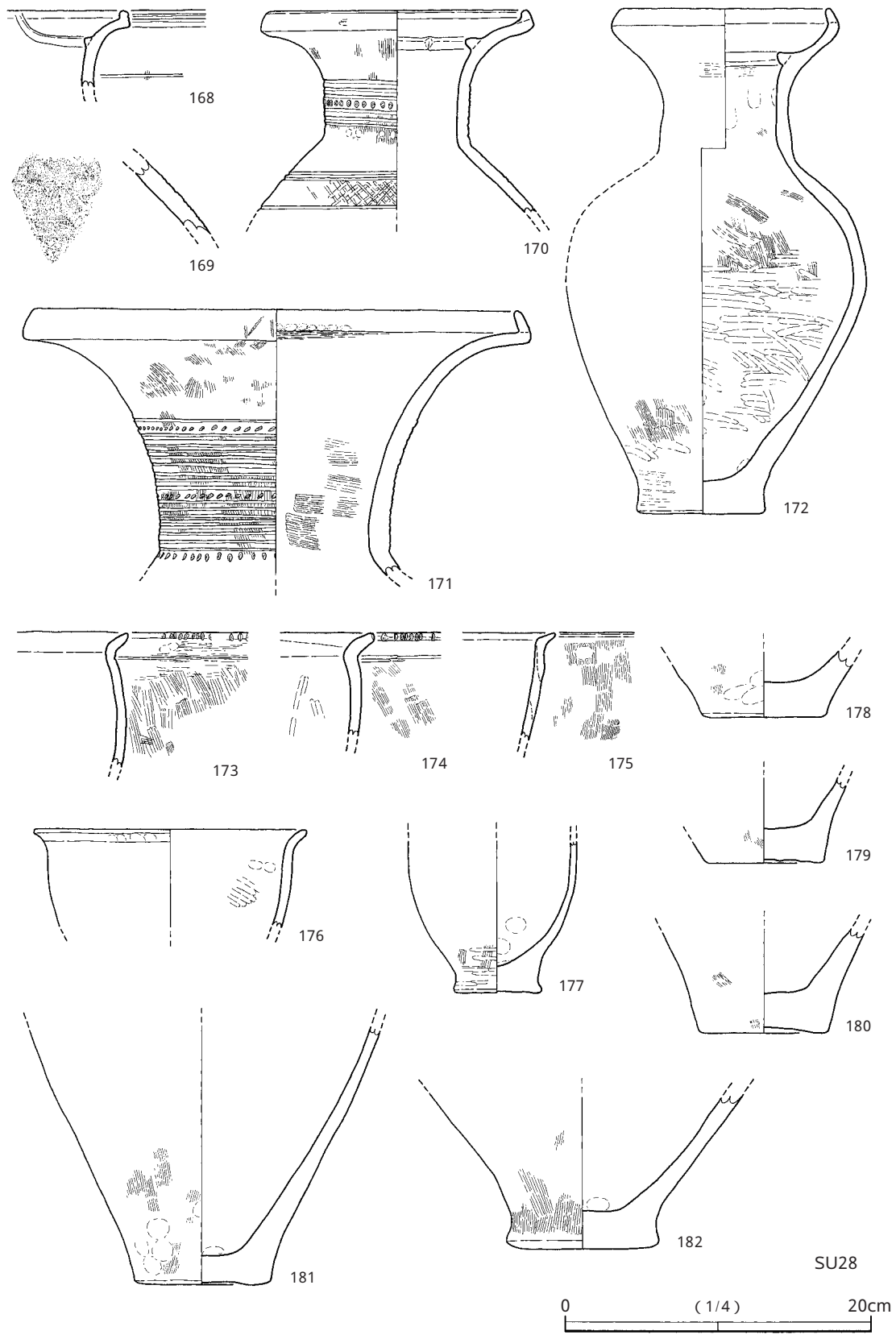


图34 出土遺物実測図⑮

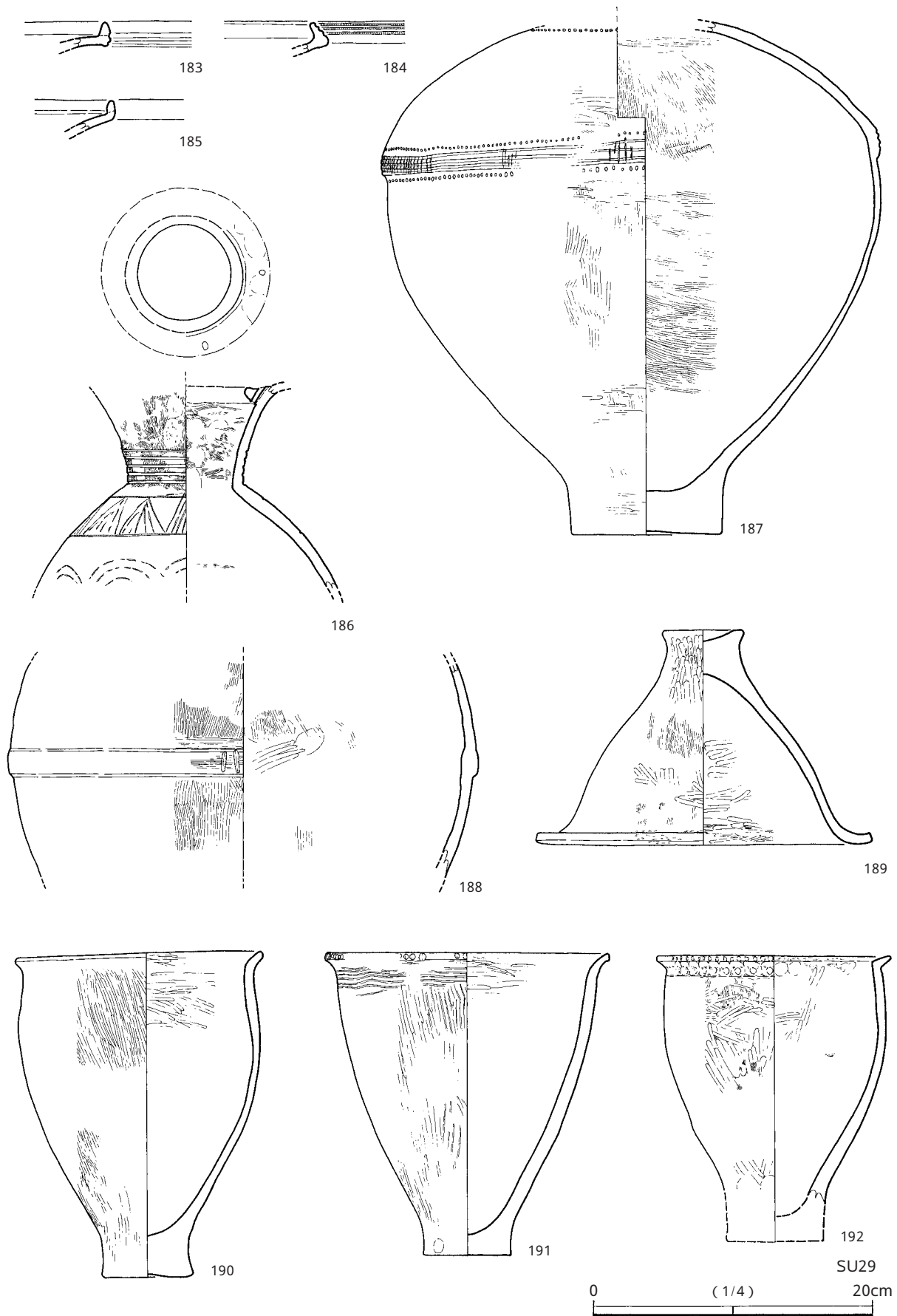


图35 出土遺物実測図⑬

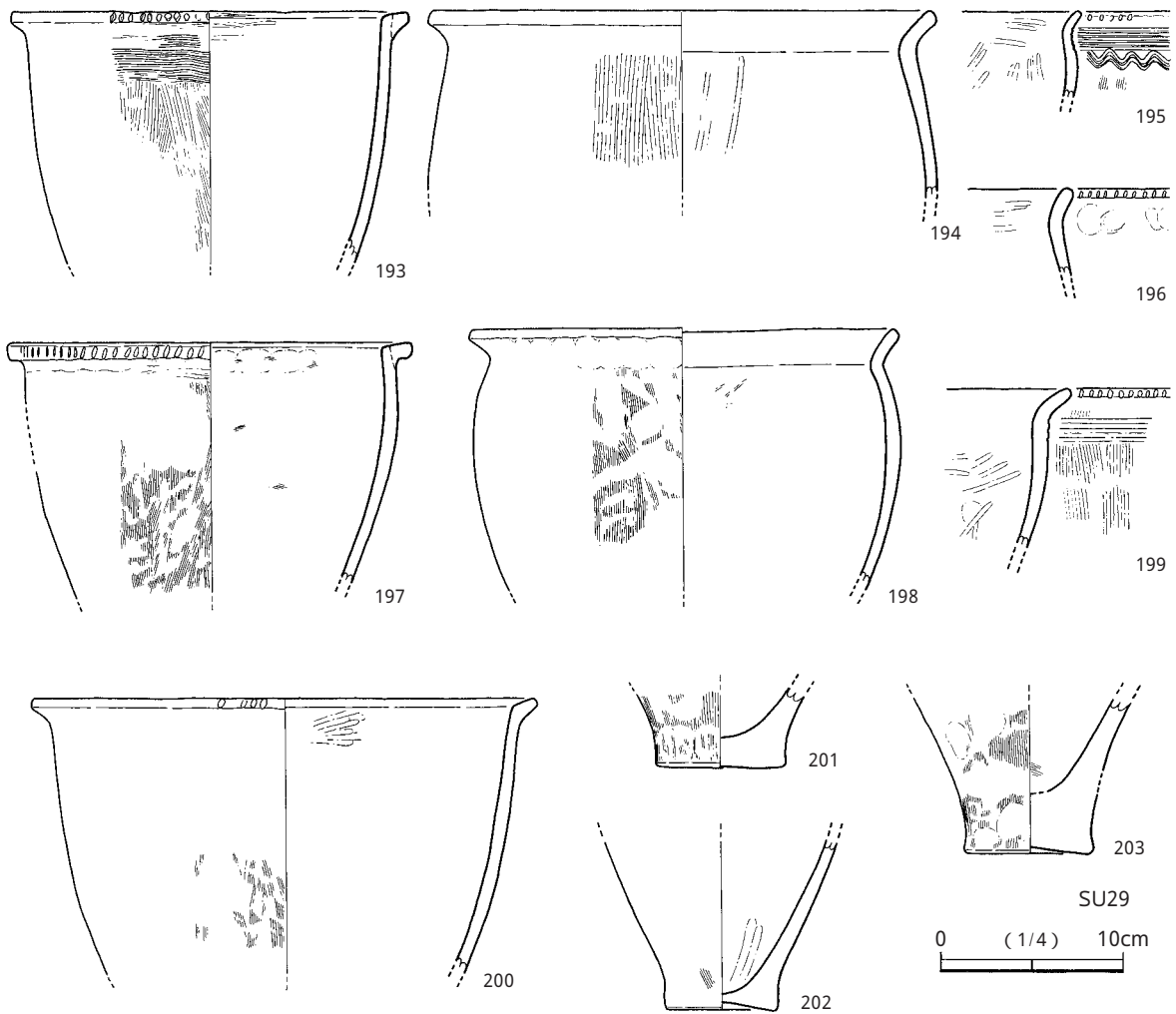


図36 出土遺物実測図①⑦

SU30出土土器 (図37)：壺は胴部片 (204・205) と、底部～胴部まで残存するもの (207・209) が出土している。207は外面に刷毛目調整痕が顕著に残る。また、208も壺底部と考えられる。甕は如意形を呈し、頸部に1条沈線が施されたもの (206) が認められる。

SU32出土土器 (図38)：壺は内折口縁に板状工具による沈線が3条施されたもの (210) や胴部片 (211・212) が出土している。甕は如意形口縁で、頸部に1条の沈線を施したもの (213)、口縁部は欠損するものの、頸部に4条沈線を施すもの (214) などが認められる。

特筆すべきは215の資料である。胴部が強く張り出し、短く外反する口縁部が付される。形態的にみれば韓半島中期無文土器である松菊里タイプの甕に近い。ほぼ完形品であり、口縁9.8cm、器高17.9cm、底径7.0cmを測り、色調は橙色を呈する。胎土には石英・長石・赤色粒子を含んでおり、他の弥生土器との差はない。器面の摩耗が著しく、調整は不明瞭であるが、部分的にナデやミガキの痕跡が認められる。この土器の評価については後述するが、形態面から見た場合、松菊里式土器としてとらえて問題はないと考えられる。しかし、胎土や調整技法などは、当遺跡で出土した他の弥生土器と何ら変わるところはなく、在地弥生土器の1バリエーションの可能性も否定できない。



图37 出土遺物実測図⑱

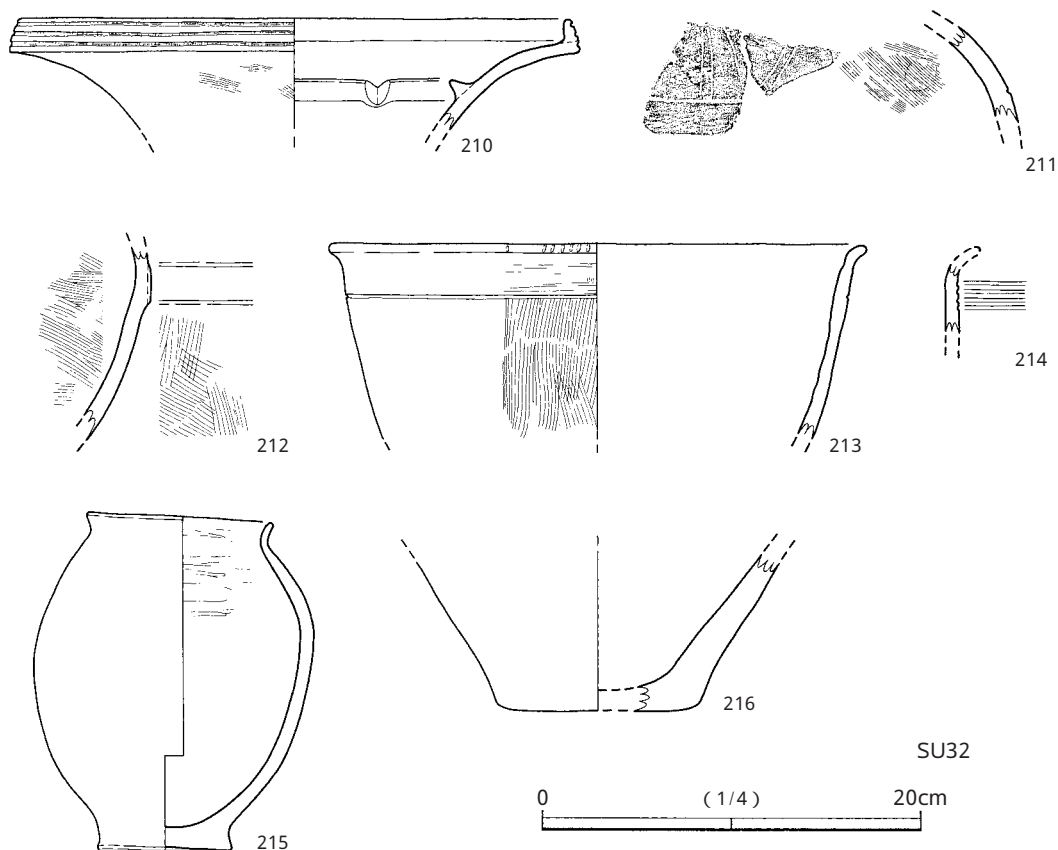


図38 出土遺物実測図⑬

SU35出土土器（図39）：壺は内折口縁の大型品(226)が出土している。文様は施されておらず、内外面ともに刷毛、ミガキが施されている。224も壺の底～胴部であると考えられ、内外面には縦方向の刷毛目調整が施されている。

甕は如意形口縁を呈し、頸部に粗雑な沈線が施されている。218～221は頸部が強く「く」の字状に屈曲する形態を呈する。口縁端部外面には刻目が施されておらず、頸部も無文である。222・223・225は底部で、いずれも甕のものと考えられる。222・223は上げ底を呈し、外面には刷毛目が顕著に残る。225は台形状を呈する特異な形態である。

SU40出土土器（図40・41）：壺は227～235に図示したようなものが出土した。227・228は内折口縁壺の口縁部であり、228は外面に7条の櫛描文状の沈線が施されている。229は口縁部が強く内傾し、3条の沈線、頸部に5条の沈線が施される。230は素口縁のもので、内外面ともに刷毛目のちミガキが施されている。城ノ越系統の壺であると考えられる。231～235は壺の胴部片である。231は頸部付け根から4つの横帯が形成され、鋸歯文が充填される。232も231と同一意匠であるが、各鋸歯文の中に貝による重弧文が施されている。断面には外傾接合痕が認められる。233は胴部上位に無軸羽状文、その下に鋸歯文が配置される。234は沈線によって区画された文様帯に鋸歯文が充填されている。235は232と文様構成が類似しており、同一個体の可能性がある。

236～242、244～246は甕である。236・237は如意形口縁で、頸部に沈線を施す。また、238は頸部に刷毛状工具による櫛描文が認められる。239は大型の甕で、胴部が強く張り出す形態を呈し、外面

には縦方向の刷毛目調整痕が顕著に残る。240は如意形口縁ながらも、刻目を施さない。頸部に刷毛目工具によって形成された段が認められる。外面には縦方向の刷毛目調整、内面にはミガキ調整痕が顕著に残る。241は小型の甕もしくは鉢で、内外面ともにミガキ調整痕が認められる。242・246はいずれも如意形口縁甕で、242は口縁下端部に刻目を施す。246は器形のひずみが著しく、器壁がきわめて薄い。244は口縁部が水平近くに折れ曲がる形態で、頸部に7条の沈線、その下に列点文が施されている。245は甕底部と考えているが確証はない。平底を呈し、外面には刷毛目調整ののち、ミガキが施されている。

243は蓋である。明赤褐色を呈し、内外面ともに刷毛目調整の痕跡が顕著に残る。

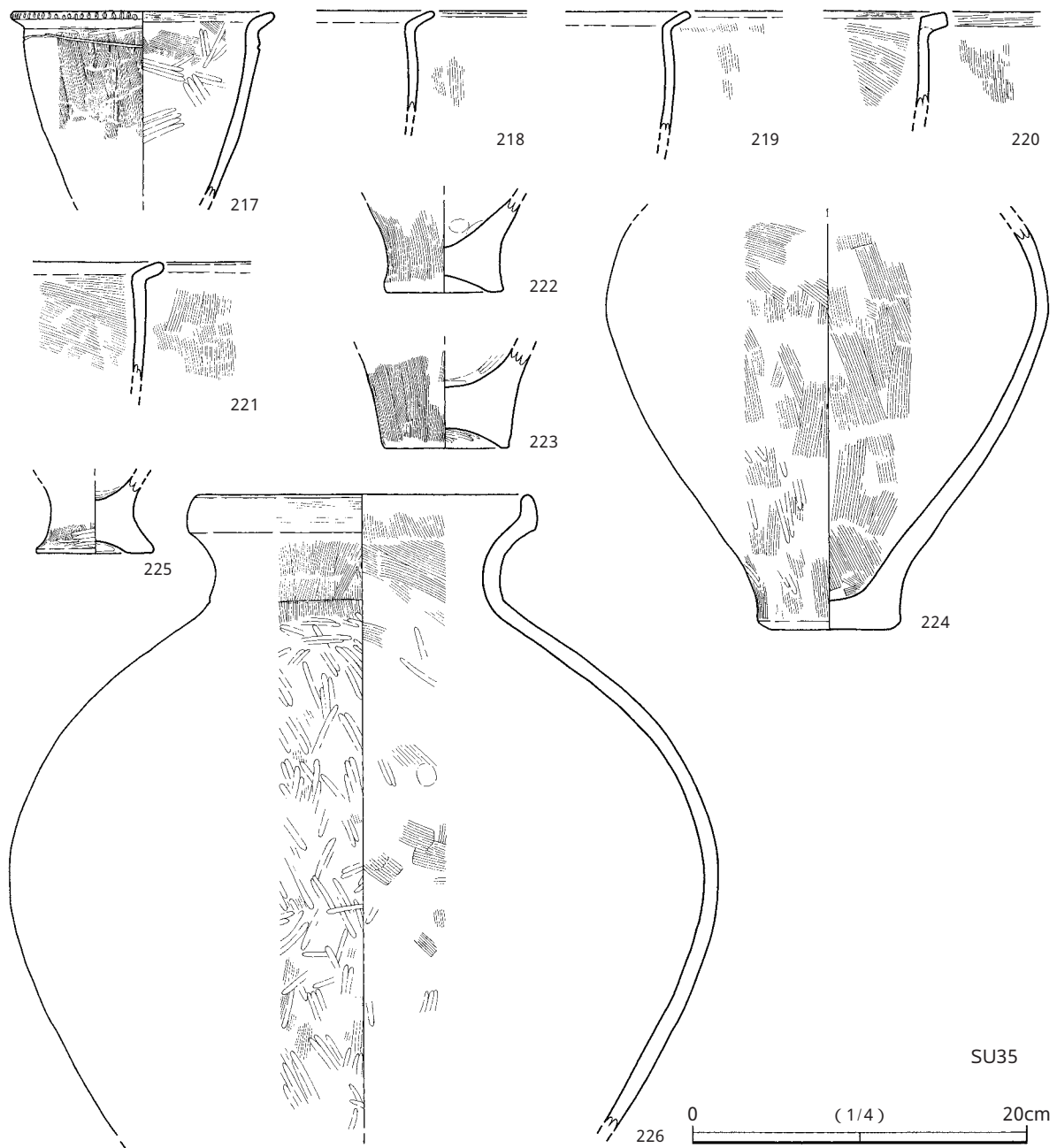


図39 出土遺物実測図⑳

SU44出土土器（図42：247～252）：247～250は壺形土器である。247は頸部が長く、7条の沈線を施す。これに対し、248は頸部が短く、文様を全く施さない。249・250は胴部片であり、無軸羽状文や鋸歯文が施文されている。

251は甕であり、口縁部外面は無刻目、刷毛目調整ののち、頸部に1条の沈線を施している。252は底部で、おそらく甕のものであろうと考えられる。

SU45出土土器（図42：253～259）：253～254は壺胴部片で、鋸歯文や木葉文が施されている。257は素口縁で、頸部が短く、胴部が強く張り出す形態である。城ノ越系統の壺であろう。

255は甕で、口縁部が強く「く」の字状に屈曲する。口縁端部に刻目は施されない。256・258・259は底部であり、いずれも甕のものであろうと考えられる。

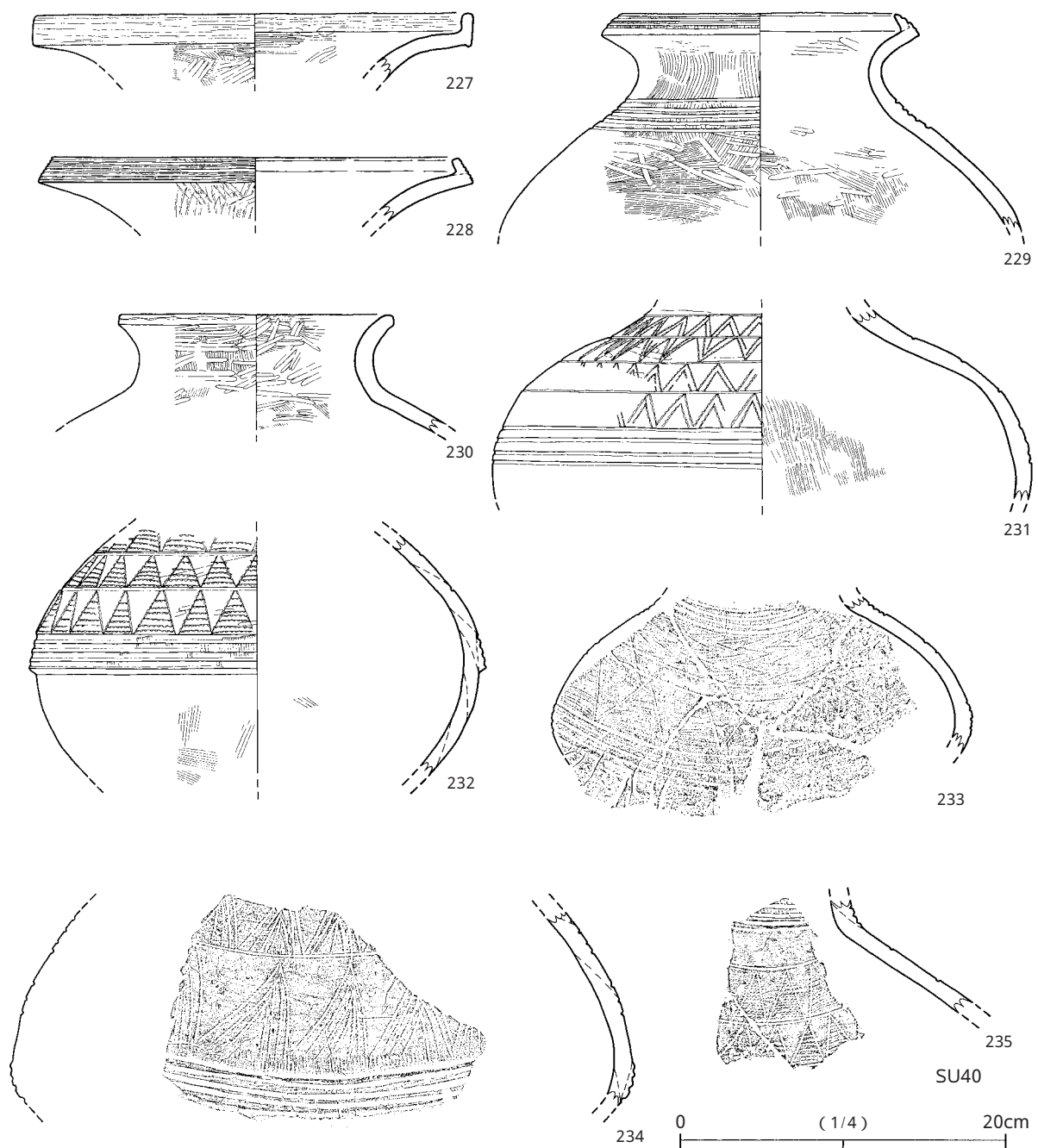


図40 出土遺物実測図①

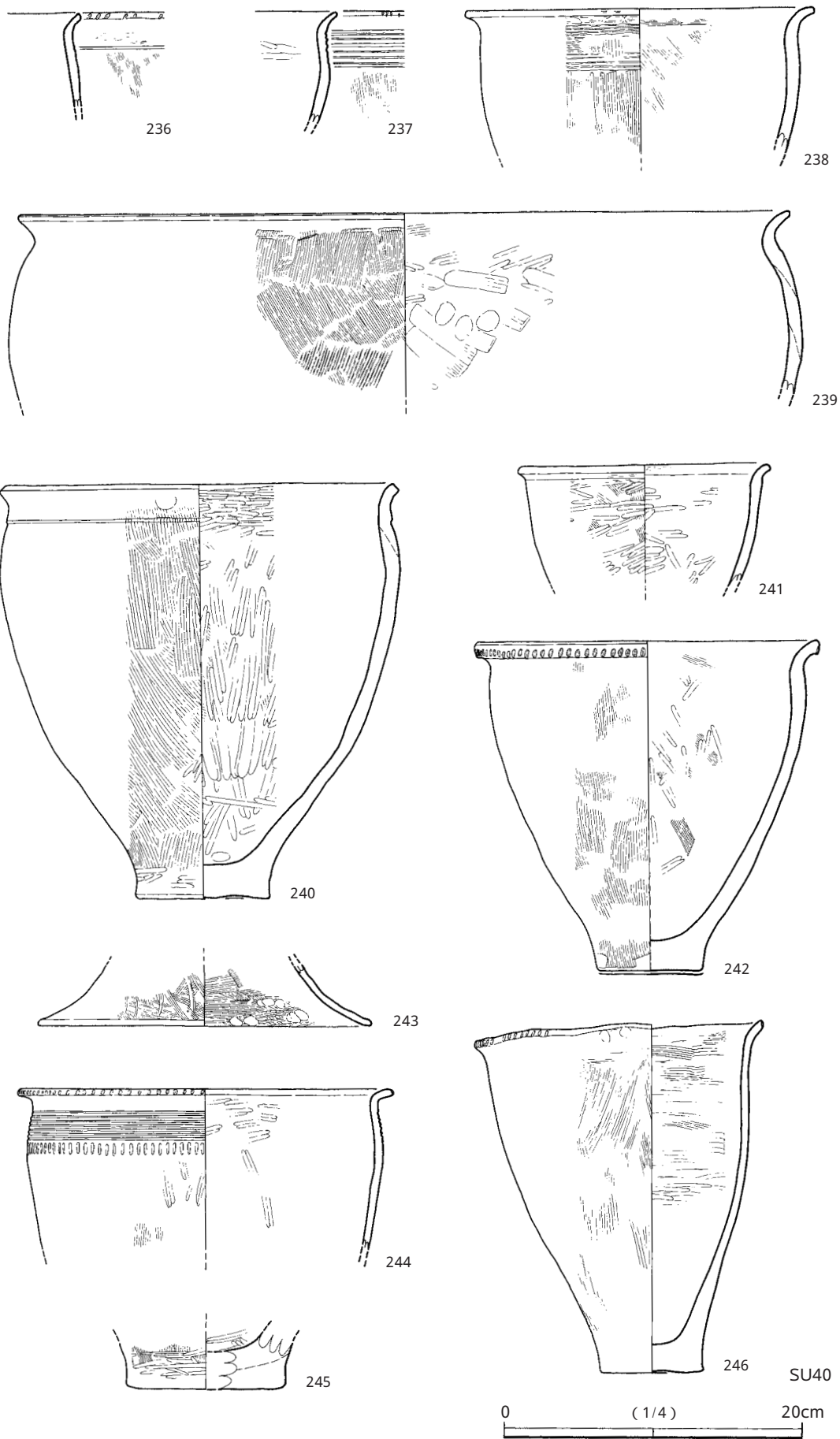


图41 出土遺物実測図②

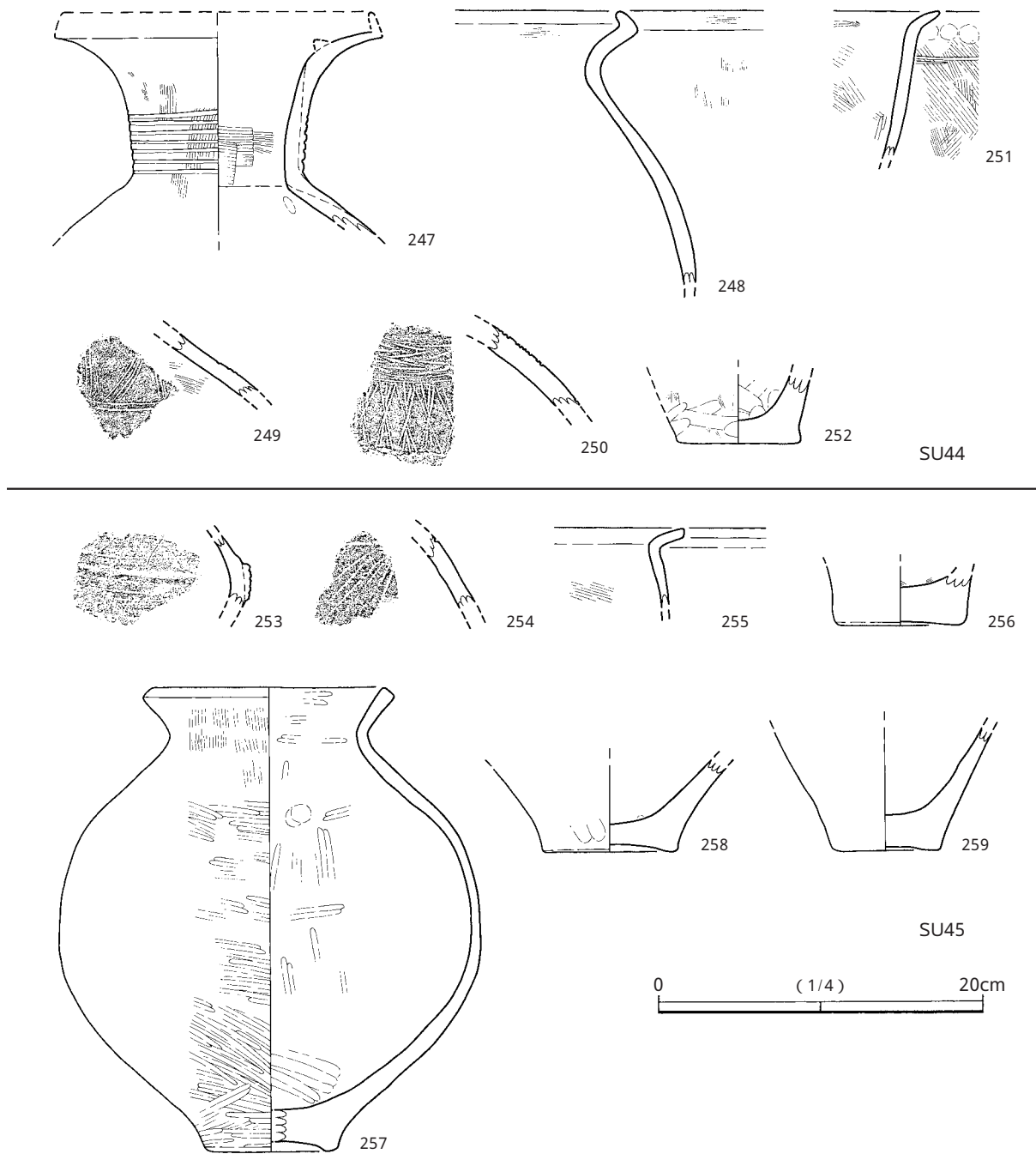


図42 出土遺物実測図③

SU49出土土器（図43・図44-277）：260～266は壺形土器である。260・261・264は頸部から胴部へなめらかに移行する形態を呈す。261の口縁部外面には鋸歯文が施される。262・265は内折口縁の壺であるが、いずれも頸部は短い。265は頸部に3条沈線、その下に列点文を施す。266は大型壺の底～胴部。胴部中位の突帯上には有軸の羽状文が施文されている。

267～271・277は甕である。267・268は如意形口縁を呈し、268の頸部には楯描状の沈線がわずかに認められる。270・271は粘土紐を貼付し、水平に近い口縁形態を作出している。277はほぼ完形に近い個体で、口縁部は如意形を呈するが、刻目は施されていない。272・273・275・276は底部であり、いずれも甕のものであると考えられる。また、274は高杯もしくは台付鉢の脚部である。このタイプ

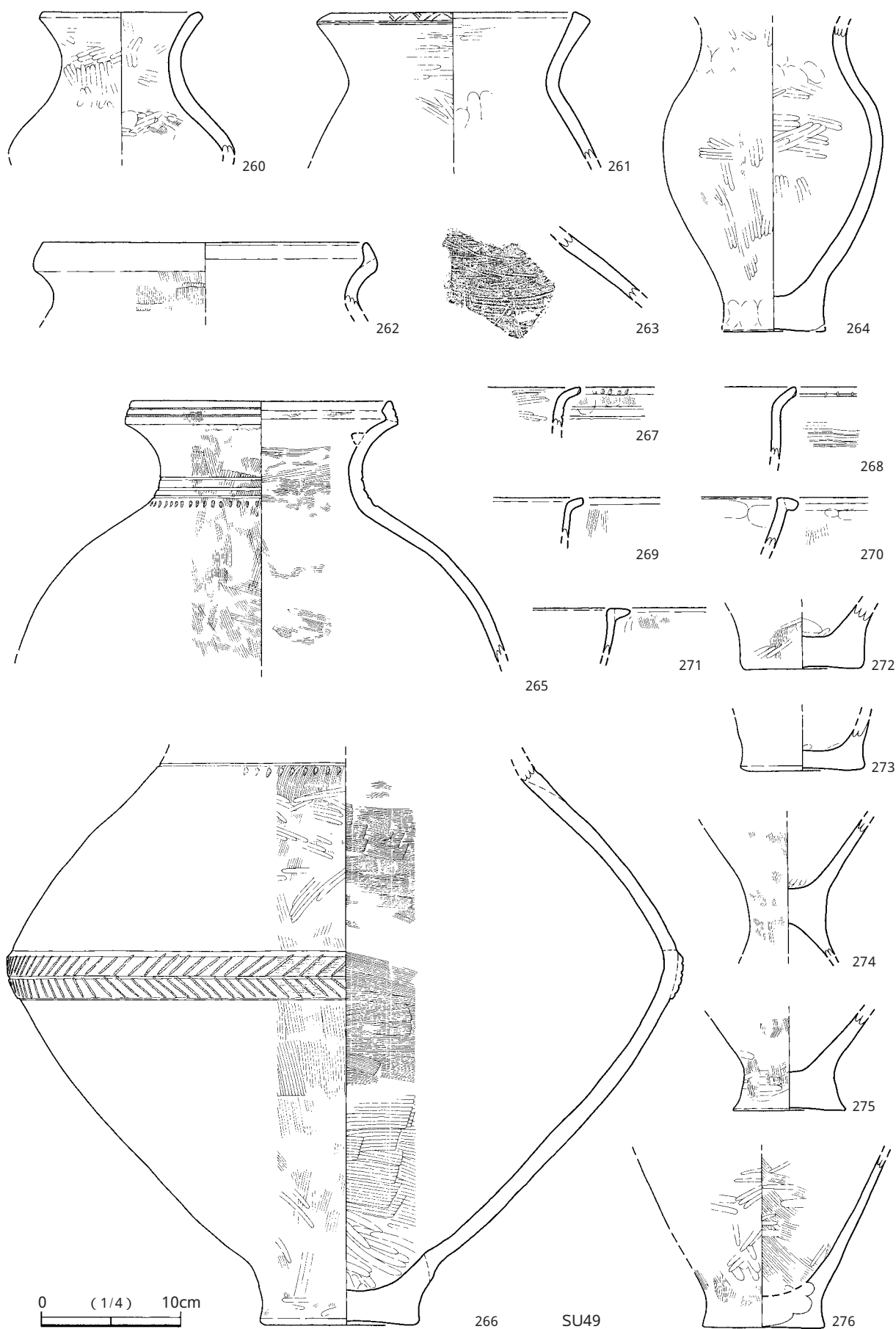


图43 出土遺物実測図④

は本遺跡では出土しておらず、高杯類は組成にほとんど含まれないことが看取できる。

SU50出土土器（図44：278～283）：278・280・281は壺である。278は無軸羽状文が施された胴部片、280は頸部から胴部へゆるやかに移行するタイプの壺である。281は大型壺の底～胴部で、器面が摩滅しているが、無軸羽状文、鋸歯文が施されている。279は甕であるが、口縁部が欠損しており、詳細な特徴については不明である。

282・283は底部で、いずれも甕のものと考えているが、282については壺底部の可能性も否定できない。この資料には外面立ち上がりの部分に沈線らしき痕跡が認められる。また、283の外底部には明瞭な靱圧痕が確認できる。

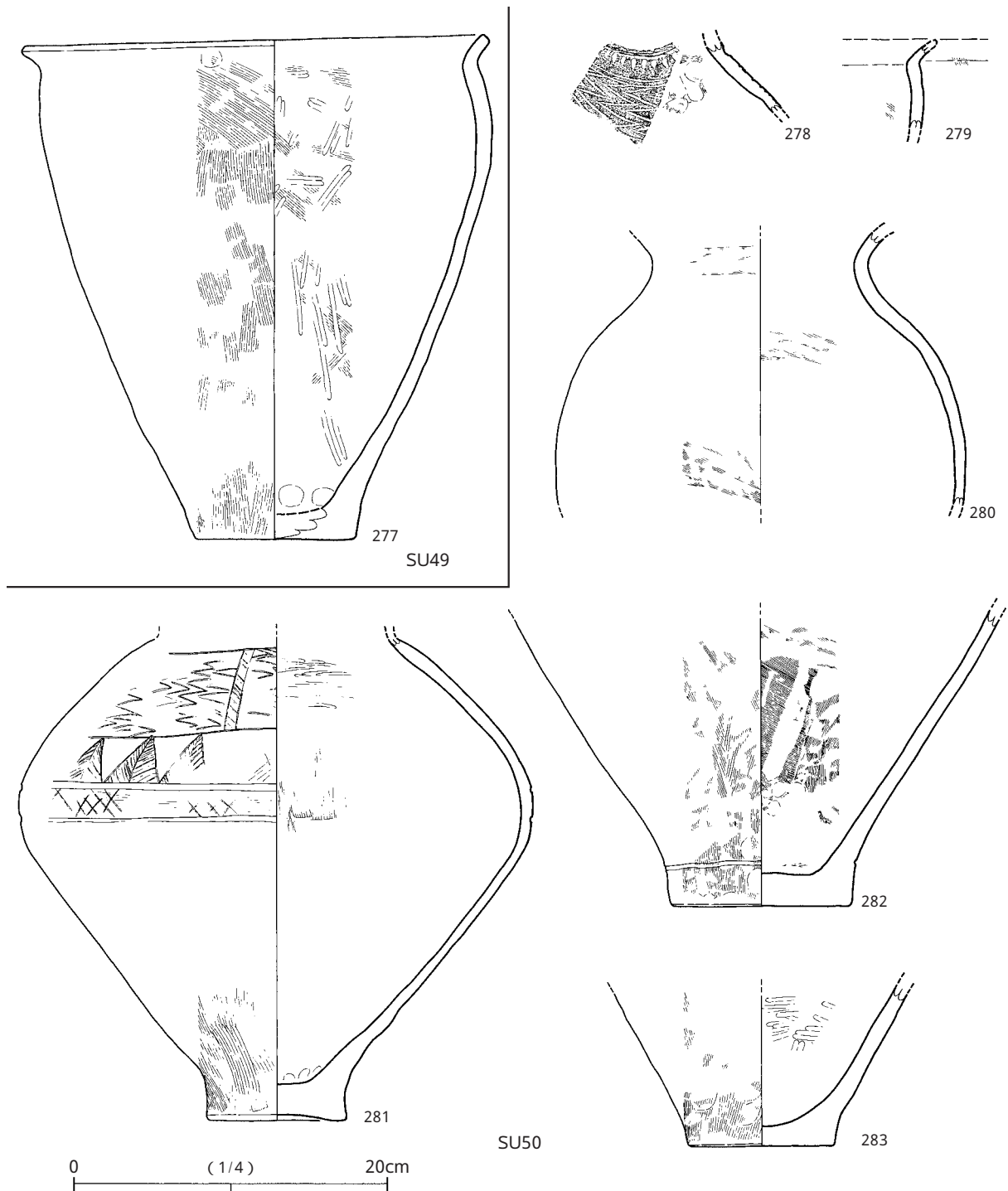


図44 出土遺物実測図②

SK 1 出土土器 (図45) : 284~286は壺である。284は頸部の短い内折口縁壺、286は素口縁で頸部に沈線と列点文を施している。287・288は甕で、前者は小型のもの、後者は大型のものである。底部(289~291)はいずれも平底で、器壁は薄い。いずれも甕のものと考えられる。

SK 2 出土土器 (図45-292) : 長頸壺の口縁部が1点のみ出土している。内外面とも調整不明。

SK10出土土器 (図46 : 293~310) : 293~296は壺。293は内折口縁で頸部の短いタイプで、文様を施さない。294・295は胴部片で、鋸歯文や無軸羽状文が施されている。

297~304は甕である。297は小型甕、298は如意形口縁を呈する前期以来のタイプである。これに対して、299~304は口縁端部に刻目を施さず、頸部も無文である。303などは逆「コ」の字状の口縁形態を呈し、型式学的に新しい特徴を有する。また、これらの土器は、色調、胎土ともに前期以来の土器とは異なっており、新たな土器製作技術によって製作されたものと考えられる。また、305~310はいずれも甕底部と考えられる。

SK11出土土器 (図47) : 大型甕が2点出土した。311は口縁部を水平近くに屈曲させ、刻目を施している。外面に刷毛目調整、内面にはミガキ痕が認められる。312は粘土紐を貼り付け、口縁部を水平に仕上げる。頸部には2条沈線を施し、正面に縦方向の沈線を3本配置する。

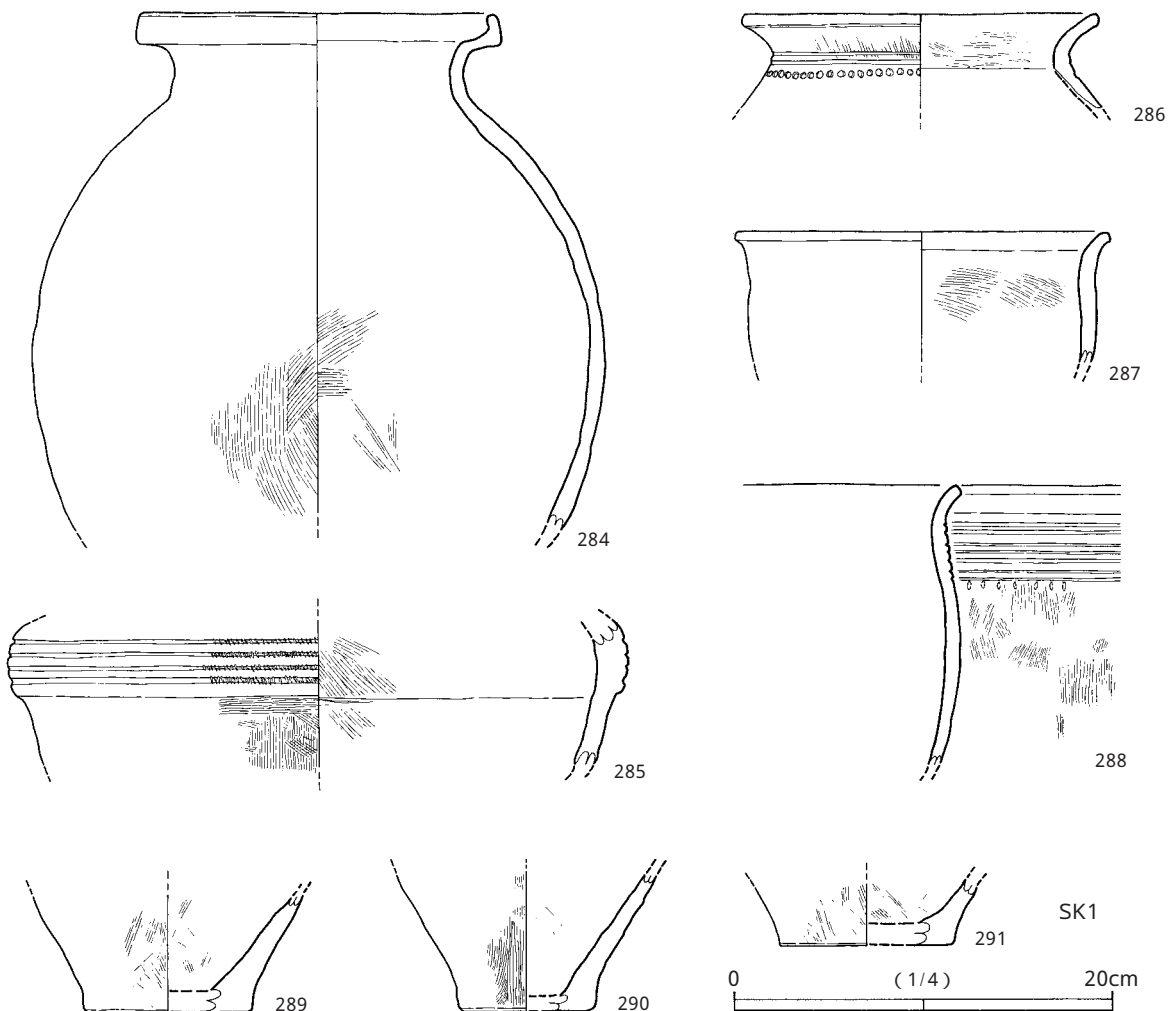


図45 出土遺物実測図②⑥

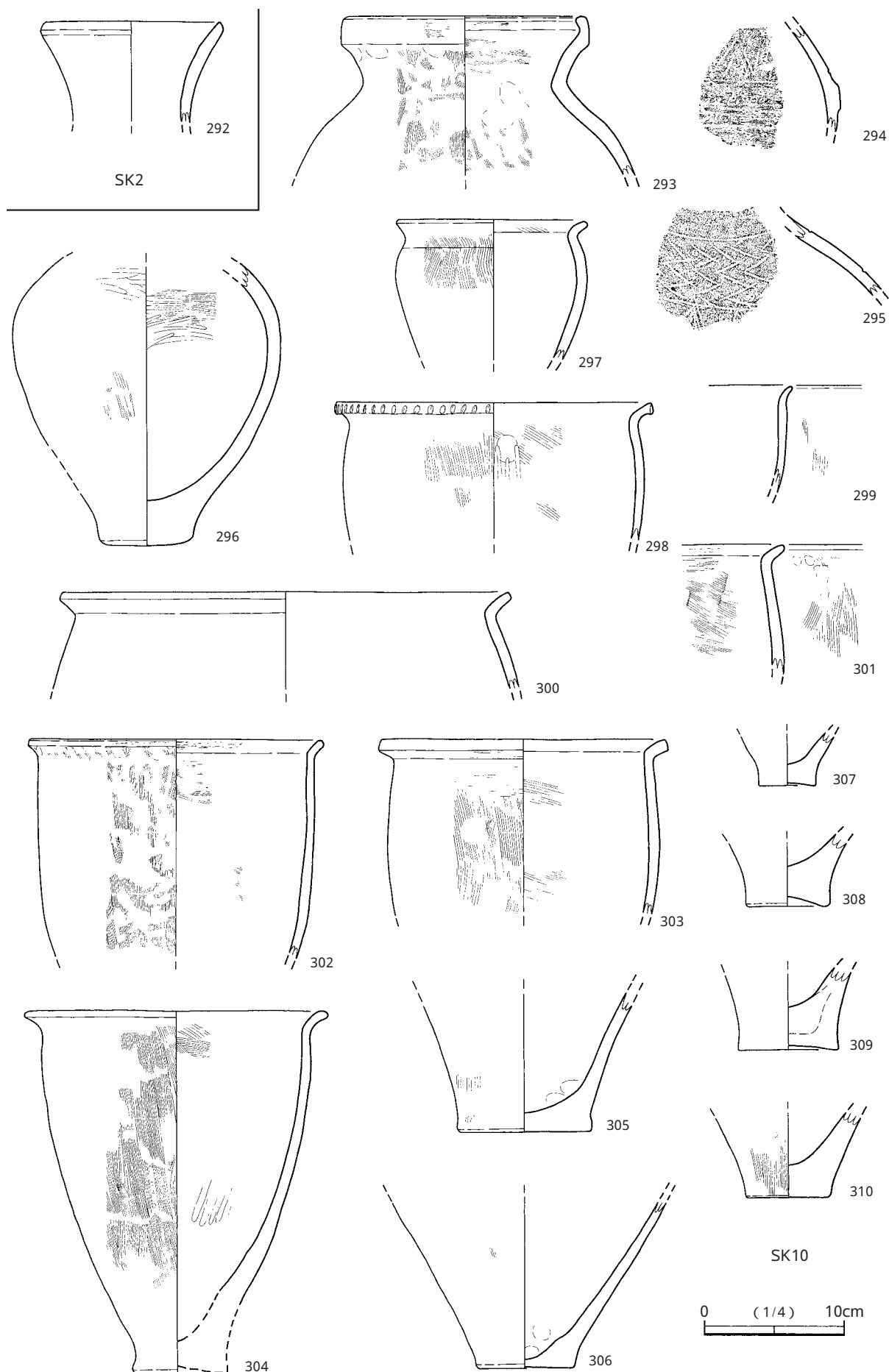
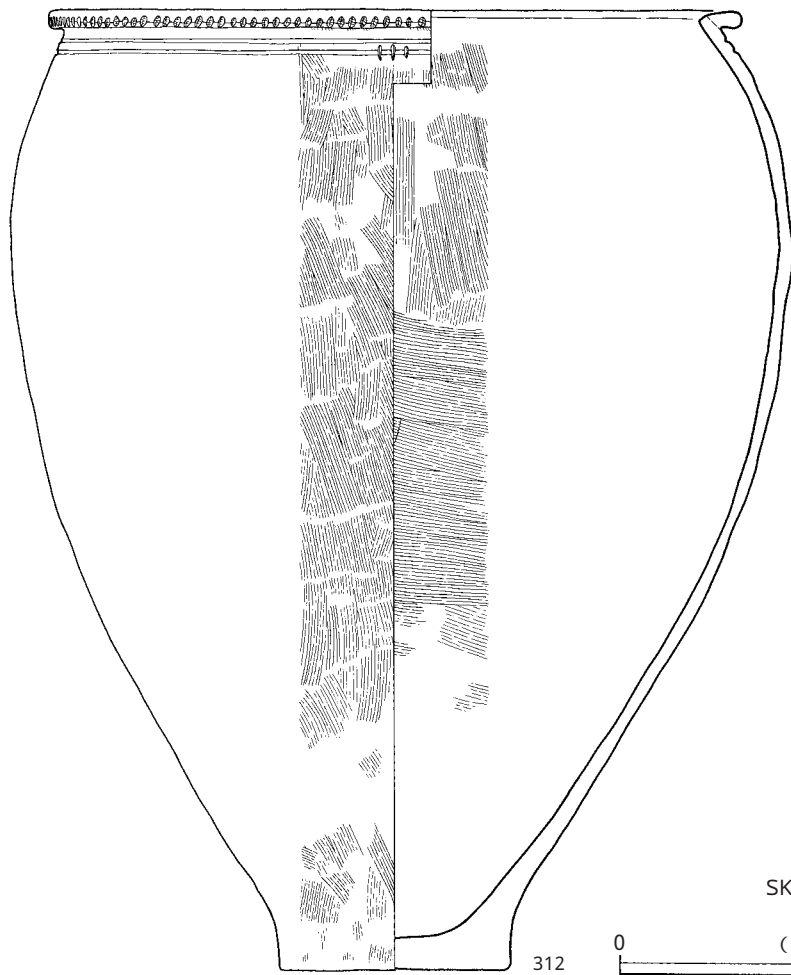
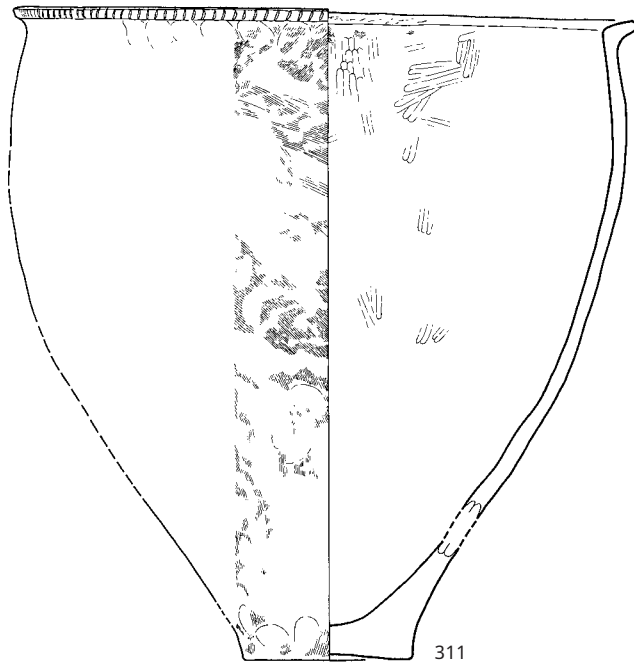


图46 出土遺物実測図②⑦



SK11

0 (1/4) 20cm

图47 出土遺物実測図⑳

SK13出土土器 (図48：313～319)：壺は内折口縁で頸部の長いもの (313) と短いもの (317)、長頸壺 (315) などが認められる。甕は如意形口縁で頸部に3条の沈線を施す (319)。

SK20出土土器 (図48-320)：大型の甕であり、図上復元するとかなりひずみがある。口縁部はゆるやかに外反し、刻目は施さない。

SK22出土土器 (図48：321・322)：甕の破片が2点出土。322は口縁部内面を肥厚させる。

SK25出土土器 (図49：323～332)：壺は内折口縁のもの (323) や胴部片 (324・325・328) などが出土している。注目すべきは329の資料であり、形式的には弥生前期のものに該当する。また、327は口縁部に粘土帯を貼り付け、肥厚させており、形態的にやや特異。このほか、口縁部が水平近くに屈曲する甕 (331) などが出土している。

SK34出土土器 (図49：333～343)：壺は頸部の短い内折口縁タイプ (333) が出土している。甕は如意形を呈するもの (334) が主体と考えられるが、335・337のように口縁部を欠損するものが多く、不明瞭な点もある。

SK45出土土器 (図50：344～346)：344は内折口縁の小型品。頸部に沈線、列点文を有し、外面には刷毛目調整が顕著に残る。345は大型品で、胴部上位に鋸歯文、その下に無軸羽状文を配する。346は大型甕で、口縁部に粘土紐を貼付し、水平近くに仕上げる。頸部に2条の沈線を配する。

SK50出土土器 (図51：347～353)：出土土器の大半を壺が占める。347は頸部の短い内折口縁壺で、胴部が強く張り出す。350は頸部の長い内折口縁壺で、胴部上半に無軸羽状文が施されている。351には連鎖状突帯が貼付されており、瀬戸内系土器の影響を受けていると見られる。

SK54出土土器 (図51：355～360)：355は口縁部が「く」の字状に強く屈曲する。形態的特徴や焼成などから、若干新しい時期に位置付けられる可能性がある。359は連鎖状突帯が貼付されたもので、小型品の部類である。356は特異な形態の土器で、口縁部内外面を肥厚させている。

SK59出土土器 (図51：361～364)：壺は頸部に三角突帯を貼付したもの (361)、内折口縁壺片 (362) が出土している。甕は頸部に5条沈線と列点文を施したもの (363) が出土。

SK61出土土器 (図51-354)：素口縁で、頸部がゆるやかに外反する。外面はミガキ調整が顕著、内面には刷毛目調整が残る。

SK66出土土器 (図52～54)：365～374は壺である。内折口縁タイプは頸部の短いもの (365・368) と長いもの (372・373) が存在する。頸部が短いタイプのうち、368は文様を施しておらず、長胴形を呈する。372は2孔1対の孔が対向する2箇所配置されている。注目されるのは369の資料で、口縁部内面を肥厚させる前期末壺の特徴を有している。367は無頸壺で、内外面ともにミガキ調整が施されている。本遺跡ではこうした無頸壺はほとんど認められない。

甕は如意形口縁のもの (375～378、380・381) が主体を占め、特に頸部に3～4条の沈線を施すもの (375～378) が多い。380は粘土紐を貼り付け、口縁部を水平近くに仕上げるものであり、頸部には4条1単位の櫛描文が2段にわたって施文され、その下には列点文が配される。379は大型の甕で、口縁部は「く」の字状に強く屈曲する。この土器は、胎土、焼成とも、同遺構から出土する他の土器とは異なっており、時期が下がるものか、搬入品である可能性もある。このほか、内折口縁を呈する大型甕 (388) も出土している。口縁部外面には横方向の刷毛目調整、屈曲部には刻目が施される。

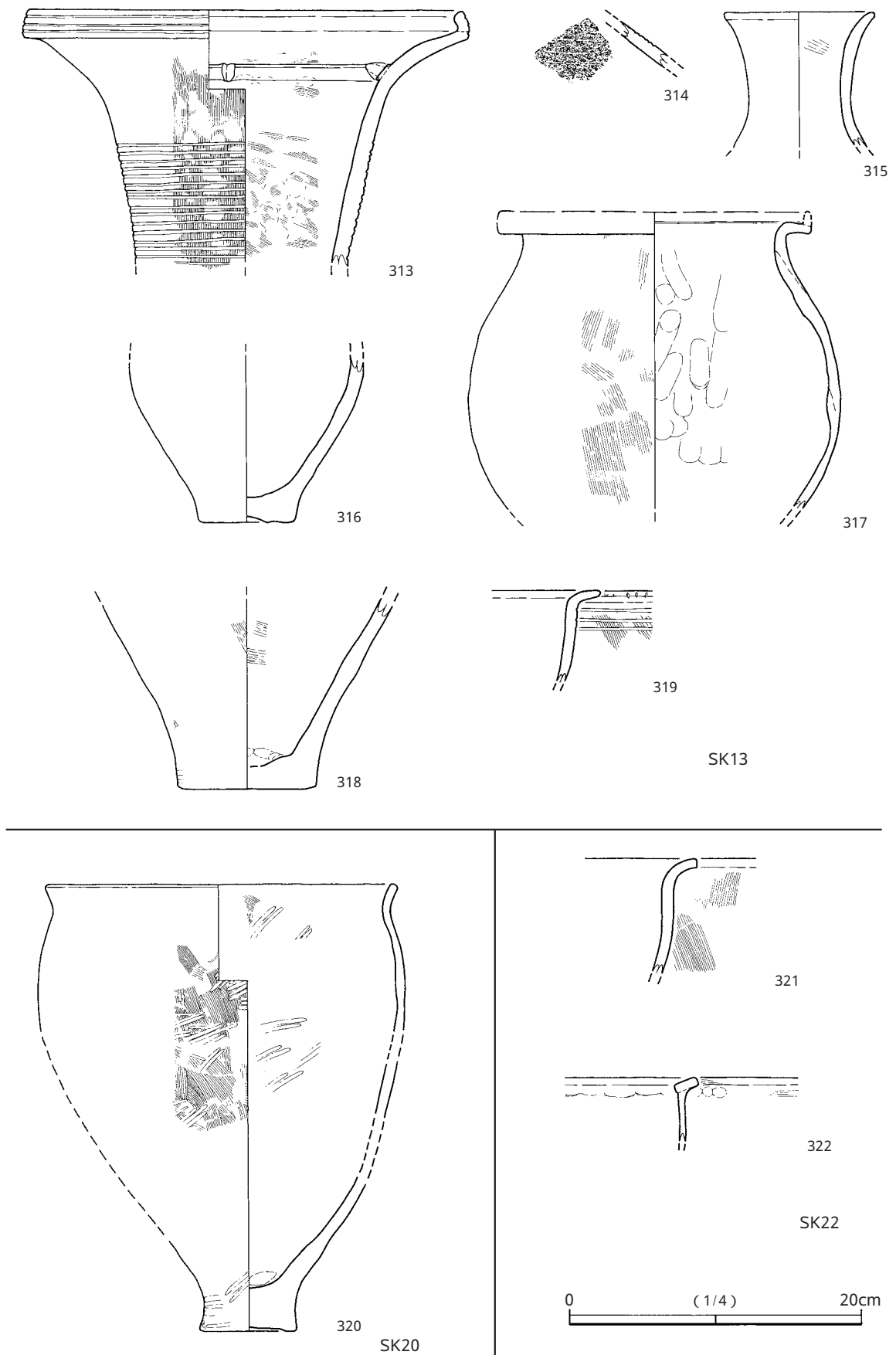


图48 出土遺物実測図②

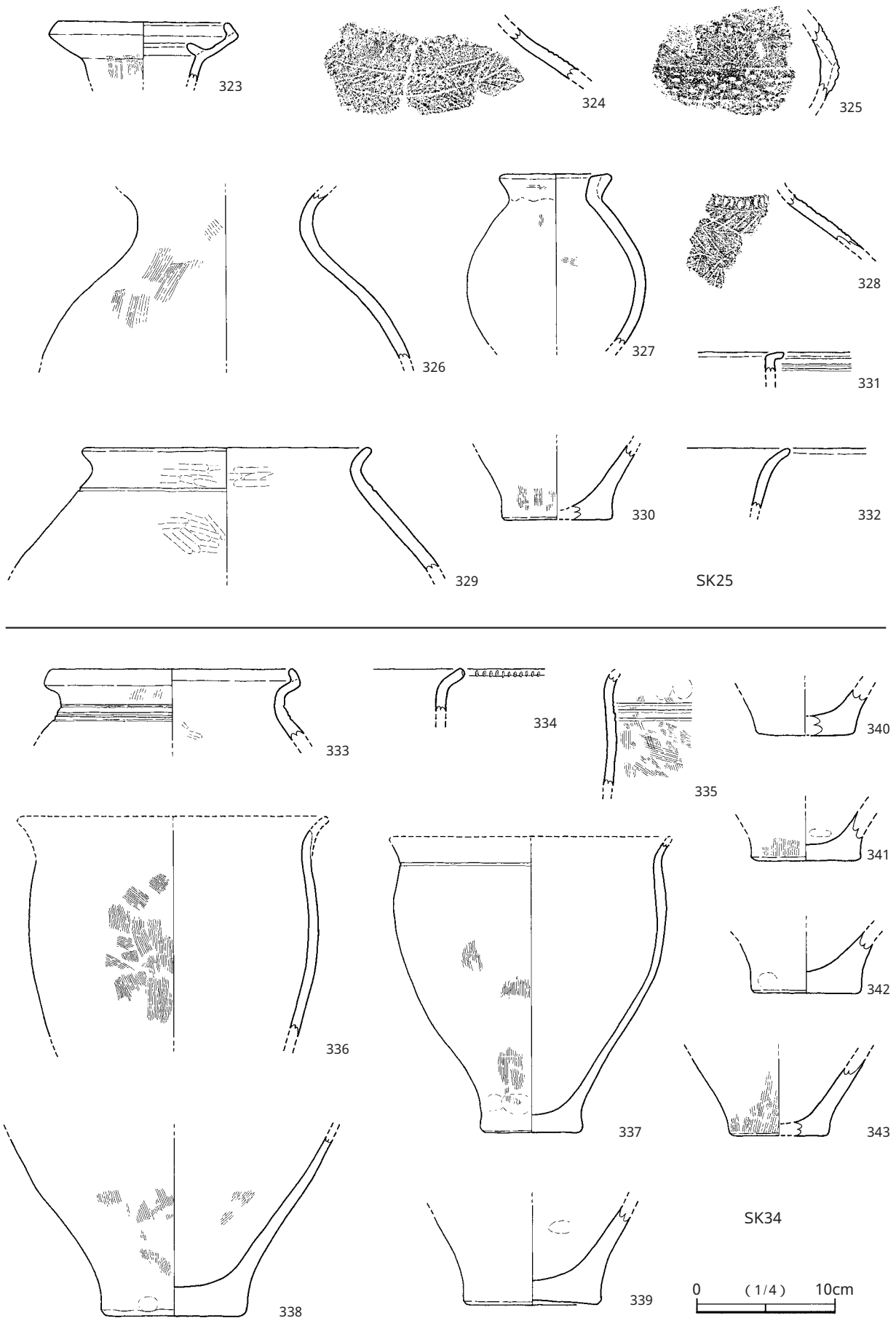


图49 出土遺物実測図⑩

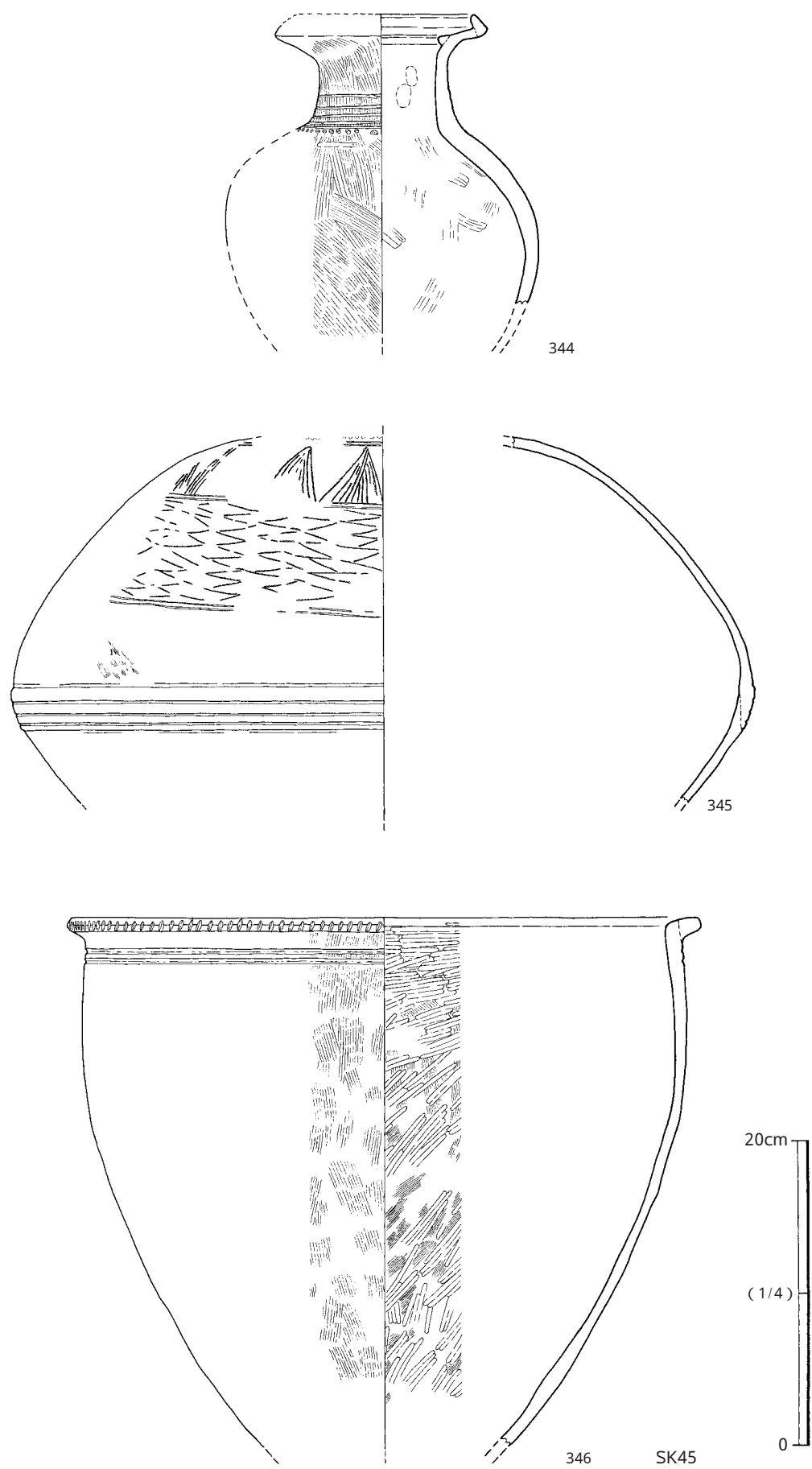


图50 出土遺物実測図③①

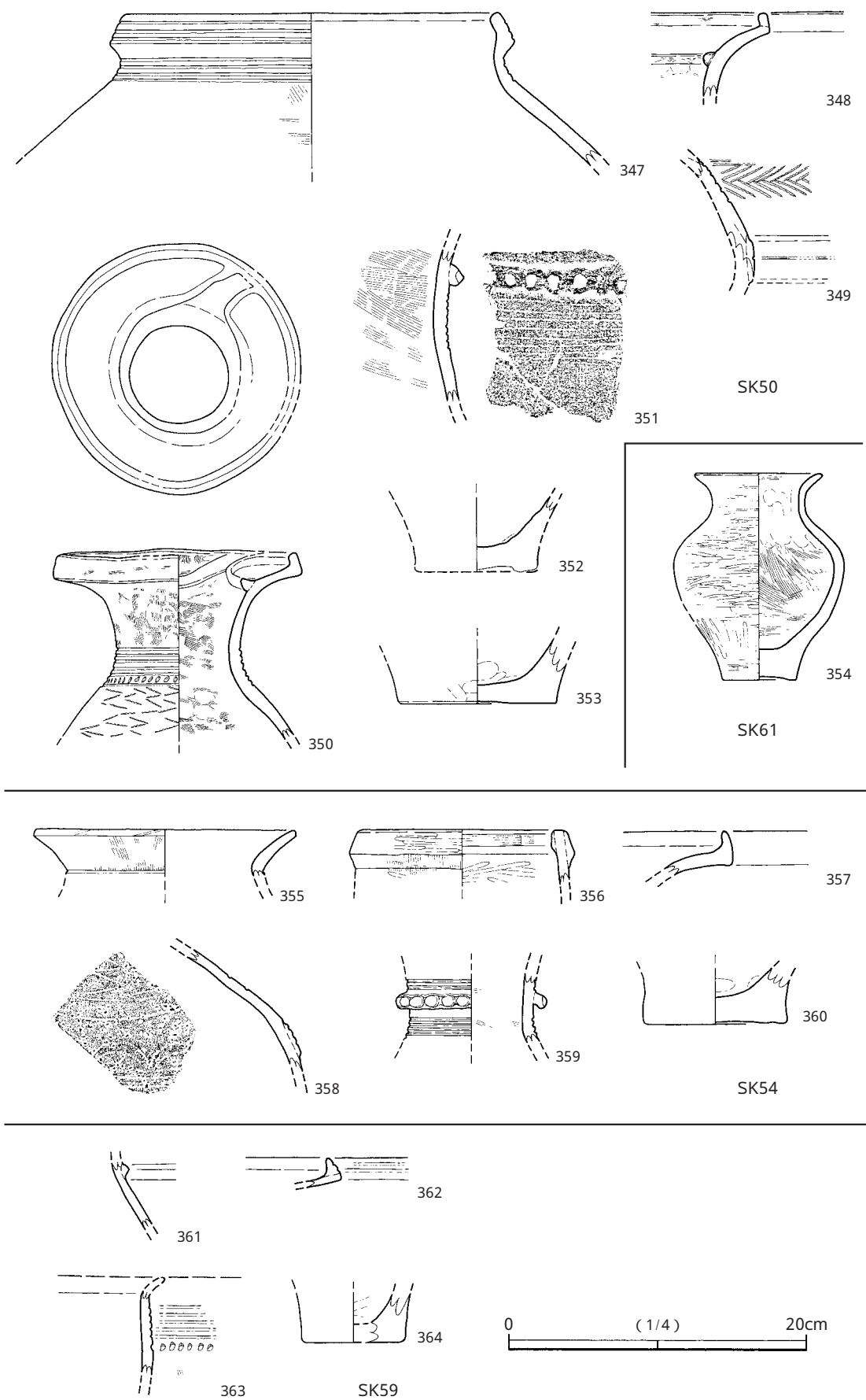


图51 出土遺物実測図③

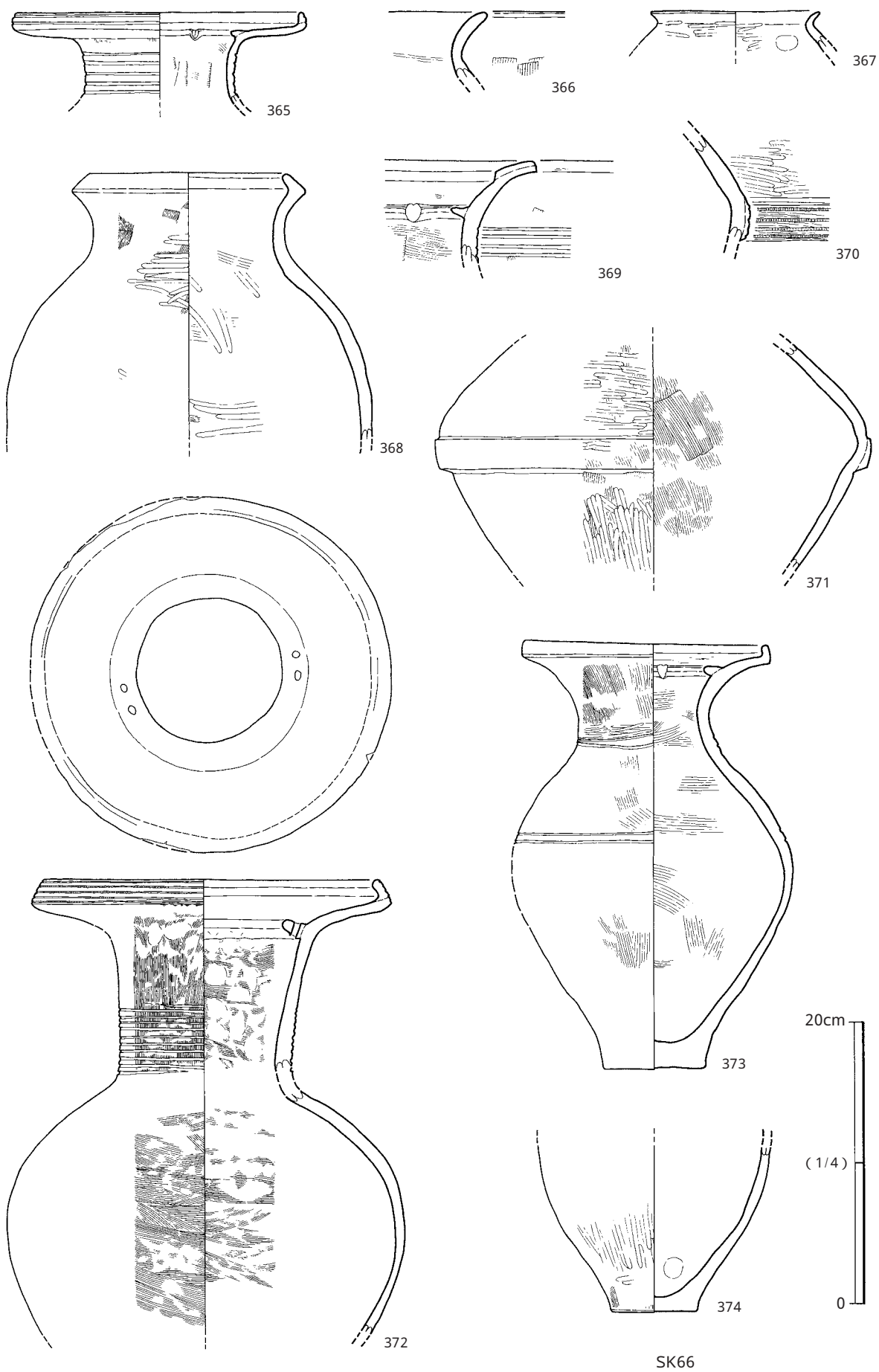


图52 出土遺物実測図③

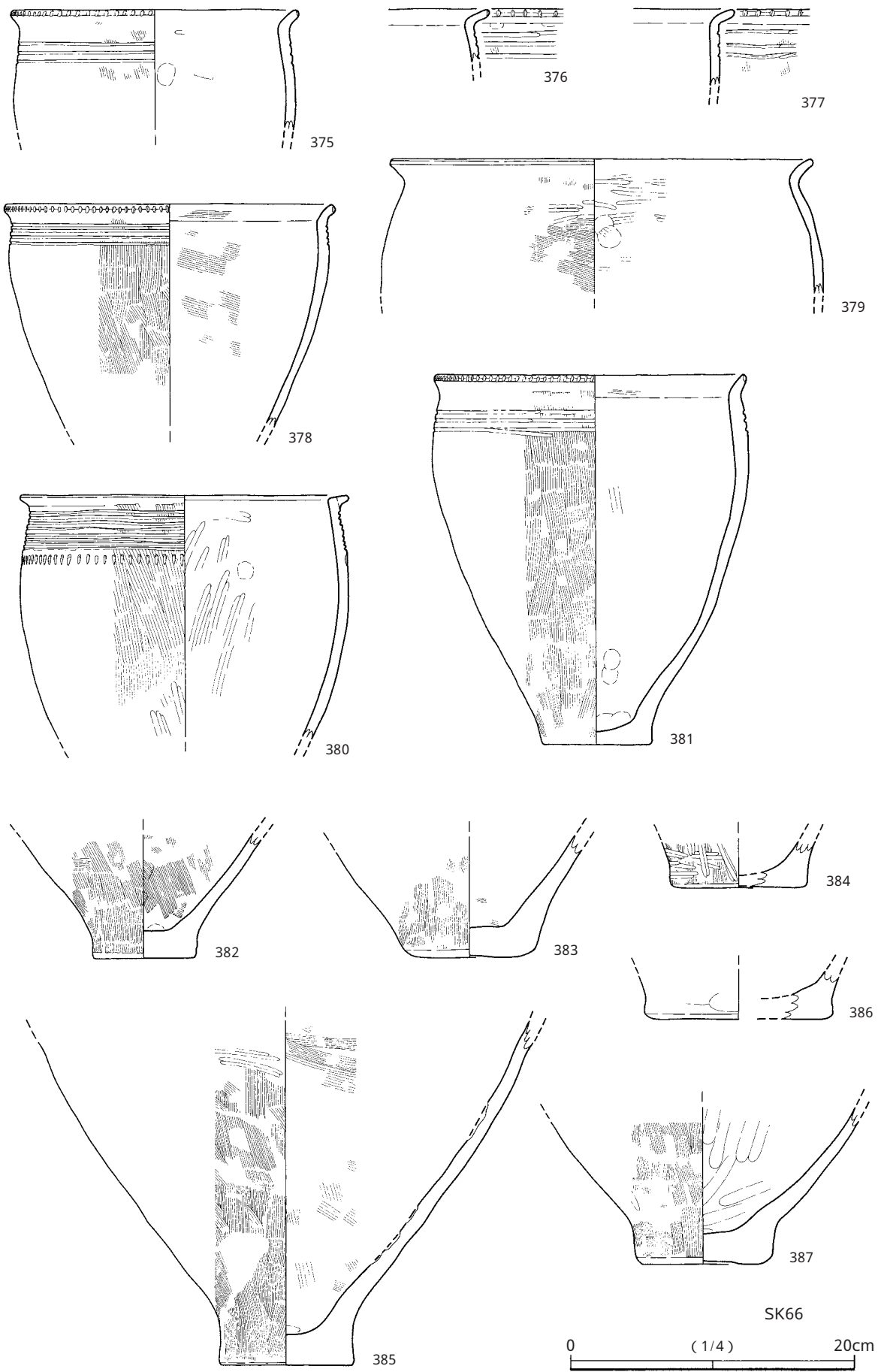


图53 出土遺物実測図③④

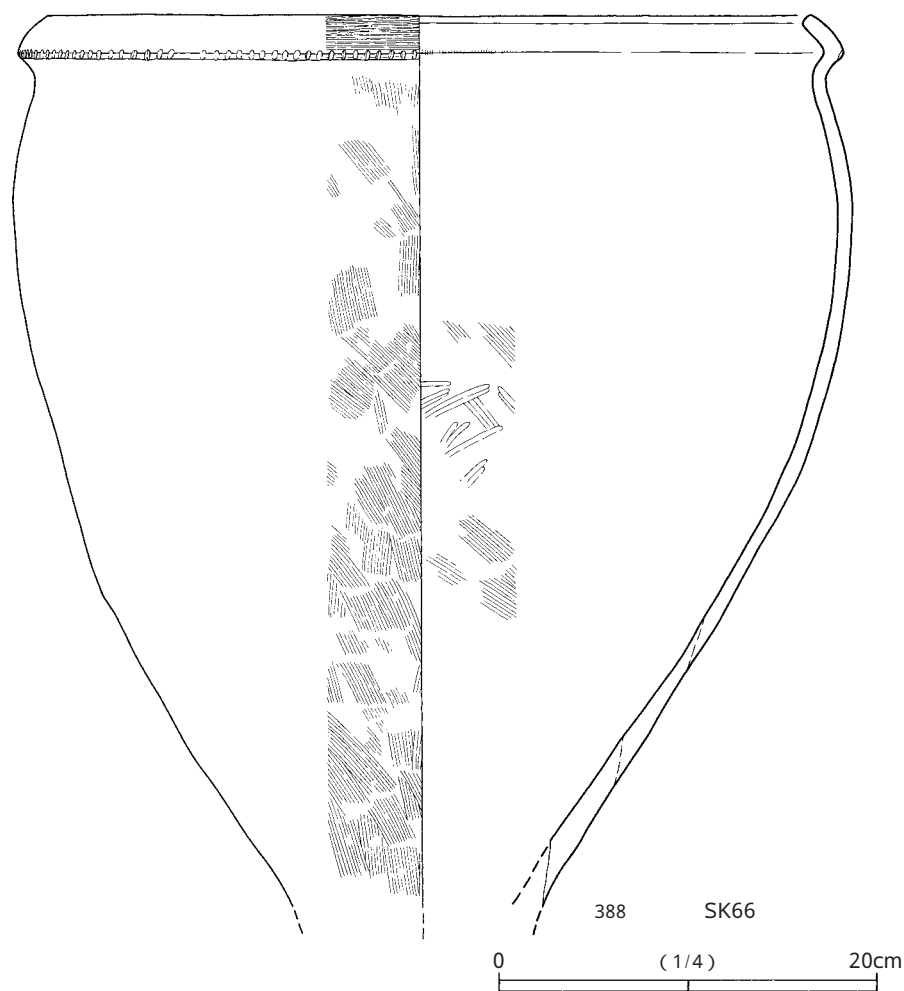


図54 出土遺物実測図③⑤

内折口縁の甕は、黒井・川棚地域や、田部盆地地域などで比較的多く出土しているが、本遺跡でも数は少ないながらも存在している。

382～387は底部であり、いずれも甕のものであると考えている。刷毛目調整が良好に残存する例が多い。

SK79出土土器（図55：389～395）：甕の出土量が多い。389は口縁部外面無文。390は頸部に刷毛状工具による段が形成されている。391は如意形口縁ながら、外面刻目はなく、頸部に3本の沈線が施される。392は頸部に櫛描状の直線的な文様が施文されている。393は如意形口縁で、外面刻目はなく、胴部が強く張り出す。また、395は底部であるが、壺のものである可能性が高い。

SK80出土土器（図55：396～398）：いずれも壺片である。396は多条沈線が施される頸部片。398は内折口縁壺の破片である。

SK82出土土器（図55：399～402）：399～401は内接口縁壺で、いずれも頸部が長いタイプであると考えられる。400は口縁部外面に鋸歯文が施されている。402は大型甕で、頸部に4本の沈線、その下に列点文が施されている。

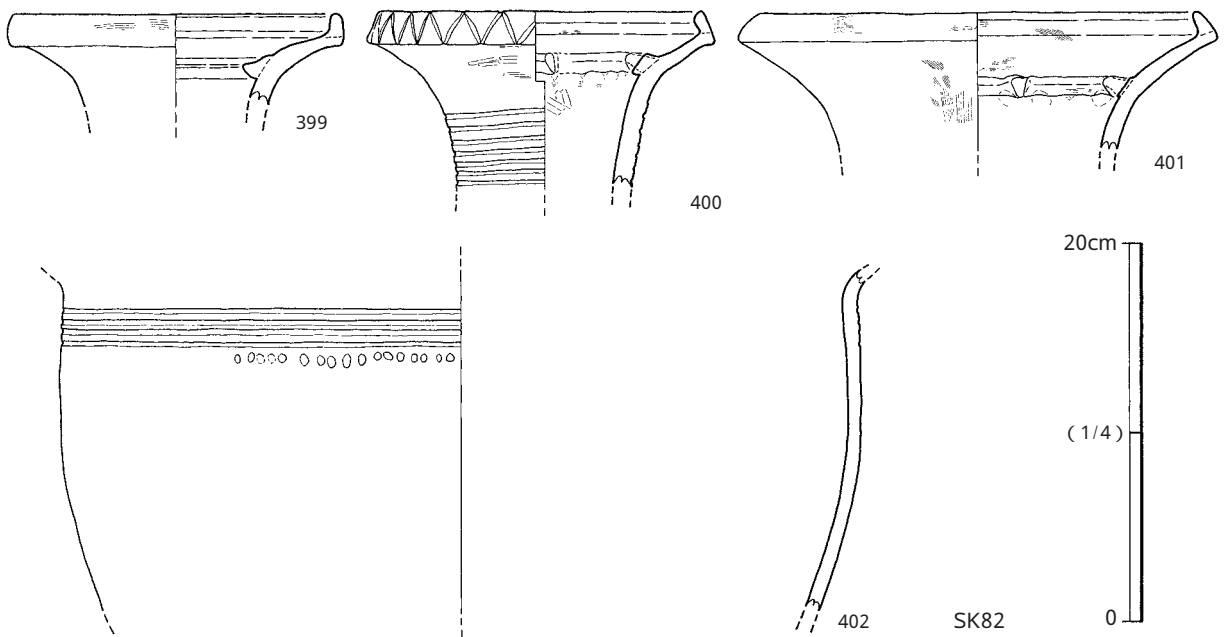
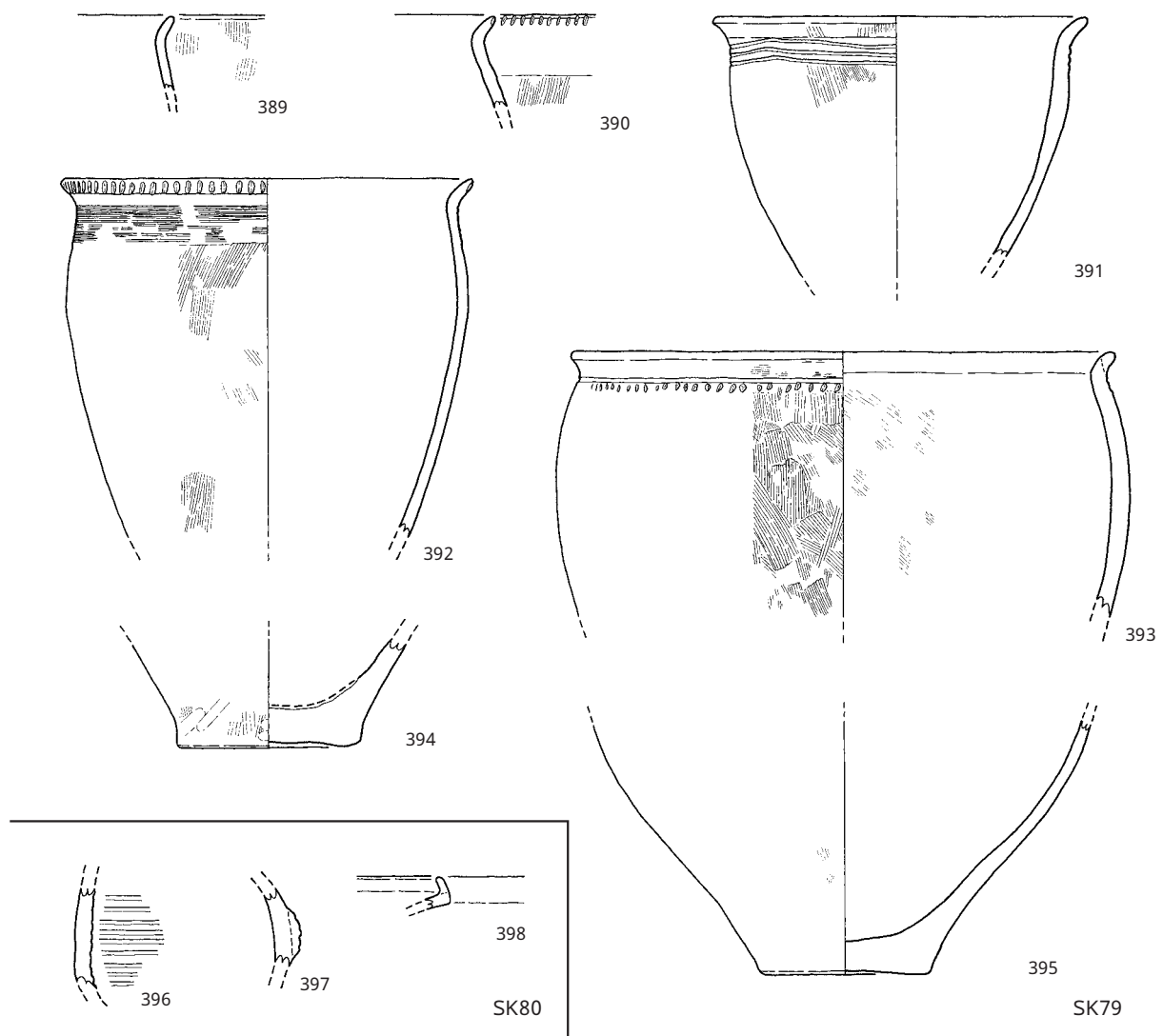


图55 出土遺物実測図③⑥

SK87出土土器 (図56~59) : 壺は内折口縁のものが主体である。このうち404は小型品で頸部も短い。407はこれを1まわり大きくしたタイプで、口縁部外面に左下がりの斜線文が配されている。403・405はいずれも口縁部に沈線が施される。406は胴部下半まで残存する個体で、頸部には沈線、胴部上位には貝による無軸羽状文が施されている。409・410は頸部が長く伸びるタイプで、410には多条沈線が施されている。408は口縁部外面に鋸歯文が施され、口縁部下に耳状突起が貼り付けられている。411・412は胴部片で、いずれも胴張りが強い。411は内外面ともに刷毛目調整が施されている。413は小型の壺であり、頸胴部の境界が曖昧で、ゆるやかに移行する。色調はにぶい褐色を呈し、焦し焼きされたものと考えられ、内外面ともにミガキ調整が施されている。414は大型壺の底~胴部である。胴部上位に木葉文状の文様、その下に無軸羽状文を施している。内外面ともに刷毛目調整痕が明瞭に残る。415~418は底部であり、いずれも壺のものと考えられる。415は内外面ともに刷毛目調整が明瞭に認められる。

419~429は甕である。如意形口縁のものが多いが、419・421は口縁端部に刻目を施さず、いずれも頸部に3条の沈線を施している。420は粘土紐を貼り付けることによって口縁部を作出しており、外面には接合痕と指押さえの痕跡が明瞭に残る。口縁部製作のため、かなり広い範囲に粘土紐が貼り付けられているが、こうした例は比較的多く認められる。422は典型的な如意形口縁の甕で、口縁部下端に刻目が施されている。外面には縦方向の刷毛目調整、内面にはミガキの痕跡が明瞭に残る。423~427は甕底部で、極端に器壁が厚いものや、上げ底のものは認められない。

428・429は大型の甕である。428は内折口縁の甕で、口径34.3cm、器高40.6cmを測る。口縁部外面には貝による鋸歯文が、頸部には5条沈線と列点文が施されている。外面には縦方向の刷毛目、内面にはミガキが認められる。この土器には一部丹塗りの痕跡が残っている。先述したようにこうした内折口縁の甕は、県西部に多く山口盆地や美祢盆地では出土例が少ない。429は口径38.0cm、器高47.0cmを測る。口縁部は如意形を呈し、下端部に刻目が施されている。また、頸部には突帯が貼付され、同じく刻目が施されている。口縁部と突帯の間には板状工具による直線文が配される。こうしたタイプの甕は、本遺跡では他に出土していないが、綾羅木郷遺跡でもこれと類似する例があり、北部九州系統の土器による影響も考えられる。

SK93出土土器 (図60) : 壺は素口縁のもの(430)が1点存在し、その他は内折口縁である。431・432は中型品であり、いずれも口縁部内面に注口状の突帯をめぐらせる。432はほぼ完形の状態で出土した唯一の例であり、外面には刷毛目調整の痕跡が明瞭に残る。438は大型の内折口縁壺で、頸部に多状沈線を施し、頸部付け根には列点文が配されている。外面には刷毛目調整、内面にはミガキ調整が施されている。435は壺胴部であり、突帯上に4条の沈線を施している。

433は甕で、口縁部が外反する形態である。434は如意形口縁で、刻目を施さない。頸部に3条沈線を施し、その下に列点文を配する。436・437は底部であり、いずれも甕のものであると考えられる。器面調整は刷毛目調整とナデである。

SK102出土土器 (図61・62) : 壺の出土量が多い。439~442は頸部が長いタイプの内折口縁壺である。439は口縁部外面に2条沈線、頸部に多条沈線が施されている。口縁部内面の突帯は認められないが、これは剥落したものであると考えられる。440は口縁部外面に鋸歯文、下端部に刻目が施され、頸部

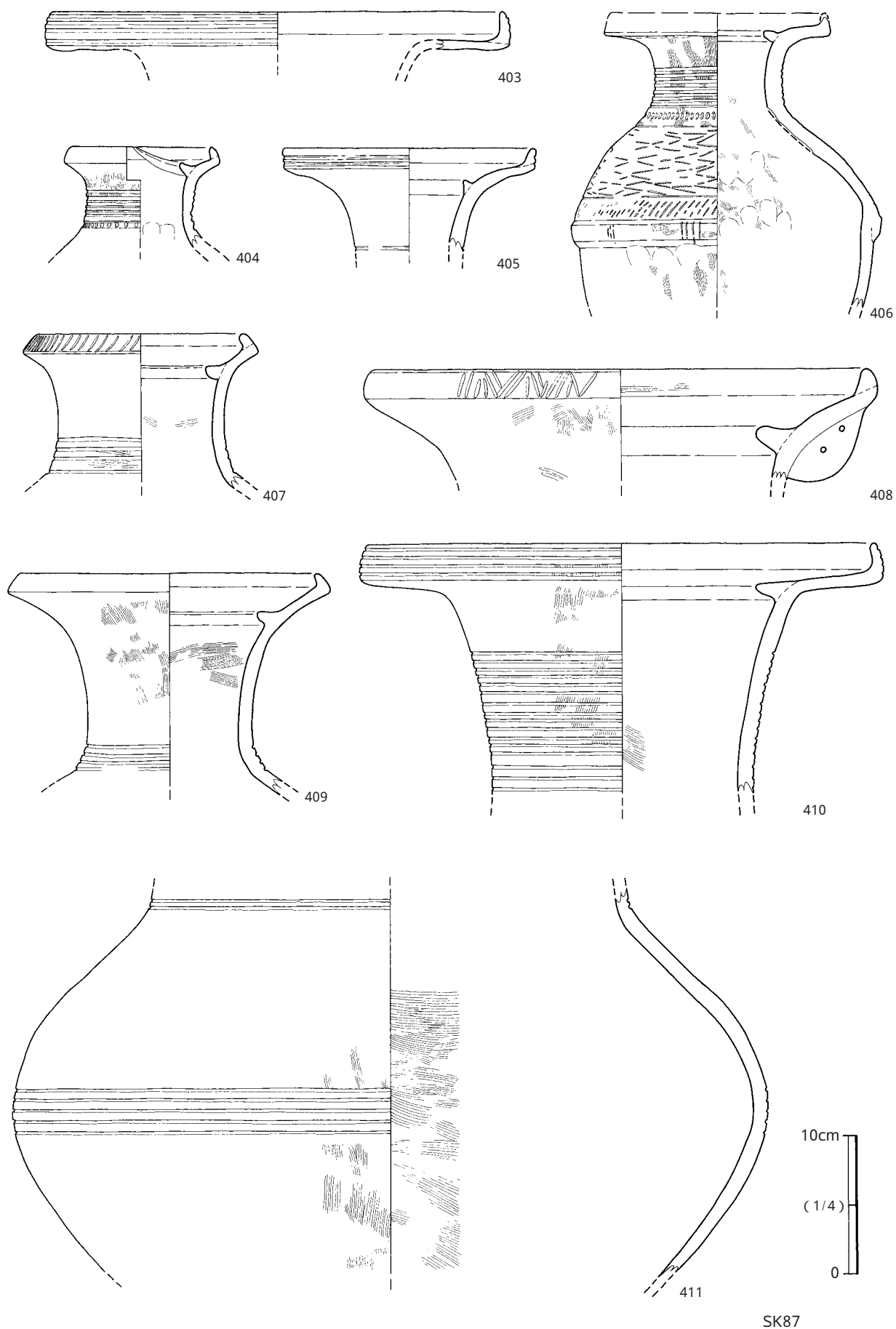
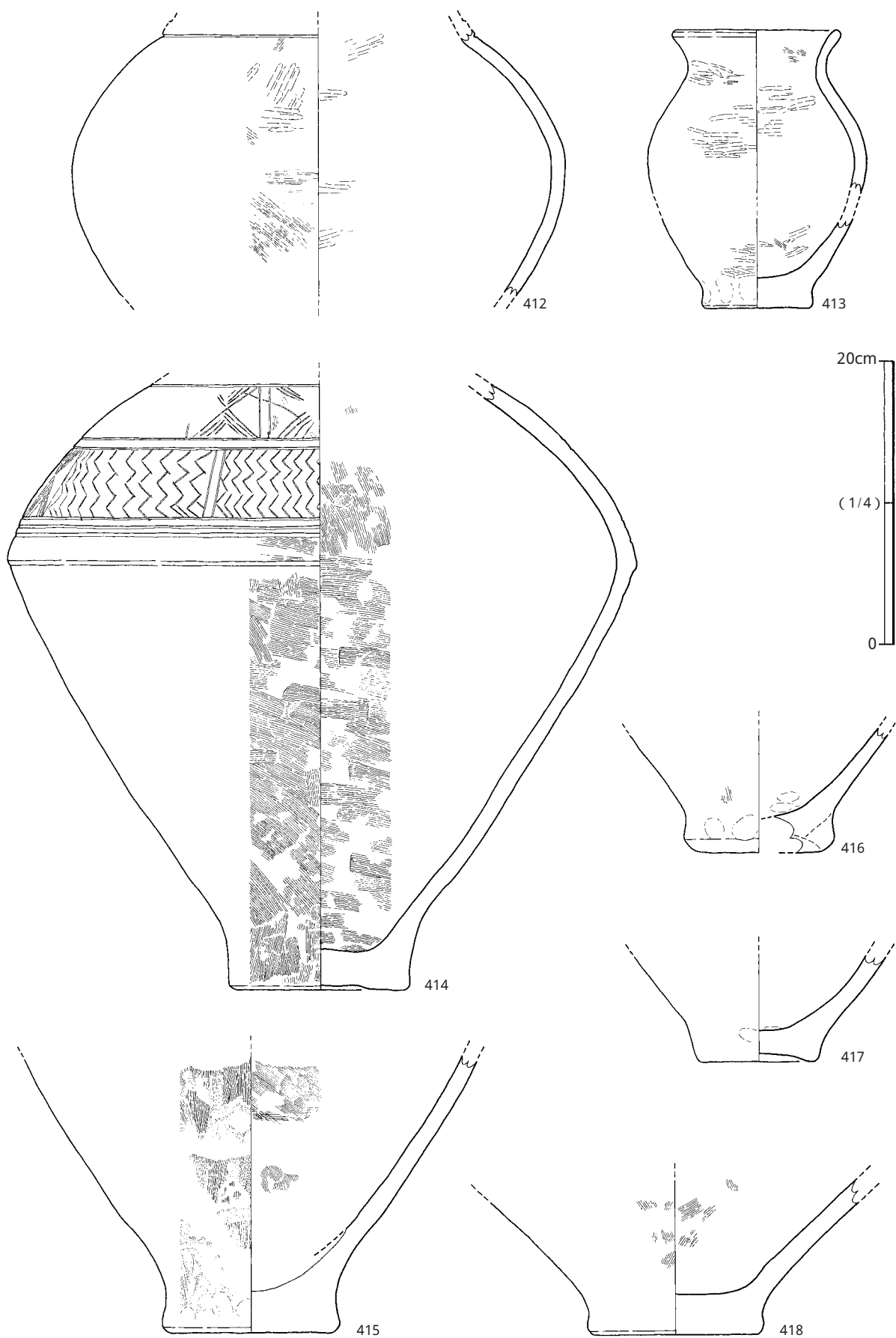


图56 出土遺物実測図③⑦



SK87

图57 出土遺物実測図③⑧

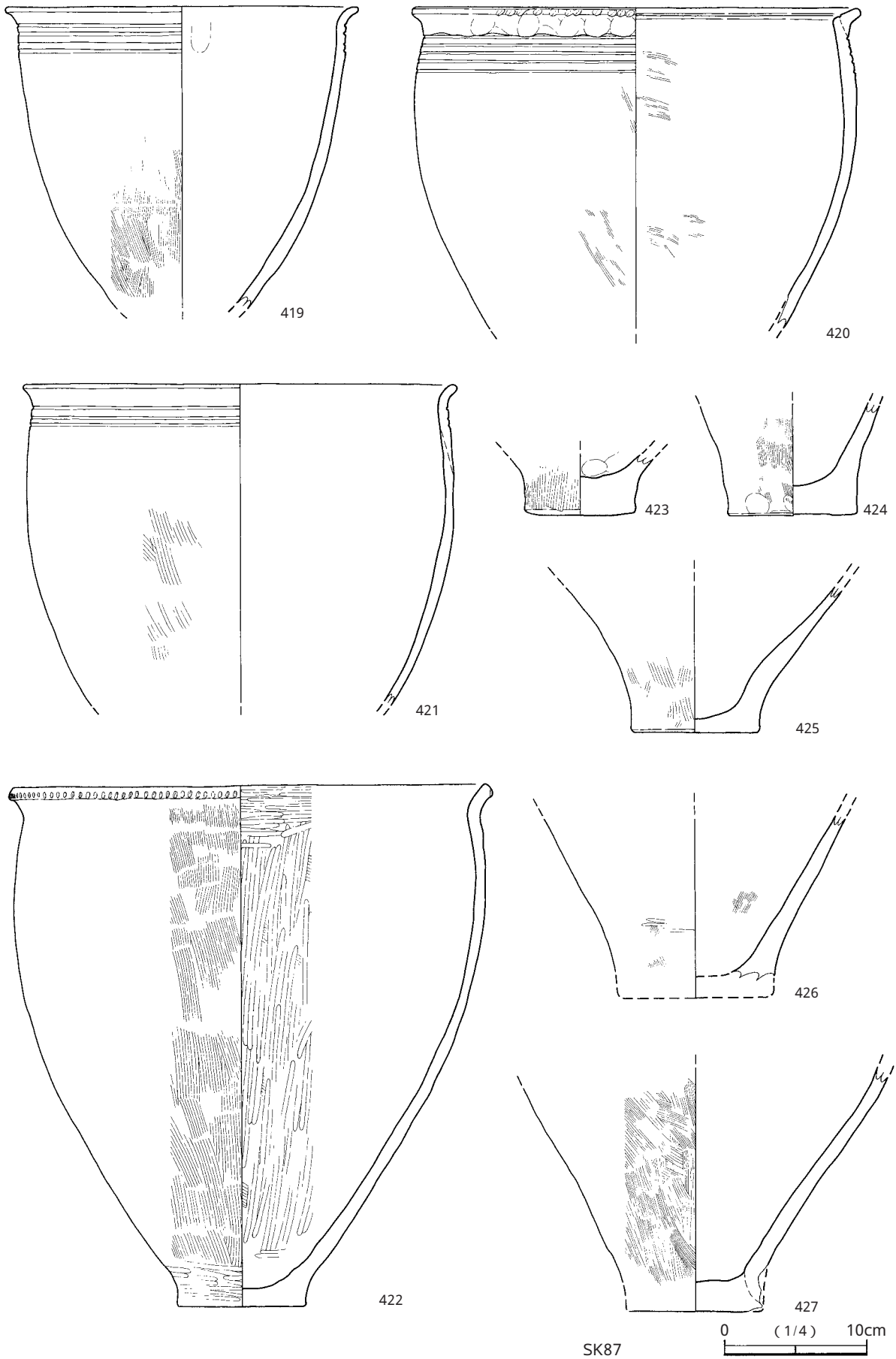
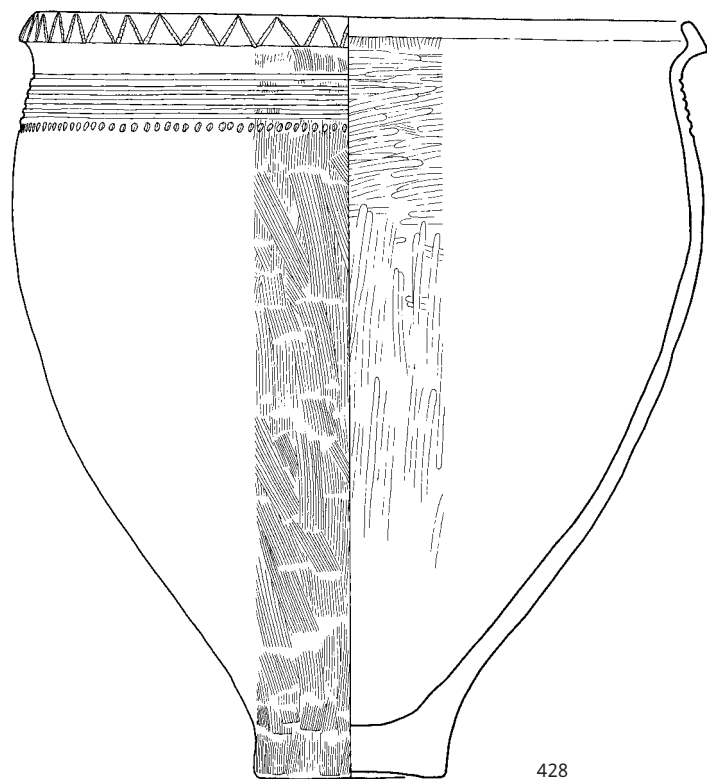
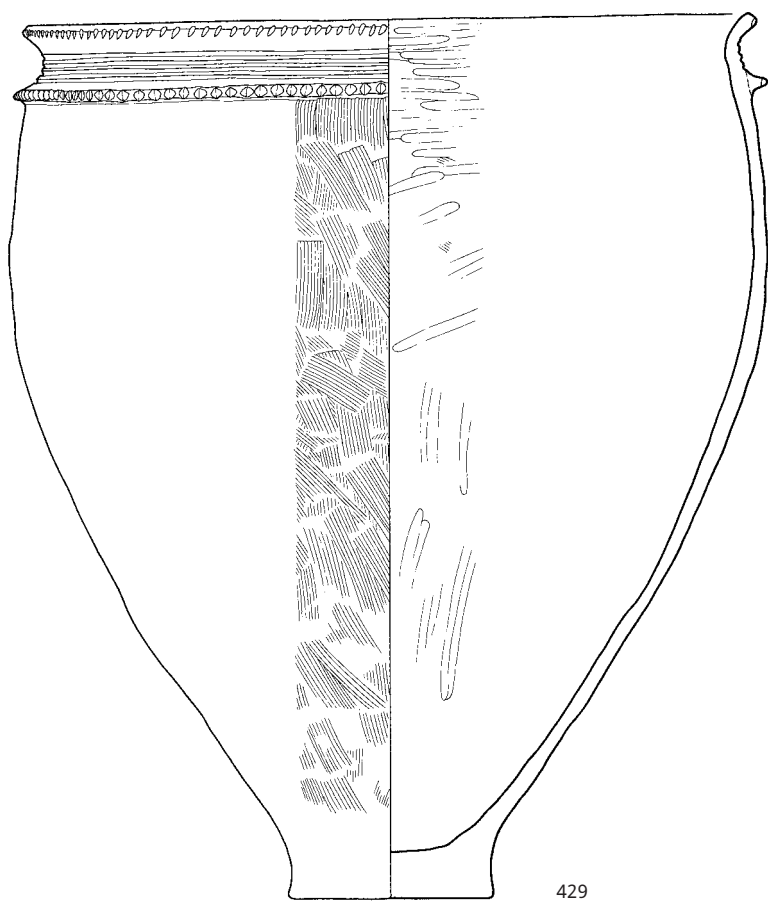


图58 出土遺物実測図③



428



429

0 (1/4) 10cm

SK87

图59 出土遺物実測図④

には多条沈線が配される。441・442はいずれも長頸内折口縁壺の頸・胴部である。443は頸・胴部の境界に1条、胴部に3条の突帯を貼り付けたもので、頸部突帯と胴部中央突帯上には刻目が施されている。こうしたタイプは、本遺跡では類例に乏しい。444は胴部片であり、無軸羽状文が施文されている。445・446は底部であり、いずれも壺のものと考えられる。447は口縁部～胴部まで残存する資料で、長頸の内折口縁壺である。頸部に6条の沈線、胴部上位に無軸羽状文と重孤文を配する。448は口縁部片であり、3孔が施された耳状突起が貼り付けられている。451は大型壺の底～胴部で、胴部突帯には貝による鋸歯文が施文されている。

甕は出土例が少ないが、449のように如意形口縁で、頸部に4条の沈線と刻目を施すものや、450のように無文で、頸部がゆるやかに張り出す形態のものが認められる。452・453は底部であり、いずれも甕のものと考えられる。454は高台状を呈するが、その他については平底である。

SK106出土土器(図63・64:465~471):壺は頸部の長い内折口縁タイプが主体である。458は口縁部、頸部ともに無文。459は口縁部無文で、頸部に7条の沈線を施す。462は頸部に多条沈線、その上に列点文を配する。口縁部外面には4条沈線を施し、これを2本1単位の縦沈線で区切る。460は頸部が長く、素口縁のものであり、類例に乏しい。461は頸・胴部が残存する資料で、頸部に多条沈線、胴部突帯上に4条沈線と4本1単位の縦沈線を施す。464も頸部を欠くが、これに類似するものと考えられる。463は、長胴形の小型壺であり、胴部中位に2条沈線を施している。頸部以上を欠損するが、口縁部は短く外反する形態を呈するものと考えられる。

465~469は甕である。465は小型のもので、口縁端部を肥厚させ、刻目を施している。粗雑なつくりであり、赤橙色を呈する。466は如意形口縁であり、頸部には1条の沈線を施している。467~469は如意形口縁を呈し、頸部に4条沈線を施す。470・471は底部であり、いずれも甕のものであると考えられる。

SK112出土土器(図64:472~475):472は大型壺で、頸部に多条沈線、胴部上位に貝による無軸羽状文を施す。口縁部外面には横方向の刷毛目が施され、文様効果を狙ったものと考えられる。473は小型品で、頸部に5条沈線+列点文、胴部上位に貝による有軸羽状文と無軸羽状文が施されている。口縁部内面の突帯が認められないが、これは剥落したものと考えられる。

474は甕の底部である。475は如意形口縁の甕で、口縁部外面には刻目を施さない。頸部には1条沈線が施され、外面には刷毛目調整痕が認められる。

小結

以上、A地区出土の弥生土器について説明を行ってきた。若干の混在資料を除いてほぼすべてが弥生中期初頭に限定され、土器型式としてきわめてまとまった内容を持っている。全体的な様相をまとめれば、壺は内折口縁のものが主体であり、特に頸部が長く伸びるタイプが多い。これらの中には前期以来の羽状文や鋸歯文などを施すものも一定量存在する。北部九州地域の城ノ越式系統の土器は少ない。ただし、内折口縁壺のうち頸部の短いものについては、プロポーシオンにおいて城ノ越式の影響を看取することができる。

甕については如意形口縁のものが圧倒的に多いが、口縁部を逆「コ」の字形に仕上げ、胎土や焼成

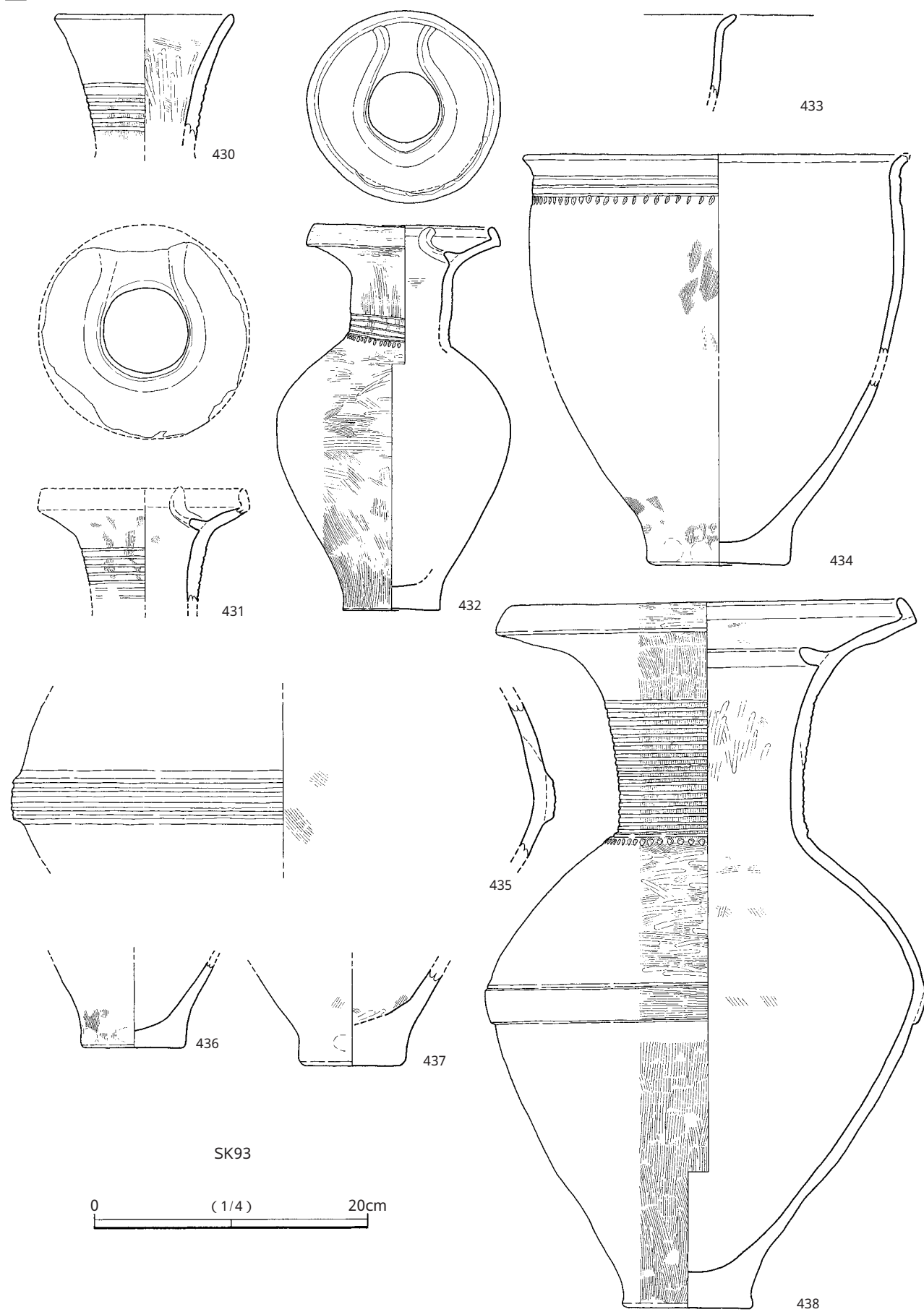


图60 出土遺物実測図④

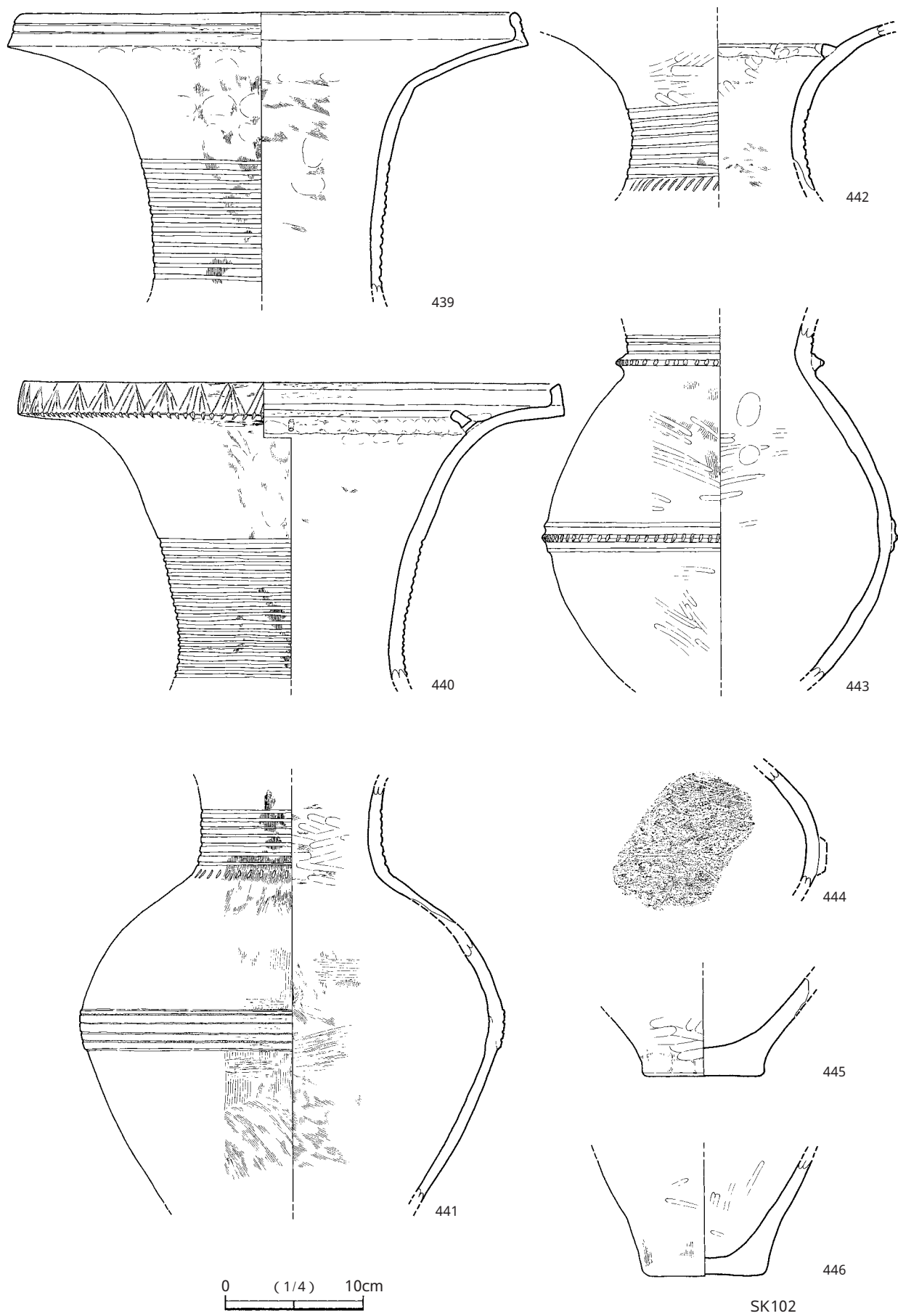


图61 出土遺物実測図②

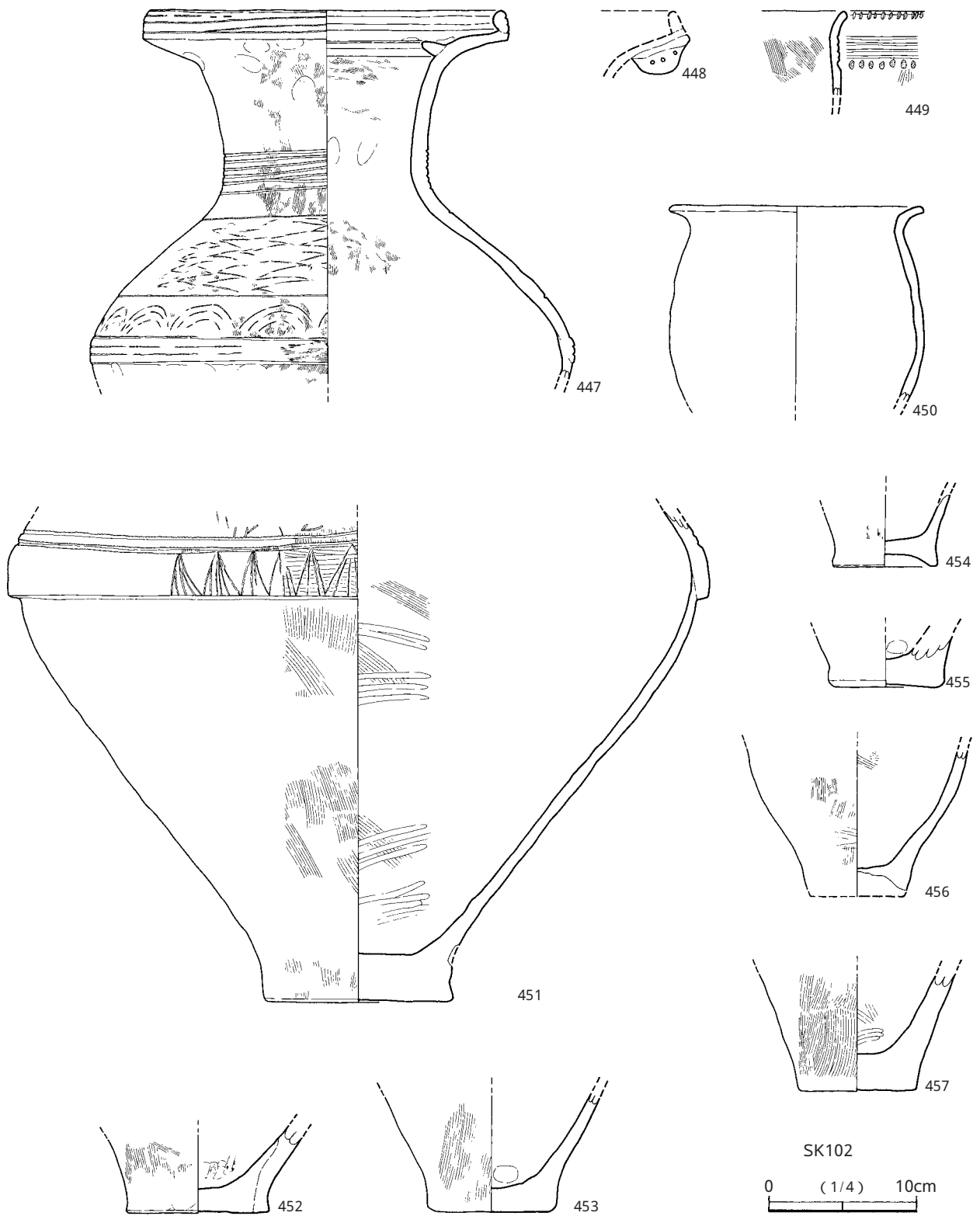


图62 出土遺物実測図④

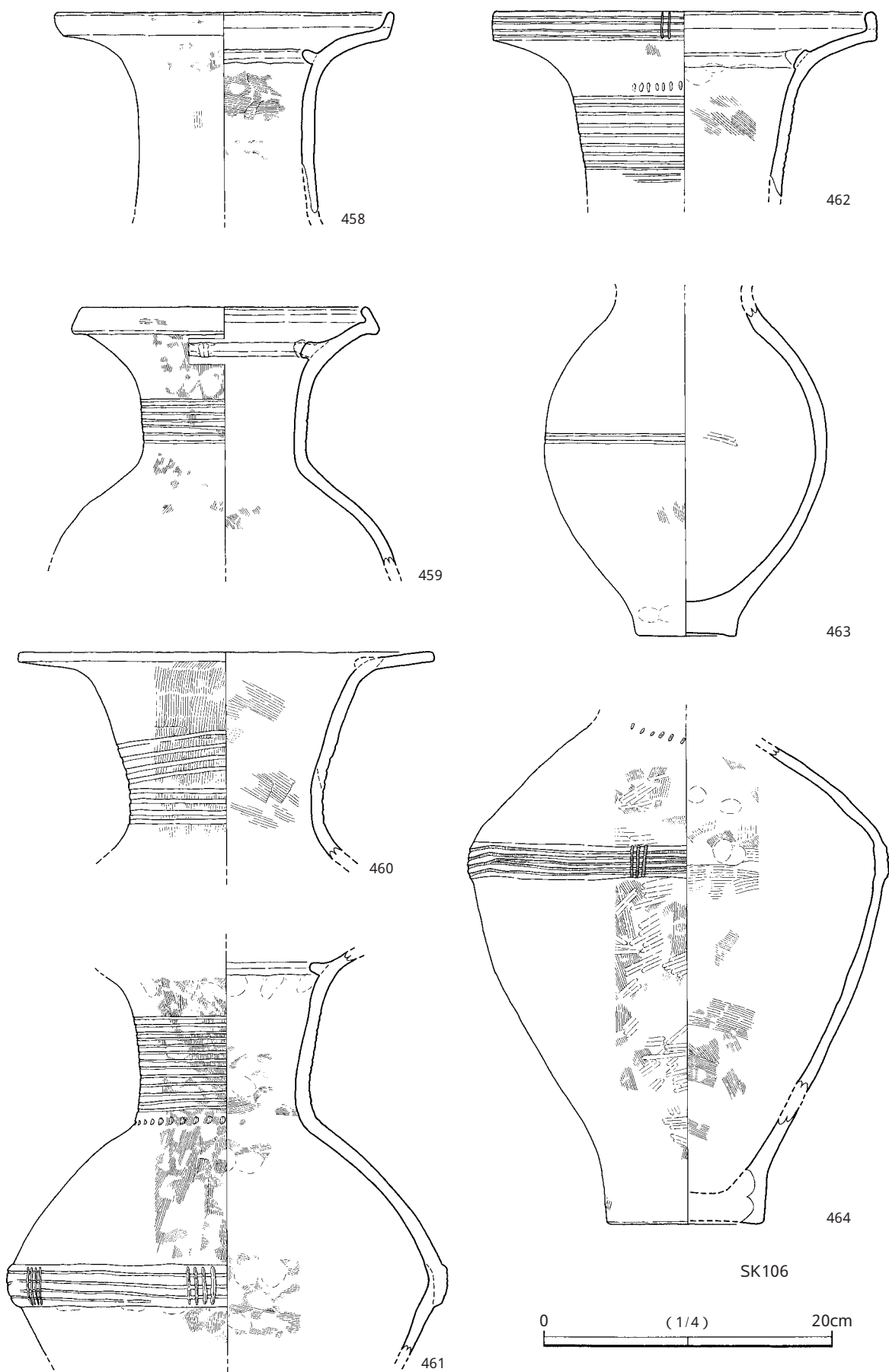


图63 出土遺物実測図④

において異なる土器が少量認められる。これらは型式学的に後出する要素を持っており、特に SK10 においてまとめて出土している。また、櫛描文を施した資料も少量出土しており、このことによつて本遺跡出土土器群の大半が弥生中期初頭であるという位置付けを与えることができる。

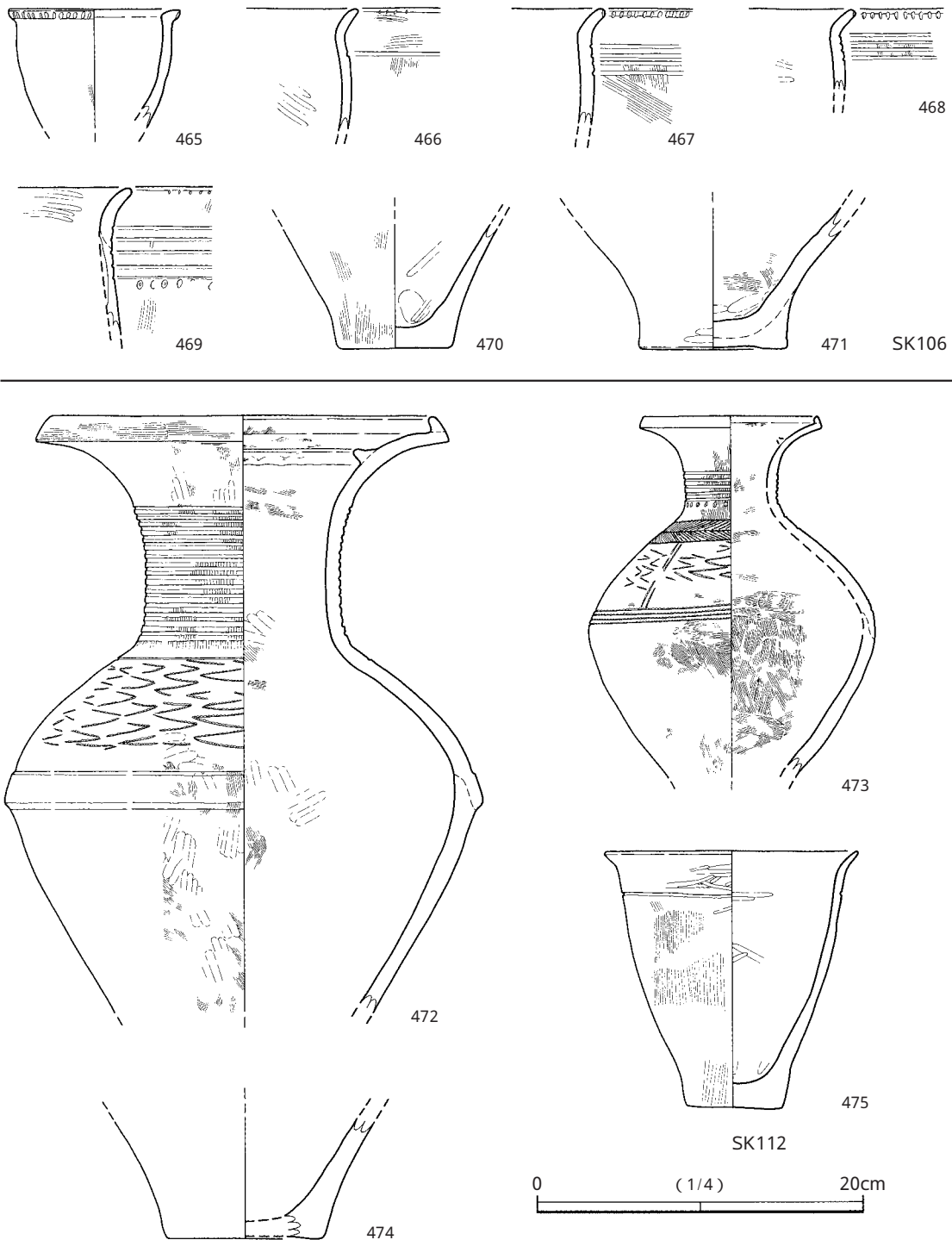


図64 出土遺物実測図④

表1 A地区出土弥生土器観察表①

番号	遺構	器種	法量 (cm)			胎土		焼成	色調		調整	
			口径	器高	底径	粗密	砂粒		内面	外面	内面	外面
1	SC1	壺	—	(2.4)	—	密	含砂粒多	やや軟質	橙色	橙色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ
2	SC1	甕	—	(2.8)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	黒褐色	黒褐色	不明	ナデ
3	SC1	甕	—	(4.4)	—	密	含砂粒少	硬質	にぶい橙色	にぶい橙色	ナデ、ミガキ	ナデ
4	SC1	甕	—	(7.0)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ハケ後ミガキ、ナデ	ハケ
5	SC1	甕	—	(4.1)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	褐色	褐色	不明	ハケ
6	SC1	壺	—	(4.5)	—	密	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	不明	不明
7	SC1	甕	—	(5.0)	(7.4)	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ミガキ	不明
8	SC1	甕	—	(17.7)	—	密	含砂粒多	やや軟質	浅黄褐色	にぶい褐色	ハケ	ハケ、ミガキ
9	SC1	蓋	—	1.8	10.5	密	含砂粒少	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ
10	SC2	壺	—	(1.9)	—	密	含砂粒少	硬質	橙色	橙色	ナデ	ナデ
11	SC2	壺	—	(7.9)	—	密	含砂粒少	硬質	にぶい黄褐色	橙色	ハケ後ミガキ、ナデ	ハケ後ミガキ、ナデ
12	SC2	甕	—	(6.0)	(8.0)	密	含砂粒少	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	不明	ハケ後ナデ
13	SC4	壺	—	(3.6)	—	密	含砂粒少	やや軟質	黄褐色	黄褐色	ハケ後ナデ	不明
14	SC4	壺	—	(4.0)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	橙色	橙色	不明	不明
15	SC4	壺	—	(5.1)	—	粗	含砂粒少	やや軟質	明黄褐色	明黄褐色	不明	不明
16	SC4	甕	—	(5.3)	—	密	含砂粒少	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	不明	ハケ後ナデ
17	SC4	甕	—	(4.7)	5.8	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	橙色	不明	不明
18	SC3	壺	(18.2)	(6.9)	—	密	含砂粒多	硬質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ、ミガキ	ハケ後ナデ、ミガキ
19	SC3	壺	—	(4.6)	—	密	含砂粒多	やや軟質	浅黄褐色	浅黄褐色	不明	不明
20	SC3	壺	—	(3.8)	—	密	含砂粒多	やや軟質	明黄褐色	橙色	不明	不明
21	SC3	壺	—	(4.0)	—	密	含砂粒多	やや軟質	淡赤褐色	浅黄褐色	不明	不明
22	SC3	壺	(26.8)	(12.1)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	不明	不明
23	SC3	甕	—	(7.3)	—	粗	含砂粒多	軟質	明黄褐色	明黄褐色	不明	不明
24	SC3	甕	(28.4)	(16.6)	—	密	含砂粒多	やや軟質	橙色	橙色	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ
25	SC3	甕	(22.0)	23.5	7.3	密	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい褐色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ
26	SC3	甕	(22.9)	19.5	8.1	密	含砂粒多	やや軟質	浅黄褐色	浅黄褐色	不明	不明
27	SC3	甕	—	(4.5)	8.1	粗	含砂粒多	やや軟質	黒色	黒色	不明	ナデ
28	SC3	甕	—	(4.8)	(4.4)	密	含砂粒多	やや軟質	浅黄褐色	浅黄褐色	不明	ハケ
29	SC3	甕	—	(4.8)	(11.4)	密	含砂粒多	やや軟質	黄褐色	明黄褐色	不明	ハケ
30	SU1	壺	(19.6)	(9.5)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	黄褐色	明黄褐色	ハケ後ナデ	ハケ
31	SU1	壺	(23.0)	(12.3)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい褐色	にぶい褐色	ナデ	ハケ、ナデ
32	SU1	壺	18.6	10.9	—	密	含砂粒多	硬質	浅黄色	浅黄色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ
33	SU1	壺	22.2	(18.2)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	浅黄色	浅黄色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ
34	SU1	壺	30.2	(20.1)	—	密	含砂粒多	やや軟質	浅黄色	浅黄色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ
35	SU1	蓋	6.8	12.0	(22.6)	粗	含砂粒多	やや軟質	褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ハケ後ナデ
36	SU1	甕	(26.5)	(14.4)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ハケ	ハケ
37	SU1	甕	—	(16.8)	7.3	粗	含砂粒多	やや軟質	黄褐色	黄褐色	不明	ハケ、ナデ
38	SU1	甕	—	(12.7)	8.2	密	含砂粒多	やや軟質	赤褐色	赤褐色	不明	不明
39	SU1	甕	—	(6.5)	8.4	密	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ナデ
40	SU2	甕	—	(5.1)	—	密	含砂粒多	やや軟質	黄褐色	にぶい黄褐色	ハケ後ナデ	ハケ
41	SU2	甕	—	(3.9)	(6.8)	密	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	褐色	ナデ	ハケ
42	SU2	甕	—	(4.3)	(4.5)	密	含砂粒多	やや軟質	浅黄色	褐色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ
43	SU5	壺	(16.4)	(4.8)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	褐色	にぶい褐色	ナデ	ハケ後ナデ、ミガキ
44	SU5	壺	—	(16.0)	(33.6)	粗	含砂粒多	やや軟質	黄褐色	褐色	ハケ後ナデ	ハケ
45	SU5	甕	30.4	(22.8)	—	密	含砂粒多	やや軟質	褐色	褐色	ハケ後ナデ	ハケ
46	SU5	甕	17.7	19.5	7.4	粗	含砂粒多	やや軟質	褐色	にぶい黄褐色	ハケ後ナデ	ハケ、ナデ
47	SU5	甕	—	(2.8)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	明黄褐色	明黄褐色	不明	不明
48	SU5	甕	—	(2.9)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	明黄褐色	にぶい黄褐色	不明	ハケ後ナデ
49	SU5	甕	—	(6.0)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	明黄褐色	明黄褐色	不明	不明
50	SU5	甕	(29.2)	(20.0)	—	密	含砂粒多	やや軟質	にぶい褐色	褐色	ハケ後ナデ	ハケ
51	SU7	甕	—	(3.5)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	褐色	浅黄褐色	ハケ後ナデ	ハケ
52	SU7	甕	—	(7.8)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	不明	不明
53	SU7	壺	—	(5.8)	—	密	含砂粒多	やや軟質	褐色	褐色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ
54	SU7	甕	—	(5.3)	(12.4)	密	含砂粒多	やや軟質	褐色	明黄褐色	ナデ	ハケ後ナデ
55	SU7	甕	—	(5.1)	(6.6)	密	含砂粒多	やや軟質	黄褐色	浅黄褐色	ナデ	ハケ後ナデ
56	SU8	壺	(12.2)	(6.8)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	明黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ナデ
57	SU8	壺	(20.8)	(9.8)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい褐色	ハケ、ナデ	ハケ後ナデ
58	SU8	壺	17.1	(11.7)	—	密	含砂粒多	やや軟質	淡黄色	明黄褐色	ナデ、ミガキ	ハケ後ナデ
59	SU8	壺	—	(11.4)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ハケ後ナデ
60	SU8	壺	(21.6)	(14.4)	—	密	含砂粒多	硬質	明黄褐色	明黄褐色	ナデ	ハケ後ナデ

※ () は復元・残存値

表2 A地区出土弥生土器観察表②

番号	遺構	器種	法量 (cm)			胎土		焼成	色調		調整	
			口径	器高	底径	粗密	砂粒		内面	外面	内面	外面
61	SU8	壺	19.7	(9.3)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	灰白色	灰白色	ハケ	ハケ
62	SU8	壺	22.2	(12.8)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	黄褐色	黄褐色	ハケ	ハケ
63	SU8	壺	14.8	(9.5)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	明黄褐色	明黄褐色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ
64	SU8	壺	(18.8)	(11.9)	—	密	含砂粒少	やや軟質	浅黄褐色	浅黄褐色	ハケ、ナデ	ハケ後ナデ
65	SU8	壺	—	(8.0)	—	密	含砂粒少	やや軟質	にぶい褐色	にぶい褐色	ハケ後ナデ	ナデ
66	SU8	壺	—	(21.0)	—	密	含砂粒多	やや軟質	淡黄色	淡黄色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ
67	SU8	壺	—	(20.6)	9.4	密	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	褐色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ
68	SU8	壺	—	(12.6)	—	粗	含砂粒多	軟質	明黄褐色	明黄褐色	ナデ	ハケ後ナデ
69	SU8	壺	(21.5)	(20.0)	—	密	含砂粒多	やや軟質	褐色	褐色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ
70	SU8	壺	17.6	34.3	7.6	粗	含砂粒多	硬質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ハケ後ナデ、ミガキ
71	SU8	壺	—	(24.4)	—	密	含砂粒多	硬質	明黄褐色	明黄褐色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ、ミガキ
72	SU8	壺	—	(41.4)	9.9	密	含砂粒少	硬質	にぶい褐色	にぶい褐色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ
73	SU8	壺	—	(12.6)	10.6	粗	含砂粒多	やや軟質	浅黄褐色	黄褐色	ナデ	ハケ後ナデ
74	SU8	壺	—	(14.9)	(8.0)	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい褐色	にぶい黄褐色	ナデ、ミガキ	ハケ後ミガキ、ナデ
75	SU8	壺	(34.7)	(5.5)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい褐色	ナデ	ハケ
76	SU8	壺	(34.6)	(30.8)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ
77	SU8	壺	—	(37.0)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	浅黄褐色	浅黄褐色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ
78	SU8	壺	17.0	(22.0)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	黄褐色	黄褐色	ハケ	ハケ
79	SU8	壺	—	(28.5)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ
80	SU8	甕	(33.0)	(11.3)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	浅黄色	にぶい黄褐色	不明	ハケ、ナデ
81	SU8	甕	—	(8.4)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	褐色	褐色	ミガキ	ハケ、ナデ
82	SU8	甕	—	(13.7)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	浅黄褐色	浅黄褐色	ナデ	ハケ後ナデ
83	SU8	甕	—	(3.9)	(6.4)	粗	含砂粒多	やや軟質	浅黄色	明黄褐色	不明	不明
84	SU8	甕	—	(4.6)	(10.4)	密	含砂粒多	やや軟質	浅黄褐色	にぶい黄褐色	不明	ハケ後ナデ
85	SU8	甕	—	(6.0)	7.4	粗	含砂粒多	やや軟質	浅黄色	にぶい褐色	不明	不明
86	SU8	甕	—	(6.6)	(9.4)	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい褐色	にぶい黄褐色	ミガキ	ハケ
87	SU8	甕	(28.0)	26.7	(8.7)	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ハケ後ミガキ、ナデ	ハケ後ミガキ、ナデ
88	SU8	甕	—	(13.3)	10.7	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	不明	ハケ後ナデ
89	SU8	甕	—	(16.6)	10.8	密	含砂粒多	やや軟質	にぶい褐色	褐色	ナデ	ハケ後ナデ
90	SU8	甕	—	(19.1)	11.2	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	明黄褐色	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ
91	SU12	壺	(13.6)	(8.9)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	褐色	明黄褐色	不明	不明
92	SU12	甕	—	(4.1)	—	粗	含砂粒多	軟質	褐色	褐色	ナデ	ハケ
93	SU12	壺	—	(37.5)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	褐色	褐色	ハケ、ミガキ	ハケ、ミガキ
94	SU13	壺	—	(16.6)	6.0	粗	含砂粒多	軟質	褐色	褐色	ナデ	ハケ後ナデ
95	SU13	壺	(29.4)	(5.5)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	明黄褐色	黄褐色	不明	ハケ後ナデ
96	SU13	壺	—	(17.0)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	黄褐色	明黄褐色	ハケ後ナデ	ハケ
97	SU13	壺	—	(12.2)	7.0	粗	含砂粒多	やや軟質	灰色	にぶい黄褐色	ナデ	不明
98	SU13	壺	—	(13.7)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	明黄褐色	明黄褐色	不明	不明
99	SU15	壺	—	(22.2)	(8.8)	密	含砂粒多	硬質	にぶい黄褐色	明黄褐色	ハケ後ミガキ	ハケ
100	SU15	甕	—	(4.6)	(9.8)	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	褐色	ナデ	ハケ、ミガキ
101	SU16	壺	(15.9)	(28.2)	(6.8)	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ
102	SU16	壺	(15.0)	(3.7)	—	粗	含砂粒多	軟質	黄褐色	黄褐色	ナデ	ナデ
103	SU16	壺	—	(4.7)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	褐色	不明	ハケ後ナデ
104	SU16	甕	—	(6.3)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	灰黄褐色	ナデ	ナデ
105	SU16	甕	(21.5)	(7.1)	—	粗	含砂粒多	軟質	黄褐色	にぶい黄褐色	不明	ハケ
106	SU16	甕	20.2	(20.8)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	褐色	にぶい褐色	ハケ後ミガキ、ナデ	ハケ後ナデ
107	SU16	壺	(15.9)	(28.2)	(6.8)	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ
108	SU16	甕	—	(4.9)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	褐色	明黄褐色	不明	ハケ後ナデ
109	SU16	甕	—	(6.5)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	褐色	褐色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ
110	SU16	甕	12.8	14.1	(6.0)	密	含砂粒多	やや軟質	にぶい褐色	にぶい褐色	ミガキ	ハケ、ミガキ
111	SU16	甕	—	(5.3)	4.9	粗	含砂粒多	やや軟質	明黄褐色	にぶい褐色	不明	不明
112	SU16	甕	—	(8.3)	(7.0)	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄色	にぶい褐色	不明	ハケ
113	SU17	壺	—	(3.4)	—	密	含砂粒少	硬質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ナデ
114	SU17	壺	—	(3.6)	—	密	含砂粒多	硬質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	不明	ナデ
115	SU17	壺	—	(3.2)	—	密	含砂粒多	硬質	明黄褐色	明黄褐色	不明	不明
116	SU17	壺	(24.8)	(5.4)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	明黄褐色	にぶい黄褐色	不明	ハケ後ナデ
117	SU17	壺	—	(4.8)	—	密	含砂粒多	やや軟質	褐灰色	にぶい黄褐色	ハケ、ミガキ	ミガキ
118	SU17	鉢	(18.6)	(7.0)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	明黄褐色	明黄褐色	不明	不明
119	SU17	甕	—	(5.1)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	明黄褐色	黄褐色	不明	ハケ
120	SU17	甕	—	(4.6)	6.2	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	褐色	不明	不明

※ () は復元・残存値

表3 A地区出土弥生土器観察表③

番号	遺構	器種	法量 (cm)			胎土		焼成	色調		調整	
			口径	器高	底径	粗密	砂粒		内面	外面	内面	外面
121	SU20	甕	(23.8)	(14.4)	—	密	含砂粒多	やや軟質	にぶい橙色	にぶい橙色	不明	不明
122	SU20	甕	(23.8)	(7.6)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	不明	ハケ後ナデ
123	SU20	甕	29.4	(19.0)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	明黄褐色	にぶい橙色	ハケ後ミガキ、ナデ	ハケ後ナデ
124	SU20	不明	—	(5.5)	—	密	含砂粒多	やや軟質	浅黄褐色	にぶい黄褐色	不明	不明
125	SU20	壺	—	(5.5)	(6.8)	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ナデ、ミガキ
126	SU20	甕	—	(9.8)	6.9	粗	含砂粒少	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	不明	ハケ後ナデ
127	SU20	甕	—	(5.9)	(7.4)	粗	含砂粒多	軟質	橙色	橙色	ナデ	ナデ
128	SU20	甕	—	(4.0)	(7.4)	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	不明	ハケ
129	SU22	壺	(21.8)	(10.9)	—	密	含砂粒多	硬質	橙色	にぶい橙色	不明	不明
130	SU22	壺	—	(10.5)	—	粗	含砂粒少	やや軟質	浅黄色	明赤褐色	不明	不明
131	SU22	壺	—	(2.9)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ハケ後ナデ	不明
132	SU22	壺	—	(5.1)	—	密	含砂粒多	やや軟質	橙色	黄褐色	不明	不明
133	SU22	壺	(29.5)	(3.2)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	黄褐色	橙色	不明	ハケ
134	SU22	壺	—	(4.2)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	橙色	不明	不明
135	SU22	甕	—	(2.8)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ミガキ後ナデ	ナデ
136	SU22	甕	—	(6.7)	—	粗	含砂粒少	やや軟質	橙色	にぶい黄褐色	ハケ後ナデ	ハケ
137	SU22	甕	(19.0)	(7.5)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ハケ後ミガキ、ナデ	ハケ後ナデ
138	SU22	甕	—	(7.6)	—	密	含砂粒多	やや軟質	橙色	橙色	ナデ、ミガキ	不明
139	SU22	甕	(18.2)	(25.0)	5.6	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	橙色	ナデ	ミガキ
140	SU22	甕	—	(4.6)	8.1	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい橙色	にぶい橙色	不明	ハケ
141	SU22	甕	—	(3.6)	7.4	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	灰黄褐色	ナデ	ミガキ
142	SU22	甕	—	(5.2)	6.1	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	不明	不明
143	SU22	壺	—	(11.4)	(7.2)	密	含砂粒多	やや軟質	浅黄褐色	橙色	不明	不明
144	SU22	壺	—	(9.9)	(10.7)	粗	含砂粒多	やや軟質	浅黄褐色	明黄褐色	不明	不明
145	SU24	壺	(14.4)	(7.1)	—	密	含砂粒多	やや軟質	黄褐色	明黄褐色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ
146	SU24	壺	—	(3.8)	—	密	含砂粒少	やや軟質	黄褐色	黄褐色	ナデ	ナデ
147	SU24	壺	—	(3.7)	—	粗	含砂粒多	硬質	灰黄褐色	にぶい黄褐色	ハケ後ナデ	ナデ
148	SU24	壺	—	(9.8)	—	密	含砂粒多	硬質	黒色	橙色	ハケ	ハケ
149	SU24	壺	—	(8.8)	7.4	粗	含砂粒多	硬質	浅黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ、ミガキ	ハケ後ミガキ
150	SU25	壺	—	(2.0)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	浅黄色	ハケ後ミガキ後ナデ	ナデ
151	SU25	壺	—	(3.9)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ハケ後ナデ	ナデ
152	SU25	壺	(13.6)	(6.0)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ
153	SU25	壺	(18.4)	(8.0)	—	密	含砂粒少	やや軟質	明黄褐色	明黄褐色	ハケ後ナデ、ミガキ	ハケ後ナデ、ミガキ
154	SU25	壺	(17.2)	(18.3)	—	密	含砂粒多	硬質	明黄褐色	明黄褐色	ナデ、ミガキ	ハケ後ミガキ
155	SU25	壺	(17.3)	31.0	6.8	密	含砂粒多	やや軟質	橙色	明赤褐色	ハケ後ミガキ	ハケ後ナデ、ミガキ
156	SU25	甕	—	(7.8)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい橙色	にぶい黄褐色	ハケ後ミガキ、ナデ	ハケ後ナデ
157	SU25	甕	—	(6.2)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	明黄褐色	にぶい黄褐色	ハケ後ミガキ後ナデ	ハケ後ナデ
158	SU25	甕	—	(7.0)	—	密	含砂粒多	やや軟質	浅黄褐色	にぶい橙色	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ
159	SU25	甕	25.2	(16.7)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい橙色	にぶい橙色	ハケ後ナデ、ミガキ	ハケ後ナデ
160	SU25	甕	(24.6)	(7.3)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	橙色	橙色	ミガキ	ハケ後ミガキ、ナデ
161	SU25	壺	—	(5.3)	13.0	密	含砂粒多	硬質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ハケ後ミガキ
162	SU25	壺	—	(5.9)	11.6	密	含砂粒少	硬質	明黄褐色	明黄褐色	不明	ハケ後ナデ
163	SU25	甕	(22.6)	25.5	6.2	密	含砂粒多	硬質	にぶい黄褐色	明黄褐色	ハケ後ナデ	ハケ
164	SU25	甕	—	(5.9)	7.2	密	含砂粒多	硬質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ハケ
165	SU25	甕	—	(7.6)	7.0	粗	含砂粒多	硬質	にぶい黄褐色	にぶい橙色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ
166	SU25	壺	(43.0)	(16.2)	—	密	含砂粒多	やや軟質	橙色	橙色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ
167	SU25	壺	—	(9.0)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	橙色	橙色	ハケ	ナデ、ミガキ
168	SU28	壺	—	(5.1)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	明黄褐色	明黄褐色	ナデ	ナデ
169	SU28	壺	—	4.6	—	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄色	灰黄色	不明	不明
170	SU28	壺	16.7	(13.3)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	明黄褐色	明黄褐色	ナデ	ハケ後ミガキ
171	SU28	壺	(31.6)	(17.1)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	明黄褐色	にぶい黄褐色	ハケ、ナデ	ハケ
172	SU28	壺	(13.6)	33.3	(7.8)	粗	含砂粒少	やや軟質	明黄褐色	黄褐色	ハケ後ミガキ、ナデ	ハケ後ミガキ、ナデ
173	SU28	甕	(12.0)	(8.8)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	明黄褐色	にぶい黄褐色	不明	ハケ後ナデ
174	SU28	甕	—	(6.8)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	浅黄色	浅黄色	ナデ、ミガキ	ハケ後ナデ
175	SU28	甕	—	(7.1)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	黄褐色	黄褐色	ナデ	ハケ後ナデ
176	SU28	甕	(17.8)	(6.5)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	橙色	橙色	ミガキ	不明
177	SU28	甕	—	(10.0)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	明黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ハケ後ミガキ後ナデ
178	SU28	甕	—	(4.3)	7.5	粗	含砂粒多	やや軟質	浅黄褐色	にぶい黄褐色	不明	ハケ後ナデ
179	SU28	甕	—	(5.6)	(7.8)	密	含砂粒多	やや軟質	浅黄褐色	橙色	ハケ、ナデ	ハケ
180	SU28	甕	—	(6.9)	(8.5)	密	含砂粒多	硬質	にぶい赤褐色	赤褐色	ナデ	ハケ

※ () は復元・残存値

表4 A地区出土弥生土器観察表④

番号	遺構	器種	法量 (cm)			胎土		焼成	色調		調整	
			口径	器高	底径	粗密	砂粒		内面	外面	内面	外面
181	SU28	甕	—	(17.0)	8.7	粗	含砂粒多	やや軟質	明黄褐色	明黄褐色	不明	ハケ後ナデ
182	SU28	壺	—	(10.2)	10.0	粗	含砂粒多	やや軟質	浅黄褐色	にぶい橙色	不明	ハケ
183	SU29	壺	—	(2.0)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	明黄褐色	明黄褐色	不明	ハケ、ナデ
184	SU29	壺	—	(2.3)	—	密	含砂粒少	やや軟質	橙色	橙色	不明	ハケ
185	SU29	壺	—	(2.2)	—	密	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	不明	不明
186	SU29	壺	—	(14.5)	—	密	含砂粒少	硬質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ
187	SU29	壺	—	(36.9)	10.8	密	含砂粒少	硬質	明褐色	にぶい橙色	ハケ	ハケ後ナデ、ミガキ
188	SU29	壺	—	(15.4)	—	密	含砂粒多	やや軟質	浅黄褐色	浅黄褐色	ハケ、ミガキ	ハケ
189	SU29	蓋	(5.9)	(15.4)	(24.2)	密	含砂粒少	硬質	橙色	橙色	ハケ後ミガキ	ハケ後ミガキ
190	SU29	甕	17.4	23.4	6.6	密	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ハケ後ミガキ	ハケ
191	SU29	甕	(20.0)	21.7	(6.2)	密	含砂粒多	硬質	橙色	にぶい黄褐色	ナデ、ミガキ	ハケ
192	SU29	甕	(16.6)	(17.8)	—	密	含砂粒少	硬質	にぶい橙色	にぶい黄褐色	ハケ後ミガキ	ハケ後ミガキ
193	SU29	甕	(21.8)	(13.4)	—	密	含砂粒少	硬質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ、ミガキ	ハケ
194	SU29	甕	(27.2)	(10.0)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	灰黄褐色	ナデ、ミガキ	ハケ後ナデ
195	SU29	甕	—	(4.6)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ミガキ	ハケ
196	SU29	甕	—	(4.8)	—	密	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	橙色	ミガキ	ナデ
197	SU29	甕	22.2	(13.6)	—	密	含砂粒少	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ
198	SU29	甕	23.2	(14.0)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	不明	ハケ後ナデ
199	SU29	甕	—	(8.5)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	明黄褐色	にぶい黄褐色	ミガキ	ハケ、ナデ
200	SU29	甕	(27.6)	(14.7)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	浅黄褐色	浅黄褐色	ミガキ	ハケ
201	SU29	甕	—	(4.3)	(7.0)	密	含砂粒多	やや軟質	にぶい橙色	にぶい橙色	不明	ハケ後ナデ
202	SU29	甕	—	(8.9)	6.2	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ミガキ	ハケ
203	SU29	甕	—	(8.3)	(7.0)	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ
204	SU30	壺	—	(3.3)	—	密	含砂粒少	やや軟質	明黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ	不明
205	SU30	壺	—	(5.1)	—	密	含砂粒少	やや軟質	にぶい黄褐色	明黄褐色	ハケ	ハケ後ナデ、ミガキ
206	SU30	甕	(11.6)	(5.8)	—	密	含砂粒少	やや軟質	明黄褐色	橙色	ハケ後ナデ、ミガキ	ハケ
207	SU30	壺	—	(33.8)	9.4	密	含砂粒少	やや軟質	明黄褐色	にぶい黄褐色	ハケ後ミガキ	ハケ後ミガキ、ナデ
208	SU30	壺	—	(10.0)	7.3	粗	含砂粒多	やや軟質	明黄褐色	浅黄色	ハケ後ミガキ	ハケ
209	SU30	壺	—	(37.7)	10.8	粗	含砂粒多	やや軟質	黄褐色	明黄褐色	ハケ後ミガキ	ハケ後ミガキ
210	SU32	壺	(29.0)	(5.9)	—	密	含砂粒多	やや軟質	橙色	橙色	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ
211	SU32	壺	—	(4.9)	—	粗	含砂粒少	やや軟質	灰黄褐色	灰黄褐色	ハケ	ミガキ
212	SU32	壺	—	(10.4)	—	密	含砂粒少	やや軟質	浅黄褐色	にぶい橙色	ハケ	ハケ
213	SU32	甕	(28.0)	(10.3)	—	密	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	灰褐色	不明	ハケ、ナデ
214	SU32	甕	—	(3.7)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	橙色	不明	不明
215	SU32	甕	9.8	17.9	7.0	粗	含砂粒多	軟質	橙色	橙色	ナデ、ミガキ	ナデ
216	SU32	甕	—	(8.3)	(9.2)	粗	含砂粒多	やや軟質	橙色	にぶい橙色	不明	不明
217	SU35	甕	15.4	(11.1)	—	密	含砂粒多	やや軟質	橙色	橙色	ハケ、ミガキ、ナデ	ハケ、ミガキ、ナデ
218	SU35	甕	—	(6.0)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	橙色	橙色	ナデ	ハケ後ナデ
219	SU35	甕	—	(7.4)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	黄褐色	橙色	ナデ	ハケ後ナデ
220	SU35	甕	—	(5.7)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	橙色	橙色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ
221	SU35	甕	—	(7.1)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい橙色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ
222	SU35	甕	—	(5.6)	(7.0)	密	含砂粒多	やや軟質	黄褐色	橙色	不明	ハケ
223	SU35	甕	—	(6.0)	(7.5)	密	含砂粒多	硬質	浅黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ、ミガキ	ハケ
224	SU35	壺	—	(24.2)	7.0	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ハケ後ナデ	ハケ後ミガキ
225	SU35	甕	—	(4.7)	(7.1)	密	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	橙色	ミガキ	ハケ、ミガキ、ナデ
226	SU35	壺	19.5	(38.1)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	橙色	明赤褐色	ハケ後ミガキ、ナデ	ハケ後ミガキ、ナデ
227	SU40	壺	(26.6)	(4.2)	—	密	含砂粒多	やや軟質	にぶい橙色	浅黄褐色	ミガキ、ナデ	ハケ、ミガキ、ナデ
228	SU40	壺	(24.8)	(3.9)	—	粗	含砂粒多	硬質	橙色	橙色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ
229	SU40	壺	(19.4)	(15.4)	—	密	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい橙色	ハケ後ミガキ	ハケ後ナデ、ミガキ
230	SU40	壺	(16.5)	(7.2)	—	密	含砂粒多	やや軟質	橙色	橙色	ハケ、ミガキ、ナデ	ハケ、ミガキ、ナデ
231	SU40	壺	—	(11.8)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	橙色	ハケ	ミガキ
232	SU40	壺	—	(14.7)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	明黄褐色	ハケ後ミガキ、ナデ	ハケ
233	SU40	壺	—	(9.7)	—	粗	含砂粒少	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ハケ	ハケ
234	SU40	壺	—	(11.9)	—	粗	含砂粒多	硬質	浅黄褐色	橙色	ハケ後ナデ	ハケ、ミガキ
235	SU40	壺	—	(6.9)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ハケ後ナデ	ハケ後ミガキ、ナデ
236	SU40	甕	—	(6.3)	—	密	含砂粒少	やや軟質	にぶい橙色	にぶい橙色	不明	ハケ後ナデ
237	SU40	甕	—	(7.6)	—	密	含砂粒少	硬質	灰褐色	ハケ	ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ
238	SU40	甕	(23.4)	(9.8)	—	密	含砂粒少	硬質	橙色	にぶい橙色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ
239	SU40	甕	(51.5)	(12.4)	—	粗	含砂粒多	硬質	にぶい橙色	褐色	ハケ後ミガキ、ナデ	ハケ後ナデ
240	SU40	甕	(26.0)	27.9	8.5	粗	含砂粒多	やや軟質	黄褐色	にぶい黄褐色	ハケ後ミガキ	ハケ後ミガキ、ナデ

※ () は復元・残存値

表5 A地区出土弥生土器観察表⑤

番号	遺構	器種	法量 (cm)			胎土		焼成	色調		調整	
			口径	器高	底径	粗密	砂粒		内面	外面	内面	外面
241	SU40	甕	(16.5)	(8.2)	—	密	含砂粒多	やや軟質	橙色	橙色	ナデ、ミガキ	ハケ、ミガキ、ナデ
242	SU40	甕	(22.6)	22.1	6.8	粗	含砂粒多	やや軟質	橙色	にぶい橙色	ハケ後ミガキ、ナデ	ハケ後ナデ
243	SU40	蓋	(22.4)	(4.0)	—	密	含砂粒少	やや軟質	橙色	明赤褐色	ハケ	ハケ
244	SU40	甕	(24.8)	(10.7)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	橙色	にぶい黄褐色	ミガキ後ナデ	ハケ後ミガキ、ナデ
245	SU40	甕	—	(3.9)	(10.8)	密	含砂粒多	やや軟質	橙色	橙色	ナデ、ミガキ	ハケ、ミガキ
246	SU40	甕	19.4	23.6	6.8	密	含砂粒多	やや軟質	橙色	橙色	ハケ、ミガキ	ハケ後ナデ
247	SU44	壺	—	(13.5)	—	粗	含砂粒少	やや軟質	にぶい黄褐色	橙色	ハケ	ハケ
248	SU44	壺	—	(16.7)	—	密	含砂粒多	硬質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ハケ後ナデ
249	SU44	壺	—	(3.8)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	浅黄褐色	にぶい黄褐色	ハケ	ハケ後ミガキ
250	SU44	壺	—	(4.9)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	橙色	にぶい橙色	不明	ミガキ
251	SU44	甕	(19.2)	(8.9)	—	密	含砂粒少	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ハケ後ミガキ	ハケ
252	SU44	甕	—	(4.2)	7.6	密	含砂粒多	硬質	橙色	橙色	ナデ	ハケ、ナデ
253	SU45	壺	—	(4.5)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	暗灰黄色	にぶい橙色	不明	不明
254	SU45	壺	—	(4.5)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	橙色	橙色	不明	不明
255	SU45	甕	—	(4.9)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄色	にぶい黄色	ハケ、ナデ	ナデ
256	SU45	甕	—	(3.1)	8.0	粗	含砂粒多	やや軟質	明赤褐色	明赤褐色	ハケ	不明
257	SU45	壺	(14.2)	28.7	(7.0)	粗	含砂粒多	やや軟質	橙色	橙色	ナデ、ミガキ	ハケ後ミガキ、ナデ
258	SU45	甕	—	(5.7)	8.2	粗	含砂粒多	やや軟質	黄褐色	黄褐色	不明	不明
259	SU45	甕	—	(7.5)	6.7	密	含砂粒多	やや軟質	橙色	橙色	ナデ	ナデ
260	SU49	壺	(11.2)	(10.3)	—	密	含砂粒少	硬質	にぶい橙色	にぶい橙色	ハケ、ミガキ	ミガキ
261	SU49	壺	(17.2)	(10.5)	—	密	含砂粒少	硬質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ミガキ	ミガキ
262	SU49	壺	(23.2)	(5.0)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	明黄褐色	明黄褐色	ナデ	ハケ後ナデ
263	SU49	壺	—	(4.9)	—	密	含砂粒多	硬質	灰黄色	橙色	ハケ後ナデ	ナデ
264	SU49	壺	—	(22.0)	7.3	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい橙色	にぶい橙色	ミガキ	ハケ後ミガキ
265	SU49	壺	(18.4)	(18.8)	—	密	含砂粒少	やや軟質	にぶい橙色	にぶい橙色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ
266	SU49	壺	—	40.6	9.8	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	橙色	ハケ後ミガキ	ハケ後ミガキ
267	SU49	甕	—	(2.9)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	橙色	橙色	ミガキ後ナデ	ハケ後ナデ
268	SU49	甕	—	(5.2)	—	粗	含砂粒少	軟質	明黄褐色	明黄褐色	ナデ	ナデ
269	SU49	甕	—	(2.9)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	黄褐色	浅黄色	不明	ハケ後ナデ
270	SU49	甕	—	(3.6)	—	密	含砂粒多	硬質	明黄褐色	明黄褐色	不明	ハケ
271	SU49	甕	—	(3.4)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	橙色	橙色	ナデ	ハケ後ナデ
272	SU49	甕	—	(4.6)	(9.0)	密	含砂粒多	硬質	浅黄褐色	浅黄褐色	ナデ	ハケ、ミガキ
273	SU49	甕	—	(3.7)	(9.0)	密	含砂粒多	やや軟質	橙色	橙色	ナデ	不明
274	SU49	高杯	—	(10.0)	—	密	含砂粒少	やや軟質	浅黄褐色	浅黄褐色	不明	ハケ後ナデ
275	SU49	甕	—	(7.1)	8.0	密	含砂粒少	硬質	にぶい橙色	にぶい橙色	不明	ハケ後ミガキ
276	SU49	甕	—	(12.5)	(8.9)	密	含砂粒少	硬質	明黄褐色	明黄褐色	ナデ、ミガキ	ハケ、ミガキ
277	SU49	甕	29.1	32.4	9.8	粗	含砂粒多	やや軟質	橙色	橙色	ハケ後ミガキ、ナデ	ハケ後ナデ
278	SU50	壺	—	(4.5)	—	密	含砂粒少	やや軟質	にぶい橙色	不明	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ
279	SU50	甕	(16.8)	(5.4)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい橙色	にぶい橙色	ハケ	ハケ
280	SU50	壺	—	(17.5)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ
281	SU50	壺	—	(30.9)	9.0	粗	含砂粒多	やや軟質	橙色	橙色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ
282	SU50	甕	—	(19.0)	11.4	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい橙色	にぶい橙色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ
283	SU50	甕	—	(10.3)	9.0	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい橙色	にぶい橙色	ミガキ	ハケ後ナデ
284	SK1	壺	(19.0)	(4.5)	(9.8)	密	含砂粒多	やや軟質	明黄褐色	明黄褐色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ
285	SK1	壺	(32.4)	(8.6)	—	密	含砂粒多	硬質	淡黄色	灰色	ハケ	ハケ
286	SK1	壺	(18.8)	(5.0)	—	密	含砂粒少	軟質	浅黄色	浅黄色	ミガキ	ハケ
287	SK1	甕	(9.9)	(6.9)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	橙色	にぶい黄褐色	ハケ	ナデ
288	SK1	甕	—	(14.7)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ハケ
289	SK1	甕	—	(6.2)	(8.8)	密	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	明黄褐色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ
290	SK1	甕	—	(7.2)	(6.6)	密	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	明黄褐色	ハケ後ナデ	ハケ
291	SK1	甕	—	(3.5)	(9.2)	粗	含砂粒多	やや軟質	浅黄色	橙色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ
292	SK2	壺	(6.2)	(7.2)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	明黄褐色	浅黄褐色	不明	不明
293	SK10	壺	(17.4)	(11.5)	—	密	含砂粒多	やや軟質	橙色	橙色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ
294	SK10	壺	—	(7.6)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ナデ
295	SK10	壺	—	(5.7)	—	密	含砂粒多	硬質	にぶい褐色	にぶい褐色	不明	ミガキ
296	SK10	壺	—	(20.7)	6.6	密	含砂粒多	硬質	明赤褐色	明赤褐色	ハケ後ナデ、ミガキ	ハケ後ナデ、ミガキ
297	SK10	甕	13.5	(10.0)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ハケ、ナデ	ハケ
298	SK10	甕	(22.5)	(9.9)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい褐色	にぶい褐色	ハケ後ミガキ、ナデ	ハケ後ナデ
299	SK10	甕	—	(7.7)	—	密	含砂粒少	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ハケ後ナデ
300	SK10	甕	(32.0)	(6.9)	—	密	含砂粒少	硬質	にぶい黄褐色	橙色	ナデ	ナデ

※ () は復元・残存値

表6 A地区出土弥生土器観察表⑥

番号	遺構	器種	法量 (cm)			胎土		焼成	色調		調整	
			口径	器高	底径	粗密	砂粒		内面	外面	内面	外面
301	SK10	甕	—	(9.3)	—	密	含砂粒少	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ハケ	ハケ
302	SK10	甕	(20.8)	(15.7)	—	密	含砂粒少	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ
303	SK10	甕	(20.4)	(12.6)	—	密	含砂粒多	硬質	にぶい褐色	褐色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ
304	SK10	甕	(20.8)	26.1	(6.8)	密	含砂粒少	やや軟質	浅黄褐色	灰白色	ナデ後ハケ、ミガキ	ナデ後ハケ
305	SK10	甕	—	(10.0)	9.7	粗	含砂粒多	やや軟質	浅黄褐色	浅黄褐色	ハケ	ハケ
306	SK10	甕	—	(11.9)	(6.6)	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	明黄褐色	ナデ	ハケ
307	SK10	甕	—	(3.8)	4.2	密	含砂粒少	軟質	褐色	褐色	ナデ	ナデ
308	SK10	甕	—	(5.2)	(6.0)	密	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	明黄褐色	ナデ	ナデ
309	SK10	甕	—	(5.8)	7.2	密	含砂粒少	軟質	にぶい黄褐色	褐色	ナデ	ナデ
310	SK10	甕	—	(6.3)	6.0	密	含砂粒多	やや硬質	褐色	明赤褐色	ナデ	ハケ
311	SK11	甕	33.0	34.6	9.0	粗	含砂粒多	やや軟質	淡黄色	淡黄色	ハケ後ミガキ	ハケ後ナデ
312	SK11	甕	35.8	51.9	11.7	粗	含砂粒多	やや軟質	褐色	褐色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ
313	SK13	壺	29.6	(17.6)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ
314	SK13	壺	—	(3.2)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	明黄褐色	不明	不明
315	SK13	壺	(10.3)	(9.3)	—	粗	含砂粒少	やや軟質	明黄褐色	明黄褐色	ハケ	不明
316	SK13	甕	—	(11.5)	(6.6)	密	含砂粒多	硬質	明黄褐色	褐色	不明	不明
317	SK13	壺	—	(19.6)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	明黄褐色	明黄褐色	ナデ	ハケ後ナデ
318	SK13	甕	—	(13.1)	(9.5)	密	含砂粒多	硬質	明黄褐色	明黄褐色	ハケ、ナデ	ハケ、ミガキ
319	SK13	甕	(33.0)	(6.3)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	浅黄褐色	にぶい黄褐色	不明	ナデ
320	SK20	甕	(23.3)	30.6	6.6	密	含砂粒多	やや軟質	明褐色	明赤褐色	ハケ、ミガキ	ハケ、ミガキ
321	SK22	甕	(12.8)	(7.8)	—	密	含砂粒少	やや軟質	浅黄色	明黄褐色	不明	ハケ
322	SK22	甕	(9.9)	(4.4)	—	粗	含砂粒少	やや軟質	明黄褐色	褐色	不明	ハケ
323	SK25	壺	(12.4)	(4.3)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	浅黄色	浅黄色	ナデ	ハケ
324	SK25	壺	—	(3.8)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	浅黄色	浅黄色	不明	不明
325	SK25	壺	—	(5.7)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	灰黄色	にぶい黄褐色	不明	不明
326	SK25	壺	—	(12.1)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	浅黄色	明黄褐色	不明	ハケ
327	SK25	壺	(7.6)	(12.4)	—	密	含砂粒多	やや軟質	浅黄褐色	浅黄褐色	不明	不明
328	SK25	壺	—	(4.1)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	黄褐色	明黄褐色	不明	不明
329	SK25	壺	(20.6)	(9.1)	—	密	含砂粒少	硬質	浅黄褐色	浅黄色	ミガキ	ミガキ
330	SK25	甕	—	(5.4)	(7.6)	密	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	不明	ハケ後ナデ
331	SK25	甕	—	(1.5)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	褐色	にぶい黄褐色	ナデ	不明
332	SK25	鉢	(17.8)	(4.4)	—	密	含砂粒多	やや軟質	浅黄褐色	にぶい黄褐色	不明	不明
333	SK34	壺	(17.1)	(5.2)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい褐色	にぶい褐色	ミガキ	ハケ後ナデ
334	SK34	甕	—	(3.1)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	明黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ、ミガキ	ハケ、ナデ
335	SK34	甕	—	(8.1)	—	密	含砂粒少	やや軟質	浅黄褐色	浅黄褐色	ナデ	ハケ後ナデ
336	SK34	甕	20.4	(15.0)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	明黄褐色	明黄褐色	不明	ハケ
337	SK34	甕	—	(21.1)	7.5	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	不明	ハケ
338	SK34	壺	—	(12.9)	10.6	粗	含砂粒多	やや軟質	浅黄褐色	浅黄褐色	ハケ	ハケ
339	SK34	甕	—	(7.2)	10.0	粗	含砂粒多	やや軟質	黄褐色	黄褐色	不明	不明
340	SK34	甕	—	(3.4)	(7.0)	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	不明	不明
341	SK34	甕	—	(3.7)	(7.0)	粗	含砂粒多	やや軟質	褐灰色	にぶい黄褐色	ナデ	ハケ
342	SK34	甕	—	(4.5)	8.0	粗	含砂粒多	やや軟質	褐色	褐色	不明	不明
343	SK34	甕	—	(5.7)	(6.8)	粗	含砂粒多	やや軟質	灰褐色	にぶい黄褐色	不明	ハケ
344	SK45	壺	(11.6)	(21.2)	—	密	含砂粒少	やや軟質	褐色	赤褐色	ハケ	ハケ、ミガキ
345	SK45	甕	—	(25.1)	—	密	含砂粒少	やや軟質	明黄褐色	にぶい黄褐色	不明	ハケ
346	SK45	甕	(41.0)	(34.8)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	明黄褐色	明黄褐色	ハケ後ミガキ後ナデ	ハケ後ナデ
347	SK50	壺	(25.2)	(9.6)	—	密	含砂粒少	やや軟質	明黄褐色	明黄褐色	ナデ	ハケ後ナデ
348	SK50	壺	—	(5.6)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	浅黄褐色	浅黄褐色	ハケ後ナデ	不明
349	SK50	壺	—	(8.1)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	灰黄色	にぶい黄褐色	ハケ	ハケ
350	SK50	壺	15.9	(12.7)	—	密	含砂粒多	硬質	褐灰色	褐色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ
351	SK50	壺	—	(10.2)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ハケ	ハケ
352	SK50	甕	—	(5.1)	(8.2)	密	含砂粒多	軟質	赤褐色	赤褐色	不明	不明
353	SK50	壺	—	(4.4)	10.6	密	含砂粒多	硬質	黄褐色	浅黄褐色	不明	ナデ
354	SK61	壺	(8.4)	13.9	5.0	密	含砂粒多	硬質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ハケ	ミガキ
355	SK54	壺	(17.3)	(3.1)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	明黄褐色	明黄褐色	ナデ	ハケ後ナデ
356	SK54	鉢	(13.0)	(3.7)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	褐色	ハケ後ナデ後ミガキ	ハケ、ミガキ
357	SK54	壺	—	(2.9)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	褐色	にぶい黄褐色	不明	不明
358	SK54	壺	—	(8.2)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	明黄褐色	不明	不明
359	SK54	壺	—	(4.7)	—	密	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ハケ	不明
360	SK54	甕	—	(3.7)	9.6	密	含砂粒多	やや軟質	浅黄褐色	褐色	不明	不明

※ () は復元・残存値

表7 A地区出土弥生土器観察表⑦

番号	遺構	器種	法量 (cm)			胎土		焼成	色調		調整	
			口径	器高	底径	粗密	砂粒		内面	外面	内面	外面
361	SK59	壺	—	(4.6)	—	密	含砂粒多	硬質	灰色	黄褐色	不明	不明
362	SK59	壺	—	(2.0)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	灰黄色	灰色	ナデ	不明
363	SK59	甕	—	(5.7)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	褐色	褐色	不明	ハケ
364	SK59	甕	—	(3.3)	(7.0)	密	含砂粒多	やや軟質	にぶい褐色	褐色	ナデ	不明
365	SK66	壺	(20.2)	(6.6)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	明黄褐色	明黄褐色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ
366	SK66	壺	—	(4.7)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	明黄褐色	明黄褐色	ハケ	ハケ
367	SK66	壺	(11.8)	(2.9)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	浅黄色	浅黄色	ナデ、ミガキ	ハケ後ミガキ、ナデ
368	SK66	壺	14.0	(18.8)	—	密	含砂粒多	硬質	灰白色	にぶい黄褐色	ハケ、ミガキ	ハケ、ミガキ
369	SK66	壺	—	(6.9)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい褐色	明黄褐色	ハケ後ナデ	ハケ
370	SK66	壺	—	(7.6)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	灰黄色	にぶい黄褐色	不明	ハケ後ミガキ
371	SK66	壺	—	(15.6)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい褐色	ハケ	ハケ後ミガキ、ナデ
372	SK66	壺	23.7	(32.5)	—	密	含砂粒少	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ
373	SK66	壺	17.1	30.6	(7.4)	密	含砂粒多	やや軟質	褐色	褐色	ハケ、ミガキ	ハケ、ミガキ
374	SK66	壺	—	(11.8)	5.8	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	不明	ハケ後ミガキ
375	SK66	甕	(19.8)	(8.5)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	明黄褐色	明黄褐色	ハケ後ミガキ、ナデ	ハケ後ナデ
376	SK66	甕	—	(3.8)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ハケ後ナデ
377	SK66	甕	—	(5.3)	—	密	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	浅黄色	不明	ハケ後ナデ
378	SK66	甕	(22.8)	(15.8)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ
379	SK66	甕	(14.2)	(9.5)	—	粗	含砂粒多	硬質	にぶい褐色	にぶい褐色	ハケ後ミガキ	ハケ後ミガキ後ナデ
380	SK66	甕	(22.8)	(17.2)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ、ミガキ	ハケ後ミガキ、ナデ
381	SK66	甕	(22.5)	26.2	7.3	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ハケ後ミガキ、ナデ	ハケ後ナデ
382	SK66	甕	—	(8.8)	7.0	粗	含砂粒多	やや軟質	灰黄褐色	にぶい黄褐色	ハケ後ナデ	ハケ
383	SK66	甕	—	(8.6)	9.2	粗	含砂粒多	やや軟質	暗灰黄色	明黄褐色	ハケ後ナデ	ハケ
384	SK66	甕	—	(3.3)	(9.2)	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄色	にぶい褐色	不明	ハケ後ミガキ
385	SK66	甕	—	(24.3)	(9.5)	密	含砂粒多	やや軟質	灰白色	にぶい黄褐色	ハケ	ハケ、ミガキ
386	SK66	甕	—	(3.3)	(12.1)	粗	含砂粒多	やや軟質	黄灰色	浅黄色	不明	ナデ、ミガキ
387	SK66	甕	—	(11.1)	8.2	粗	含砂粒多	やや軟質	褐色	にぶい褐色	ナデ	ハケ後ナデ
388	SK66	甕	(40.2)	(47.1)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	明黄褐色	黄褐色	ハケ後ミガキ、ナデ	ハケ後ナデ
389	SK79	甕	—	(4.2)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	褐色	にぶい黄褐色	不明	ハケ後ナデ
390	SK79	甕	—	(5.1)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	不明	ハケ後ナデ
391	SK79	甕	(20.5)	(14.5)	—	密	含砂粒多	硬質	浅黄褐色	浅黄褐色	不明	ハケ
392	SK79	甕	(22.5)	(19.9)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	浅黄色	にぶい黄褐色	ハケ	ハケ後ナデ
393	SK79	甕	(29.4)	(14.8)	—	密	含砂粒少	硬質	褐色	褐色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ
394	SK79	壺	—	(6.0)	(10.1)	密	含砂粒多	やや軟質	浅黄褐色	浅黄褐色	不明	ハケ、ナデ
395	SK79	壺	—	(14.1)	8.8	密	含砂粒少	やや軟質	明黄褐色	明黄褐色	不明	ハケ
396	SK80	壺	—	(5.5)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	浅黄色	明黄褐色	不明	不明
397	SK80	壺	—	(4.4)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	黄褐色	褐色	不明	不明
398	SK80	壺	—	(1.8)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	明黄褐色	明黄褐色	不明	不明
399	SK82	壺	(17.0)	(4.9)	—	密	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	明黄褐色	ナデ	ハケ後ナデ
400	SK82	壺	(17.0)	(9.5)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	淡黄色	淡黄色	ハケ後ミガキ	ハケ後ミガキ
401	SK82	壺	(22.8)	(7.3)	—	粗	含砂粒少	やや軟質	浅黄色	浅黄色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ
402	SK82	甕	—	(28.3)	—	密	含砂粒多	硬質	にぶい黄褐色	黄褐色	不明	不明
403	SK87	壺	(32.6)	(2.8)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	灰色	灰色	ナデ	不明
404	SK87	壺	(10.3)	(7.5)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	褐色	褐色	ナデ	ハケ後ナデ
405	SK87	壺	(18.0)	(7.5)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	明黄褐色	ナデ	ナデ
406	SK87	壺	(15.4)	(21.2)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	淡黄色	淡黄色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ
407	SK87	壺	(14.7)	(11.3)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	明黄褐色	明黄褐色	ハケ、ナデ	ミガキ
408	SK87	壺	(18.3)	(8.1)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	褐色	褐色	ハケ後ミガキ	ハケ、ミガキ
409	SK87	壺	21.6	(16.0)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ハケ	ハケ
410	SK87	壺	36.2	(18.2)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	黄褐色	黄褐色	ハケ	ハケ
411	SK87	壺	—	(28.0)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ハケ	ハケ
412	SK87	壺	—	(19.0)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	褐色	褐色	ミガキ	ハケ後ミガキ、ナデ
413	SK87	壺	(11.2)	(19.7)	7.8	密	含砂粒少	硬質	にぶい褐色	にぶい褐色	ハケ後ミガキ	ハケ後ミガキ
414	SK87	壺	—	(42.9)	12.0	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ハケ	ハケ後ミガキ
415	SK87	壺	—	(19.6)	(11.0)	密	含砂粒多	やや軟質	淡黄色	淡黄色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ
416	SK87	壺	—	(8.7)	(8.8)	密	含砂粒多	やや軟質	浅黄褐色	にぶい黄褐色	不明	不明
417	SK87	壺	—	(7.4)	8.4	粗	含砂粒多	やや軟質	黄褐色	黄褐色	不明	不明
418	SK87	壺	—	(10.9)	12.4	粗	含砂粒多	やや軟質	明黄褐色	明黄褐色	ハケ	ハケ
419	SK87	甕	(24.4)	(21.2)	—	密	含砂粒多	やや軟質	浅黄褐色	黄褐色	ナデ	ハケ、ナデ
420	SK87	甕	(31.4)	(22.6)	—	密	含砂粒多	やや軟質	浅黄褐色	浅黄褐色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ

※ () は復元・残存値

表 8 A 地区出土弥生土器観察表⑧

番号	遺構	器種	法 量 (cm)			胎 土		焼成	色 調		調 整	
			口径	器高	底径	粗密	砂 粒		内 面	外 面	内 面	外 面
421	SK87	甕	(30.2)	(22.5)	—	密	含砂粒多	やや軟質	黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ハケ、ナデ
422	SK87	甕	33.2	36.9	8.7	粗	含砂粒多	やや軟質	灰黄褐色	にぶい黄褐色	ハケ後ナデ、ミガキ	ハケ後ナデ、ミガキ
423	SK87	甕	—	(4.3)	7.4	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ハケ、ナデ
424	SK87	甕	—	(7.9)	9.0	密	含砂粒多	やや軟質	浅黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ハケ後ナデ
425	SK87	甕	—	(10.2)	9.0	粗	含砂粒多	やや軟質	明黄色	明黄色	不明	ハケ
426	SK87	甕	—	(10.8)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	赤色	赤色	ハケ	ハケ後ミガキ
427	SK87	甕	—	(17.2)	9.6	密	含砂粒少	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ハケ後ナデ	ハケ
428	SK87	甕	34.3	40.6	9.6	粗	含砂粒多	やや軟質	褐色	褐色	ハケ後ナデ	ハケ後ミガキ、ナデ
429	SK87	甕	38.0	47.0	10.4	粗	含砂粒多	やや軟質	明黄褐色	にぶい褐色	ハケ後ミガキ、ナデ	ハケ後ナデ、ミガキ
430	SK93	壺	12.6	(9.3)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ハケ後ミガキ、ナデ	ハケ、ナデ
431	SK93	壺	(14.8)	(7.6)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	浅黄褐色	浅黄褐色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ
432	SK93	壺	13.1	28.3	7.2	密	含砂粒少	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ハケ後ナデ	ハケ後ミガキ
433	SK93	甕	—	(6.2)	—	密	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	浅黄褐色	不明	不明
434	SK93	甕	(28.2)	(30.1)	10.5	粗	含砂粒多	やや軟質	浅黄色	浅黄色	不明	ハケ後ナデ
435	SK93	壺	—	(11.4)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ハケ	不明
436	SK93	甕	—	(6.3)	7.2	密	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	不明	ハケ後ナデ
437	SK93	甕	—	(7.1)	7.5	粗	含砂粒多	やや軟質	黄褐色	黄褐色	ハケ	ハケ
438	SK93	壺	29.4	52.0	7.4	粗	含砂粒多	やや軟質	褐色	褐色	ハケ後ミガキ、ナデ	ハケ後ミガキ、ナデ
439	SK102	壺	(36.0)	(20.6)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい褐色	にぶい褐色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ
440	SK102	壺	(39.0)	(21.7)	—	密	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ハケ、ナデ	ハケ後ナデ
441	SK102	壺	—	(30.4)	—	密	含砂粒少	やや軟質	灰黄色	にぶい黄褐色	ハケ後ナデ、ミガキ	ハケ後ナデ
442	SK102	壺	—	(12.1)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	褐色	褐色	ハケ後ミガキ	ハケ後ミガキ
443	SK102	壺	—	(26.2)	—	密	含砂粒多	やや軟質	褐色	褐色	ミガキ	ハケ後ミガキ
444	SK102	壺	—	(8.7)	—	密	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ハケ	ハケ
445	SK102	壺	—	(7.2)	8.4	密	含砂粒少	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	不明	ハケ後ミガキ
446	SK102	壺	—	(8.5)	(8.4)	粗	含砂粒多	やや軟質	褐色	明黄褐色	ミガキ	ハケ後ミガキ
447	SK102	壺	24.2	(25.2)	—	密	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ
448	SK102	壺	—	(2.7)	—	密	含砂粒多	硬質	にぶい黄褐色	浅黄褐色	不明	不明
449	SK102	甕	—	(5.7)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	淡黄色	褐色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ
450	SK102	甕	(17.0)	(13.3)	—	密	含砂粒多	やや軟質	淡黄色	にぶい黄褐色	不明	不明
451	SK102	壺	—	(33.4)	12.9	密	含砂粒多	やや軟質	褐色	褐色	ハケ後ミガキ	ハケ
452	SK102	甕	—	(6.1)	9.6	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ハケ後ミガキ	ハケ後ナデ
453	SK102	甕	—	(8.1)	7.6	粗	含砂粒多	やや軟質	明黄褐色	褐色	不明	ハケ
454	SK102	甕	—	(4.9)	6.9	粗	含砂粒多	やや軟質	明黄褐色	褐色	不明	ハケ後ナデ
455	SK102	甕	—	(3.6)	(7.0)	粗	含砂粒多	やや軟質	灰黄色	褐色	不明	不明
456	SK102	甕	—	(9.5)	(6.4)	密	含砂粒多	やや軟質	にぶい褐色	褐色	ハケ	ハケ
457	SK102	甕	—	(10.0)	(8.0)	粗	含砂粒多	やや軟質	浅黄褐色	浅黄褐色	ハケ、ミガキ	ハケ
458	SK106	壺	23.2	(14.0)	—	密	含砂粒多	やや軟質	明黄褐色	明黄褐色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ
459	SK106	壺	(19.6)	(18.0)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ
460	SK106	壺	(28.6)	(14.4)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	明黄褐色	明黄褐色	ハケ	ハケ後ナデ
461	SK106	壺	—	(28.1)	—	密	含砂粒多	やや軟質	褐色	褐色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ
462	SK106	壺	(26.2)	(12.9)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	灰黄色	浅黄褐色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ
463	SK106	壺	—	(23.3)	7.0	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ミガキ	ハケ後ナデ
464	SK106	壺	—	(35.8)	(11.0)	密	含砂粒多	やや軟質	黒色	褐色	ハケ	ハケ、ミガキ
465	SK106	甕	(10.4)	(7.3)	—	密	含砂粒多	やや軟質	赤褐色	赤褐色	不明	ハケ
466	SK106	甕	—	(7.5)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	褐色	褐色	ハケ、ミガキ	ミガキ
467	SK106	甕	—	(7.0)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	不明	ハケ
468	SK106	甕	—	(5.0)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	褐色	褐色	ミガキ	ハケ後ナデ
469	SK106	甕	—	(9.1)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	明褐色	明褐色	ミガキ	ハケ
470	SK106	甕	—	7.7	6.4	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ミガキ	ハケ
471	SK106	甕	—	(8.7)	(9.0)	密	含砂粒多	やや軟質	浅黄褐色	褐色	ハケ、ナデ	ハケ、ミガキ
472	SK112	壺	(23.6)	(36.7)	—	密	含砂粒少	硬質	褐色	明褐色	ハケ後ミガキ	ハケ後ミガキ
473	SK112	壺	(10.6)	(22.2)	—	密	含砂粒少	やや軟質	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ
474	SK112	甕	—	(7.4)	—	粗	含砂粒多	やや軟質	褐色	褐色	不明	不明
475	SK112	甕	15.6	15.8	5.8	粗	含砂粒多	やや軟質	にぶい赤褐色	灰褐色	ナデ、ミガキ	ハケ、ミガキ

※ () は復元・残存値

② 石器 (図65～68)

打製石鏃 出土した38点のうち、無茎凹基式がほとんどを占める(477～483、485～489、491～498、500～504、506～513)。ほとんどは安山岩製であるが、509・513は腰岳産黒曜石、481、512は姫島産ハリ質安山岩を用いる。476・499は無茎平基式石鏃、490は有茎石鏃、484は石鏃未製品であり、ともに安山岩製である。514は姫島産黒曜石に槌状剥離を施して製作される。表採遺物であり、縄文時代草創期から早期にかけてのものと考えられる。

磨製石鏃 505の1点のみ出土。砂岩製。基部が欠損しており、全体の形態は明らかではない。

剥片 515は腰岳産黒曜石製。剥離面は全て上端部からの剥片剥離により形成。自然面打面である。

楔型石器 516は姫島産玻璃質安山岩製。両面上下端部に階段状剥離が形成され、両極技法により製作されたと考えられる。両側縁部に剥離面を残すことによって、一定の厚みを持たせている。

石庖丁 全て欠損品である。517は赤色頁岩製の外湾刃半月形。518・522はともに粘板岩製の直線刃である。522は研磨した後に調整剥離を施していることから、リダクションがなされた可能性もある。左側縁部に挟りが見られ、紐をかけて使用したものと推測される。520は泥岩製の直線刃長方形であり、両面の刃部が集中的に研磨されている。521は粘板岩製の直線刃半月形を呈する。

磨製石斧 523は堆積岩製。刃部は、右側縁は下端部、左側縁は中央欠損部にまで作り出されており、左右対称ではない。526は泥岩製で平面形は撥型だが、刃部は側縁部手前で弧状を呈している。

柱状片刃石斧 524・525ともに頁岩を用いる。どちらも白色を呈するほど風化しているが、側縁部の稜は明瞭である。525は基部と刃部の一部を欠損する。

扁平片刃石斧 527は頁岩製。刃部の右半分を欠損。刃部の幅は狭く、鈍角に作り出されている。

磨製石剣 528・529はともに粘板岩製の磨製石剣の破片である。両面共に丁寧に研磨され、中央部に明確な稜を作り出している。529の断面形は菱形を呈する。

紡錘車 530が出土。半分以上が欠損している。両面・側面ともに丁寧に研磨される。砂岩製。

大型蛤刃石斧 531は変成岩製。刃部右側は使用により欠損し、先端部は微細な使用剥離痕が見られる。532は凝灰岩製。敲打痕が残る。刃部の稜は明確に作り出されておらず、厚みが中央部で最大になるなど、531とは形態が異なる。533は泥岩製で刃部付近は完全に欠損。側縁部に敲打痕が残る。

不定型刃器 534は泥岩製。不定型ではあるが、下端部には剥離痕が形成されている。

礫器 明確な用途が不明。535は下端部に使用剥離痕が見られることから、刃部として使用されたものと考えられる。玄武岩製。536・537はともに安山岩製。536は裏面上端部に多数の敲打痕が見られ、下端部も剥離が多く施される。537は表面下端部における剥離作業によって鋭角をなし、微細な使用剥離痕が見られることから、他の2点と同様、刃部として使用された可能性がある。

不明石器 538は用途不明の石器である。泥岩製であり、中央に石理が明瞭に見られる。調整剥離が両面下端部に見られるが、上端部や側縁部にはほとんど見られず、石器未製品の可能性もある。

磨石 539は側縁部と中央部に敲打痕が見られる。540は上下端部を調整剥離、側縁部を敲打した後、両面とも表面を研磨しているが、さらにその後中央部に敲打痕を形成している。共に花崗岩製。

石皿 541～544、全て砂岩製。542は裏面に礫面を残しているが、他の3点は扁平な形状を呈する。542・543は横幅が約30cmと、かなり大型である。

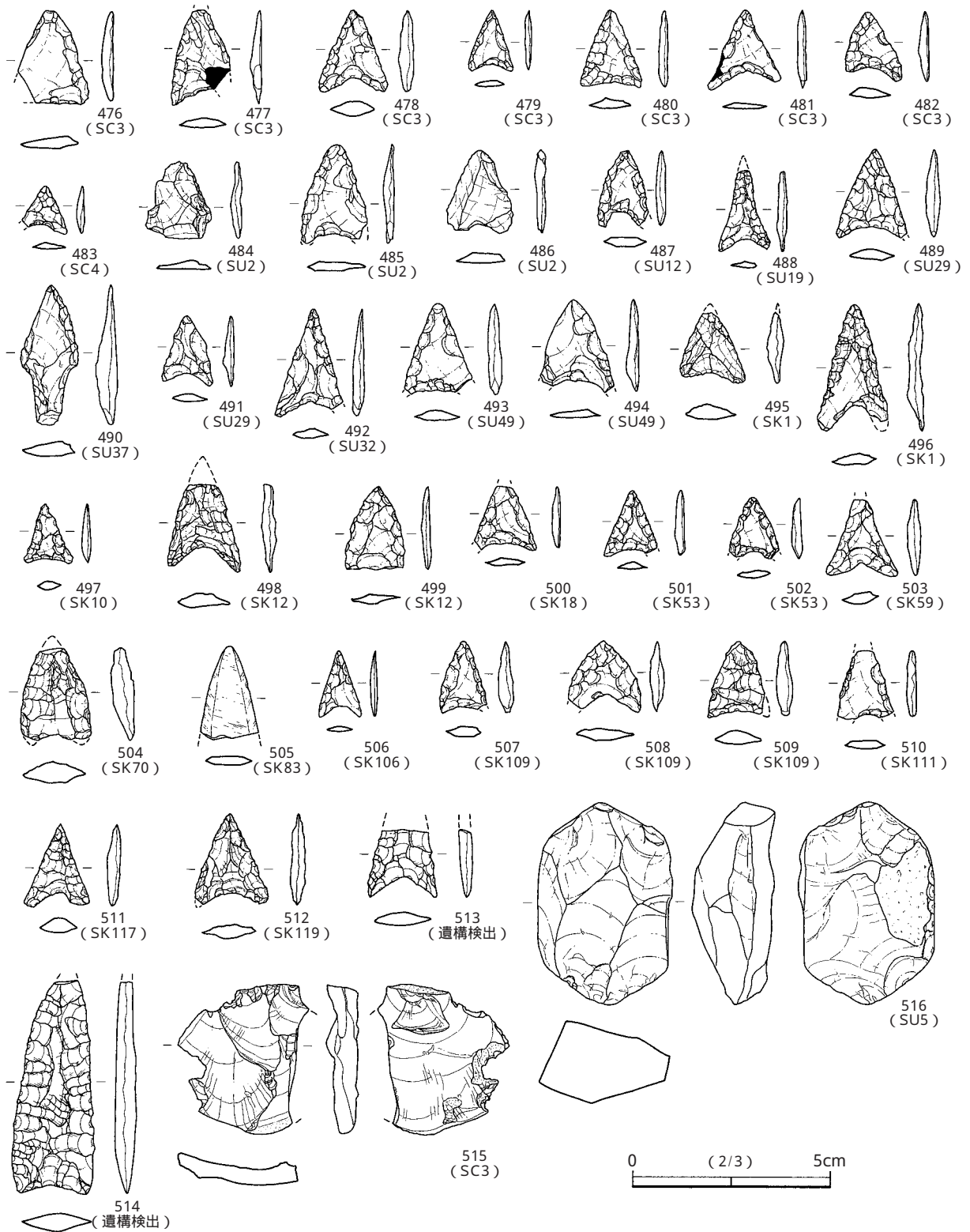


图65 出土遺物実測图④

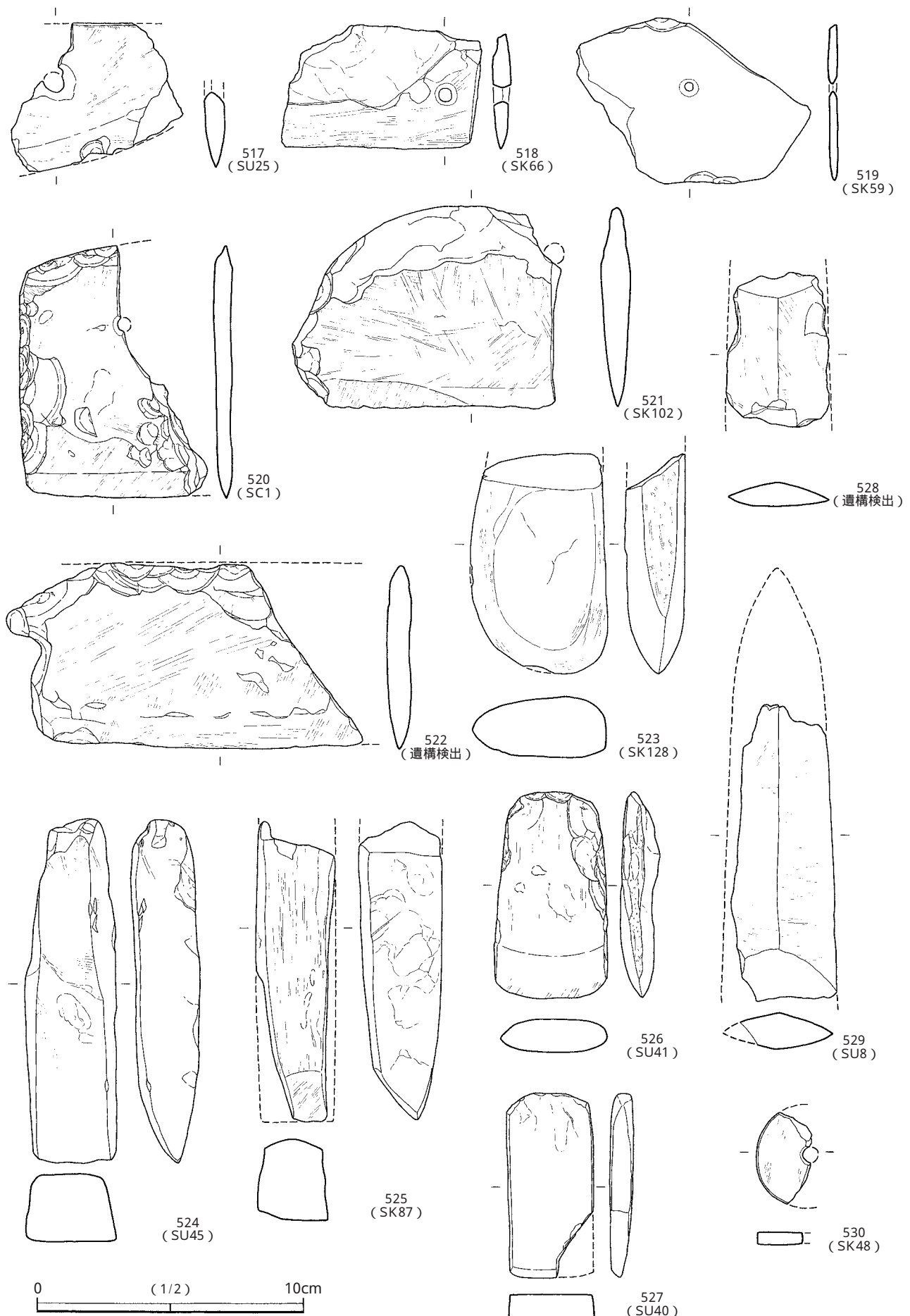


图66 出土遺物実測図④

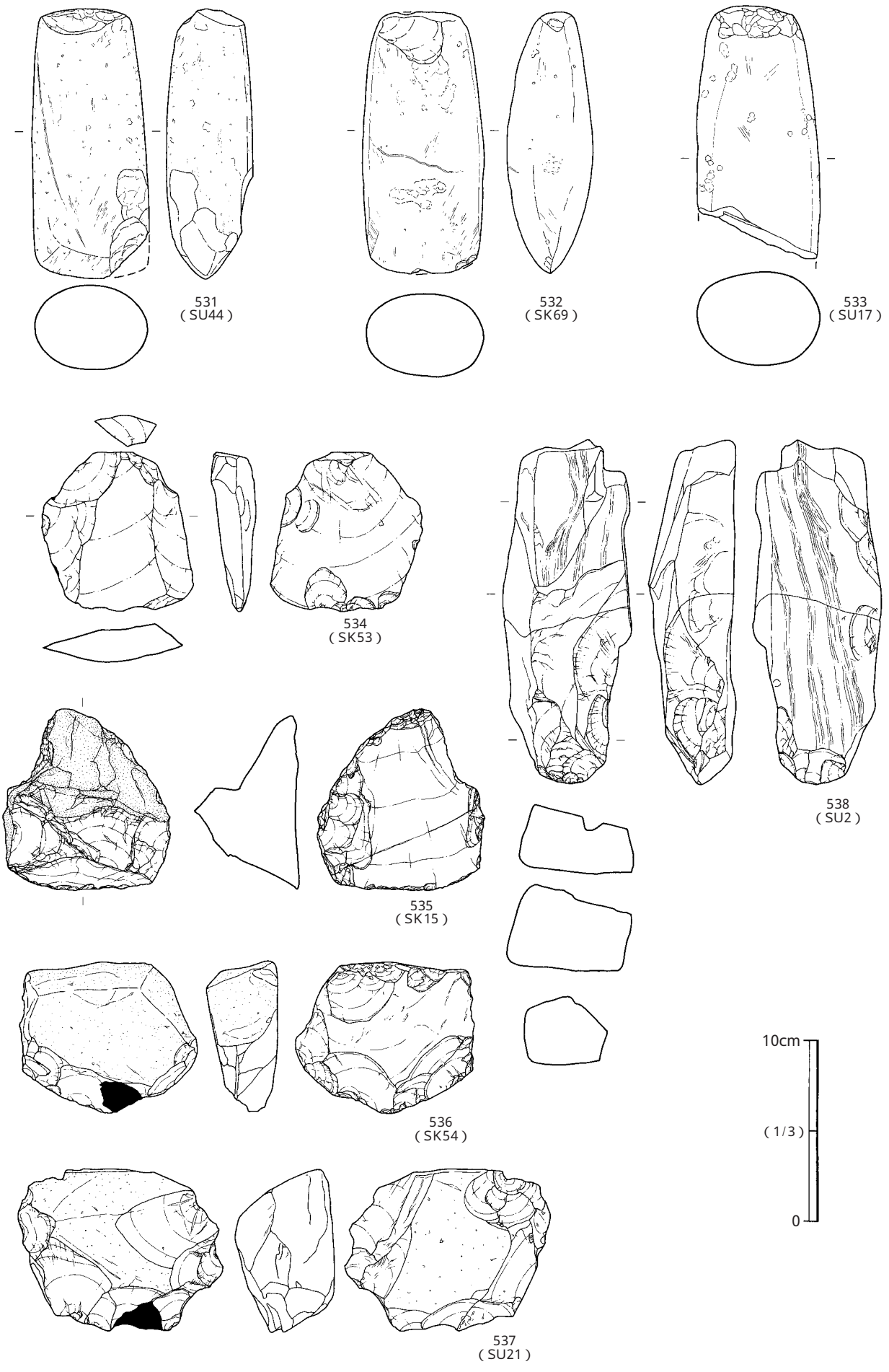


图67 出土遺物実測図④

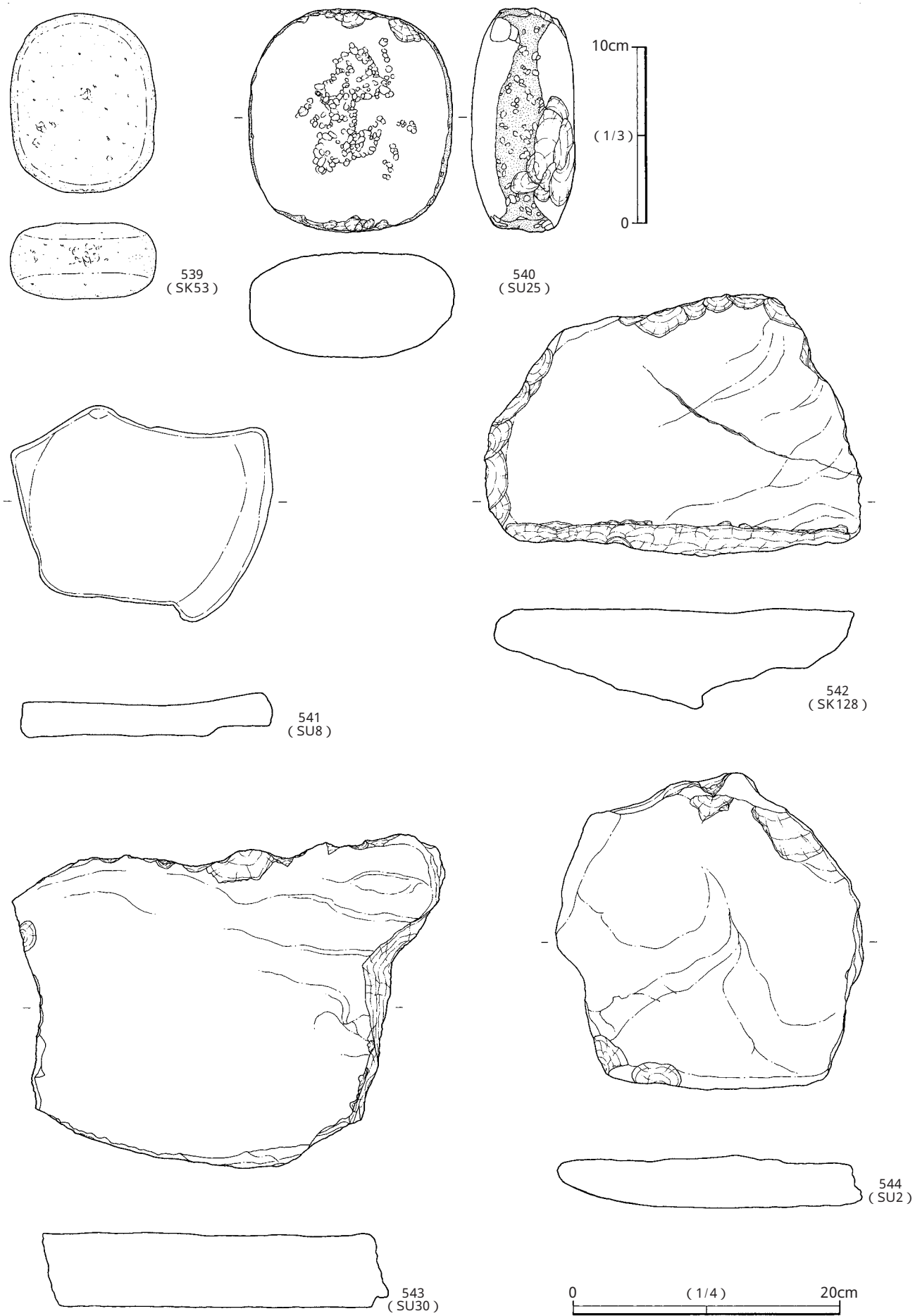


图68 出土遺物実測図⑨

③ 玉類 (図69)

ST 1 から52点、SC 4 から1点の管玉、表面採集で1点の平玉が出土した。このうち31点を図示した。

545～573はST 1 より出土した管玉である。545・546は長さが短く、6.7mm 程度であるが、その他はおおよそ8mm～1.4mm を測る。最長は551の2.1mm である。幅は基本的に3mm～5mm の間に集中する傾向が窺える。色調は灰色がかった緑を呈するものが主体であるが、545のみ濃緑色を呈する。石材はすべて碧玉とみられる。574はSC 4 から1点のみ出土したものであり、碧玉製。これらの管玉は弥生時代中期初頭の所産であると考えられる。575は平玉であり、表面採集されたものである。長さ約1.5mm、幅約1.7mm であり、硬玉製と考えられる。所属時期については不明。

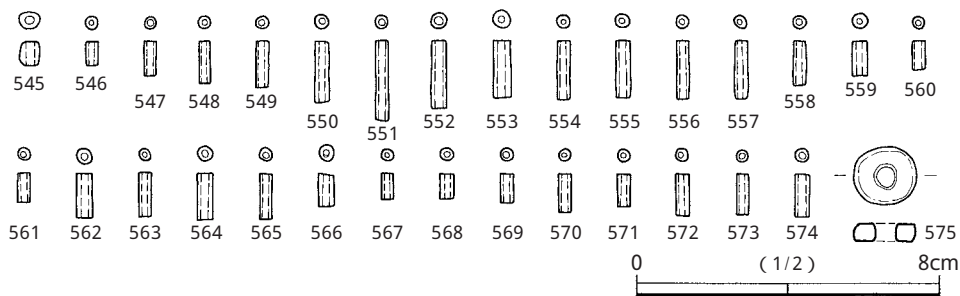


図69 出土遺物実測図③

(3) 中世の遺構・遺物

弥生時代中期初頭の遺構が集中する中央部から東側に一段下がった位置に中世の墓が1基のみ検出された。この遺構は弥生時代の所産と考えられるほぼ正方形を呈する土坑を切って構築されている。

ST 3 (図70、図版14)

平面形は楕円形を呈し、長径105cm、短径55cm を測る。断面形は逆台形で、深さは12cm と浅い。軸はほぼ南北に走り、北側の西壁よりに伏せ据えた状態で土師器杯が1点出土していることから、北枕で葬られたものと見られる。墓のサイズからして小児を葬ったものと考えられる。

出土遺物 (図71)：土師器杯で、口径13.1cm、器高4.6cm、底径6.2cm を測る。内外面ともに口クロナデであり、底部には回転糸切り痕を残す。色調は橙色。

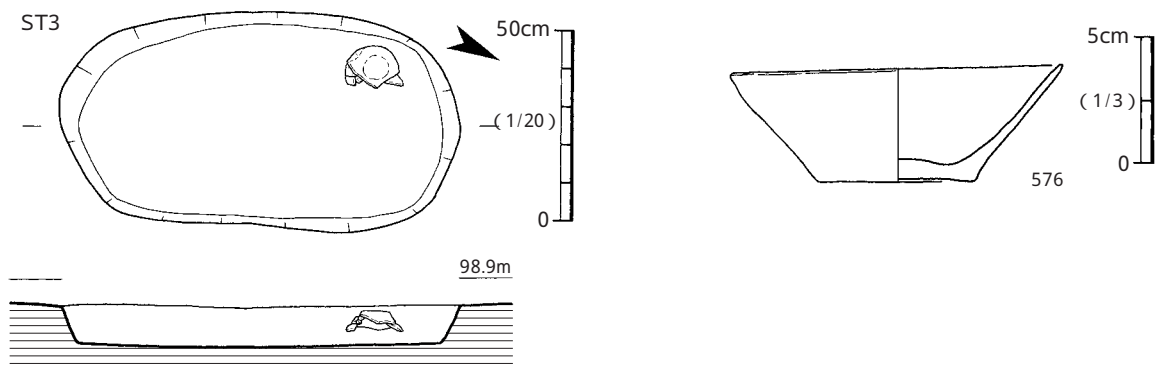


図70 中世墓及び出土遺物実測図

表9 A地区出土石器観察表

番号	遺構	器種	法量 (cm)			重量 (g)	石材	備考	番号	遺構	器種	法量 (cm)			重量 (g)	石材	備考
			最大長	最大幅	最大厚							最大長	最大幅	最大厚			
476	SC3	打製石鏃	2.4	1.8	0.3	1.3	安山岩		526	SU41	磨製石斧	7.7	4.2	1.5	68.0	泥岩	
477	SC3	打製石鏃	2.4	1.5	0.3	0.9	安山岩		527	SU40	扁平片刃石斧	6.9	3.3	0.9	35.7	頁岩	
478	SC3	打製石鏃	2.1	1.7	0.4	0.8	安山岩		528	遺構検出	磨製石剣	(5.8)	(3.8)	1.1	24.1	粘板岩	
479	SC3	打製石鏃	1.5	1.2	0.2	0.4	安山岩		529	SU8	磨製石剣	(11.1)	(3.8)	1.4	74.6	粘板岩	
480	SC3	打製石鏃	1.9	1.4	0.3	0.5	安山岩		530	SK48	紡錘車	(3.4)	(2.1)	0.5	5.7	砂岩	
481	SC3	打製石鏃	2.0	1.9	0.2	0.5	安山岩	姫島産	531	SU44	大型蛤刃石斧	14.8	6.3	4.7	770	変成岩	
482	SC3	打製石鏃	1.7	1.4	0.3	0.6	安山岩		532	SK69	大型蛤刃石斧	14.3	6.7	4.3	710	凝灰岩	
483	SC4	打製石鏃	1.2	1.2	0.2	0.1	安山岩		533	SU17	大型蛤刃石斧	(13.8)	6.7	5.1	770	泥岩	
484	SU2	打製石鏃	2.0	1.7	0.2	0.5	安山岩		534	SK53	不定型刃器	8.7	8.4	2.3	170	泥岩	
485	SU2	打製石鏃	2.5	1.6	0.3	1.0	安山岩		535	SK15	礫器	10.0	9.2	6.0	450	玄武岩	
486	SU2	打製石鏃	2.1	1.7	0.3	0.5	安山岩		536	SK54	礫器	8.3	9.7	4.0	430	安山岩	
487	SU12	打製石鏃	1.9	1.3	0.3	0.4	安山岩		537	SU21	礫器	8.9	11.2	5.3	620	安山岩	
488	SU19	打製石鏃	2.1	1.3	0.3	0.3	安山岩		538	SU2	不明石器	18.8	6.9	4.7	790	泥岩	
489	SU29	打製石鏃	2.3	1.9	0.5	0.8	安山岩		539	SK53	磨石	10.0	8.1	4.3	590	花崗岩	
490	SU37	打製石鏃	3.6	1.4	0.5	1.6	安山岩		540	SU25	磨石	12.5	11.4	5.8	1320	花崗岩	
491	SU29	打製石鏃	1.8	1.3	0.3	0.2	安山岩		541	SU8	石皿	14.9	19.5	2.4	880	砂岩	
492	SU32	打製石鏃	2.7	1.7	0.3	0.5	安山岩		542	SK128	石皿	19.6	28.1	7.5	4220	砂岩	
493	SU49	打製石鏃	2.3	1.7	0.3	0.6	安山岩		543	SU30	石皿	25.1	32.6	6.9	7520	砂岩	
494	SU49	打製石鏃	2.4	1.9	0.3	1.1	安山岩		544	SU2	石皿	23.8	23.2	4.4	3400	砂岩	
495	SK1	打製石鏃	1.8	1.7	0.4	0.7	安山岩		545	ST1	管玉	0.67	0.55	0.46	0.2	碧玉	孔径0.22cm
496	SK1	打製石鏃	3.2	1.8	0.4	1.0	安山岩		546	ST1	管玉	0.68	0.34	0.34	0.1	碧玉	孔径0.15cm
497	SK10	打製石鏃	1.5	1.3	0.2	0.2	安山岩		547	ST1	管玉	0.95	0.34	0.34	0.1	碧玉	孔径0.19cm
498	SK12	打製石鏃	2.2	1.9	0.4	0.9	安山岩		548	ST1	管玉	1.15	0.32	0.32	0.1	碧玉	孔径0.18cm
499	SK12	打製石鏃	2.1	1.5	0.3	0.8	安山岩		549	ST1	管玉	1.26	0.35	0.35	0.1	碧玉	孔径0.19cm
500	SK18	打製石鏃	1.6	1.6	0.2	0.4	安山岩		550	ST1	管玉	1.65	0.40	0.40	0.3	碧玉	孔径0.18cm
501	SK53	打製石鏃	1.7	1.3	0.2	0.3	安山岩		551	ST1	管玉	2.14	0.37	0.36	0.2	碧玉	孔径0.20cm
502	SK53	打製石鏃	1.6	1.3	0.3	0.2	黒曜石	姫島産	552	ST1	管玉	1.81	0.43	0.42	0.3	碧玉	孔径0.22cm
503	SK59	打製石鏃	1.9	1.8	0.3	0.7	安山岩		553	ST1	管玉	1.54	0.49	0.48	0.5	碧玉	孔径0.18cm
504	SK70	打製石鏃	2.3	1.8	0.6	2.0	安山岩		554	ST1	管玉	1.60	0.37	0.37	0.2	碧玉	孔径0.19cm
505	SK83	磨製石鏃	(2.4)	(1.4)	0.2	0.9	砂岩		555	ST1	管玉	1.55	0.40	0.40	0.3	碧玉	孔径0.18cm
506	SK106	打製石鏃	1.7	1.1	0.2	0.2	安山岩		556	ST1	管玉	1.57	0.36	0.36	0.2	碧玉	孔径0.18cm
507	SK109	打製石鏃	1.8	1.2	0.3	0.6	安山岩		557	ST1	管玉	1.55	0.35	0.35	0.2	碧玉	孔径0.15cm
508	SK109	打製石鏃	1.8	1.8	0.3	0.7	安山岩		558	ST1	管玉	1.21	0.36	0.36	0.2	碧玉	孔径0.15cm
509	SK109	打製石鏃	1.9	(1.4)	0.4	0.9	黒曜石	腰岳産	559	ST1	管玉	0.95	0.42	0.42	0.2	碧玉	孔径0.16cm
510	SK111	打製石鏃	(1.7)	1.5	0.3	0.5	安山岩		560	ST1	管玉	0.80	0.35	0.35	0.1	碧玉	孔径0.21cm
511	SK117	打製石鏃	2.1	1.6	0.4	0.5	安山岩		561	ST1	管玉	1.31	0.35	0.35	0.1	碧玉	孔径0.18cm
512	SK119	打製石鏃	2.3	1.9	0.4	0.9	安山岩	姫島産	562	ST1	管玉	1.22	0.45	0.44	0.2	碧玉	孔径0.18cm
513	遺構検出	打製石鏃	(1.7)	1.7	0.5	0.9	黒曜石	腰岳産	563	ST1	管玉	1.19	0.35	0.35	0.2	碧玉	孔径0.15cm
514	遺構検出	打製石鏃	7.3	1.9	0.9	5.2	黒曜石	姫島産	564	ST1	管玉	1.27	0.42	0.41	0.2	碧玉	孔径0.20cm
515	SC3	剝片	3.8	3.3	0.8	7.0	黒曜石	腰岳産	565	ST1	管玉	1.24	0.34	0.33	0.2	碧玉	孔径0.18cm
516	SU5	楔型石器	5.1	3.4	2.1	35.1	安山岩	姫島産	566	ST1	管玉	0.91	0.44	0.43	0.2	碧玉	孔径0.19cm
517	SU25	石庖丁	(5.5)	(6.5)	0.8	33.6	赤色頁岩		567	ST1	管玉	0.72	0.33	0.33	0.1	碧玉	孔径0.12cm
518	SK66	石庖丁	(4.7)	(7.5)	0.7	31.0	粘板岩		568	ST1	管玉	0.70	0.38	0.36	0.2	碧玉	孔径0.15cm
519	SK59	石庖丁	(6.2)	(8.8)	0.3	29.8	粘板岩		569	ST1	管玉	0.80	0.37	0.37	0.1	碧玉	孔径0.17cm
520	SC1	石庖丁	9.5	7.1	0.7	61.8	泥岩		570	ST1	管玉	1.04	0.35	0.34	0.2	碧玉	孔径0.19cm
521	SK102	石庖丁	(7.4)	(9.1)	1.1	124.4	粘板岩		571	ST1	管玉	0.91	0.37	0.36	0.2	碧玉	孔径0.17cm
522	遺構検出	石庖丁	(11.9)	(6.9)	(0.9)	127.2	粘板岩		572	ST1	管玉	1.15	0.38	0.37	0.2	碧玉	孔径0.18cm
523	SK128	磨製石斧	(8.4)	5.1	2.3	160	堆積岩		573	ST1	管玉	1.10	0.33	0.33	0.1	碧玉	孔径0.18cm
524	SU45	柱状片刃石斧	12.9	3.4	2.6	200	頁岩		574	SC4	管玉	1.15	0.39	0.38	0.2	碧玉	孔径0.22cm
525	SK87	柱状片刃石斧	(11.3)	3.0	3.1	160	頁岩		575	遺構検出	平玉	1.51	1.68	0.51	2.3	硬玉	孔径0.50cm

※ () は復元・残存値

2 B地区

B地区は厚狭川南岸の河岸段丘上に位置する。今回の調査対象地区は東西約70m、南北約20mで、近現代は階段状を呈する耕地として利用されていたため、遺構面は帯状に削平されており、西部から中央部は3段に分かれる。東部では背後の丘陵から厚狭川へと土石が流された痕跡が確認され、遺存状態は不良である。調査区の標高は最高点の中央部南端が90m、最低点の西部北端が87.3mで、標高差は2.7mである。

(1) 遺構

中央部では標高の高い南端で小さなピットから縄文土器の小片1点が出土しているが、この時期の遺構は確認されていない。調査区南側の丘陵上に集落が存在し、そこから流れ込んだ可能性もある。中段から下段へと落ちる斜面に古墳時代初頭の遺物を伴う土坑が1基検出された。

西部は遺構の密度が最も高い。下段で竪穴住居跡1棟が検出された。弥生時代終末期～古墳時代初頭のものともみられ、わずかではあるがこの時期に人々が生活していたことを裏付ける。中段には多数の柱穴と小型の土坑が検出されたが、遺物はほとんど出土していない。柱穴の多くは直径20cm程度のものであり、後世の攪乱を受けているため、掘立柱建物を復原するには至らなかった。上段では調査区外へ広がるとみられる掘立柱建物1棟が検出された。中段・上段で検出された柱穴の大部分は古代の所産と考えられ、小集落の存在が推測される。

東部では灰白色の粘土層の下に厚い礫層が堆積しており、明確な遺構面は確認できなかった(図73)。大量の礫は南側の丘陵から洪水等で流されてきたものとみられ、この層から古代の須恵器が出土した。北端では溝状遺構の一部と少数のピットが検出された。溝状遺構の東側は調査区外へ延び、西側は礫層から続く自然流路に切られており、全容は明らかでない。わずかに出土した須恵器も礫層からの流れ込みとみられ、時期を判断できるものとはいえない。

SC201 (図71、図版16)

調査区の西部北端に位置する方形プランの竪穴住居跡である。北側の大部分が削平を受けており、

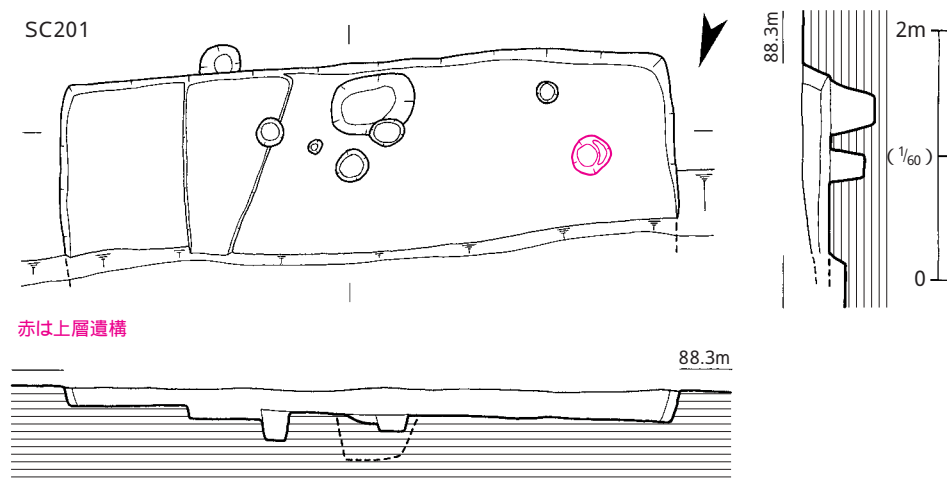


図71 B地区竪穴住居実測図

幅は最大でも1.5mしか遺存しないため全容は明らかでないが、長軸は4.9m、壁高は最深部で25cmを測る。床面は西にわずかに傾斜している。東半部は床面の基底部よりも5cm程度高くなっており、いわゆるベット状の形態を呈する。南壁面付近で柱穴と小土坑が検出されたが、明確な主柱穴は確認できなかった。埋土に含まれるわずかな土器片と住居構造から弥生時代終末期～古墳時代初頭の所産であると考えられる。

SK208 (図72、図版16)

調査区のほぼ中央に位置し、階段状に削平された斜面に検出された小型の土坑である。北半の上部は遺存しない。平面形は不整楕円形で長径90cm、短径50cm。断面形は逆台形を呈し、東壁はゆるやかに立ち上がる。南側の壁高は48cm。埋土は暗褐色粘質土の単層で、底面から10cmのレベルから土師器の高杯と甕が出土しており、古墳時代初頭の所産であると考えられる。

SB201 (図73)

調査区の西部南端に位置する掘立柱建物である。1.7m間隔で同軸上に並ぶ3本の柱穴は、西側からそれぞれ直径44cm×深さ28cm、直径44cm×深さ21cm、直径42cm×深さ28cmを測り、そのうち2本には直径14～16cmの柱痕が確認された。これらに直交する位置に直径34cm×深さ35cmの柱穴が検出された。南側の大部分が調査区外に広がるとみられ詳細は不明であるが、棟方向N19°W、桁行2間(2.8m)以上、梁行2間(3.4m)の規模と考えられ、時期は古代と推定される。

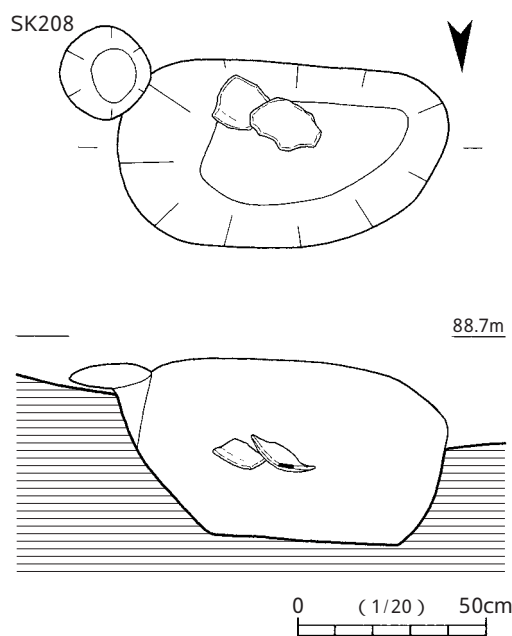


図72 B地区土坑実測図

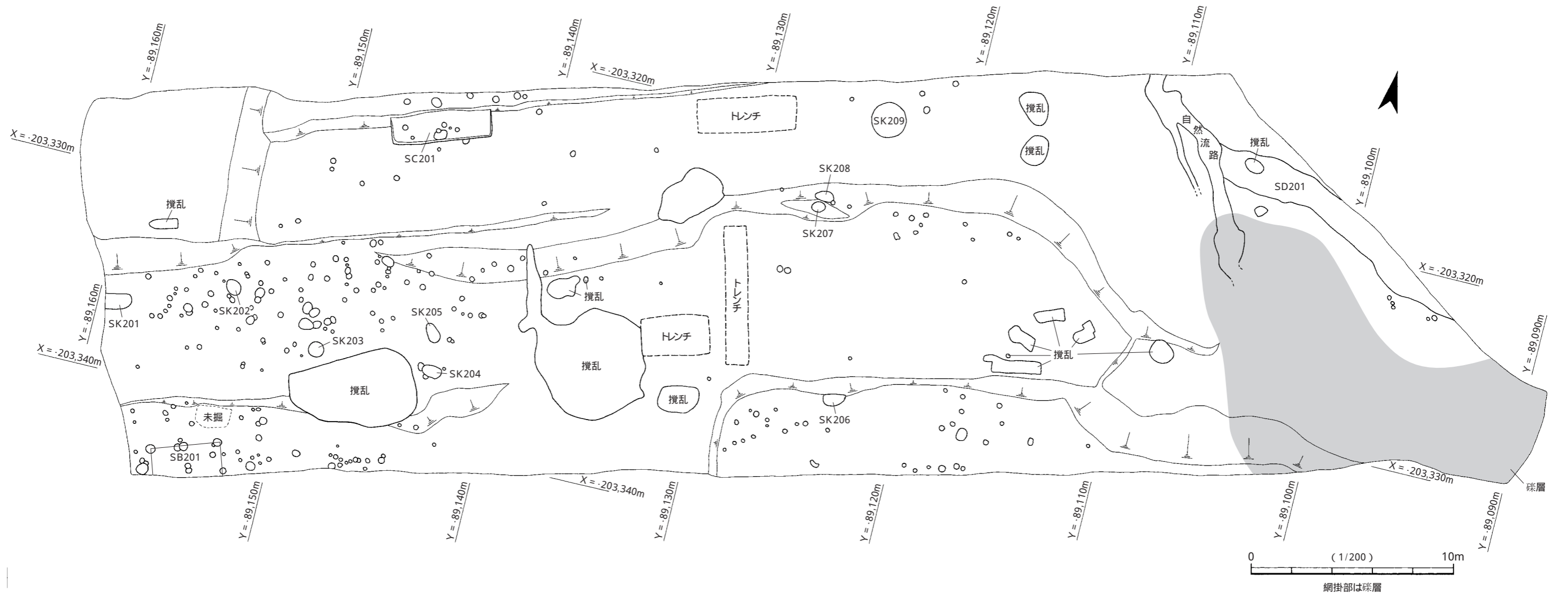


図73 遺構配置図 (B地区)

(2) 遺物

B地区からは縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器などが出土した。最も出土量が多いのは古代の須恵器であり、自然流路から出土したものがほとんどである(図74)。

1は須恵器杯蓋で、復元口径12.0cmを測る。内外面ともにロクロナデを施し、口縁端部は丸みをもって仕上げる。色調は外面灰白色、内面灰色を呈し、焼成は良好。自然流路から出土した。2は須恵器杯蓋で、復元口径14.4cmを測る。内外面ともにロクロナデで、口縁端部は明瞭に立ち上がる。内外面ともに灰色を呈し、胎土の砂粒は少なく、焼成も良好。表採品である。3は須恵器杯蓋片でSD201から出土した。内外面ともにロクロナデで、色調は灰白色を呈する。胎土の砂粒は少なく、焼成も良好である。4も須恵器杯蓋片で、表採品である。内外面ともにロクロナデを施し、灰白色を呈する。胎土の砂粒は少ないが、焼成はやや甘い。5は須恵器杯で、復元口径10.6cm、器高2.0cm、復元底径9.6cmを測る。内外面ともに灰白色を呈し、胎土に砂粒をわずかに含む。焼成はやや甘い。自然流路より出土した。6は土師器杯である。復元底径7.4cm、残存高2.3cmを測る。器面が摩滅しているが、おそらくロクロナデが施されていたものと見られる。内外面ともに浅黄色を呈し、焼成は軟質である。自然流路より出土した。7は須恵器杯身で、復元底径8.8cmを測る。内外面ともにロクロナデが施され、底部は貼り付け高台である。自然流路より出土した。8は須恵器杯身であり、復元底径9.2cmを測る。内外面ともにロクロナデを施し、底部は台形状のしっかりとした高台が作出されている。色調は外面灰色、内面灰白色であり、焼成は良好。自然流路より出土した。9も須恵器杯身であり、復元底径10.4cmを測る。内外面ともにロクロナデが施され、色調は灰色を呈す。胎土には砂粒を若干含み、焼成は良好。自然流路から出土した。10は須恵器杯身片であり、SD201より出土した。内外面とも灰色を呈し、焼成はやや甘い。これらの須恵器杯身・杯蓋は、その型式学的な特徴から8世紀中葉～9世紀にかけてのものであると考えられる。

11は須恵器大甕片であり、外面格子目タタキ、内面には同心円状の当て具痕が残る。焼成はやや甘い。自然流路より出土した。12も須恵器大甕片で、自然流路より出土。外面に格子目タタキ、内面に当て具痕が認められる。焼成は良好。13は須恵器大甕であり、復元口径37.4cmを測る。外面に2条の沈線が施され、口縁部内面には段が形成されている。色調は外面褐灰色、内面灰黄色を呈し、焼成は良好である。自然流路より出土した。

14は縄文土器片であり、SP209より出土した。内外面ともにミガキ調整で、色調は外面にぶい黄橙色、内面灰黄褐色を呈す。口縁部内外面には沈線が施され、リボン状突起が付されている。晩期中葉黒川式の浅鉢片である。

15は土師器高杯で、SK208より出土した。復元口径21.6cmを測る。杯部下位に不明瞭ながら屈曲部があり、口縁部はゆるやかに外反しながら立ち上がる。器面の摩滅が著しく、調整は不明瞭であるが外面の一部に刷毛の痕跡が認められる。色調は内外面ともに橙色を呈し、焼成は甘い。古墳時代初頭の所産である。16は土師器甕で、SK208より出土した。球形胴に近く、口縁部は強く屈曲するものとみられる。内外面ともに刷毛目調整の痕跡が明瞭に残る。色調は外面にぶい黄橙色、内面浅黄色を呈し、焼成は良好。古墳時代初頭に位置付けられる。

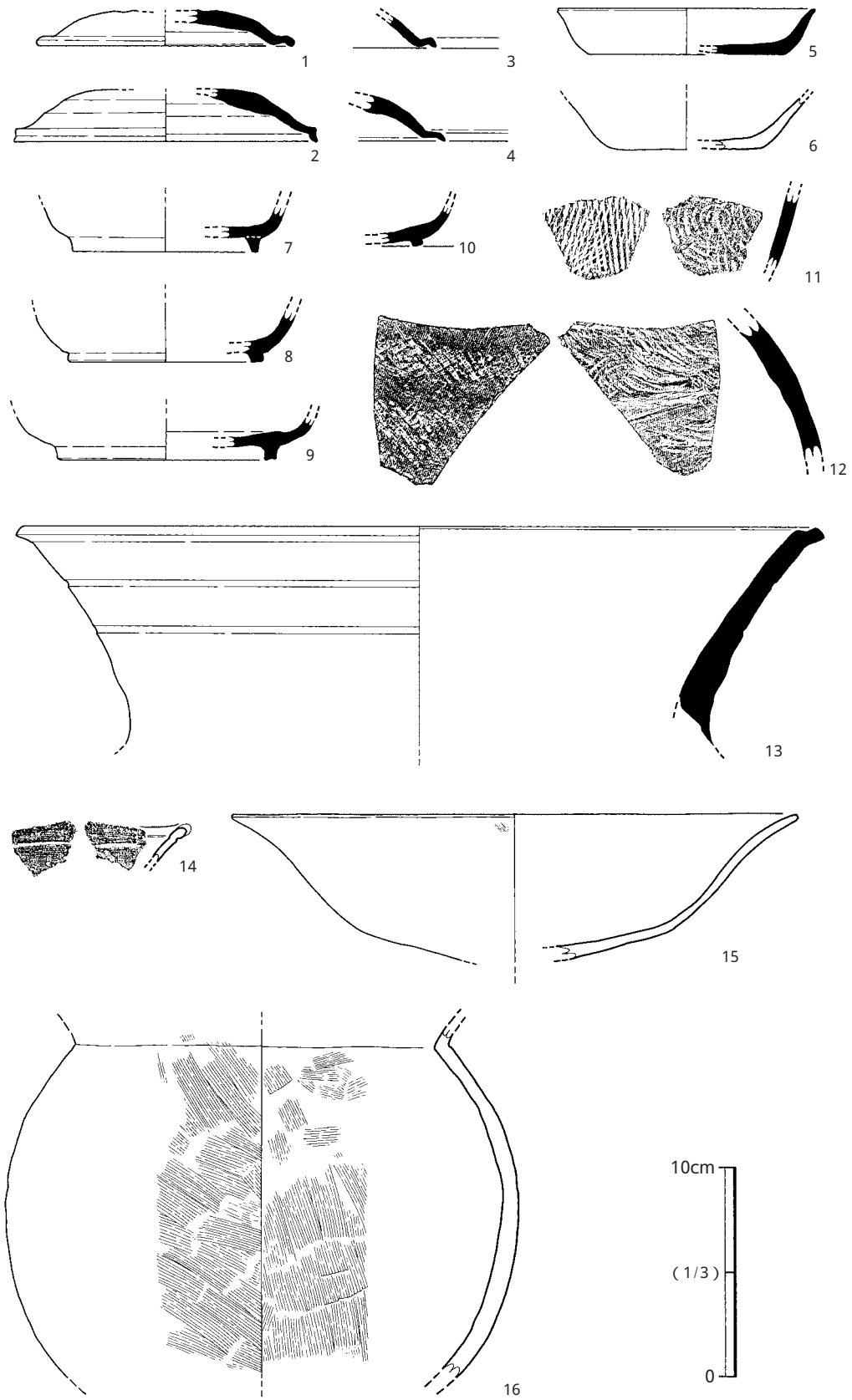


图74 B地区出土遺物实测图

IV まとめと考察

1 集落構造について

(1) 下村遺跡の集落構造

下村遺跡では、竪穴住居6棟、貯蔵穴約50基、土坑約150基、墓3基が検出された。こうした遺構の時期は出土土器から弥生中期初頭にはほぼ限定でき、集落構造を考察するうえできわめて良好な素材となる。以下、可能な範囲で集落の構造を分析してみたい。(図75)

竪穴住居は、調査区の南西側、中央部、南東側で検出されており、まとまった分布傾向を示さない。また、貯蔵穴についてもまとまった集中傾向を示さず、調査区全域にまんべんなく分布する。

注目されるのは平面長方形を呈する大型土坑である。詳細については後述するが、こうした土坑の一部からは炭化米あるいは雑穀が多量に出土しており、壁面には、被熱の痕跡が認められる。収穫した稲もしくは雑穀を何らかの意図で熱処理した施設と考えられ、等高線に沿うかたちで整然と配置されているものもある。このタイプの遺構については今後、機能や用途について検討を進める必要がある。

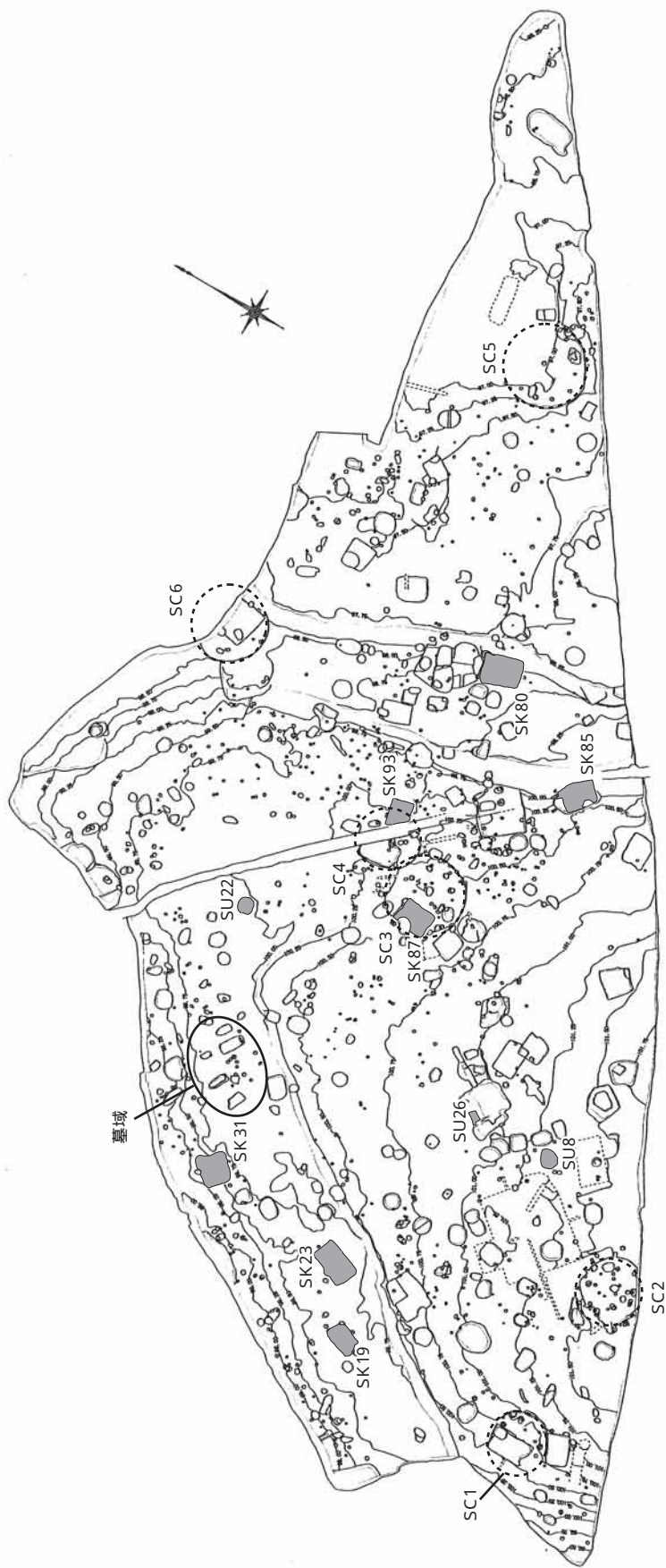
また、調査区の北西側で管玉を大量に出土した長方形土坑が検出されており、木棺墓である可能性が高い。これをST 1と命名しているが、この周辺にはこれと長軸方向をほぼ同じくする土坑群が存在しており、墓である可能性が高い。このことは集落内に墓域が形成されていることを示しているが、弥生時代、集落と墓は一般的に場所を異にして形成されることが多く、この点下村遺跡の事例は特殊である。

繰り返しになるが、下村遺跡の各遺構は弥生中期初頭というきわめて限定された期間に構築されており、前後の時期のものをほとんど含まない。しかし、住居跡や貯蔵穴が整然と配置されているわけではなく、空間利用のありかたが比較的ルーズであった印象を受ける。こうした集落構造が同時期の周辺地域でも同様であったのか、以下検討したい。

(2) 長門地域の弥生前・中期集落構造

長門地域においては、弥生時代の前期前半から、弥生集落の形成が始まる。とりわけ、下関市の川中地域や黒井・川棚地域では綾羅木郷遺跡や、吉永遺跡など拠点的な環濠集落が早い時期から存在し、地域社会の核となっている。また、下関市菊川に位置する田部盆地地域では前期後半段階から遺跡の形成が始まり、下七見遺跡のような拠点集落が出現する。

さて、こうした諸遺跡の集落構造を検討すると、前期前半～中頃までは明確な竪穴住居の存在が確認できず、貯蔵穴や土坑が限定されたエリアに集中的に構築されている状況を看取できる。竪穴住居が別のエリアに存在するのか、それとも削平されてしまって確認できないだけなのかは議論の分かれるところであるが、綾羅木郷遺跡明神地区(乗安：1988・西岡：1989)などでは貯蔵穴集中区の外縁に円形住居らしき遺構が確認されており、住居配置の一端を垣間見ることができる。竪穴住居の検出例は前期後半～中期初頭段階になると増加するが、田部盆地の上原遺跡(富士埜：1976)などでは、貯蔵穴あるいは長方形土坑を取り囲むように3棟の竪穴住居が検出されており、同じ田部盆地の下七見遺跡(村岡：1989・宝川：1992)、黒井・川棚地域の川棚条里遺跡(藤本：2005)(図76)でも、不明確ながら、土坑集中区域の縁辺に竪穴住居が配置されているように見受けられる。なお、川棚条里遺跡の竪穴住居は径6～7mで、中央土坑を有し、支柱穴は円形に配置される。規模、構造ともに



○ 竪穴住居

* アミカケは炭化植物種子出土遺構

図75 下村遺跡遺構配置図 (S=1/400)

下村遺跡の住居に類似するが、周溝を有する点で異なっている。また、いずれの遺跡も、集落内に小児棺が埋設される事例はあるものの、成人墓が構築されている痕跡はない。

こうした諸例は、下村遺跡における空間利用のありかたとは異なっているが、いずれの遺跡も集落全域を調査したわけではないので、ただちにその相異を強調するわけにはいくまい。但し、下村遺跡以外では、複数の土器型式が出土しており、一定期間、集落が継続したことが明らかである。下村遺跡の集落継続期間はきわめて短く、特異であり、この点については、地域社会全体の枠組みの中で追求すべき課題である。長門地域における弥生集落の研究は、十分な進展を見せていない。下村遺跡の事例を加えつつ、今後総合的な集落論が展開される必要がある。

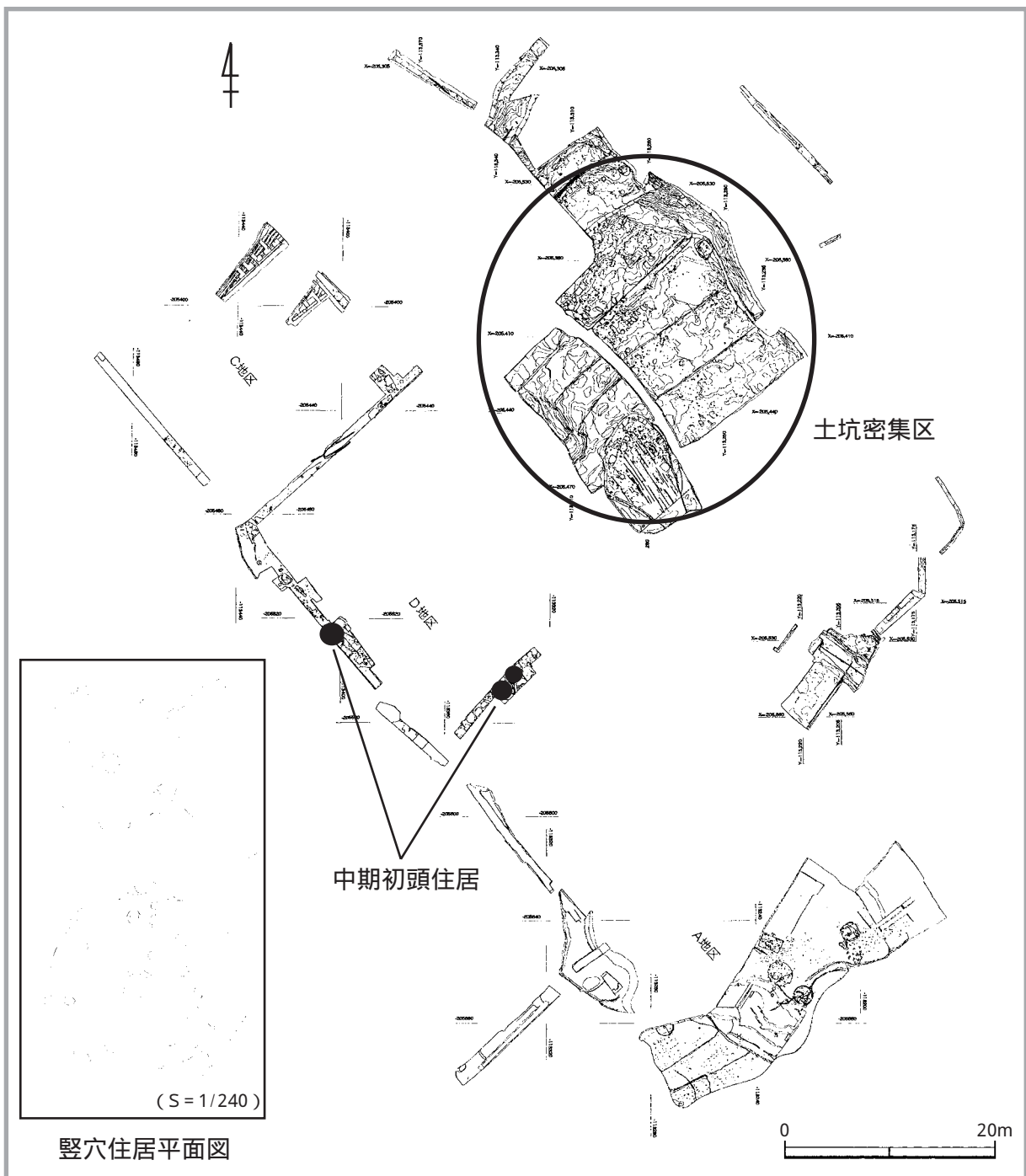


図76 川棚条里遺跡遺構配置図 (1/2500)

2 出土土器について

(1) 出土土器の年代的位置づけ

下村遺跡出土土器は、そのほとんどが弥生時代中期初頭に位置づけられる。内折口縁の壺、如意形口縁の甕を基本的な器種として型式が構成されている。かつて前期末の型式として位置づけられてきた綾羅木Ⅲb式の一部が中期初頭に下ることが指摘されて久しいが（山本：1993・田畑：1999）、このことは櫛描文土器の出現という広域編年上の指標が、すでにこの段階に認められることに起因している。当遺跡においてもSU29、SU40、SK66などで、櫛描文土器が出土しており、上記の言説を補強する事例として重要である。

ところで、下村遺跡出土土器の大部分が中期初頭に位置づけられることは事実であるにしても、各貯蔵穴、土坑出土の土器群を検討すると、そこにはやはり微妙な型式差・組成差が存在する。この問題について言及するために、まず遺構の切り合い関係を整理しておこう。土器の出土量が保障された遺構同士の切り合いとしては、SC03→SK87、SK82→SK10、SU50→SK106などがあるが、特にSK82とSK10から出土した土器の間には明確な差がある。すなわちSK82では内折口縁壺と頸部に3条沈線を施す如意形口縁甕が出土しているが、SK10では如意形口縁甕は1点のみの出土であり、甕のほとんどが口縁、頸部ともに無文のタイプである（仮に無文甕と呼称する）。このような無文甕は、中期前葉まで下る可能性もあるが、如意形口縁甕や内折口縁壺と共伴している点や、同遺構から鋤先口縁土器が出土していないことなどを踏まえると、中期初頭段階にはすでに出現していたものと見られる。このほかSU35においてもSK10に類似する型式内容が確認されており、当該期の細分編年を構築するうえで重要な資料と言えよう。

さらに、遺構単位の一括資料を基に出土土器細分の可能性について指摘したい（図77）。SC3、SU8、SK66、SK87から出土した土器群では如意形口縁甕（4～8）が主体であり、無文甕を含まない。壺も内折口縁で頸部が長いタイプ（1・2）が主体である。また、羽状文などの文様を施した壺片も多い。こうした型式内容をもつ土器群を様相1と呼称する。次に、SU16、SU25、SU29から出土した土器群についてであるが、如意形口縁甕（14・15）と無文甕（16・17）による甕組成となり、壺は内折口縁で、頸部が短いタイプ（9・11・12）の量が増加傾向にある。また、文様を施した壺（10）も確実に残存するが、量は減少している印象を受ける。こうした土器群を様相2としたい。そして様相3が先述したSU35、SK10に代表される資料である。甕組成は如意形口縁のもの（21）が極端に少なく、無文甕（22～24）が卓越する。壺は内折口縁で、頸部が短く、文様を施さないもの（18・19）に限定できる。

このように下村遺跡出土の土器群は、型式組成のありかたを重視すれば、3つの様相に区分できるが、このうち様相3としたものは時期的に後出するものと認定できる。問題は様相1と様相2が時間的前後関係にあるかどうかであるが、今回、該当資料すべてについて、型式別のカウントや、詳細な型式学的検討を行い得ていないので、速断することはできない。近隣地域の事例を含め、今後検討していきたい課題である。

ところで今回、こうした弥生中期初頭土器とともに出土した炭化米あるいは炭化物をAMS法によって年代測定した。詳細については付編を参照願いたいだが、おおよそBC4世紀前半～3世紀前半と

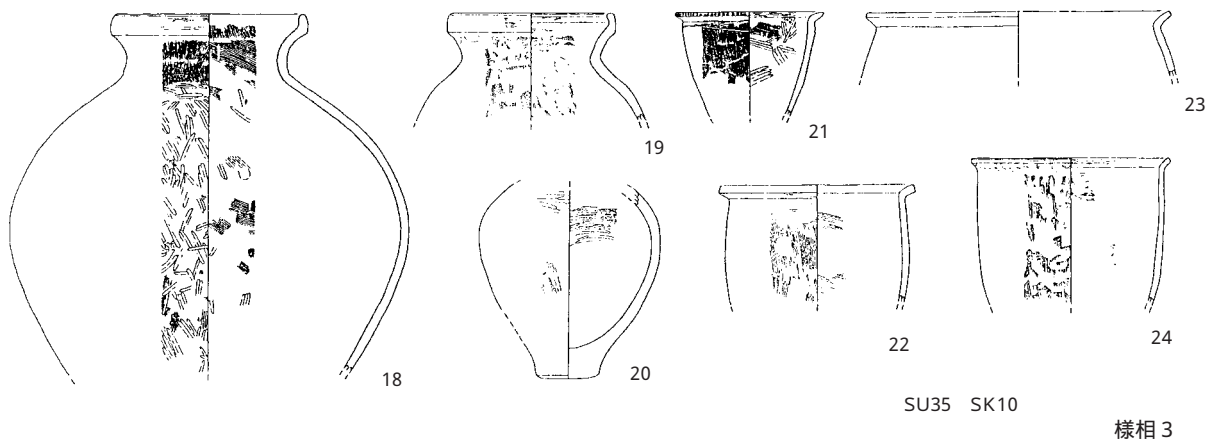
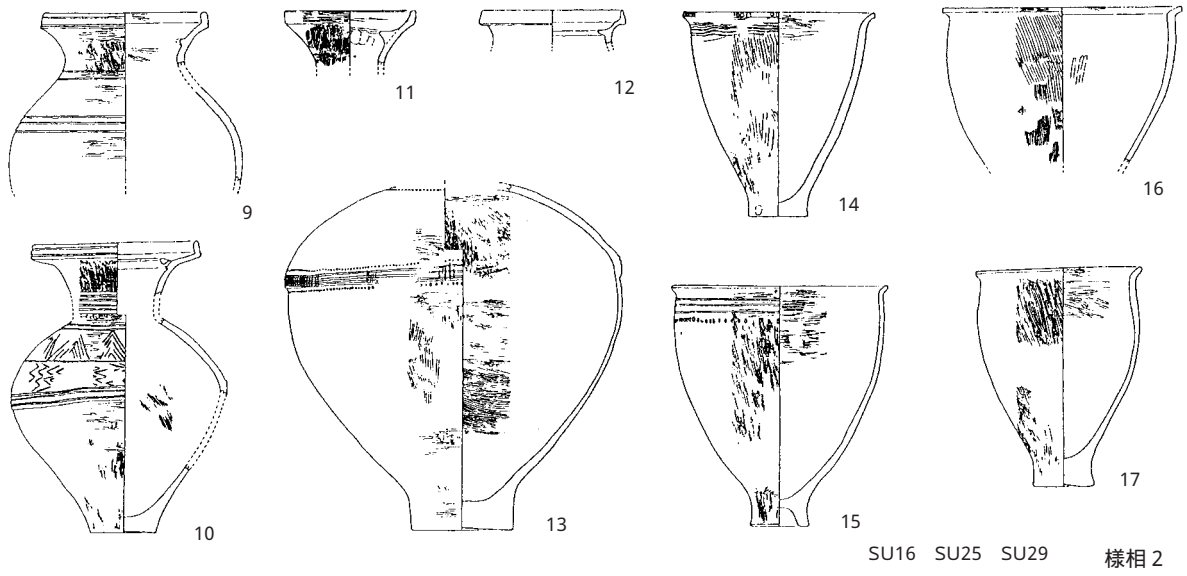
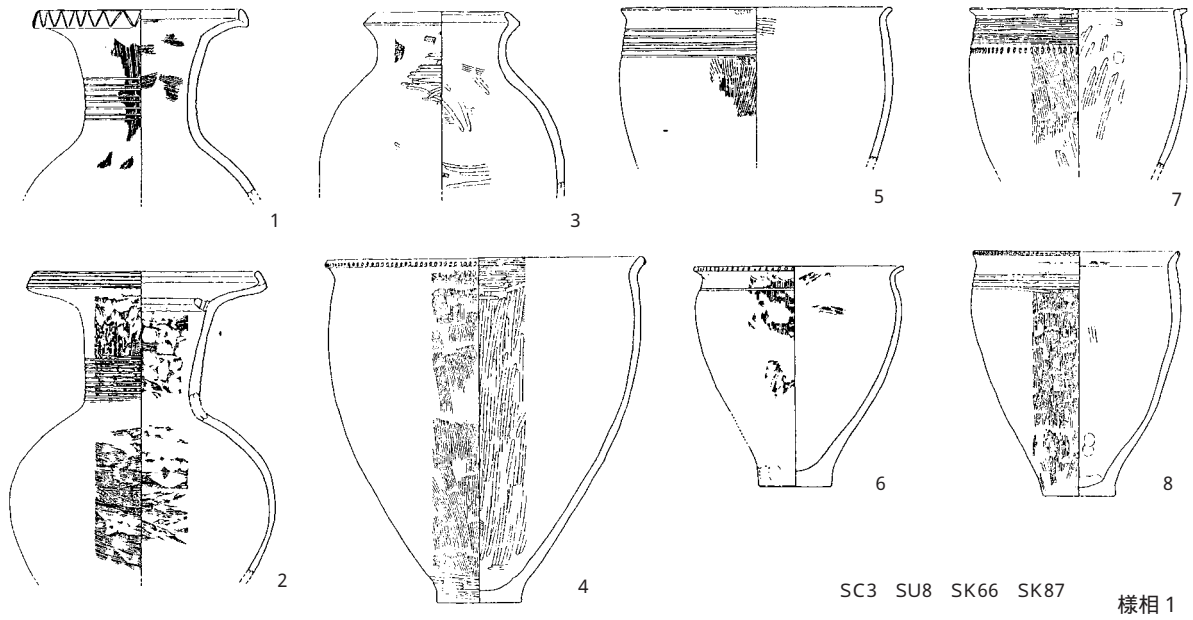


図77 下村遺跡出土土器の細分 (S = 1/8)

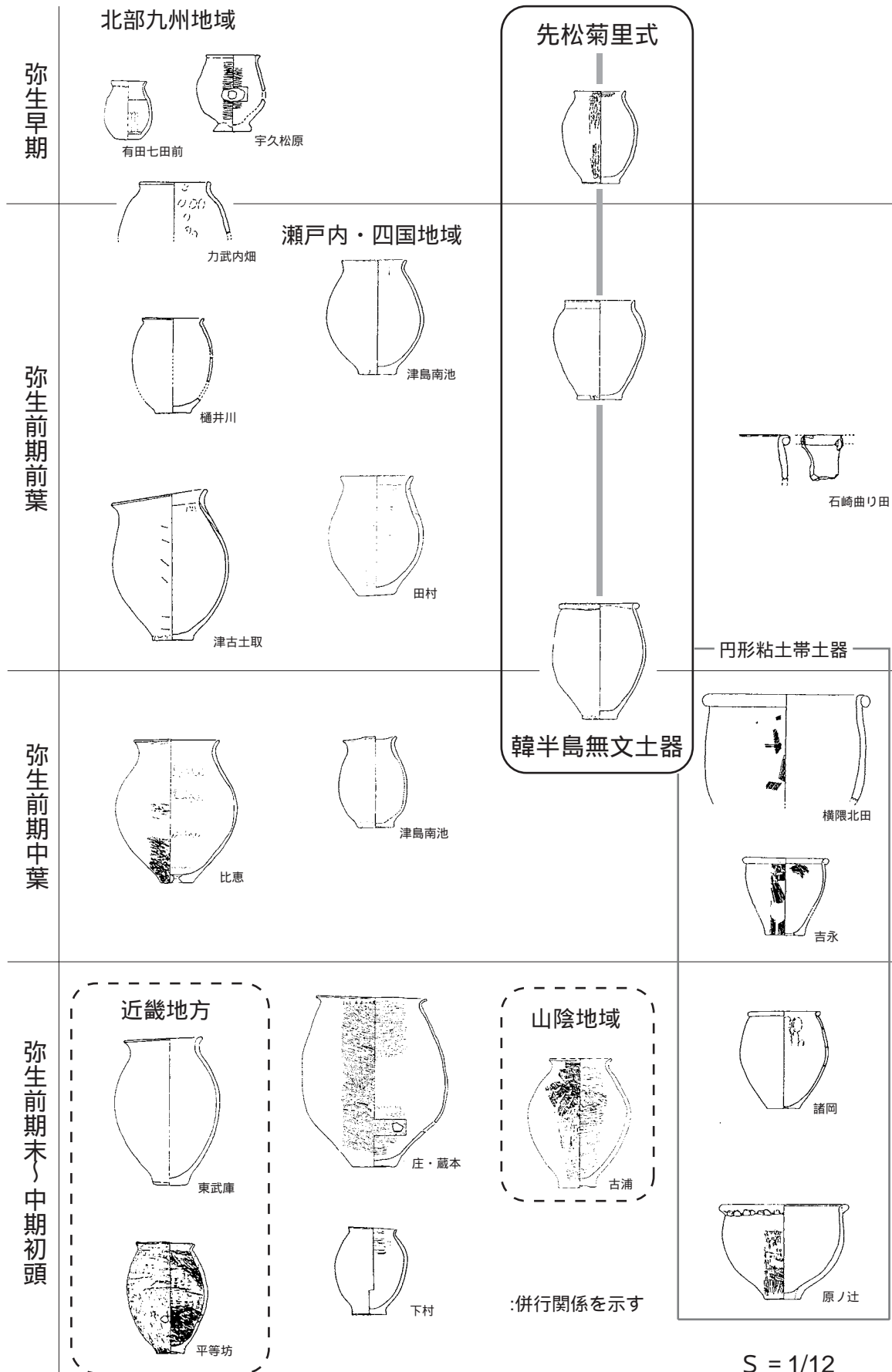
いう年代が出されている。これは近年、国立歴史民俗博物館が見直しを進めている弥生暦年代観に合致する。ただし、韓半島と日本列島における青銅器の比較から、弥生中期初頭の暦年代を BC 3 世紀後半頃とみる見解もあり（武末：2004 など）、この問題は未だ流動的である。さらに分析事例を蓄積するとともに、考古学的手法による研究を進め、年代を絞り込んでいく必要がある。

（2）松菊里式類似の土器について

SU32 から出土した小型甕は、韓半島の松菊里式土器に形態的には酷似している。外面は磨滅が著しく、調整は不明瞭ではあるが、わずかにナデの痕跡が認められる。内面は横方向の丁寧なナデが施されており、全体的に丁寧なつくりである。胎土には長門地域の前・中期土器に特徴的な赤色のクサリ礫が含まれていることから、搬入品でないことは明らかである。また、この甕に共伴する土器は、如意形口縁で頸部に1条の沈線を施す甕や、内折口縁の壺などであり、中期初頭に位置づけることができる。しかし韓半島無文土器中期に位置づけられる松菊里式土器は、日本では弥生前期前半に併行すると考えるのが従来説であり、今回の事例とは齟齬がある。この点について以下詳述したい（図78）。

日本列島で出土する松菊里式類似の土器は、筆者の編年観（小南：2006）では弥生早期-3 から弥生前期前葉-2 にかけて顕著に認められる。従来の編年で言えば夜白Ⅱ a 式から板付Ⅱ a 式に該当し、長崎県宇久松原遺跡、福岡県樋井川遺跡・津古土取遺跡・力武内畑遺跡、高知県田村遺跡、岡山県津島南池遺跡などの資料が該当する。分布範囲を見れば、北部九州地域を中心として中部瀬戸内地域までの広がりを持っており、農耕社会の成立、伝播という動きと関連するものと捉えられよう。韓半島の無文土器は松菊里式から円形粘土帯土器である水石里式へと移行し、これをもって中期無文土器と後期無文土器が区分されるが、支石墓の消滅や細形銅研を中心とする新たな青銅器組成が登場するなど、単なる土器型式の変化にとどまらない文化的な画期となっている。韓半島におけるこうした文化変動は、短期間で列島に波及する。前期前葉-1 の土器とともに出土した福岡県石崎曲り田遺跡例（橋口：1983）は位置づけが微妙であるが、福岡県三国丘陵地域における出土事例からすれば、前期中葉段階には円形粘土帯土器が日本列島に波及していたものと見られる。山口県においても下関市豊浦町吉永遺跡で、前期中葉～後葉の土器とともに円形粘土帯土器の模倣品が出土しており（向上：2003）、北部九州地域にさほど遅れることなく後期無文土器文化の一端が波及していたことが窺われる。ここまでは、日本列島・韓半島間の土器変遷は整合しており問題はない。しかし、下村遺跡の事例や、近畿地方の東武庫遺跡（山田：1995）や、平等坊遺跡（泉：1996）では畿内第Ⅰ様式末～第Ⅱ様式土器と共伴する松菊里式類似の土器が確認されており、併行関係上、齟齬が生じる。

この問題を解決するためには2通りの考え方を適用することができる。白井克也氏は、松菊里式土器と水石里式土器とともに「後期無文土器」の範疇としてとらえ、両者は時間的前後関係にあるのではなく、分布地域を異にして併存する土器型式であると解釈した（白井：2000）。この説に立てば、日本列島で松菊里式土器と水石里式土器が弥生前期前葉から中期初頭まで連続的に出土することを合理的に説明することができる。しかし、水石里式土器の分布は韓国全域に広がっていることや、前述したように松菊里式土器と水石里式土器に伴う文化要素は大きく異なっていることを考慮すれば、一部の重複時期はあるものの、基本的に両者は時間的前後関係にあると考えるのが妥当である。いっぽう武末純一氏は、松菊里式類似の土器が前期末～中期初頭土器と共伴する点について、粘土帯土器の



S = 1/12

図78 日本列島出土韓半島系無文土器の年代的位

時期にも松菊里式に特徴的な外反口縁甕が形式として残存することを理由として挙げている（武末：2003）。確かに水石里遺跡や金海大浦遺跡の住居跡からは水石里式土器と外反口縁甕が出土しており、説得力ある見解と言える。

ただし、上述したような見解を適用する以前に、前期末～中期初頭土器に伴う松菊里式土器は、そもそも本物なのかという点を問う必要がある。この時期の壺には、頸・胴部境界が曖昧化し、あたかも松菊里式に似た印象を与える資料が存在する。かつて豆谷和之氏は列島出土の松菊里式とされる土器について重要な発言を行っている。長くなるが以下引用したい。「私は近年西日本各地で報告が相次ぐ松菊里型土器というものに不信感を抱いている。そもそも、松菊里型土器の特徴とはなんなのか。なぜ、各地の松菊里型土器は完形品ばかりで、破片が識別されないのか。単に器形の類似を根拠にするならば、そこに土器論は成立しない。（中略）まずは朝鮮半島における松菊里型土器独自の成形なり調整手法を見だし、日本における類似土器の検討比較を行うべきであろう」と（豆谷：2000）。まさに、日本列島で出土する松菊里式土器研究の問題点を鋭く突いた至言である。いっぽう、西日本弥生文化成立期の墓制研究を精力的に進める中村大介氏は、半島の墓制の受容にからめて東武庫遺跡や庄・蔵本遺跡の松菊里式類似の土器を積極的に評価する（中村：2004・2006）。

このように、前期末～中期初頭における日本列島出土の松菊里式土器の評価はきわめて難しく、韓半島での研究状況に常に注意を払いつつ考究されるべき課題である。下村遺跡では、鹿を描いた絵画土器も出土しており、そこに韓半島の影響を見出すことは可能であるが、SU32から出土した松菊里式類似の土器をもってこのことを強調することには禁欲的でありたい。

（3）絵画土器について

SU25から出土した鹿を描いたと見られる絵画土器は、型式学的特徴から見て弥生中期初頭に位置づけられる。弥生時代の画題が明らかな絵画土器としては国内最古級であり、弥生絵画の成立や伝播経路を考えるうえできわめて重要な資料である。ここでは北部九州地域～西部瀬戸内地域における絵画土器ならびに関連資料と対比させつつ、下村遺跡出土絵画土器の意義について考察したい（図79）。

弥生時代早期・前期土器に描かれた「絵画」については、小林青樹氏による集成と分析がある（小林：2002）。しかし、これらの資料は弥生絵画土器一般に認められる明確な画題を持っておらず、分布も近畿・東海地域に集中するようである。北部九州地域では、福岡県志摩町新町遺跡出土の大型壺頸部に稲らしきものが描かれたものがあり（志摩町教育委員会；1988）、弥生前期前半にあたる。

前期後半においても、明確に「絵画」と規定できる資料はない。しかし、東北九州地域から西部瀬戸内地域にかけて分布する高槻式、あるいは綾羅木式と呼称される有文土器には縦方向の沈線と羽状文を組み合わせて稲穂を表現しているのではないかと考えられる資料が存在する。さらに、こうしたモチーフ状の表現から一步進んで、より絵画的な表現を行っているものが山口県宮原遺跡（山口県教育委員会：1973）において認められる。また、羽状文の組み合わせを若干変えることによって魚を表現したとみられる資料が綾羅木郷遺跡に存在する（近藤・乗安：2000）。こうした資料は現在、弥生絵画として積極的に認定されている訳ではないが、当時の人々にとっては理解可能な「絵画」であったのであろう。

次に絵画ではないが、前期後半に出現するモチーフとして重要なのが「鉤状文」である。鉤状文に

については常松幹雄氏の研究があるが（常松：2001・2006）、北部九州地域の日常土器、甕棺ともに採用されているようである。ただし、前期後半段階の鉤状文は主に突帯で立体的に表現されており、沈線で表現された中期以降のものとは若干異なる。東北九州・西部瀬戸内においても綾羅木郷遺跡のように、鉤状文をしかも沈線で表現した資料が存在する。常松氏によれば、こうした鉤状文は、単鉤と双鉤に分類され、土器のみならず青銅器にも採用されており、「靈魂」から派生する鉤、あるいは辟邪の意味を持つものであるという（常松：2006）。筆者にはこうした鉤状文の意図するところを読み解く力量はないが、こうした文様の初源が北部九州地域であり、それがほぼ同一時期に綾羅木郷遺跡など、西部瀬戸内地域にまで伝播していることを重視したい。そしてさらに、北部九州地域では突帯表現であったものが、東北九州や西部瀬戸内では沈線表現へと変容されていることは、モチーフの受容が決して画一的なものではなかったことを示していると言えよう。

弥生絵画として確実なものは中期初頭段階に出現する。佐賀県唐津市天神ノ元遺跡（仁田坂：2004）、福岡市吉武高木遺跡（横山：1998）の甕棺に描かれた鹿がそれであり、今回下村遺跡で出土した事例もこれとほぼ同時期である。天神ノ元例は、鹿と鉤状文を配置したものであり、確認されている範囲では2頭の鹿が認められ、吉武高木例は、2頭の鹿が上下に、頭部方向を違えて描かれている。いずれも描出方法は、沈線によるもので、シンプルな絵画である。これに対し、下村例は体部が三日月状を呈し、絵画表現としてはより具体的なものとなっている。

鹿は弥生絵画では最も多く採用されている画題であるが、縄文時代において鹿を描いている絵画資料は極めて少ない。いっぽう韓半島の青銅器には鹿もしくはオオツノジカが描かれている例があり（南城里遺跡剣把形銅器・伝慶州出土銅製飾板など）、これらが日本列島における弥生中期初頭絵画の起源である可能性は高い。弥生中期初頭段階は、吉武高木遺跡3号木棺墓副葬品に代表されるように、剣・矛・戈という青銅武器の3点セットが定着する時期であり、こうした青銅器文化複合体の一部として絵画の情報が北部九州地域にもたらされたものと考えられる。そして、その情報はほぼ同じ時期に下村遺跡が所在する西部瀬戸内まで伝播していた可能性が強く、しかも描出手法としては変容を遂げている。これは先述した鉤状文のありかたと全く同じであり、特殊なモチーフあるいは絵画の伝播パターンとして認定できるのかもしれない。なお、鹿の絵は北部九州地域において中期前葉段階、甕棺の胴部に描かれる場合もあるが（大木遺跡・三沢ハサコの宮遺跡）、草場遺跡例（水ノ江：1996）のように日常土器の底部に描かれることもある。また、中期後葉の例ではあるが東北九州の長野角屋敷遺跡（山手：2001）では、胴部を三日月状に表現した鹿が日常土器に描かれている。

下村遺跡の絵画土器は、大型壺の胴部上位に鹿が描かれたものであるが、この壺は口縁部内面に羽状文を施している。管見に触れる限りこうした資料は存在せず、きわめて特殊な土器であったと考えることができる。吉武高木や天神ノ元の例は、死者を葬る甕棺に鹿が描かれており、そこには世を辞した者への鎮魂と再生への祈りが込められていたと解釈されている（常松：2006）。下村遺跡の絵画土器はこうした埋葬用の土器ではないが、前記した特殊性に鑑みると祭祀用に作られたものであると推測される。春成秀爾氏はかつて鹿が土地の精霊であり、鹿を描いた土器は秋の収穫祭で用いた土器、あるいは秋に収穫したばかりの稲穂を容れた土器であると解釈した（春成：1991）。下村例の口縁部内面に描かれた羽状文は、稲穂を表現した可能性もあり、春成の言説には共感をおぼえる。

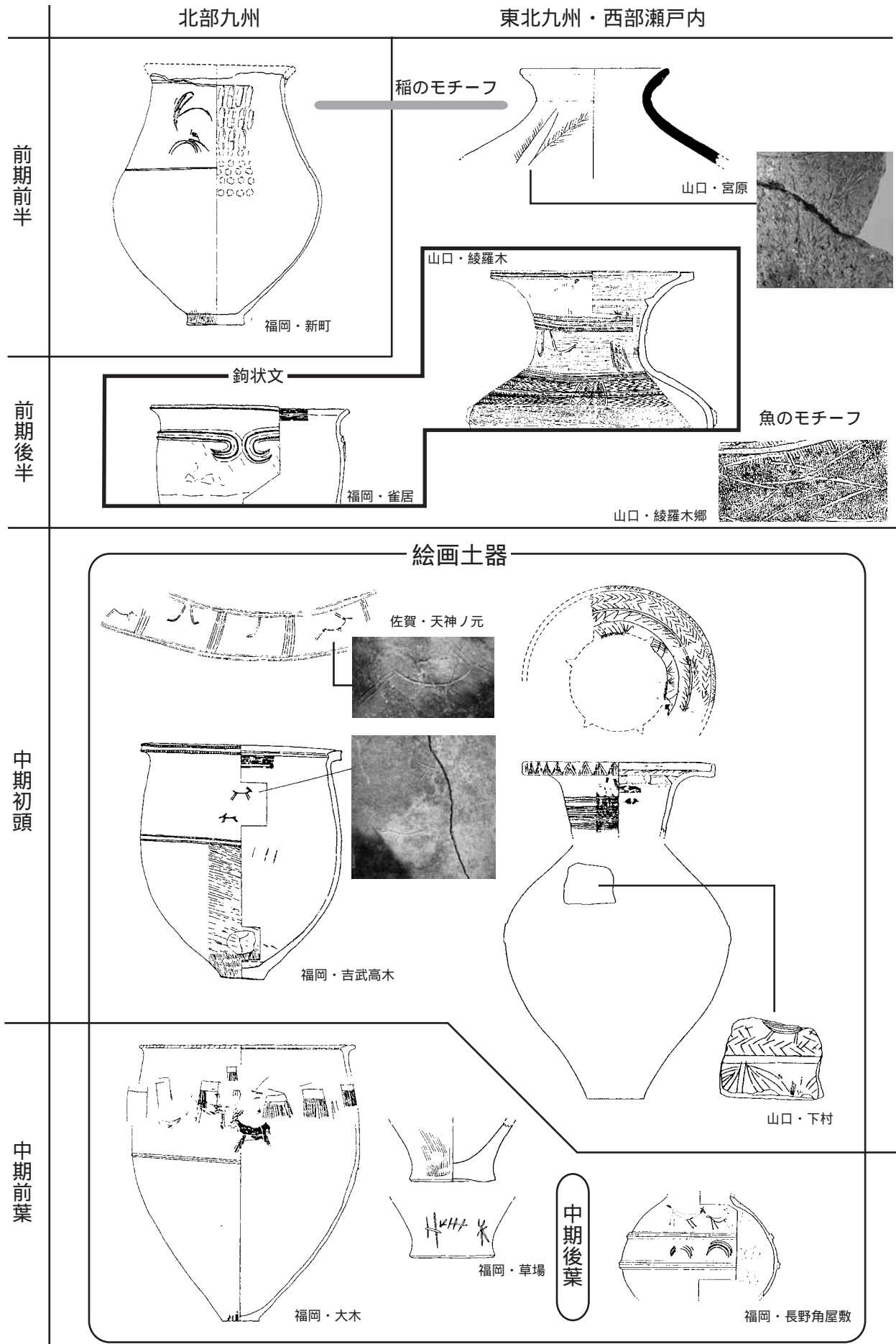


図79 弥生時代初期の絵画資料 (縮尺不同)

3 出土石器について

(1) 剥片石器の分析

下村遺跡において最も出土量が多いのは石鏃である。用いられている石材は安山岩が圧倒的に多く、黒曜石のものは少ない。安山岩製の明確な石核は出土していないが、剥片の量は多く、遺跡内で石鏃の製作が行われていたのは確実である。この安山岩は肉眼観察によれば金山産サヌカイトである可能性が高いが、そのほか姫島産のハリ質安山岩と考えられるものも含まれる。表10は剥片石器ならびに剥片の重量比をグラフ化したものであるが、安山岩もしくはハリ質安山岩の量が圧倒的に多い。このほか姫島産黒曜石、腰岳産黒曜石も存在するが、その量は極めて少ない。西部瀬戸内地域においては、縄文時代晩期中葉以降、姫島産黒曜石の利用率が減少し、安山岩・サヌカイトの量が増加する(小南：2003)が、こうした傾向は弥生時代になっても続き、下村遺跡も例外ではない。

ところで、下村遺跡において、石鏃の石器組成中に占める割合は非常に高い。かつて佐原真氏は西日本弥生時代中期における石鏃の重量化と、高地性集落の出現を関連付け、戦争の存在を想定した(佐原：

1964・1975)。しかし下村遺跡における、石鏃の重量は佐原氏が「武器としての石鏃」の基準とした2gを超えるものはほとんどなく、その出土量の多さを戦争と直結させるわけにはいかない。

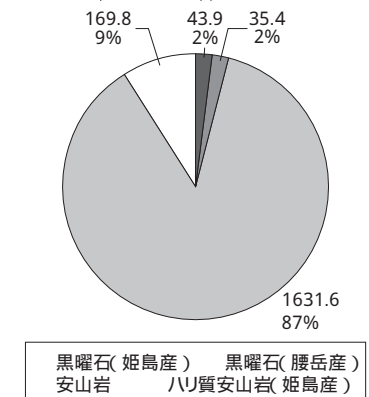
西谷大氏は、焼畑や水田の穀物を荒らすトリやネズミを捕獲し、それを生業戦略の一部に取り込んでいる民俗事例を紹介した(西谷：2003)。下村遺跡で大量に出土した石鏃も、水田や畑に群がってくる小動物の捕獲に用いられていた可能性を考慮する必要がある。

(2) 礫器について

下村遺跡では礫器として認定できる資料が数点存在する。このうちの3点を図示したが、いずれも安山岩・玄武岩系石材の礫を素材としており、粗雑な刃部が形成されている。こうした礫器は、綾羅木郷遺跡、下七見遺跡等で出土しており、かつては前期・中期旧石器として扱われていたこともあった。しかし、こうした礫器は弥生時代の遺跡でしばしば出土するものであり、古く位置づける積極的な根拠はないと筆者は考えている。弥生時代の石器研究は、これまで大陸系磨製石器を中心として進められてきた。その過程で、礫器などの不定形石器は研究対象から除外され、漠然と「古いもの」であると解釈されてきた傾向が否めない。筆者らは綾羅木郷遺跡出土石器の再整理を行い、今まで前期・中期旧石器と考えられてきた資料が、弥生時代の小型ドリル製作に関連するものであることを明らかにした(小南・村田：2005)。さらに綾羅木郷遺跡においても礫器あるいは剥片素材の粗製刃器が存在することが判明しており、こうした石器が少数ながらも組成の中にも含まれることは確実である。

こうした礫器の用途については、今後使用痕分析などを通じて検討していく必要があるが、基本的にはその重量を生かして、ものを叩き割る道具ではなかったかと推定される。縄文時代早期段階に東九州の一部地域では、こうした礫器が盛んに製作されたことが判明している(荻：1999)。無論、こうしたものが弥生時代に認められる礫器の祖形となったわけではないが、このような単純な技術で製作された石器が、鉄器普及の直前まで命脈を保っていたことは重要な事実と言えるだろう。

表10 下村遺跡A地区出土石材重量比(石器・剥片)



4 炭化植物について

下村遺跡のA地区では炭化植物が多量に検出された。その量は膨大であり、SU 8の炭化植物種子（以下本文では種子と略す）を除き、全てを持ち帰ることができなかった。また炭化植物の鑑定はほとんど種子に限定して行っており、木材については不明なものが多い。ここでは種子及び出土した遺構について簡単に述べる。なお出土種子の同定については宇都宮宏氏（山口大学大学教育機構講師 作物環境生態学専門）に依頼した。

(1) 炭化植物の種類

下村遺跡から出土した種子はイネ、クリ、ダイズ、アズキ、ヤブツルアズキ、ヒエの6種類である。いずれも炭化状態であると同時に煤けた状態で出土した。イネは小粒形の円粒種である。玄米状態のものは多く見られるが、依存状態が良く固まって出土したものは粃状態である。元来は粃状態で置かれたものと考えられる。クリも堅果の状態で出土した。子実の大きさにばらつきが見られ、野生クリの可能性が高い。ダイズの子実 は原形を残すものが少なく、火熱の影響のために破裂・破損しているものが多数見られる。これに対してアズキの子実 は比較的原形を保っているが、大きさのばらつきが見られる。ヤブツルアズキは野生種であるが、アズキと同様に原形を保っている。ヒエの子実の形にも多少の差が認められるが、ダイズやアズキを含めて比較的良好な生産状態であったと推測される。これらについては栽培あるいは採集という手段で得られたものであると考えられる。このほか、唯一判明した木材としてメダケがある。

(2) 種子出土遺構と出土状況

種子を出土した遺構は表11の通りである。その中でもSU 8、SK80・93からは大量に出土した。柱穴を除くと土坑や貯蔵穴に限定され、堅穴住居からは出土していない。出土した貯蔵穴や土坑の平面形態は、いずれも方形プランである。これらは小型の貯蔵穴と、本章で「大型土坑」と呼ばれる大型の土坑とに大別できる。

表11 下村遺跡炭化植物種子出土遺構一覧表

出土遺構	規模	イネ	クリ	ダイズ	アズキ	ヤブツルアズキ	ヒエ	容器敷物	壁焼け	備考
SU 8	小型	●	●	●	●	●		●壺	▲	上層より土器大量出土、種子堆積層に幼虫
SU22	小型	●			●					
SU26	小型	●	●		●	●		●木材		
SK19	大型	●	●	▲						
SK23	大型	●								
SK31	大型	●							●	
SK80	大型	●							●	
SK85	大型	●								
SK87	大型	●	●				●		●	上層より土器大量出土
SK93	大型	●	●						●	
SP63	小型			●						

●…属性に該当する ▲…属性に該当する可能性がある

出土遺構の立地状況から判断すると大型の土坑は2群に分かれる。すなわち調査区北西に位置するSK19・23・31と、ほぼ中央に位置するSK80・85・87・93である（図75参照）。前者をA群、後者を

B群と仮称すると、A群は調査区内の低位に位置し、周辺の遺構密度は薄い。SK31は木の根に一部切られるが、いずれも平面プランは長方形と考えられる。主軸方向は共通し、等高線に平行する。これに対してB群の多くは遺構密度が濃いところに位置する。平面プランは長方形を呈する。遺構の長さは3～4 m、幅は2～3 mでA群のものとはほぼ同じ規模である。深いものでは約70cmを測る。主軸はSK93がほかの遺構と大きく異なる。また小型の貯蔵穴はA・B群から一定の距離を保ったところに位置する。3基しか見つかっていないが、SU 8・26とSU22に分けることも可能である。

種子との関係では、イネは柱穴以外の全ての遺構で確認され、イネのみ出土した土坑も見られる。アズキ、ヤブツルアズキは貯蔵穴、ヒエはSK87のみで確認された。ダイズも貯蔵穴に限定される可能性がある。攪乱や削平を受けた遺構もあるが、種子の種類は遺構規模などに反映されている可能性がある。

下村遺跡出土の多くの種子は床面に接する状態で堆積していた。種子は異種同士が接することはあっても、各種類で固まっていた。貯蔵穴には種子を入れた容器や敷物を示唆するものが検出された。以下、貯蔵穴と土坑の出土状況をいくつか挙げることにする。

SU 8からは5種類の種子が出土した(図8、図版7参照)。床面からやや浮いた状態の壺にはダイズのみが詰まっており、流入土の堆積は認められない。また壺の頸部内面は2次的な火熱などによって燻べている(写真1)。

イネ、クリ、アズキ、ヤブツルアズキは大小3群に分かれて出土した。中央付近の大きな一群では、4種類の種子がまとまった状態で床面直上に堆積していた。その周囲や上面では焼土や炭が多く混ざる粘質土が検出された。床面西側の小土坑はこの一群の範囲と重複し、その床面からも種子が堆積している。そのためこの土坑は種子を置くことに関連したものと考えられる。ほかの小さな2群は床面から若干浮いた状態で出土した。また種子とともに、メダケが散在して出土した。欠損した小片である(写真2)。ねじれた状態のものが多く見られ、編んで用いた可能性がある。ただし、ダイズ以外の種子は床や埋土に直接堆積しており、容器や敷物としての機能は考えにくい。識別できた範囲では種子の検出面で多く確認されており、むしろ上から被せるものであった可能性がある。



写真1 ダイズを入れた壺



写真2 メダケ

SU26は攪乱によって遺構の半分は破壊されていた。しかし遺存状態の良い部分では東側にクリ、

西側にイネ、アズキ、ヤブツルアズキが分かれて出土し、種子堆積層の上層の焼土は非常に硬く締まっていた。またクリの下で炭化材が検出された。遺存状況は悪いが、クリの容器や敷物と思われる。

SK80からは最も多い量の種子が出土したが、イネに限定される。大半は床面に直接堆積していた(図17、図版12参照)。この堆積層はSU 8とは異なり、硬く締まっていた。これより上層のイネは、大きな固まりとして出土することはない。また南と西の壁面には火熱を受けた痕跡が見られた。これらは床面直上の種子堆積層より上のレベルで確認された。しかし床面では焼けた痕跡は確認されなかった。なお床面全体に種子が堆積している点はSK93も同様である(図18、図版12参照)。

SK87では、床面直上の薄い焼土・炭の含有層の上からイネ、ヒエ、クリが出土した(図17、図版12参照)。このほか床面に接した状態や、浮いた状態でもイネが小さく固まって出土した。いずれも焼土含有層と接しており、土層図の中央の一群に焼土を大量に含む5層が入り込む状況である。このような状況はSK31でも見られる。

(3) 炭化植物種子出土遺構の機能について

下村遺跡のSU 8から出土したダイズは壺に入れられており、床面に堆積しているほかの種子も含めて食用目的の貯蔵と考えられる。これらの上層からは大量の土器が一括廃棄された状態で出土した。貯蔵→ごみ捨て場へと機能が変わっていることが推定される。種子の検出面からは炭化材や焼土も多く見られた。貯蔵された種子が虫害や黴などの理由で食べられなくなれば焼却した可能性もあるが、逆に食べられるものであれば火熱で燻すなどの虫害対策の可能性も考えられる。壺の内面や中のダイズの火熱を受けた痕跡はそうした状況を物語るものかも知れない。このほかSU26からもクリの敷物ないし容器と考えられる炭化材が出土しており、食料貯蔵の機能が考えられる。SU22は少量で不明であるが、先の2例を踏まえると、小型である貯蔵穴には食料貯蔵の機能を認めて良いだろう。

これに対して大型の土坑には種子の下に何かを敷いた痕跡は見られず、多くは床面に直接堆積していた。火熱を受けた遺構が多く見られるが、いずれも壁面に限定される。遺構の乾燥目的で壁だけを焼いたとは考えにくい。むしろ種子に関連した火熱使用の痕跡であろう。さらにこれらの遺構からは大量の焼土も出土した。そのうちSK87の西側のSK10からは被熱した板状の粘土塊が出土しており、残存最大長約20cm、厚さ約5cmを測る。強く被熱している表側では凹凸が多く見られるが、裏側は平坦に近い面状をなす。これに類似したものがSK31・80からも出土した。どちらも遺存状態は悪いが、SK31から出土した粘土塊には植物繊維と思われる付着痕が確認され、土坑の機能解明につながる可能性もある。また同様の資料は遺構検出時にも確認されている。

土坑に堆積した種子が食べられない状態であれば、焼却機能と考えるのが妥当であろう。出土したイネやクリには虫害と思われる穴が確認された。またSU 8からは害虫の可能性のある幼虫も数匹確認した。収穫物のうち、食べられない状態の食料は十分存在しうる。床面に堆積した大量の種子が焼却されたのであれば、集落の短期間での廃絶にも関わるかも知れない。しかし土坑から出土した膨大な種子の多くが食べられない状態とは考えにくく、これらの土坑の全てを焼却機能に位置付けることは難しい。

食べられる食料ならば、収穫して食べるまでの過程に機能を求められる。収穫時に何らかの祭祀行為をした可能性もあるが、祭祀に用いたにしてはあまりにも量が膨大である。遺存状態の良いイネが

籾状態で出土したことは、種子を直接燃やすのではなく、間接的な火熱を加えることを意図した可能性が高い。また虫害と思われる痕跡が確認され、当時の人々がそれに対して何らかの処置を施していたならば、SU 8で推測したような熱や煙で害虫を駆除したということも考えられる。

貯蔵穴と大型土坑の両者は、立地状況や2倍近い規模の差を勘案すると全く同じ機能を有していたとは考えにくい。貯蔵穴に貯蔵機能をあてはめると、大型土坑の機能としては貯蔵する前段階の脱穀作業や害虫駆除、それに仮置き施設などが候補に挙げられ、その際に火を用いた行為をしていることになる。また一部については廃棄して焼却する場合もありうる。いずれにせよ現時点では機能・用途を1つに断定するのは困難である。今後の資料追加に期待するところが大きい。

(4) 周辺遺跡との比較

県内の弥生時代の遺跡からは種子を出土した遺跡が点在している。下関市綾羅木郷遺跡では弥生時代前期から中期にかけて、防府市大崎遺跡(山本・三戸田編:1985)では中期の貯蔵用と思われる堅穴がまとまって見られる。堅穴以外から出土した種子を含めると、綾羅木郷遺跡からはイネ、アワ、ヒエ、キビ、アズキ、クリ、イチイガシ、モモ、ウメなどの出土が報告されている。また大崎遺跡からイネ、クヌギ、コナラ、ツブラジイの出土が報告されている。綾羅木郷遺跡については不明な部分もあるが、本遺跡に近い時期で食用種子が出土した堅穴はほぼ円形プランである。断面形も大崎遺跡では本遺跡のような上面・床面径が同じタイプも見られるが、両遺跡で袋状ないしフラスコ状のものが確認されている。

これらの例からも分かるように、本遺跡の種子出土遺構と時期を前後する頃、県内遺跡では円形プランで袋状ないしフラスコ状の堅穴から種子が出土するケースが多い。すなわち本遺跡の方形プランは数の上では少数例である。しかし方形プランにおいても貯蔵施設と考えられる遺構が事例として追加されており(森下:1986)、同時期の方形プランの資料は今後増加するであろう。ただし本遺跡のような大型土坑の床全体に種子が堆積した例はなく、もっと広い地域において検討する必要がある。

5 総括

以上、下村遺跡における集落構造、出土土器・石器・炭化植物について検討をおこなってきた。本遺跡は弥生中期初頭というきわめて限定された時期の集落跡であり、絵画土器が出土するなど、美祢盆地では核となる存在であったと考えられる。今後、本遺跡の資料が有効に活用され、弥生地域社会の動態がより鮮明になることを期待したい。また、今回はA地区の調査成果ばかりを強調したきらいがあるが、B地区においても、弥生時代終末～古墳時代初頭、古代の小規模集落が確認されている。特に出土した古代の須恵器は、当センターが平成15年度に調査を行った上領遺跡出土のものと年代的に近く、8世紀～9世紀の所産であると考えられる。今後周辺の調査事例が蓄積されれば、美祢盆地の古代社会がより鮮明なものとなるであろう。

なお、本章は「4. 炭化植物」の項を河原が執筆し、その他については小南が執筆した。

引用・参考文献

- 石川日出志 「弥生時代暦年代とAMS法年代」『考古学ジャーナル』510 2003
- 泉 武編 『天理市埋蔵文化財調査概報—平成4・5年度—』天理市教育委員会 1996
- 伊東輝雄編 『綾羅木郷遺跡Ⅰ』下関市教育委員会 1981
- 荻 幸二 「縄文時代早期後葉の大野川下流域における礫器文化の提唱」『一方平Ⅰ遺跡』大分県教育委員会 1999
- 片岡宏二 『弥生時代渡来人と土器・青銅器』雄山閣 1999
- 向上昭彦編 『吉永遺跡（V地区）』山口県埋蔵文化財センター 2003
- 小林青樹 「突帯文土器の絵画」『国立歴史民俗博物館研究報告』97 2002
- 小南裕一 「中四国における姫島産黒曜石の流通—縄文時代を対象として—」『StoneSources』2003
- 「日韓農耕文化成立期の土器編年と併行関係（予察）」『日韓交流史理解促進事業調査研究報告書』2006
- 小南裕一・村田裕一 「綾羅木郷遺跡出土の石器資料2」『研究紀要』9 下関市立考古博物館 2005
- 近藤喬一・乗安和二三 「弥生前期の土器文様」『山口県史資料編考古1』2000
- 佐原 真 「石製武器の発達」『紫雲出』1964
- 「かつて戦争があった—石鏃の変質—」『古代学研究』78 1975
- 志摩町教育委員会 『新町遺跡Ⅱ』1988
- 白井克也 「日本出土の朝鮮産土器・陶器」『日本出土の船載陶磁』2000
- 宝川昭男編 『下七見遺跡Ⅱ』菊川町教育委員会 1992
- 武末純一 「弥生時代の年代」『考古学と暦年代』2003
- 「弥生時代前半期の暦年代」『福岡大学考古学論集』2004
- 田畑直彦 「綾羅木式土器と阿方式土器」『山口大学文学会志』1999
- 常松幹雄 「鉤文様考—弥生時代における九州の事例」『勾玉—山中英彦先生退職記念論文集』2001
- 「鹿と鉤の廻廊」『原始絵画の研究』2006
- 中村大介 「方形周溝墓の成立と東アジアの墓制」『朝鮮古代研究』5 2004
- 「弥生時代開始期における副葬習慣の受容」『日本考古学』21 2006
- 西岡義貴編 『綾羅木郷台地遺跡—明神地区・久保之上田地区—』山口県教育委員会 1989
- 西谷 大 「トリとネズミ」『先史学・考古学論及Ⅳ』2003
- 仁田坂聡編 『天神ノ元遺跡(3)』唐津市教育委員会 2004
- 乗安和二三編 『綾羅木郷台地遺跡（明神地区）』山口県文化財愛護協会 1988
- 橋口達也編 『石崎曲り田遺跡Ⅰ』福岡県教育委員会 1983
- 春成秀爾 「角のない鹿—弥生時代の農耕儀礼—」『日本における初期弥生文化の成立』1991
- 富士埜勇編 『上原遺跡Ⅰ』菊川町教育委員会 1976
- 藤本有紀編 『川棚条里跡4』下関市教育委員会 2005
- 豆谷和之 「出原恵三論文—四国における遠賀川式土器の成立—へのコメント」『突帯文と遠賀川』2000
- 水ノ江和同 『法華屋敷遺跡・伊方小学校遺跡』方城町教育委員会 1996
- 村岡和雄編 『下七見遺跡Ⅰ』菊川町教育委員会 1989
- 森下靖士 「山口県内の弥生時代貯蔵穴について」『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ』1986
- 山口県教育委員会 『宮原遺跡・上広石遺跡』1973
- 山手誠治編 『長野角屋敷遺跡2』北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室 2001
- 山田清朝編 『東武庫遺跡』兵庫県教育委員会 1995
- 山本一郎 「山口県東部（周防）弥生前期土器編年」『古文化談叢』30(上) 1993
- 山本源太郎・三戸田晃司編 『奥正寺遺跡Ⅱ・大崎岡古墳群・大崎遺跡』山口県教育委員会 1985
- 横山邦継編 『吉武遺跡群Ⅹ』福岡市教育委員会 1998

V 付編

下村遺跡の放射性炭素年代測定

株式会社古環境研究所

1. はじめに

放射性炭素年代測定は、呼吸作用や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素 (^{14}C) の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。過去における大気中の ^{14}C 濃度は変動しており、年代値の算出に影響を及ぼしていることから、年輪年代学などの成果を利用した較正曲線により ^{14}C 年代から暦年代に較正する必要がある。

ここでは、下村遺跡で出土した炭化物について放射性炭素年代測定を行った。測定にあたっては、米国の Beta Analytic Inc. の協力を得た。

2. 試料と方法

測定試料は、SK80、SK93、SU 8 より出土した炭化物各 1 点の計 3 点である。

これら試料に、二次的に混入した有機物を取り除くために以下の処理を施した。まず蒸留水中で細かく粉碎し、超音波洗浄および煮沸洗浄を行った。次に塩酸 (HCl) により炭酸塩を除去した後、水酸化ナトリウム (NaOH) により二次的に混入した有機酸を除去した。さらに塩酸 (HCl) で洗浄し、最後にアルカリによって中和した。これら前処理をした試料は、定温乾燥機内で 80°C で乾燥した。

乾燥後、試料中の炭素を燃焼して二酸化炭素に変え、これを真空ライン内で液体窒素、ドライアイス・メタノール、*n*-ペンタンを用いて精製し、高純度の二酸化炭素を回収した。こうして得られた二酸化炭素を鉄触媒による水素還元法でグラファイト粉末とし、アルミニウム製のターゲットホルダーに入れてプレス機で圧入しグラファイトターゲットを作製した。

これらのターゲットをタンデム加速質量分析計のイオン源にセットして測定を行った。

測定試料と方法を表 1 にまとめた。

表 1 試料と方法

試料名	地点	種類	前処理・調整	測定法
No. 1	S K 8 0	炭化米	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
No. 2	S K 9 3	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
No. 3	S U 8	炭化米	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS

※ AMS (Accelerator Mass Spectrometry) は加速器質量分析法

3. 結果

年代測定の結果を表 2 に示す。

表 2 測定結果

試料名	測定No. (Beta-)	^{14}C 年代 ¹⁾ (年 BP)	$\delta^{13}\text{C}$ ²⁾ (‰)	補正 ^{14}C 年代 ³⁾ (年 BP)	暦年代 (西暦) ⁴⁾
No. 1	226069	2270 ± 40	-25.3	2270 ± 40	交点: cal BC 380 1 σ : cal BC 390~360 cal BC 280~260 2 σ : cal BC 400~340 cal BC 320~210

No. 2	226070	2300±40	-24.8	2300±40	交点：cal BC 390 1σ：cal BC 400~370 2σ：cal BC 410~360 cal BC 290~240
No. 3	226071	2300±40	-27.1	2270±40	交点：cal BC 380 1σ：cal BC 390~360 cal BC 280~260 2σ：cal BC 400~340 cal BC 320~210

(1) ¹⁴C年代測定値

試料の¹⁴C/¹²C比から、単純に現在（AD1950年）から何年前かを計算した値。¹⁴Cの半減期は、国際的慣例により Libby の5,568年を用いた。

(2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定¹⁴C/¹²C比を補正するための炭素安定同位体比 (¹³C/¹²C)。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

(3) 補正¹⁴C年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、¹⁴C/¹²Cの測定値に補正值を加えて算出した年代。

(4) 暦年代 Calendar Age

¹⁴C年代測定値を実際の年代値（暦年代）に近づけるには、過去の宇宙線強度の変動などによる大気中¹⁴C濃度の変動および¹⁴Cの半減期の違いを較正する必要がある。暦年較正には、年代既知の樹木年輪の¹⁴Cの詳細な測定値およびサンゴのU/Th（ウラン/トリウム）年代と¹⁴C年代の比較により作成された較正曲線を使用した。最新の較正曲線である IntCal04では BC24050年までの換算が可能である（樹木年輪データは BC10450年まで）。

暦年代の交点とは、補正¹⁴C年代値と較正曲線との交点の暦年代値を意味する。1σ（68%確率）と2σ（95%確率）は、補正¹⁴C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点や複数の1σ・2σ値が表記される場合もある。

4. 所見

加速器質量分析法（AMS）による放射性炭素年代測定の結果、No. 1では、2270±40年 BP（1σの暦年代で BC 390~360年、BC 280~260年）、No. 2では2300±40年 BP（同 BC 400~370年）、No. 3では2270±40年 BP（同 BC 390~360年、BC 280~260年）の年代値が得られた。

参考文献

Paula J Reimer, Mike G L Baillie, Edouard Bard, Alex Bayliss, J Warren Beck, Chanda J H Bertrand, Paul Caitlin E Buck, George S Burr, Kirsten B Cutler, Paul E Damon, R Lawrence Edwards, Richard G Fairbanks, Michael Friedrich, Thomas P Guilderson, Alan G Hogg, Konrad A Hughen, Bernd Kromer, Gerry McCormac, Sturt Manning, Christopher Bronk Ramsey, Ron W Reimer, Sabine Remmele, John R Southon, Minze Stuiver, Sahra Talamo, FW Taylor, Johannes van der Plicht, Constanze E Weyhenmeyer. 2004. INTCAL04 Terrestrial Radiocarbon Age Calibration, 0-26 cal kyr BP, Radiocarbon 46:1029-1058.

尾寄大真（2005）「INTCAL98から IntCal04へ。」『学術創成研究費 弥生農耕の起源と東アジアNo. 3 -炭素年代測定による高精度編年体系の構築-』 p.14-15.

中村俊夫（1999）「放射性炭素法」『考古学のための年代測定学入門』古今書院, p.1-36.

版 圖



A地区遠景（南から）



A地区全景（南東から）



A地区全景（東から）



SC 1 完掘状況 (東から)



SC 2 完掘状況 (北から)



SC 3完掘状況（南西から）



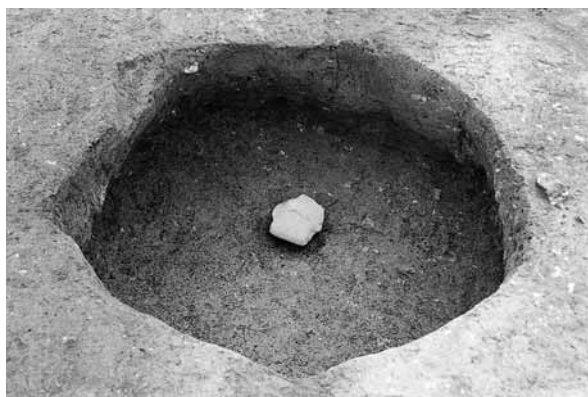
SC 3遺物出土状況（西から）



SC 5 完掘状況（北から）



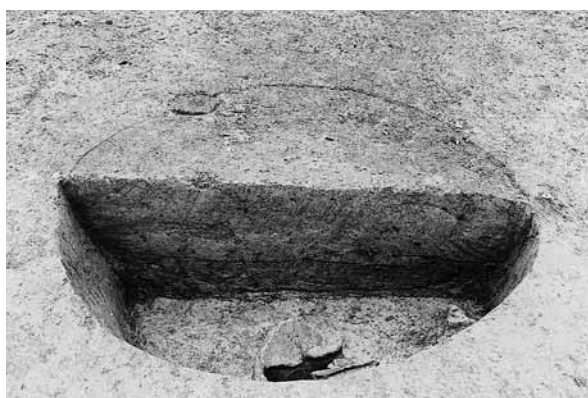
SU 1 遺物出土状況（北から）



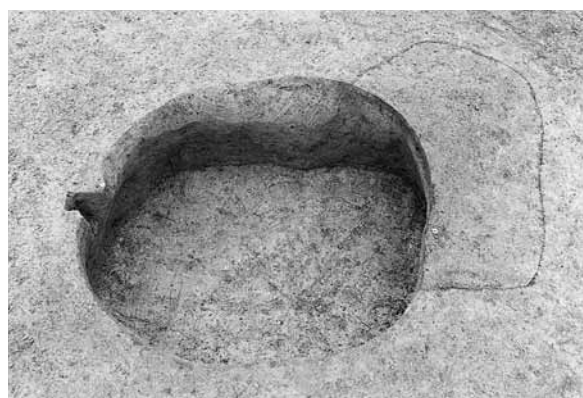
SU 2 完掘状況（東から）



SU 5 土層断面（北から）



SU 6 土層断面（北東から）



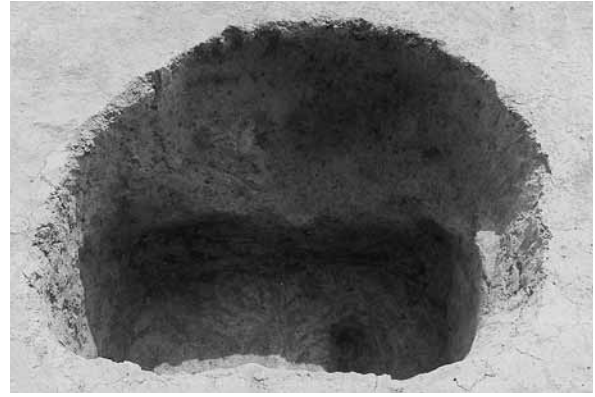
SU 7 完掘状況（北東から）



SU 8 遺物出土状況（南西から）



SU 8 炭化物出土状況（南から）



SU 8 完掘状況（北から）



SU13遺物出土状況（東から）



SU22土層断面（南東から）



SU22遺物出土状況（北西から）



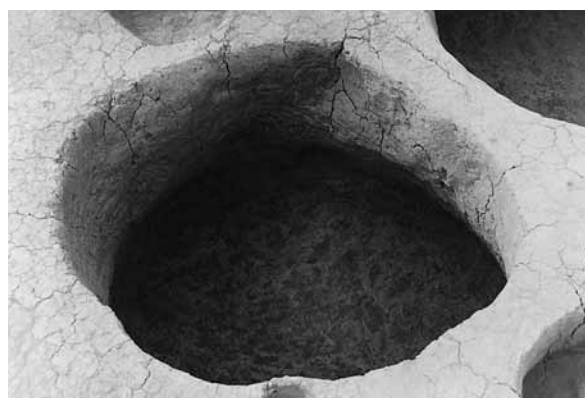
SU24土層断面（南東から）



SU24完掘状況（西から）



SU25遺物出土状況（南東から）



SU25完掘状況（東から）



SU29遺物出土状況（南から）



SU28土層断面（南西から）



SU28遺物出土状況（南東から）



SU30遺物出土状況（南から）



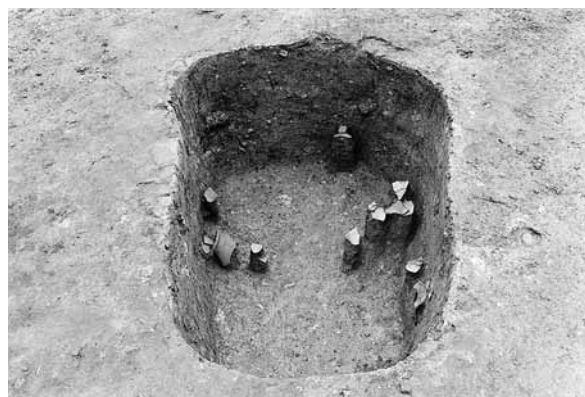
SU32遺物出土状況（東から）



SU40土層断面（南東から）



SU49土層断面（南東から）



SK1 遺物出土状況（東から）



SK10遺物出土状況（東から）



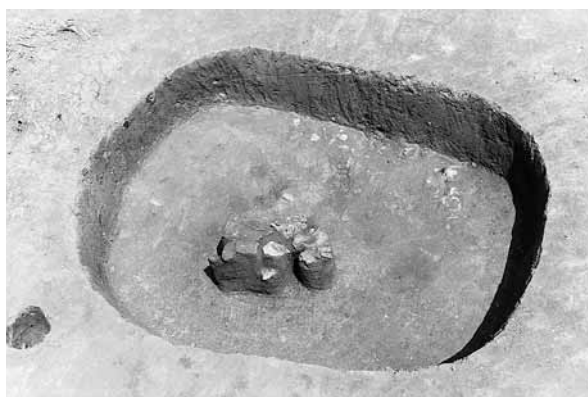
SK11遺物出土状況（西から）



SK16完掘状況（北東から）



SK20完掘状況（北から）



SK22遺物出土状況（西から）



SK23完掘状況（南東から）



SK34遺物出土状況（北西から）



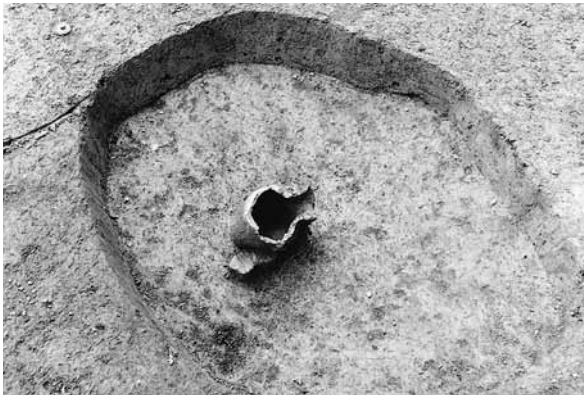
SK54土層断面（北から）



SK59完掘状況（北から）



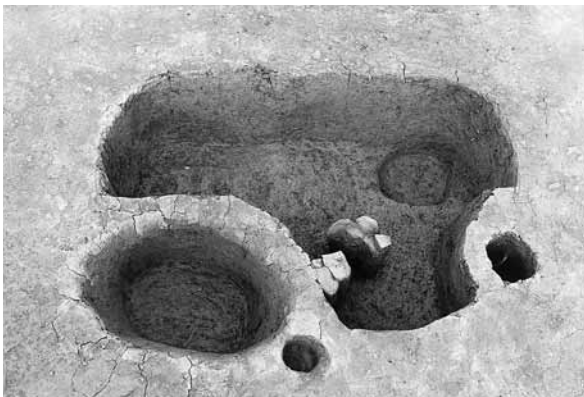
SK59壁面のピット（東から）



SK61遺物出土状況（北から）



SK66遺物出土状況（南西から）



SK79遺物出土状況（西から）



SK82遺物出土状況（東から）



SK80土層断面（西から）



SK80炭化物出土状況（南から）



SK80完掘状況（西から）



SK87土層断面（東から）



SK93遺物出土状況（北から）



SK106遺物出土状況（北から）



SK106完掘状況（北から）



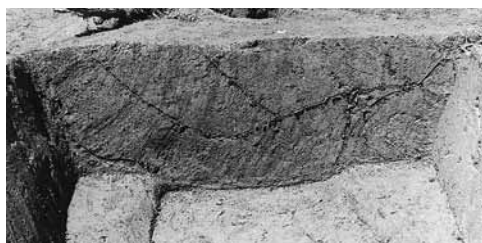
SK102遺物出土状況（東から）



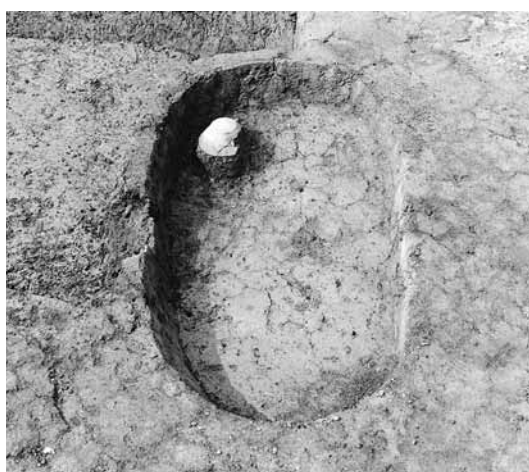
ST1完掘状況（北西から）



ST1管玉出土状況（北から）



ST1土層断面（南東から）



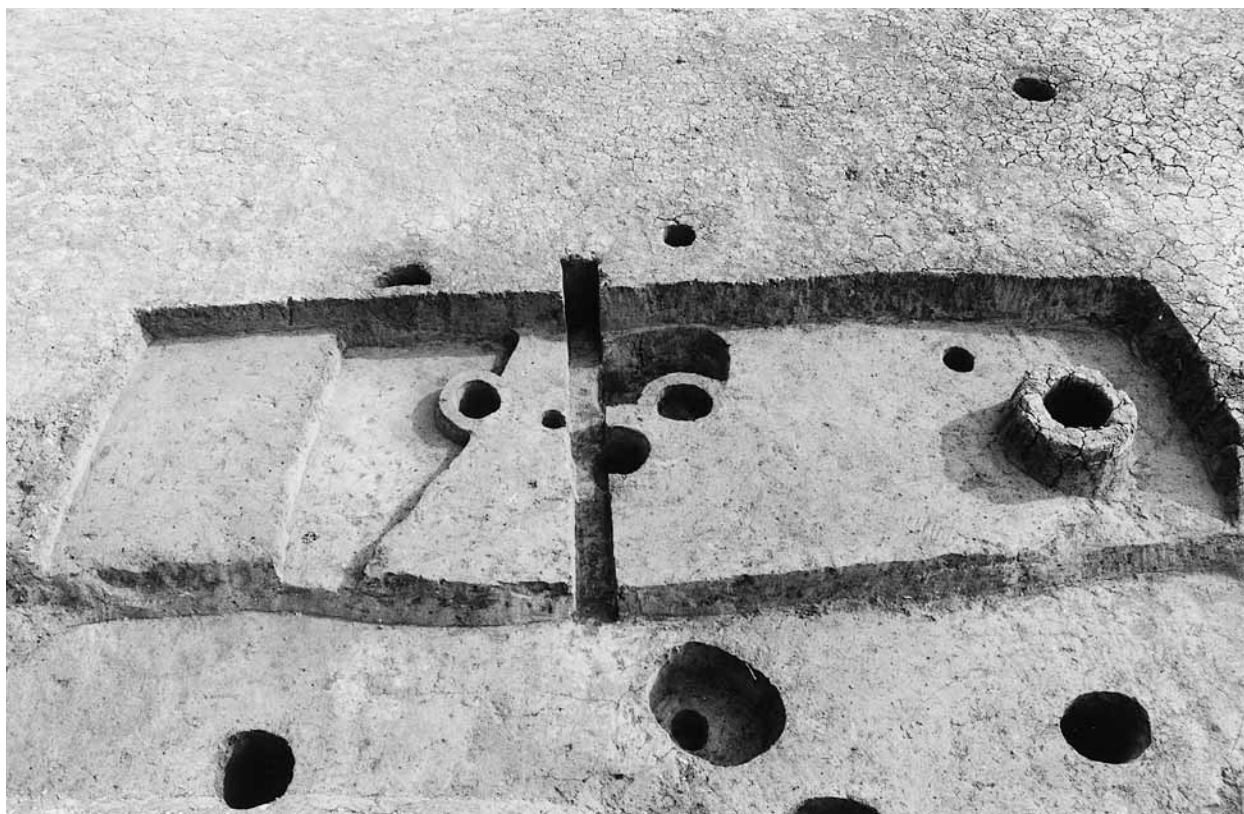
ST3遺物出土状況（南から）



B地区遠景（東から）



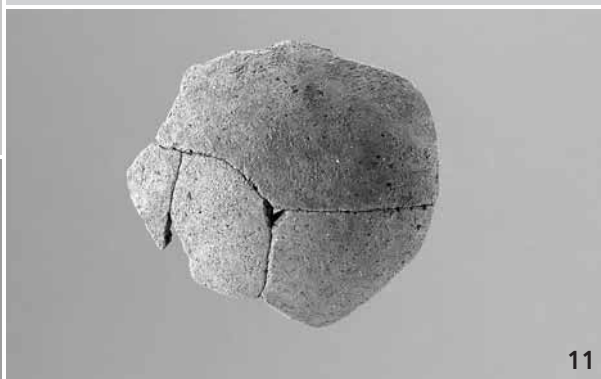
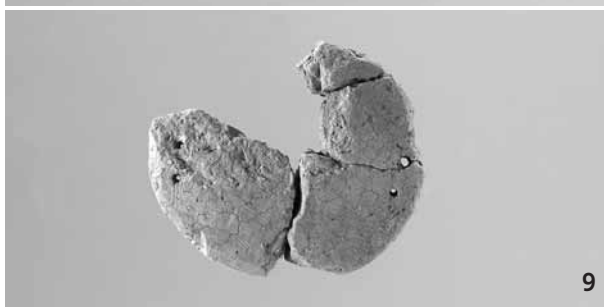
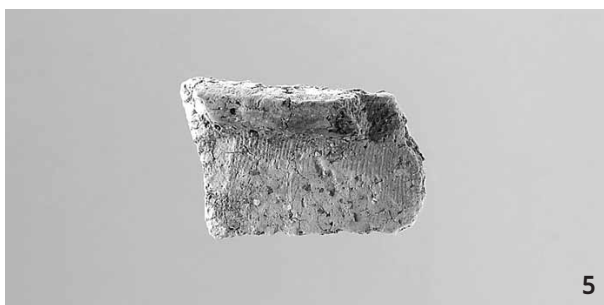
B地区全景（南から）



SC201完掘状況（北から）

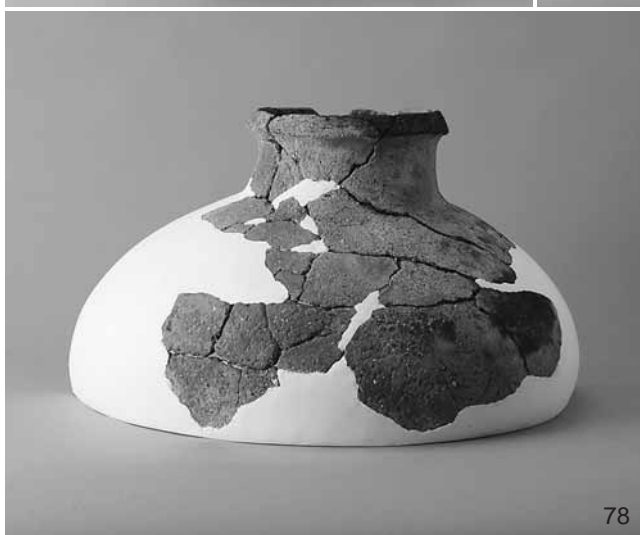


SK208遺物出土状況（北から）

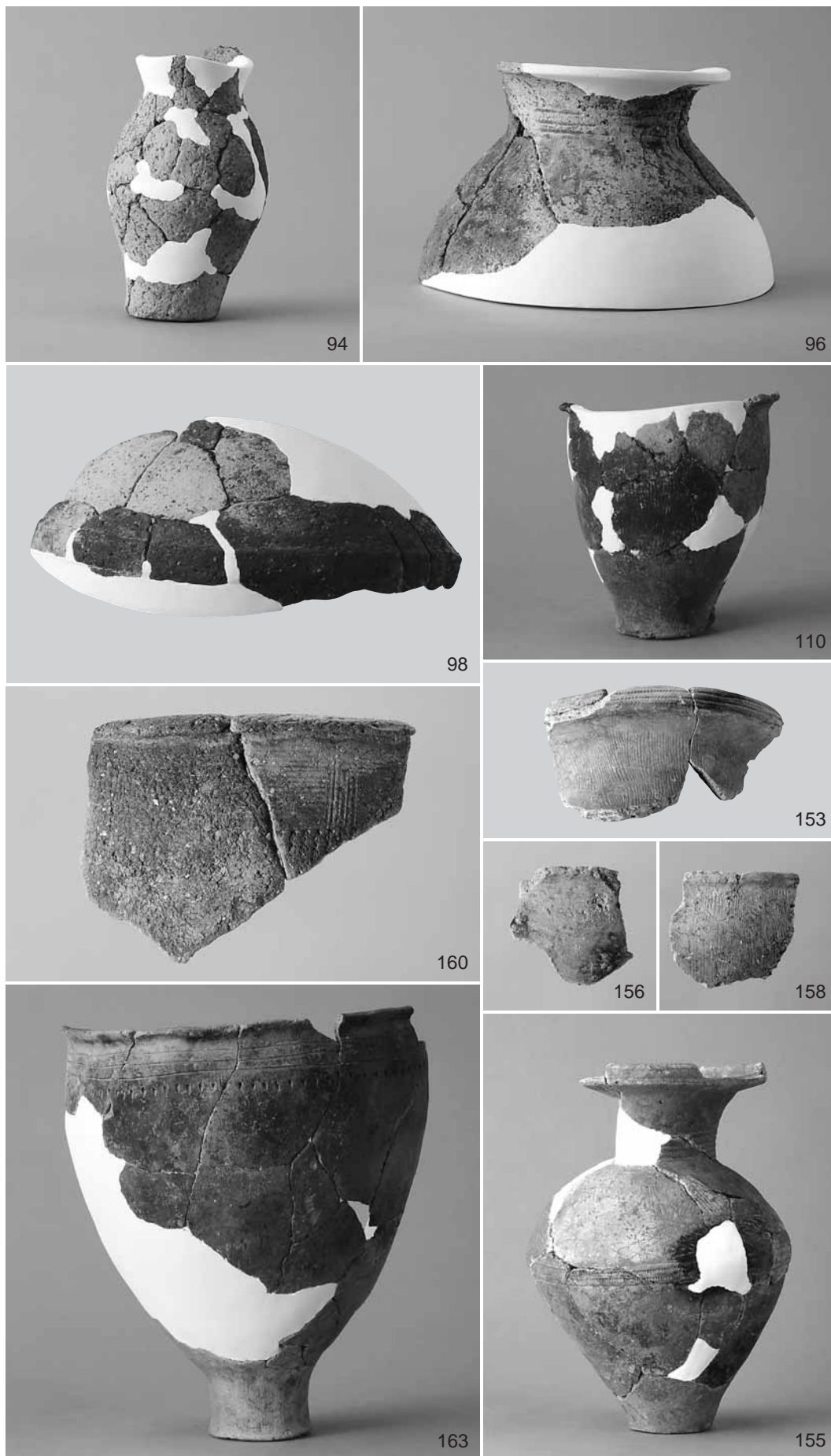


出土遺物





出土遺物



出土遺物

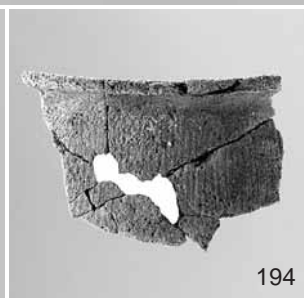
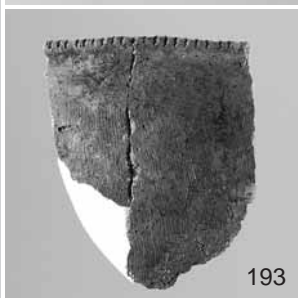


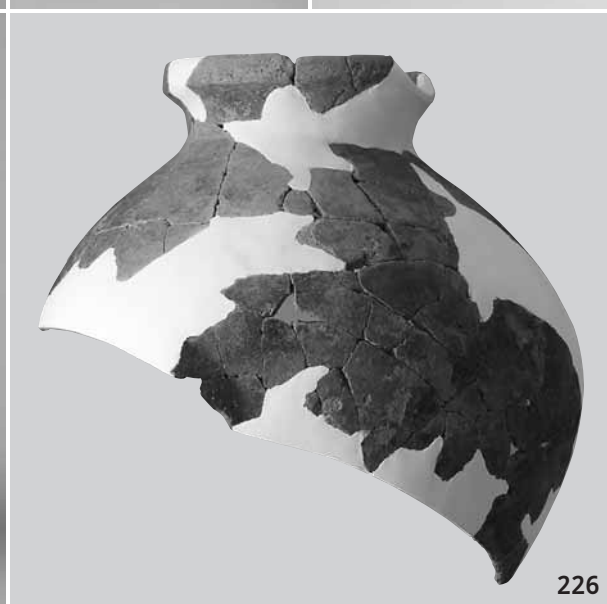
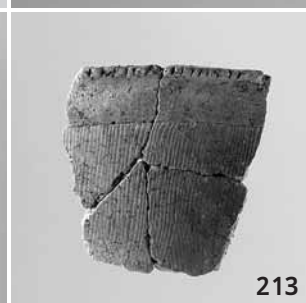
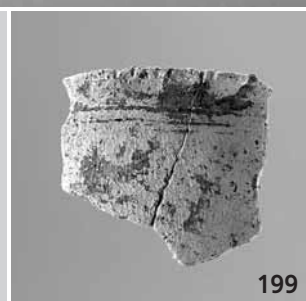
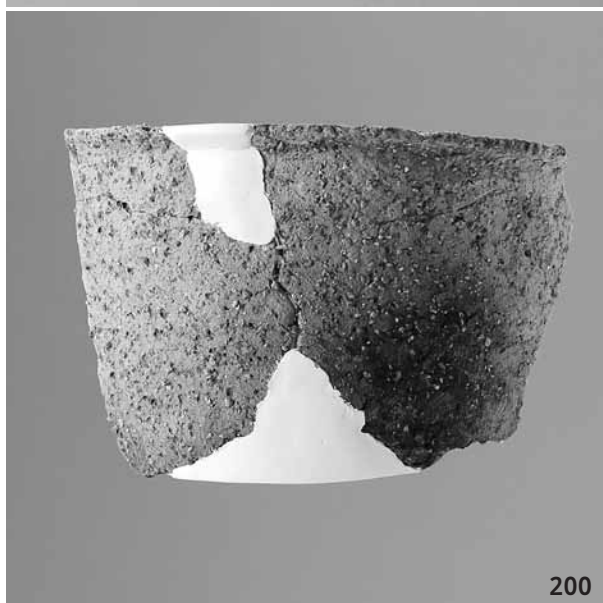
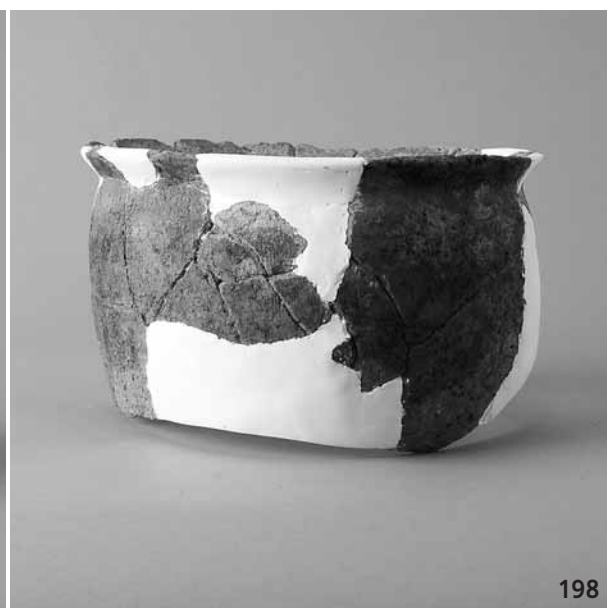
166



167

出土遺物





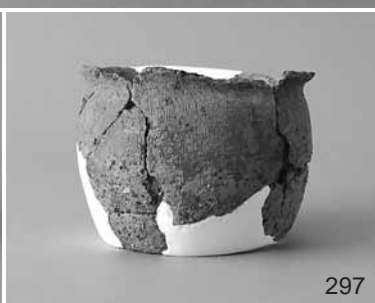




281



293



297



303



296



304

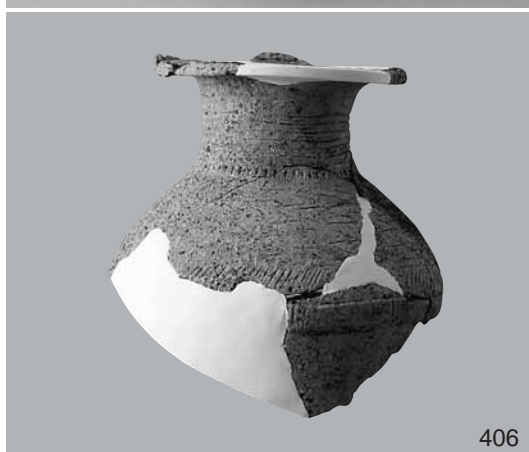
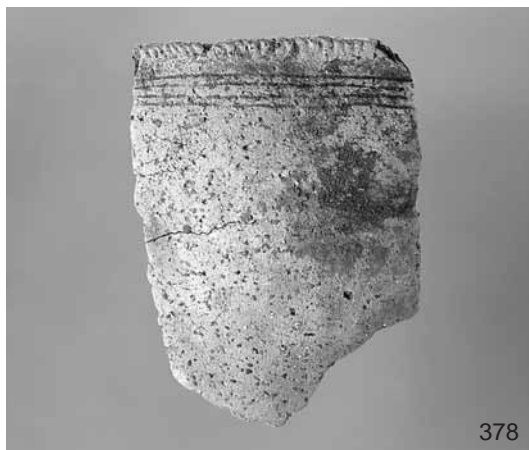
出土遺物



出土遺物



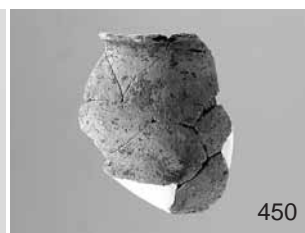
出土遺物

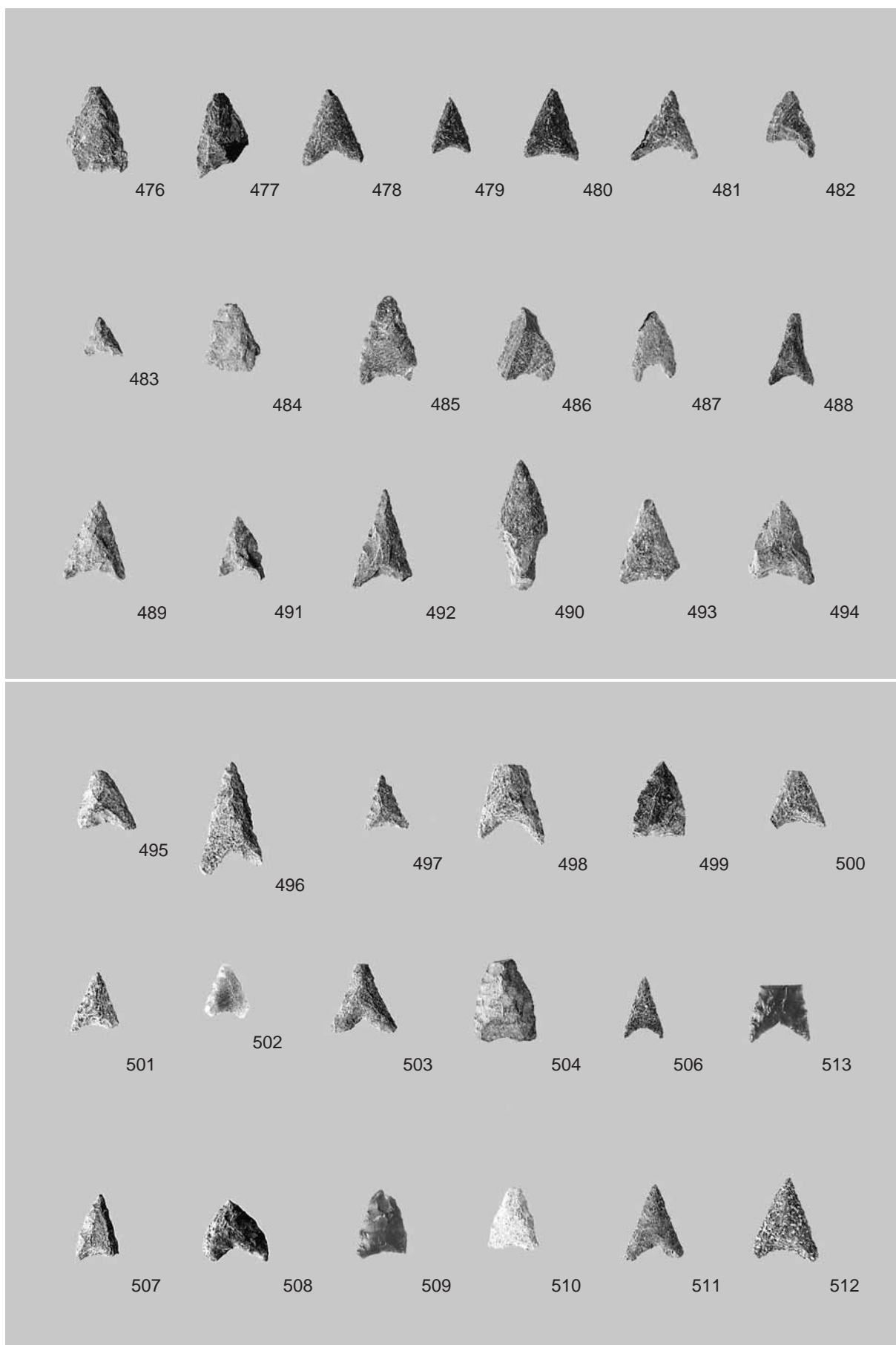




出土遺物



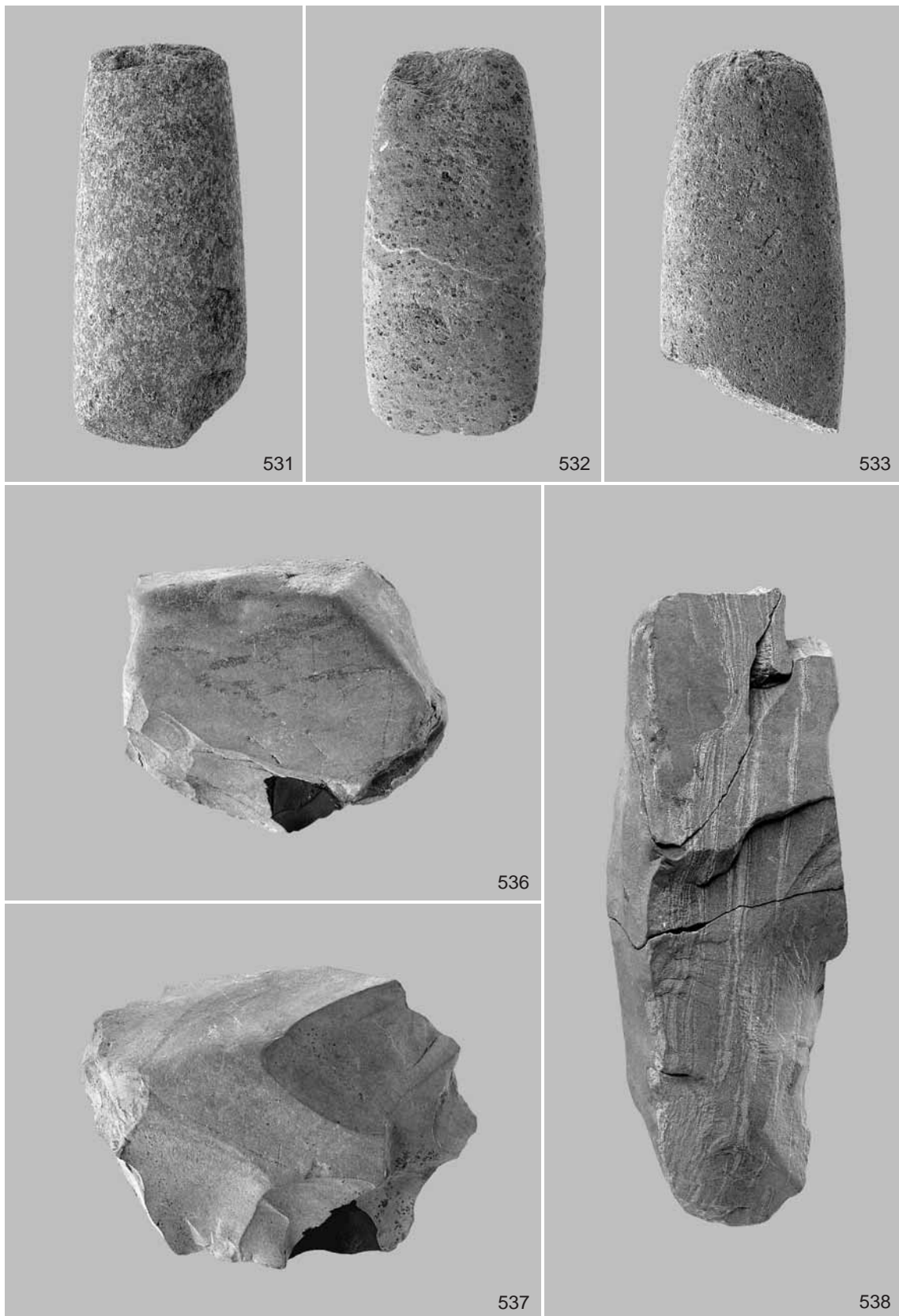




出土遺物



出土遺物



出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	しもむらいせき
書名	下村遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	山口県埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第60集
編集著者名	小南裕一 籠山幸雄 松林寛樹 河原剛 竹内奈央
編集機関	山口県埋蔵文化財センター
所在地	〒753-0073 山口県山口市春日町3番22号 TEL083-923-1060
発行年月日	西暦2007年3月26日(平成19年3月26日)

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しもむらいせき 下村遺跡	山口県 美祢市伊 佐町下村	35213		A地区	A地区	20060509	A地区	道路建設
				34°9'52"	131°12'12"	}	4,100	
				B地区	B地区	20061109	B地区	
				34°9'48"	131°12'3"		1,400	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
下村遺跡 A地区	集落跡	弥生時代	竪穴住居跡 6棟 土坑(貯蔵穴を含む) 約200基 墓 3基 柱穴 約1500個	弥生土器 土師器 石器・石製品	弥生時代中期初頭の集落跡 貯蔵穴を含む土坑から多数の弥 生土器や大量の炭化物が出土 鹿が描かれた絵画土器が出土
下村遺跡 B地区	集落跡	弥生時代 古墳時代 古代	竪穴住居跡 1棟 掘立柱建物跡 1棟 溝状遺構 1条 土坑 9基 柱穴 約200個	縄文土器 弥生土器 須恵器 土師器	古代の須恵器が一定量出土

要 約	<p>下村遺跡 A 地区は、弥生時代中期初頭に営まれた集落跡であり、竪穴住居を中心に約50基の貯蔵穴を含む約200基の土坑が検出された。これらの遺構から、多数の弥生土器や米を初めとする粟やダイズなど大量の炭化物が出土した。この時代の人々が貯蔵穴や大型土坑を食料の貯蔵に使用し、その後廃棄土坑として利用したことが推察される。また、貯蔵穴の一つから鹿の絵が描かれた土器が出土しており、弥生絵画土器としては日本最古級のものといえる。このほか、同時期の墓が1基確認されており、大量の管玉が出土した。</p> <p>B 地区では、弥生時代終末～古墳時代初頭の住居跡や、古代の須恵器などが検出された。小規模ながらこうした時期に集落が形成されていたものとみられる。</p> <p>今回の調査では、弥生時代中期初頭に限定される集落が検出され、当時の集落構造を復元するうえで重要な資料となった。</p>
-----	--

山口県埋蔵文化財センター調査報告 第60集

下 村 遺 跡

2007年3月

編集・発行 財団法人 山口県ひとづくり財団
山口県埋蔵文化財センター
〒753-0073 山口県山口市春日町3番22号
印 刷 泉菊印刷株式会社
〒752-0927 山口県下関市長府扇町8番48号